王の剣士　六　「紺碧の守護者」

雅

（第四章～『序章』）

（2012.1.23 校了）

第四章　「剣士ザイン」

一

王都は春の短い日射しを受け、淡く花の蕾の薫りを想わせる空気の中に微睡んでいるようだった。

来月に控える西海との条約再締結への緊張は、まだ王都の街には見えない。

王都の中心に聳(そび)える王城の四方にはそれぞれ正門があり、馬車が六台はすれ違えるような広い石畳の道が、正門と城とを繋いで一直線に延びている。上空から眺めると、円形の城壁の中に白く幅広い十字が描かれているようだった。

道の左右には緑の低い生け垣が連なり、更に向こう側は整えられた庭園になっていた。咲き綻び始めた花の間を、小さな蝶があちこちと飛び歩き、薄い羽根を休めている。

ふいに一陣の風が王城の玄関前から沸き起こり、石畳の道を正門へ向かって吹き付けた。蝶や生け垣の枝葉が風に煽られる中、風は途中で身を起こし、馬の姿に変わった。

一頭、二頭――三頭の馬が現われ、半ば透き通った躯で宙を駈けるように正門へ向かう。

それは四つの正門全てで同時に起きていた。

東西南北四方にある四つの正門を、それぞれ三頭の馬が走り抜ける。

馬達は王城の通りを駈け、それぞれの目指す場所へ向かった。

王都は都を高い街壁がぐるりと包んでいるが、その外側を更に、王都を取り囲むようにして軍の演習場が広がっている。演習場の傍を抜ける基幹街道を通る時には大抵、正規軍や近衛師団が練兵を行っている様子を見る事ができた。

レオアリスの第一大隊もこの日の午後、西の第二演習場にいた。

午後は基礎訓練が主で、レオアリスも組み手をしている隊士達の中に入り、列の間を歩きながら時折声を掛けていた。

自分がこの中に加わらなくなって久しく、それがいつも物足りない。本気でやれるのは、時折グランスレイや中将達と手合わせをする時くらいだろうか。

剣技ではやはりレオアリスが抜きん出るが、組み手となると大抵グランスレイか、幼少の頃から訓練を受けているロットバルトに軍配が上がる。一番得意そうなクライフは我流のせいもあって、長引けば不利だ。

隊士達の列を半分ほど回り、ちょうど隊の中央辺りを歩いていたところで、演習場の門の辺りがにわかに騒がしくなった。それと共に馬のいななきが一声、門から演習場の中央まで走る。

「何だ――？」

目を向けた先で組み手をしていた隊士達の列が割れ、風を巻くように一頭の馬が走り込むと、レオアリスの前で前足を振り上げて立ち止まった。半透明の躯が陽光に揺らぐ。

「上将！」

「お下がりください！」

周囲にいた隊士達が数名、慌ててレオアリスと馬の間に立ちはだかろうとしたが、レオアリスは片手を上げて止めた。

「構わない――これは」

レオアリスの言葉が終わる前に、馬はぶるりと身を揺すると陽射しに溶けるように消え、代わりに一通の白い封筒になった。レオアリスが伸ばした右手に、ひらりと収まる。

「伝令使――？　というよりは書状に法術を掛けたのか、へぇ」

レオアリスは感心したように言って、手にした封筒を眺めた。紙の手触りはまるっきりただの封筒だ。グランスレイとロットバルト、クライフが隊士達の間を分けてレオアリスの所へ駆け寄る。

クライフは明るい茶色の頭を巡らせ、馬が立っていた辺りを見回した。

「上将、お怪我は――今のは何なんすか？　あんなでかい馬がぱっと消

えちまうなんざ」
「あれはこの書状にかけられた法術だろう。凝ったやり方だな――」
「書状？　ええと、今のが？」
「そう、よくあるのは鳥とかもっと小さいものに変化させて相手に届けるんだが」
馬は派手だよな、とまた感心した口振りで言って、ロットバルトが差し出した細い短剣を受け取り、レオアリスは手にした封筒の封を切った。取り出した便箋を開く。
そこに綴られた文を読む内、レオアリスの表情にそれまでとは全く違う驚きと困惑が広がった。見ているグランスレイ達が憂慮を覚えるほど、強い感情だった。
「――何で……」
微かなその呟きを聞き取り、ロットバルトはレオアリスの面に視線を落とした。
「何だ」ではなく、「何で」と、そう言った。
グランスレイも眉を寄せる。
「上将？　書状には何が」
「王の召集だ――」
「召集――」
「陛下の？」
「王名で緊急の軍議が召集された。この後二刻からだ」
レオアリスは隊士達の間を抜け、物見台の下まで行くと立ち止まった。その様子がどことなく、集中する視線を避けるように見え、クライフはそこにいた隊士達を退らせた。
「二刻――もう開始まで一刻もありませんね。議題は？」
ロットバルトの問いかけにレオアリスは一度視線を書状に落とし、困惑を残したままのそれを上げた。ロットバルトとグランスレイとクライフと、三人の顔をそれぞれ見る。
「レガージュで問題が発生したらしい。その処置についてだと書いてある」
クライフは驚いた様子で、レオアリスの手の中の書状を見た。
「レガージュ？　ってあのレガージュですか」
つい先日話していた街の名が何故、王が召集する軍議で取り上げられるのかと、当然の疑問を口にする。しかも緊急の軍議でとは。
ただレガージュと聞いて、ロットバルトは先ほどのレオアリスの呟きの理由が判ったように思えた。
何故問題が発生したのが選りにも選ってレガージュなのか、と、そうした想いからだろう。
もしかしたらもう一つ、違う想いがあったかもしれないが。レオアリスは手にしていた書状をグランスレイに差し出した。
「それと、今回は一等参謀官級まで召集を受けてる」
「それは――」
あまり無い事だ。基本的に軍議の際は、同席者は副将までと決まっている。
「つまりは今回の件が、その場で一定の戦術まで詰める必要があるという事ですか」
「かもしれない。詳細は出てみないと判らないが――、何だ？」
降ろした左手に持っていた封筒がかさりと微かな音を立て、レオアリスは視線を落とした。書状を取り出し空になっていたはずの封筒から、すっともう一枚、便箋が滑り出る。
「――」
便箋は独りでに開くと、白い表面に光で綴られた文字が浮かんだ。署名と、それに数行の文が続く。
「アルジマール院長か……」
『君はレガージュのブレンダンを僕に紹介した。そこも話題になるだろう。さほど問題は無いが、問われたら発言に注意した方がいい。詳しい事は軍議で判る』

アルジマールの言葉を読み取った直後、便箋は先ほどの馬と同様に空気に溶けた。集まっていた光の粒子がすうっと四方に散って消える。
「ブレンダン？」
彼について何かあったのだろうかと、レオアリスは一昨日ブレンダンが尋ねてきた時の様子を思い浮かべた。レガージュの近海で船が沈んだと、そう言っていた。
ただ、アルジマールの手紙はただの情報というよりは、忠告に近い。
「ロットバルト。先日のレガージュの商人は、あの時何と言って来たか覚えているか」
グランスレイもそれが気になったようで、ロットバルトに測るような鋭い眼を向けた。
「近海で他国の船が沈み、救出した生存者を回復させる為に、腕のいい法術士を紹介して欲しいという内容です。……軍議に発展する案件だったのかまでは、詳細を聞いていない分判断しかねます。ただ印象としては彼は、何かを隠している様子でもありませんでしたが」
「――ホースエント子爵は」
「それも、取り立てた情報は入っていません」
「情報って」レオアリスが驚いた顔を見せる。「ホースエント子爵の事を何か調べたのか」
「まあ余りいい面会内容ではありませんでしたしね」
ロットバルトは当然のようにそう言った。
「ただし三日前の情報ですので、いずれもこの緊急の軍議が召集された時点で、大して参考にはならないでしょう。ともあれアルジマール院長は、法術士を派遣したこと自体は、さほど大きな問題とは捉えていないようです。問われたら事実を淡々と述べるというところでしょうね」
「ふむ」
グランスレイは腕を組み唸ると、レオアリスを見た。
「とにかく軍議に入ってみないと状況が掴めませんな。二刻からであればもう時間がありません。すぐ士官棟に戻って軍服を替え、王城に上がりましょう」
演習場の砂ぼこりを被った軍服を示し、そう告げる。
「ああ、行こう――。クライフ、取り敢えず訓練は続けていい。ただ、フレイザーとヴィルトールに軍議が召集された事だけ伝えておいてくれ。軍議が終わったら連絡を入れる」
「承知しました」
左腕を胸に当てて敬礼したクライフに頷き、レオアリスはこの場所からも見える王城の尖塔へ視線を投げた。

二

急遽召集された軍議は日頃使われる議場ではなく、王城の五階にある謁見の間を指定されていた。それは王自身がこの軍議に臨席する事を意味している。

普段の朝議とは違い、玉座が置かれた高座の階（きざはし）の下に、高座と扉を繋ぐ深緑の絨毯を挟むようにして、椅子が並べられていた。正規軍将軍と近衛師団大将級が一列目に座り、副将以下の席はその後ろに設けられている。

レオアリス達が入室した時には正規軍将軍の数名と、法術院の副院長が既に席についていた。

驚いたのは、軍議の席に内政官房、地政院、財務院の席が用意されている事だ。既に事務官が数名、それぞれの席にいて小声で遣り取りをしていた。

「アルジマール院長だけじゃないのか――これは、思ってる以上だな」

「確かに。通常の軍議の枠を超えた対応案件だと捉えていいのかもしれませんね。そこまでの事態がレガージュであったのか……」

ふ、とまた、レオアリスが瞳に翳りを落としたのに気付き、ロットバルトはその原因を見極めようとするように微かに眼を細めた。

レガージュは剣士ザインのいる土地だ。

そこで持ち上がった「問題」――彼自身の過去を連想せずにはいられないのかもしれない。

（――あれほどの問題はそうそう起こらない。そう思いたいが……）

長い深緑の絨毯を自席まで歩く間、レオアリスに向けられる視線が少なくないのは、レガージュにの剣士、ザインの存在を考えたからだろう。

（それは当然か）

第二大隊のトゥレスは既に席にいて、副将や一等参謀官と小声で話をしていたが、レオアリスが来たのに気付いて顔を向けた。片手を上げて挨拶を寄越し、同意を求めるように周囲を見回す。

「来たか。急な召集なのにずいぶんと大掛りだよな。アルジマール院長が伝令使を出すのも例が無い。レガージュで何があったか、知ってるか？」

「いや。俺も初耳だ」

「そうか――でもお前は特に驚いただろう。何せレガージュには剣士がいる。最近はレガージュとのやり取りがあったみたいだしな」

「ああ――」

二人の会話を耳にしながら、ロットバルトは微かに眉を潜めた。

レガージュとの関わりができたのはつい最近の事だ。ザインからの手紙が届いたのが十日ほど前。ホースエントとの面会があり、そしてブレンダンが再び訪れたのが、一昨日。

立て続けとは言え、それそのものはさほど人の口に上がる話題では無い。

同じ近衛師団ではあるものの、それをトゥレスが知っているのは少し意外に思えた。

（――）

関わりがある事自体は問題は無い。ザインから手紙を受け取ったとその程度で、それも実際はザインその人ではなく、彼の子供からだ。ブレンダンについてはアルジマールを紹介したが、それ以上の事はない。

（強いて問題があるとするなら、ホースエント子爵か）

ともかくどうやらこの場では、アルジマールの手紙にあったように注意が必要のようだった。

トゥレスがちょうどやって来た第三大隊のセルファンと話を始めたのを見て、ロットバルトはレオアリスの椅子の背に手を置いて身を屈めた。

「上将、先ほども申しましたが、ブレンダン氏については、質問が飛んだらなるべく簡潔に」

周囲には聞こえない程度の声で、見た目だけは差し障りの無い話をしているように、口元に軽く笑みを浮かべる。

「アルジマール院長に紹介した後は、我々の関与するところではないと、それを明確にした方が無難です。ホースエント子爵は今回どう関わってくるかまだ判りませんが」
「判った。しかしその話題が出るか？」
「半々ですね――。ただトゥレス大将が、貴方とレガージュの……ザインとの話を知っているというのは意外でした。ブレンダンというあの商人の動向が余程目立ったのか――そうなると他にも知っている者はいると考えられます」
「トゥレスは同じ師団だ、隊士達を介したりして何となく伝わるんだろう。俺はウィンスター大将には手紙をもらった事は言ったし」
ロットバルトはすぐそこにあるレオアリスの顔を見つめた。
何もかも疑えという訳ではないが、レオアリスは自分を取り巻く政治的な状況についての警戒心が少し甘い。
トゥレスはさりげなくではあるが、これからレガージュに関する軍議が始まろうとする中で、レオアリスとザインの関係を口にした。そこにはある種の、疑念が存在するからこそだとも考えられる。
「伝聞はとかく独り歩きするものです。むしろこの場で話題に出た方が有難い。状況が把握できますし、もし正確さを欠いているようであれば、陛下の御前で訂正ができますからね。自ら俎上（そじょう）に載せてもいいくらいです。逆にここで放っておくと後の制御は利かなくなります」
「判った、そうしよう」
レオアリスはロットバルトの言葉を斟酌（しんしゃく）し、頷いた。
並べられた席はほぼ埋まり、広い謁見の間の中には密やかな騒めきが満ちている。まだこの場に来ていないのは内政官房を初めとした四大公、アルジマール、そして正規軍副将軍タウゼンと、西方軍将軍ヴァン・グレッグだ。
他の将軍達は既に顔を揃えているところを見ると、ヴァン・グレッグはただ遅れている訳ではなさそうだった。事前に関係者のみで、話し合いが持たれているのかもしれない。
「西方軍がこの件に関わるのか」
レガージュは西方軍の管轄だ。レガージュで今起きている事は、やはりそれほどに大きいのだろう。
そう考えながら空席を目で追っていて、レオアリスはふと気付いた。
内政官房長官の席の右側、玉座に近い方にもう一つ席がある。
（大公の席より上位？　誰の席なんだ？）
内政官房の長官よりも高位の存在がいただろうか。
空気が騒めく中、後方の扉が開いた。
内政官房長官のベールと副長官ヴェルナー侯爵、地政院長官のそれぞれが深緑の絨毯を歩き、席に着いた。アスタロトもルシファーと並んで現れ、緊張した面持ちで座る。
アスタロトはその時だけ視線を上げ、レオアリスを見た。微かに口元に笑みを浮かべたが、疲れているのかすぐに俯いた。
（相変わらず、何か悩んでるのか）
そう考えてから、アスタロトに対して相変わらずという言葉は、もっと別の事を差して使っていたはずなのにと改めて思った。
ただ、明日の昼にようやく、アスタロトと会う時間が取れている。何を悩んでいるのかくらいは聞けるだろう。
ふいに周囲が驚いた空気を滲ませ、レオアリスは辺りを見た。
最後に王の相談役でもあるスランザールが現れ、深緑の絨毯の上を歩くと、一つ残った空席に座った。内政官房長官の右隣――例の席だ。
周囲の騒めきが続いている。レオアリスも彼等と同じように、驚きを覚えていた。
（あれはスランザールの席だったのか――でも）
常ならば、スランザールは王の相談役として、玉座の傍らに座るはずだ。
では玉座の隣に今置かれている椅子には誰が座るのかと、そんな疑問

が参列者達の中に浮かびかけた時――、カァンと高く鐘が鳴らされた。
参列者達が椅子から立ち上がり、一斉に頭を下げる。
謁見の間は打って変わって水を打ったように静まり返えり、王の到着を待った。
ほどなくして玉座の後ろの扉が開き、王が入室する。衣擦れの音が聞こえ、玉座に腰かける気配がした。
空間に満ちた静謐が心地よく、レオアリスは面を伏せたまま瞳を閉じた。
再び高く鐘が鳴る。
列席者達が顔を上げ、玉座を見上げて――誰もが驚きに眼を見開いた。声にこそ出さないが、空気がうねるようにその驚きが広がった。
レオアリスも驚いて息を呑む。
（殿下――？）
王の玉座の隣の席には、ファルシオンが腰かけている。
緊急の召集に、内政部までが参加する軍議。全てが異例尽くしの中で、王太子の臨席は異例中の異例だ。
ファルシオンは先日の祝賀式典とは違う、もっと張り詰めた空気を感じ取り、幼い頬に緊張を広げている。
「揃っているようだな」
王は広間を見渡しそう言うと、ファルシオンが同席している事には触れず、内政官房長官ベールへ視線を向けた。
ベールが立ちあがり、王に一礼すると参列者達を見渡した。
「これより、軍議を開催する」
通常の軍議では場を取り仕切るのはアヴァロンか正規軍副将のタウゼンだ。これもまた違う。
「貴侯方もお気付きの事と思うが、今回は通常の軍議とは異なる。前置きはせず、本題に入ろう」
ベールの声は抑えられていながら、静まり返っている広間に良く通った。参列者達が僅かも聞き漏らすまいと構えているせいもあるだろう。
「南西の交易都市フィオリ・アル・レガージュは方々ご存知であろう」
「レガージュ……」
ファルシオンはそっと呟いて、レオアリスを見た。レオアリスがレガージュに行きたいのだと言ったのは、つい昨日の事だ。
レオアリスはファルシオンの視線を感じ取ったのか、ベールに向けていた瞳を上げ、ファルシオンに向けた。レオアリスと目が合った事で、先ほどから激しく打っていた鼓動が、少し落ち着いた。
「――」
ファルシオンは傍らの父を見上げた。父王は金色の瞳を静かに壇下に向けている。
冷静で、荘厳な眼差し。国を治める者が備えるべきものだ。
その眼差しを、ファルシオンも持たなくてはいけない。
ベールが淡々と続ける。
「現在、マリ王国海軍の軍船十一隻がレガージュの港に寄せている」
前置きなど一切無く放たれた言葉に、一瞬謁見の間は全くの無音になった後、波が打ち寄せるように騒めいた。
「軍船？　マリ王国海軍とおっしゃいましたか」
「――大公、それは一体」
「ヴァン・グレッグ将軍、どういう事です」
正規軍や近衛師団、地政院などの文官達からも、ベールや西方軍将軍ヴァン・グレッグに問いかける視線が向けられる。
「経緯は僕が説明しよう。この中で僕が一番、足を突っ込んでいるからね」
アルジマールは普段と変わらない口調でそう言うと、一度レオアリスに目を向け、そして王を振り仰いだ。
「陛下、よろしいですか」
「現時点では、そなたが最も適任であろうな」
王の声には微かに、苦笑に近い響きがあった。ただ事態を軽んじている訳ではなく、レガージュの治領とは全く異なる分野にいるアルジマー

ルが一番の適任にならざるを得ない処に、その原因がある。
アルジマールは恭しく一礼し、顔を戻した。
「今朝早く、僕は法術士を一人、レガージュに送った。この軍議はその法術士が現地から寄越した報告に基づいて召集されている。報告が届いたのはつい三刻前」
独特の、教鞭を取るような口調だ。
「法術士を送ったのはレガージュに重篤人がいて、治癒を必要としたからだが――、その経緯は後でまとめてお知らせする」
一旦言葉を区切り、首を傾げた。
「結論から言うと、レガージュにマリ王国海軍の軍船が寄せた理由は、レガージュ船団がマリ王国の交易船と軍船を沈めたからだ」
「――ア、アルジマール院長、そんなまさか」
文官達の一人が唸る。アルジマールの表情は深く目元まで被った被き(かず)の下で、普段と大差は無い。
「まあそれはマリの言い分だよ。一方でレガージュは、一切その事実は無いと言っているからね」
「では、マリ王国の言いがかりだと」
「いいや。事実マリ王国の交易船、ゼ・アマーリア号はレガージュ近海で沈んでいる。それが七日前の夕方の事のようだ」
アルジマールは口にはしなかったが、ちょうどファルシオンの為の祝賀式典が開かれた日の事だと、誰もがすぐ思い浮かべた。
「レガージュはマリの船が沈んだ報せを受けて船を出し、船員二人を救助している。僕はレガージュに依頼され、彼等の為に治癒師を送ったんだ。残念ながら一人は既に亡くなったそうだが、もう一人は現在施術中だ。彼は早ければ明日にも回復すると思う」
「それならば、マリの思い違いなのだろう。自分で沈めた船の船員を救助するはずがない」
北方軍将軍ランドリーが苦々しい声で言った。「レガージュがマリ海軍と膝詰めで話し合えば誤解が解ける。何故そうしない」
「事はそう簡単じゃないようだ。マリ王国海軍は、彼等自身が救出したゼ・アマーリア号の船員から、レガージュ船団の船がゼ・アマーリアを沈めたという証言を得ている」
ざわりと謁見の間の空気が揺れる。
「そして、彼等の目の前で、海軍の軍船一隻を沈めるところを見ていると」
「何だと。ではやはり、レガージュが？」
けしからんと言わんばかりに、今度は南方軍将軍ケストナーが口元を歪める。アルジマールはちょっとばかり単純なこの男をちらりと眺め、言葉を続けた。
「マリ王国海軍はその証言をもとに、昨日の午後二刻、レガージュへ到着した」
「待ってください」レオアリスはふと気が付いて口を挟んだ。「昨日、マリ王国の軍船が？　交易船が沈んだのは七日前の話でしょう」
「剣士殿の言う通りです――」
同じように疑問を口にしたのは、東方軍将軍ミラーだ。
「レガージュからマリ王国は、船で二十日はかかるはず。無理でしょう、それは」
「そう――ところがマリの海軍は実際にレガージュに着いている。偶然近海に居たんだろう」
「――」
アルジマールの言葉は、ここにいる者達に疑問を投げかけるように響いた。
（偶然？　そんな事がこの状況であったって？）
レオアリスは周囲を見た。偶然という言葉を、アルジマールが投げかけた通り、誰も鵜呑みにしてはいない。
「そこの議論は後にしよう――」

アルジマールは王を見上げ、またレオアリス達を見回した。この時ばかりはアルジマールにも、もろい硝子細工に触れるような慎重さがあった。
「昨日、マリ王国はレガージュ交易組合に対し、国使を送って来た。国使である以上、それはレガージュだけではなく、この国に――そして陛下に対して向けられたものと言える」
視線がアルジマールに集中し、謁見の間の空気は更にぴんと張り詰めた。アルジマールがゆっくり口にする。
「――マリ王国は我が国に、国としての謝罪と、賠償金五十万の支払いを求めている」
あちこちで息を呑む音が上がった。
「期限は明日の昼二刻。謝罪がなされない場合はレガージュを攻撃すると、そう通告してきた」
謁見の間は物音一つ無く静まり返った。互いの出方を見るように周囲を見回し、または隣や後ろに控えている部下達と素早くやり取りする。
レオアリスも後ろのグランスレイとロットバルトに目をやった。ロットバルトが首を振り、「状況を」と小さく告げる。自分と同じ判断であるのを確認し、レオアリスはまたアルジマールへ視線を戻した。
騒めきと困惑の中で、最初に苛立ちをあらわにしたのはケストナーだ。
「国として謝罪をしろと？　馬鹿げた言い草だ」
「陛下、事実関係も疑わしいそのような条件を、我が国が呑む必要はありません」
「マリは我々を風下に立たせようというのか」
セルファンが珍しく、アルジマールを睨むように口を開いた。
「レガージュの領事や交易組合は今まで何をやっていたのです。マリ海軍が寄せた昨日の段階で報告せず、今になって報告を上げた理由は。そもそもマリの交易船が沈んだ段階で一報を入れるべきではありませんか」
「僕を睨まれても困るが――レガージュ交易組合は、状況を調査している最中だったと言っている。情報がある程度まとまってから報告しようと考えていたんだろう。それから領事ホースエント子爵は、昨日マリ王国海軍の提督と話し合いを持とうとして失敗しているようだ。かなりマリを怒らせてね」
グランスレイはちらりとロットバルトを見た。何も言わなかったが、グランスレイの考えは汲み取れる。
代弁したのは地政院の事務官だ。
「あの男は能がないのですよ。先代ならば少しましな応対ができたのでしょうが――そもそも我々に一報も上げず、勝手な行動を取った挙句、事態を悪化させるとは」
「それに関しては、レガージュの交易組合はいかようにも叱責を受けると言っている」
「叱責を受ける？　国を謝罪という立場に追い込んで、どのような叱責を受けるつもりですか」
「交易組合の廃止か、自らの首で収めるか、いずれかしかない」
「レガージュも良くのうのうと、マリの条件を伝えてこれたものです。自治権があると図に乗っているのでは」
「――とにかく、状況をもう一度確認すべきではありませんか」
レオアリスは騒がしくなってきた空気を宥めるようにそう言った。
「今はレガージュの対応を言っても始まりません。それよりも、こうなった原因が何なのか――レガージュとマリ王国との話が食い違っている以上、必ず原因があるはずです」
何種類かの視線が向けられる。同意や、検討するような眼、否定、それぞれだ。
「まずはそこを明らかにしてからでなくては、決着の仕方を誤る恐れがあります」
それに対する意識は様々にしろ、レオアリスの声は散らばりかけていた視点を在るべきところに戻した。
また静かになった参列者達の中で、口を開いたのはずっと黙っていたベールだった。慎重な口調ではあるが、否定の色は無い。

「しかし、原因を明らかにしてと言っても期限は明日だ。ほぼ一日――何ができる」
「一日しかないからこそ、その間に両者の話を少しでも聞くべきだと考えます。そうは言ってもマリとの話は難しいのかもしれませんが――話の掛け違いがあったまま、国としての対応を決めるのは危険だと思います」
「経験談ですか。貴方の過去からすると、他人事ではないのかもしれないですな。心情を良くお分かりのようですから」
揶揄するような口調で、先ほどの地政院の事務次官がレオアリスに鋭い視線を向けた。
「レガージュには貴方の同族である剣士がいる。レガージュを庇う気持ちもあるでしょう」
「今そういう話題は相応しくないだろう」
トゥレスが咎める。
「レオアリスの過去はもう決着のついた事で、王も承知しておられる。この件でレガージュとの関わりを取り沙汰するのは、悪意が感じられるが」
「何を……」
「構わない、トゥレス」
「何を甘い事を言ってるんだ。こういう場で黙っていたら、認めるのと同じ事だぞ」
トゥレスは呆れたようにレオアリスを見た。地政院の事務次官が口元を歪める。
「トゥレス大将は全く危惧を感じていないと、そう仰る訳ですな。ではレガージュで何かがあったら、近衛師団が責任を」
「いい加減にしてよ――」アスタロトが尖った声を出し、事務次官を睨み付けた。「いつまでその話をするつもりなんだ」
深紅の瞳には事務次官を焼き尽くしそうな熱がある。事務次官は真っ青になって身を縮めた。
「いえ、アスタロト公爵、私はただ」
「同じ剣士がいたら、気持ちが動くのは当たり前だろ。庇うとかそんな話じゃない」
「ア――炎帝公」
レオアリスはアスタロトを呼ぼうとして、口調を改めた。
「この件については、私個人の責任ですので」
アスタロトは少し感情的になっている。こうした場でそれは、アスタロトの立場にもあまりいい事ではないだろう。そう思ったからだが、アスタロトはレオアリスを見つめて何か言おうとして――、俯きがちに口を閉ざした。
だが事務次官は二人の親交を思い出したのか、恐縮しきって身を縮めている。
「アスタロト侯爵、申し訳ございません、これは」
「失礼――」
涼やかな声が割って入り、漂いかけていた空気が変わった。発言はレオアリスの後ろの席に座っていたロットバルトだ。視線は滅多に公で発言する事のない青年に集まった。
グランスレイはロットバルトが何を言うのか、微かに緊張した面持ちを向けた。ロットバルトがグランスレイに答えるように、慣れた人間以外には判らないほどの笑みを浮かべる。
「僭越ながら……アルジマール院長、一つ確認をさせてください」
「何だろう」
「今回、そのザインについては何か情報は。今地政院からもご指摘がありましたが、我々としてもレガージュの剣士については当然、意識せざるを得ません。ザインとは全く無縁という訳でもありませんので」
ロットバルトはそこで一度、言葉を区切った。諸侯達が今の言葉を検討するような様子を見て、再び口を開く。
「我々も先刻、召集状を受けた時から、ザインの動向は気にかかっていたところです。――レガージュの守護者として、これまでに何らかの動きがありそうな気もしますが、そうした情報はありませんか」

グランスレイは心の中で息を吐き、改めて感心した。さすがにこの場で辛辣な言葉を口にする訳がない――それはレオアリスの立場を悪くするだけだと当然、ロットバルトも判っている。
ザインとの関連を積極的に持ち出す事で逆に、レオアリス個人への批判からこの件全体の問題へ話の趣旨をすり替え、議論を本筋に戻しただけだ。気まずい空気もいつの間にか拭い去られている。
アルジマールは被(かず)きに包まれた頭を上げた。隠れていた瞳が片方、光を受けて煌めく。
「ザインか。そう言えば動いてないな――何故だろう」
「表立って動くには、繊細な事案だとは思います。しかしマリ王国海軍との交渉の場に出るのに十分な立場でしょう」
「ふぅん、そうだね――ザインについては、レガージュに動向を確認しよう。――では」
「ああ、議論を収束させるのは少し待ってもらおう、アルジマール」
そう言ったのはルシファーだ。ルシファーは紫の瞳をレオアリスに向けた。
「師団第一大隊大将に聞きたい。レガージュの商人ブレンダンをアルジマールに紹介したのは貴侯だそうだな。先ほどヴェルナー中将が全くの無縁ではないと言っていたが、どの程度の関わりなのか」
先日の宴の華やかさとは違う、西方公としての厳しさがある。レオアリスは改めて居住まいを正した。
「確かに、剣士ザインとは縁があります。十日ほど前――ブレンダン氏がザインからの手紙を持って尋ねてきて、それからですが。それまでは残念ながら、親交はありません」
「ザインからの手紙？　ザインは何を」
「ザインからと言うより、実際は彼の子供が書いて送ってくれたもので……ザインが父の古い友人だという事と、いつか会いたいと」
子供からと聞いて、何人かは拍子抜けしたように口元を緩めた。ただ、ルシファーはそこで質問を止めなかった。
「古い友人？　面白い事を言う。それでいて、関わりは今まで無かったと？」
「ファー」
何故ルシファーがそんな事を言い出したのかと、隣にいたアスタロトが彼女の横顔を見た。
これでは尋問だ。
「やめてよファー、どうしたの？」
ルシファーはアスタロトに視線を向け、薄く笑った。
「お嬢さん、この場でその名を呼ぶのはやめなさい。貴方は今正規軍将軍としてここにいるのよ」
いつになく、厳しく――嘲るような口調で言い、再びレオアリスを見据える。
「ザインとの関係は、本当にないのか。最近まで知らなかったというのは、額面通りには受け取りがたいな」
アスタロトはルシファーの態度に戸惑い、息を止めたまま彼女と、レオアリスを見た。謁見の間の空気は先ほど地政院の事務官が発言した時とは全く違って張り詰め、ぴりぴりと肌を撫ぜるようだ。
レオアリスが口を開こうとした時、空気が動いた。
「――ザインは確かに、かつての大戦の折、レガージュ戦線に参加した」
王だ。
静かだが力に満ち――、そして懐かしむような響きでもある。
視線は一斉に王へと集中し、室内の空気は再び張り詰めた。
「戦線があの地に踏み止まったのは、ザインやその一族の功績が大きい。剣士達の参戦がなければ、レガージュは破られ内陸部まで戦火が広がっていただろう」
謁見の間は静まり返り、王の言葉を聞いている。王はその金色(こんじき)の瞳を壇下のレオアリスへ向けた。

「ジンの親しい友人と知っていれば、私がもっと早い時期にそなたに教えてやれたのだがな」
「――そのような、事など」
王の追憶に似た言葉がふいに喉の奥に熱を競り上げ、レオアリスは奥歯を噛みしめた。
王の語る言葉が、過去の情景を呼び起こすように感じられる。
ルシファーは王を見上げて、再び視線を戻した。謁見の間の空気からは、もう暗い陰が払拭されている。
「――」
アスタロトははっとしてルシファーの横顔を眺めた。何か、――笑ったようにも見えたからだ。
しかし見つめた先で、ルシファーは普段と変わらない表情を浮かべ、王に一礼してからアルジマールを見た。
「質問を続けてもかまわないだろう？　少しまだ疑問がある」
「僕は本来、進行役ではないんだが」
「構わない。続けられよ、西方公」
ベールが引き取って促し、ルシファーは改めてレオアリスに顔を向けた。
「悪いがもう少し付き合ってもらおう。今回の一件を把握する上で必要な事だ」
「承知しています」
「――レガージュの商人が法術士を紹介して欲しいと言ってきた時、その理由は聞いたのか」
「レガージュの近海で他国の船が沈み、救助した船員の治癒が必要だと、そう聞きました」
「それ以外に何か言っていなかったのか――例えばマリ海軍が関わる事などを」
「その時点では――確かに急いで治癒の術者を探していましたが、そうした状況だったとは思えません」
続けて答えたのはアルジマールだった。
「それに関しては、僕の依頼人自身――レガージュの商人だが、彼がマリの軍船の事実を把握していなかったと理解している。僕もブレンダンとは話したけれど、彼が隠している素振りは無かった。現地の術士も、ブレンダンはマリの軍船を見てかなり驚いた様子だったと言っていたし――今朝の時点ではそういう状況だよ」
「なるほど――」
そう言って唇に笑みを浮かべ、レオアリスとアルジマール、そして諸侯達を見渡した。
「状況は判った。私の質問は以上だ。アルジマールに続きがあるなら、続きを」
「僕も以上だ」
広い謁見の間を覆っていた緊張がすうっと退いたように思えた。
ロットバルトは微かに息を吐き、素早く周囲の反応とルシファーの様子とを見比べた。
この場でレオアリスとザインとの関わりを明確にしておく事は必要だ。質問が飛ぶのは想定の範囲――だがルシファーからその質問が出るとは思っていなかった。
先ほどの地政院事務次官の反応のように、表面的に食い付き易い話題だからだ。
（いや、確かにレガージュは西方公の管轄だ。詳細を確認するのは当然だろう。しかし……）
何故だろう、ルシファーの意図はどこか別のところにあるように思えた。
（あの夜会でのやり方と、似ている）
わざわざアスタロトとエアリディアルを同席させたあの夜会と。何故敢えて波風を立てるやり方をするのかと、そう思わせるところが、似ているのだ。
夜会でのルシファーは、ロットバルトに対して踏み込むなとそう告げ

た。
好意的な忠告とは違う。
そして今の詰問。
同じところに根差しているのではないかと、そう思わせる。
先ほど、王の言葉が諸侯の意識を変えなければ、場はレオアリスに批判的なものになっていただろう。
そう考えてふと思い至った。
（――王は意識を変える為に、意図してそうされたのか）
「さて――幾つかの懸案を出したが、根本に立ち帰らなくてはならない。我々にもレガージュの住民達にも、もはや猶予は無い」
ベールは改めてそう言った。
「マリ王国の要望にどう対応するか、考えがあったら発言願おう」
ヴェルナー侯爵が蒼い瞳を向けた。
「大公。この場でする議論には限界がありましょう。近衛師団大将の言うとおり、現地で状況を子細に確認した上で判断するのが良いかと」
ヴェルナー侯爵の言葉に、随所で同意の表情を浮かべる。次に発言したのは、ベールの右隣に座っていたスランザールだった。
「それが最善じゃろう。ただ状況を確認するとなると、期限が切られている中、いつの段階で判断するか、そこが重要じゃ。調停と対話を同時に行える権限がその者に必要になる。マリ王国を議論の場に着かせ、我々の主張を納得させるだけの権威――」
「であれば適任は、ヴァン・グレッグ将軍か、アスタロト公爵では」
そう言ったのは先ほどの地政院事務次官だが、スランザールは首を振った。
「軍が全面に出るべきではないな。それではマリは対話を受け入れまい」
「では、西方公に出ていただいては」
「西方公――」
スランザールはゆっくりとそう言い、ルシファーを見た。
ルシファーは口元にうっすらと笑みを浮かべ、スランザールに眼差しを返す。
スランザールは黙ってルシファーを見つめている。
「スランザール殿？」
地政院事務次官は戸惑って二人の様子を見比べた。
どことなく身を縛るような空気を破ったのは、やはり深く静謐な声だった。
「議論はほぼ決した――」
一連のやり取りを眺めていた王が、玉座から僅かに身を起こす。謁見の間の空気が揺らいだ。
「マリ王国海軍へは、国使を送るものとする」
そう明言し、王は玉座の傍らに黄金の瞳を向けた。
「ファルシオン」
ファルシオンが緊張が弾けたように顔を上げた。
この席に座ってからずっと、繰り広げられる議論を見ながら、ファルシオンは自分がここにいる理由を考え続けていた。
「そなたは明朝レガージュに赴き、マリ王国海軍の提督と面会せよ。王太子として国を担って対話をするのだ」
謁見の間全体が驚愕にうねるようだ。
これほど幼いファルシオンを――、という思いと、僅か五歳とはいえ王太子たるファルシオンを国使とするほど、王がこの件を重く捉えているのか、と、その二点においての驚きだ。
王太子は王の名代そのものを意味する。
スランザールはほんの一呼吸の間、憂いを帯びた瞳を伏せた。
ファルシオンは椅子を立つと、高座の階（きざはし）を数段降りて王の前に膝をつく。
「――近衛師団」
王は視線を巡らせた。
「第一大隊大将、レオアリス。そなたは小隊一隊を率いファルシオンを

守護せよ」
レオアリスが膝をつき、面を伏せる。
「身命に代えても、王太子殿下の御身をお守り致します」
諸侯はやはり騒めいたが、王がファルシオンの名を呼んだ時よりは驚いた様子は無かった。先日のファルシオンの祝賀式典でレオアリスは十分に役割を果たしている。漂ったのは当然だろうと、そういう空気だ。
第三大隊のセルファンは苦々しい表情を浮かべたが、すぐにそれを押さえた。
「正規軍将軍、アスタロト」
続いて王がアスタロトを呼ぶ。アスタロトは王の声にはっとして顔を上げた。
「危急の事態に備え、西方軍第七大隊のうち、中隊をボードヴィルで待機させよ。ただしファルシオンより指示があるまで、兵を動かしてはならん」
ボードヴィルは西方軍第七大隊が駐屯する軍都だ。
「――承知致しました」
次々と矢継ぎ早に王の下命が言い渡される。黄金の瞳はアルジマールに向けられた。
「アルジマール。かつての道は使えるか」
「いつなりとお命じください。昨夜、ちょうど復活させたところです。大隊一つでも送り届けましょう」
「――良かろう」
最後に王はスランザールを見た。
「老公。そなたにはファルシオンの補佐を頼みたい」
スランザールは既に先ほどの憂いを消して、恭しく頭を下げた。
「仰せのままに――」
王は謁見の間を睥睨した。緊張が否応無しに高まる。
「レガージュの一件は全て、王太子ファルシオンに一任する。ファルシオンの判断が我が意と考えよ」
列席者達が一斉に膝をつき、頭を下げる。その衣擦れの音が波のように流れた。
「明朝七刻、フィオリ・アル・レガージュへ発つ。万事滞りなく整えよ」

三

視界から朝日に輝く王城の尖塔が揺らいで消え、その次に感じたのは肌に触れるふわりとした熱だった。
レオアリスは瞳を開け、眩しさに少し目を眇めながら、すぐ後ろにいるファルシオンを振り返った。
「殿下、ご気分は」
「……大丈夫」
ファルシオンもまだくらくらする頭を振って、レオアリスを見上げた。
「ちょっと目がまわる……」
「ご安心を。法術の余韻ですから、すぐに消えます」
ファルシオンがしっかりと頷いたのを確認し、レオアリスはグランスレイ達へ顔を向けた。
「周囲の状況は。アルジマール院長がしっかり送ってくれたはずだが、街は見えるか？」
アルジマールは先日ブレンダン達を送った移動陣を使い、一度の施術でファルシオンやレオアリス達だけでなく、王が指定した小隊五十名と彼等の乗騎の飛竜をレガージュに送り届けていた。改めて、舌を巻くほど高度な法術だと、そう思った。
ファルシオンとスランザール、グランスレイとロットバルト、フレイザー、フレイザーが率いる左軍第一小隊、全員問題なく揃っている。
それらを確認し、少将ベルツが数名の隊士を走らせたのを見てから、レオアリスは改めてこの場所を眺めた。
色彩が鮮やかだ。
緑の短い下草が覆う足元には白い石積みの残骸が点々と散らばり、時折崩れた柱や壁があった。振り仰ぐと青い空が、世界の半分を覆うように広がっている。
陽射しが熱い。質量があるみたいに肌に落ちてくる。転移して最初に肌に感じた熱は、太陽の陽射しだったのだと判った。
吹き付ける風が、熱い。
「ここが――レガージュか……」
感慨に浸るような状況では無いと判っていたが、それでもレオアリスはそっと息を吐いた。
遠い生まれ故郷とはまるで違う――。
夏でもどこか遠い太陽は、ここでは全てを支配するように存在していた。
だが感慨も束の間、レオアリスの瞳はもう一つのものを捉えた。
草地が連なる先、切り取られたような岸壁の向こうに見える、青い海と――、そこに一列に並ぶ船団だ。遠目にも、旗が靡いているのが判る。マリ王国の国旗か、海軍旗か。
レオアリスは一歩踏み出した。草地の中の小さな石の欠けらがじゃりと音を立てる。
「あれか。マリ王国海軍――」
ロットバルトが眼を向ける。
「合計十一隻、元は十二隻の船団が一隻を沈められたと、それを眼で見て取れる状態ですね」
「火球砲を備えているのは、見る限りじゃどうやら六隻のようだ」
この距離でそこまで見えるのかとロットバルトは感心したようにレオアリスに眼を向けた。
「なるほど――。マリ王国では戦功によって、火球砲を備えた軍船を与えられるという話です。七つの船団を持ち、船団の半数もの船が火球砲を備えているのはうち二つ」
「メネゼスという提督は武勲で知られるらしいしな」
「上将」
グランスレイに呼ばれ振り返ると、グランスレイの傍らに濃紺の軍服を纏った士官が一人、ちょうど足を止めたところだった。膝をつくと右腕を胸に当て、正規軍式の敬礼を向ける。
レガージュに駐屯する正規軍第七大隊の中将だと、すぐに判った。

その姿の向こうに、レガージュ駐屯部隊だろう、正規軍兵士達が並んで膝をついていた。
レオアリスはファルシオンの斜め横に退いた。正規軍中将はファルシオンに対し、深々と頭を下げた。
「王太子、ファルシオン殿下――ご尊顔を拝し光栄です！　正規軍西方第七大隊中将ドナートと申します！　第七大隊大将ウィンスターより殿下のお越しをお聞きし、お迎えに上がりました！」
ファルシオンはドナートへ身体を向け、頷いた。
「ドナート中将、出迎え大儀である」
「は！　有難きお言葉――」
ドナートは顔を上げ、スランザールとレオアリスを見た。
「スランザール公並びに近衛師団第一大隊大将殿にも、改めてご挨拶申し上げます！」
「状況の変化は無いか」
問いかけたスランザールに対し、地面についていた左腕の肘を曲げるようにして身を屈める。
「は、昨日の報告より変わりはございません！　到着来、あの位置を保ったままであります！」
「ふむ――街の様子は」
「は！　一時期状況の説明を求めて交易組合の会館前に商人達が集まりましたが、昨夕交易組合長が状況を説明し、現在は下火になっております。我々駐屯部隊も騒ぎが拡大した際は対応するため待機しておりますが、現時点までに出動はしておりません！」
「なるほど、レガージュの住人は肝が据わっておるようじゃな。過去の経験ゆえか――」
スランザールの言葉を聞きながら、ロットバルトは瓦礫の間を出て岸壁の傍に立った。
足元は高い断崖になっている。軽く三十間はありそうなそれが、左右に延々と連なり、その切れ目に河口と街があるような状態だ。
白い壁と青い瓦屋根の家々が連なる街並みは美しい。
（だが、確かに――要衝だ）
こうして改めて目の当たりにすると、三百年前の大戦でレガージュ戦線が長く持ち堪えた理由が良く判った。
岸壁を這うように駆け上がってくる風が、海からの独特な香りを運んでくる。内陸部の王都では全く馴染みのない――潮の香りだ。
ふ、とある引っ掛かりを覚え、ロットバルトは眼下の海面を見つめた。
打ち寄せられた波が岸壁に当たって砕け、白く泡立つ。その都度風が吹きつけてくる潮の香。
ロットバルトもまた海を眼にしたのは初めてだが、どこかで一度嗅いだ覚えがあると、そう思った。
あれはもっとはっきりした強い香りだったが、ごく最近だ。
何故か、今の状況とは関係ないはずのそれに強く注意を引かれ、記憶を辿った。
基本的に好んで香りを立てるのは女達だが、大抵は甘い花の香りばかりで、この香りは余り好まれないだろう。華やかさを引き立てる香りとしては遠い。
（――いや、あの時……）
記憶が甦る。
何故そんな香りを纏っているのか、意外に思った事が思い出された。
六日前の夜会で――。
『ああ、これ？　すぐに消えるわ……』
そう言って微笑んだ時には、確かにその香りは消えていた。代わりに何事も無かったかのように甘い花の香が漂った。
『残念ね』
（西方公――？）
「どう？」

ふいに女の声がかかり、ロットバルトはその考えから意識を引き上げた。後から来たフレイザーが首を傾げていた。
「――」
「あの船団を見た感想は」
「……そうですね――。マリ王国は三方を海に囲まれた海洋国です。文書宮にある幾つかの記録を見ましたが、海上戦だけではなく当然港を攻める戦術にも長けている――。反面我が国では海戦は大戦以降行われた記録はありません。そもそも大戦後は西海との条約もあり軍船も有していない。実際我々には非常に不利な状況ですね」
「のっけから悲観的な分析ね」
「まあ全く楽観ができない訳ではありませんよ。今の段階ではマリ王国海軍は、威嚇の姿勢を崩していない。文献では火球砲の射程は百間と記されています。文献だけで距離を測るのは危険ですが、一昨日に一度威嚇射撃をしていますから、その情報も合わせると百間と見てほぼ間違いはないでしょう。現在の港から船団までの距離が報告によるとおよそ百十間。それからすると、敢えてレガージュの街に砲撃が届かないぎりぎりの距離を保っているようです」
「ぎりぎりでしょ。でもそれはレガージュも理解しているみたいね」
「そのようですね。あの布陣でレガージュを攻撃しようとするなら、まず船を進める。対応する時間はあります」
「でも対応できるかしら。ほんの短時間しかないでしょう」
「まあ四半刻も無いでしょうね。いかにマリ海軍をあの場所から動かさないかが問われ、また火球砲を防ぐ為の事前の手筈が重要になる――ですが今回は、戦闘にならないように対処するのが第一です」
「――そうね」
フレイザーは頷いて唇を引き結んだ。
「マリは待ってくれている――ただし、待っているのは謝罪ですが」
「――」
王は昨日の軍議で、結論を示さなかった。場合によっては――、ファルシオンがマリ王国に対して謝罪をする事になるのだろうか。
スランザールとレオアリス達は、昨日その件について話をしていたが、やはり結論は出ていない。
フレイザーは再び船団へ目を向けた。強い風がフレイザーの波打つ緋色の髪を煽る。額にかかる髪を掻き上げ、巡らせようとしていた視線を止め、その手で斜面の下を差した。
「上将、あれを」
フレイザーが指差した先、丘の斜面の下から、数名の男達が登ってくるのが見えた。
先頭に立つ二人の男の、ブレンダンが身につけ付けていたのと同じような服装が、レガージュの商人なのだろうとそう思わせる。その後ろに十名ほど続くのは兵士――レガージュ船団の団員だろう。
昨夕の内にレガージュへは伝令使が出され、ファルシオンの到着は伝えられていた。直接交易組合の会館を訪れる予定だったが、出迎えに来たようだ。
丘の中腹の廃墟に立つ一団を見上げ、レガージュの男達は斜面を登る足を速めた。
「殿下、こちらへ」
スランザールがファルシオンの肩を引き寄せる。レオアリスはファルシオンの傍らに立ち、商人達が登ってくるのを待った。
グランスレイとフレイザー、ロットバルトがファルシオンの前方左右に開くように位置取り、近衛師団小隊五十名はファルシオンの後方を半円状に囲んでいる。
小さなファルシオンの姿は、黒い軍服に身を包んだ近衛師団隊士達に戴かれるように佇み、威厳を纏(まと)って見えた。
斜面を登ってきた商人達――カリカオテとビルゼンはその姿に息を呑み、斜面のやや下、正規軍兵士達が並ぶ辺りで慌ただしく膝をついた。
初めて目の当たりにする王子の姿に、長年レガージュの自治を担って

きたカリカオテ達ですら、畏怖に近い感動を覚えていた。僅か五歳という幼さは、今この姿からは感じられない。
陽の降り注ぐ廃墟の中にあっても、王城の謁見の間と何ら遜色は無かっただろう。
「王太子殿下――御自らのお出ましを頂き、誠に恐縮の至りと存じ上げます」
顔を上げないまま、カリカオテは早口で言った。
「私は、フィオリ・アル・レガージュの交易組合長、カリカオテと申します」
束の間言葉を飲み込んだと思うと、カリカオテはつんのめるようにしてその場に伏し、額を短い草の上に押し当てた。
その思い詰めたような動作に、ファルシオンが金色の瞳を見開く。
「この度の件、この一命を差し出しても精算のつかぬ事と、承知しております！　王太子殿下――」
共に来たビルゼン達は覚悟を決めた様子で身体を伏し、じっと俯いている。
「しかしどうか、この首を刎ね、マリ王国海軍に差し出して頂けますよう――！」
カリカオテは懇願とも言える口調でそう言った。
レオアリスは視線だけを落とし、ファルシオンを見つめた。彼の立つ位置からは、瞳は銀髪に隠され、まだ柔らかな頬だけが見える。
（――）
いきなり大きな決断を求められ、どう答えるのか――
フレイザーはスランザールへそっと視線を向けた。だがスランザールは泰然としたままで、レオアリスにも口を開く様子はない。グランスレイもロットバルトもファルシオンが決断するのを当然のように待っている。
ファルシオンはじっと黙っていたが、ややあって小さく息を吐いた。
「面を上げよ」
スランザールもレオアリスも、何も言わない。だから自分でやらなければいけないのだと、そう思った。
それを求められ、王太子として答えなくてはいけない。
今回の問題は全て。
その為に、王はファルシオンを国使として送ったのだ。
「今、この場でそなたを罰しても意味のないことだと思う」
カリカオテはまだ伏したまま、じっとしている。
「それに、まだレガージュの船がマリ王国の船を沈めたか、はっきり判っているわけではないと、聞いている。今は、それを確かめるのが、先だろう」
カリカオテは声もなくもう一度叩頭（こうとう）し、恐縮しきっている。
「レオアリス」
いつまでも顔を上げないカリカオテ達に困って、ファルシオンはレオアリスを見上げた。ここで頼っていいのか判らなかったが、レオアリスは微かに笑ってみせ、カリカオテの傍に歩み寄ると膝をついた。
「組合長殿、顔をお上げください。殿下の仰る通り、今はマリ王国海軍との対応をどうすべきか、一刻も早く話し合うべき段階です」
肩に手を置き、身体を起こすように促す。
カリカオテはしばらく躊躇い、僅かに上体を起こした。傍らに膝をついていたレオアリスと目線が合う。
ファルシオンが「レオアリス」と呼ぶのを、カリカオテも聞いていた。
ザインと同じ剣士――そして王を主に持つ剣士だ。
見つめた剣士はまだとても若く、カリカオテの孫達ほどの外見だった。ただ、身に纏う空気がザインと似ている。
ザインの事が思い出され、カリカオテはつい視線を落とした。
ザインの事を何と説明すればいいのか――。
もう一度、カリカオテを促したのは、ファルシオンの傍らに立っていたスランザールだ。

「カリカオテ殿。殿下は今は謝罪より対策をと、そう仰せなのじゃ。そなたらは今すぐ身を起こし、殿下を屋内にご案内した上で、事の次第をご説明申し上げるべきじゃろう」
その老人が王の相談役である事を、カリカオテ達も事前の伝令使により承知していた。
自分達がただ詫びれば事態が収まる訳ではないのだと、カリカオテは改めて思い出し、今度こそ本当に身を起こした。
「度重なるご無礼、申し訳ございません――。王太子殿下、まずは交易組合にご案内申し上げ、そこで詳しい経緯（いきさつ）をご説明致します」
レオアリスは先に立ち、カリカオテが立ち上がるのを待って、隊士達の後ろで待機している飛竜を示した。
「街へ移動します。カリカオテ殿、あなた方も飛竜に同乗願います」
「飛竜――、しかし、ここからでは」
カリカオテは海を見た。飛竜が飛んでは、沖にいるマリ海軍からも見えるだろう。
だがレオアリスは頷いただけで、隊士にカリカオテを乗せるよう指示すると、自分は中央の銀翼の飛竜へ向かった。
飛竜の前でファルシオンを待ち、その背に乗せて自分も騎乗する。
ぐぐ、と飛竜が翼を広げた。風が起こる。
「街へ移動する！　なるべく岸壁に沿って飛べ。マリ海軍に姿が見えるようにな」
レオアリスの指示に、カリカオテは思わず何故、と声を上げかけた。軍の姿はマリ海軍を刺激してしまうのではないかと思ったからだ。
だがおよそ五十騎の飛竜は、ファルシオンを乗せた銀翼をやや内陸側に置く陣形を取ると、近衛師団の軍旗をなびかせて岸壁を回り込むように移動を始めた。
息を呑むほど良く統率された動きは、さすがは王都の、そして王太子を擁する部隊だとそう思わせる。
部隊は一旦岸壁の上を通ると、そのまま斜面と等距離を保ってレガージュの街へ向かった。

ザインは落ち着かない街の騒めきに、交易組合の会館の一室に座って耳を傾けていた。だが落ち着かない中でも、まだ会館が騒がしさを増す様子は伝わって来ない。
カリカオテ達は王都からの国使を迎えに出たと、ファルカンから聞いていた。国使が着き、その姿を見れば、恐らく街はたちどころに蜂の巣をつついたような騒ぎになるだろう。
国使――王太子ファルシオンがレガージュの街に来臨すれば、住民達は当然騒ぎ、だが安堵するはずだ。
そして王太子の護衛を務めるのは、近衛師団第一大隊――それを率いるのはレオアリスだ。
こんな事態になった以上、会う事は無いと思っていた。
（会えと、そう言っているのか――ジン）
今しか、機会が無いと判って――。
そう思ってから、ふとザインは嘲（わら）った。
（感傷か）
そんなものは自分勝手な考えでしかなく、ジンの意思などではない。もうザインも待つつもりはない。
マリ海軍が示した期日ぎりぎりまで待ったが、あのゼ・アマーリア号の船員が目覚める気配はいまだなかった。
王太子はまだ幼い――ユージュよりもずっと幼いが、王の相談役であるスランザールが従っているのであれば、まずは両国間の話し合いが行われるのだろう。
話し合いは上手くまとまるかもしれない。
だが、レガージュの街を傷つける事無く事態を収めるのなら、西海を

見つけて突き出す方が確実だ。
いや――
それもまた、欺瞞(ぎまん)だと判っていた。
今を逃せば、西海のヴェパールの喉元に手が届く機会は、恐らくやって来ない。
ただそれだけの事だ。
ザインは扉に近づくと、向こうに立っている船団員に声をかけた。
「悪いが、オスロを呼んでくれないか」
「オスロ殿ですか」
「そうだ。王太子殿下がおいでになる前に少し話したい」
船団員は訝しそうな様子の声を返したものの、すぐ別の船団員を呼んでザインの要望を伝えた。
ほどなくして、扉を叩く音がした。
「ザイン――オスロだ」
恐る恐るというように、オスロが扉越しにザインを呼ぶ。
「入ってくれ」
オスロは扉に付いている船団員と、一人だけで話をするという事を二言三言話した後、扉を開けた。
「ザイン――」
入ってきたオスロの顔は血の気が引いて蒼白く強ばっている。ザインは小さく笑い、何を言われるのか既に予期している様子のオスロを手招いた。
「時間がない。簡潔に聞かせてもらおう。お前が何を知っているのか――いや、今回の件にどう関わったのか」
「わ、私は、」
マリ海軍の船団が現われた時のオスロの青ざめた様子にザインは気が付いていた。
「西海に手を貸したのか」
「ち、違う！　手を貸したつもりじゃ」
慌てて声を上げたオスロの口を、ザインは素早く押えた。
「余り大きな声を出すな。ファルカンに知られたら、お前は半刻後には魚の餌だぞ」
口を塞がれたままオスロは更に青くなった。
「王太子殿下に知られても、結果は大差ないだろうな。あと半刻もすれば、王太子殿下がここにお着きになるんだろう」
オスロがごくりと唾を飲み込んだのを見て、ザインは手を離した。一歩後ろに退る。それが逆に、オスロに圧迫感を与えた。
「わ、私はどうすれば」
弱々しく呟き、ザインを見る。
「俺をこの部屋から出せ。お前はただ知らない顔をしていればいいんだ」
「い、今か」
「いや、今はまずい。王太子殿下がおいでになる前に騒ぎを起こしたくない。王太子殿下はマリ海軍との話し合いの為に船で向かうはずだ。その後がいい」
「わ――判った」
オスロは何度も頷いて、これで終わりと後退ろうとしたが、ザインはその手を掴んだ。
「待て。それで終わりじゃない」
「――」
「後はお前の知っている事を、全て話してもらおう」

四

「提督！　レガージュに動きがあります」
メネゼスの司令室に走り込んできた一等海尉が、メネゼスと副官の前で直立する。
「軍の飛竜が、右舷――レガージュの右手の丘から、レガージュの街へ移動しました。数はおよそ五十騎です。いつ現われたのかは目視できておりませんが、ほぼ同時刻と思われます」
メネゼスは立ち上がり、海尉の横を抜けて船室を出た。副官と一等海尉も後に続く。
「五十騎か。鱗の色は確認できたか？」
「黒です。軍旗を立てているのも確認できました」
メネゼスの隻眼に鋭い光が宿る。
「黒鱗――近衛師団か」
口元に凄みのある笑みを浮かべ、階段を登って甲板へ出た。
舳先の延長線上にあるレガージュの街が、朝日を受けて輝くように見える。
それとも今、王の威光が照らす故か。
「レガージュめ、どうやら正直に国王へ報告したようだ」
「しかし、提督――レガージュには正規軍が駐屯しています、そこに加えて近衛師団が出てくるなど、まさか交戦を考えているのでは」
副官の声には警戒の色があったが、メネゼスは笑った。
「お前はいつも気が早いな。まあ兵力が増えた事は確かだが、おそらくいきなり交戦はないだろう。むこうさんは近衛の到着を、敢えて我々に報せてくれてるからな」
「と申しますと」
「我らが国王陛下の御意思は、アレウス国王からの謝罪だ。それが明確な限り、正規軍が出てきても二度手間になるだけだ。それを判ってるんだろう。様子見を避け、王直轄の近衛師団を出す事で、我々に国としての交渉の意思を見せている――お陰で俺は待ちきれずに火球砲を打ち込むのを思い止まったぜ」
冗談めかした言い方ではあったが、メネゼスはアレウス国が見せてきた意図を感じ取り、良しとしたように見える。
「この状況で一足飛びに近衛を出すとは、なるほど彼の国の王は賢帝だ」
「では、今レガージュには国王が？」
副官はそこに国王の姿が見えるというように、息を潜めてレガージュの街に視線を投げた。だがメネゼスはあっさりと首を振る。
「国王？　――それはないだろうな。いずれか、高位の貴族を国使に任命し交渉役に、というのが常套だろう。今回の件で最も地位の高い人物を出すとしたら、西方公か――それで我々に対する態度が測れる」
「メネゼス提督」
いつの間にか、ローデン王国の使者セルメットがメネゼスの後ろに来ていた。銀の瞳に粘つく光を浮かべている。セルメットはそっとメネゼスの傍に寄った。
「提督のお考えは今お聞きしましたが、そうは言っても充分に警戒すべきでしょう。国使に一個小隊もの兵を、飛竜を付けて送り込むのはいささか大仰かと……。国として対話する姿勢を見せておき、その実、貴国の要望へ武力で応えるつもりかもしれません」
「ほう。貴侯はそう考えられるか」
「はい。飛竜の機動力ならば沖合いにあるこの船団まで、一息に攻め込む事ができましょう。火球砲は放つまでに少なからず時を要するはず――近衛師団の飛竜はその間に船まで到達できます」
メネゼスは喉の奥で低く笑いを転がした。
「面白い――まるで軍人のような考え方をされるな」
セルメットは一瞬、うろたえたように眼を動かした。
「そ――そうでしょうか。差し出た口を聞き申し訳ありません。ただの浅薄な考えと切り捨てていただければ……」
メネゼスの隻眼が一度セルメットの銀の眼を捉え、逸らされる。

「いいや。ご忠告、有り難くいただこう」
そう言うとメネゼスはセルメットの傍を離れ、甲板を軋ませて船首へと歩いていった。セルメットはその後ろ姿を睨みながら、内心に滲んだ汗を拭った。
「――」
全面的に「セルメット」をローデンの使者として信頼しているのかは、メネゼスの態度からは掴みがたい。余り口を開くと下手な疑いを持たれる恐れがあるが、近衛師団――国使とメネゼスをこのままただ会わせては、計画が全て水泡に帰す事にもなりかねなかった。
近衛師団が出てくるのは計算外とは行かないまでも、まずは正規軍か、もしくはまずレガージュ交易組合長を処断し、その首を寄越すと踏んでいた。
（頭を下げるつもりか――まさかな。第一それでは我が君がお喜びにならぬ）
セルメット――ヴェパールは遠くに見えるレガージュの街へ視線を向けた。ここにいればマリ海軍の動きをつぶさに知れるが、お陰で身動きが取りにくいのも事実だった。
（ホースエントめ、まだ実行していないのか）
騒ぎになれば、近衛師団の足止めにもなる。
期限の午後二刻を経過させ、マリ海軍を煽って火球砲をレガージュの街に打ち込ませる。
戦端が開かれれば、後はそれに乗じてレガージュを陥す。
あくまでも、マリ海軍の行動として――そう見せるのはヴェパールには容易い事だ。船などいくらでも創り出す事ができ、他のやり方もある。
（だがこの状況では、最後は私が動くことになりそうだ――）
ヴェパールは照りつける陽射しを忌々しそうに睨み、与えられている船室に戻った。
扉を閉め、取っ手に指先で触れる。取っ手はぶるんと一度、寒天のように震えた。
これで扉をいきなり開けられる心配はない。
もしかしたらもうすぐ、ここを訪ねてくる人物があるかもしれない。
その相手をマリの兵士に見られない為の用心だった。

五

「アーシア」
アスタロト公爵家の本邸の女官が三人ばかり、階段を降りてきたアーシアを手を振って呼び止めた。アーシアが傍まで行くとそっと問いかける。
「アスタロト様は朝食を召し上がった？」
「まだ――あまり空腹ではないと仰っていたから、取り敢えず置いて下がってきたんだけど」
「そう。最近はよく鬱いでおいでね――」
アスタロトの親くらいの年齢の女官は心配そうに天井を見上げた。
アスタロトが鬱いでいるのは、館の人間達は誰もが知っていて、心配していた。理由を何となくながらにも想像できている者はアーシアのようにごく一部だけだったが、いつも奔放で屈託の無い主が落ち込んでいる様はただ見ているだけでも気掛かりなものだった。
（仕方がない。レオアリスさんと、本当は今日会う予定だったから――）
レオアリスがファルシオンに付いてレガージュという街へ行く事は、アーシアもアスタロトから聞いている。今の時間ならもう王都を発ったかもしれない。
（陛下のご下命で、重要な案件だから、こんな言考えちゃいけないとは思うけど）
アスタロトが口には出さなかったものの、レオアリスと会うのを心待ちにしていたのも知っていたから、アーシアの心境は複雑だった。もちろん、王の下命に勝るものなど無いのは判っている。
アスタロトも、特にレオアリスには、王の下命は絶対だ。
だがつい溜息が落ちる。
（レオアリスさんも、もっと早くにアスタロト様と会ってくだされば良かったのに――あの人はこういうのはなかなか気付かないんだろうけど）
これまでずっと、出会った時から変わる事の無い態度や笑顔も、こうなると少し恨み言を言ってやりたかったりもする。
お互い忙しいのだから仕方がないし、アスタロトもついこの間までまるで男の子の友達のような感じで接していて、口調もあんな感じだったのだ。気付けという方が無理を言っているのかもしれない。
（――もし）
アーシアが手にしていた空の茶器がかちゃりと音を立てる。
アスタロトの気持ちに気付いたら、レオアリスはどうするのだろうと、そう思った。
（レオアリスさんは）微かに、胸の奥のどこかが痛んだ。（アスタロト様の事を、嫌いじゃないとは思う）
けれどもしかして、それがアスタロトの気持ちと、同じでは無かったら――？
（アスタロト様は――、どうされるんだろう）
「アーシア、どうかした？」
「――何でもないんだ」
彼女達がいるのを忘れて考え事をしていたのに気付き、アーシアはにこりと笑って首を振った。
「もうそろそろ御出勤になる時間だから、それまで一人にしてさしあげよう」
そう言って彼女達に手を振り、アーシアは冷めたお茶を入れ替える為に厨房へ向かった。

アスタロトは低い寝椅子に膝を抱えて座り、すぐ前の卓の上にある花瓶を見つめた。色とりどりの花や葉が白い壁に映えて鮮やかだ。
葉の緑と花々の赤や薄い水色、白い壁の色が溶け合う間に、昨日の情景が見えた。

アスタロトの斜め前、深い緑の絨毯を隔てた向かいにレオアリスの席があり、座っていた。
『炎帝公』、とレオアリスはアスタロトを呼んだ。
それは深い水に大きな石を一つ沈めるような、そんなゆっくりとした衝撃があった。
炎帝公。それが近衛師団大将の立場に対する、アスタロトの立場だ。
ファーと呼び掛けたアスタロトに対し、ルシファーは『お嬢さん』と、そう笑った。
公の場でレオアリスがアスタロトを炎帝公と呼ぶのも、ルシファーが咎めるのも、何も間違ってはいない。
自分はアスタロトとして、あれではいけないのだ。
けれど判っていても、これは職務だからと感情を切り分けるのは難しい。
職務――
アスタロトは小さく呟いた。
多分ずっと、アスタロトがアスタロトである以上、そう振る舞わなければならないのだろう。レオアリスともこの先、そうしたやり取りが増えるのかもしれない。
昨日の軍議でそれを突き付けられた。
「――っ、」
屈めた膝を抱え込み、胸のつかえを抑えた。
もう四半刻もしたら、王城へ向かわなくてはいけない。
フィオリ・アル・レガージュの件で、アスタロトは執務室にいなくては。
正規軍将軍――炎帝公として。
息が、苦しくなる。
「――」
「アスタロト」
柔らかい声に呼ばれて顔を上げると、扉の前にルシファーの姿があった。いつの間に来たのか、誰の案内の姿も無かったが、そんな事には頭が回らなかった。
「ファ」
途中で口を閉ざしたアスタロトを見て、ルシファーが微笑みを向ける。
「昨日のことを気にしてるの？　大丈夫よ、今は。あんなのは公の場所でだけの話」
ルシファーはアスタロトに近づくと、そっと頭に手を載せた。
「辛そうだわ。大丈夫？」
「……ファー」
「可哀想にね――あなたはただの女の子なのに」
柔らかい密やかな口調が、するりとアスタロトの心の中に入り込む。
何が苦しいのか、自分でもはっきりとは判らないような気持ちを言い当てられて、抑えていた苦しい塊が、解き放たれたように喉の奥を圧迫した。
それはどんどん大きくなる。
「ファー」
「ずっと、アスタロトとして生きなくちゃいけないなんて――。自分を押し殺して、諦めて。それが当然で誰も気付かない」
「あ――」
ルシファーの両手が伸びて、アスタロトの頭をそっと抱き締める。腕の中はふわりと温かく、心地よかった。
反面、喉の奥に競り上がった塊が、存在を訴える。
「私達を、誰がそんなふうにしたのかしら」
「――ファー？」
「あなたをそんな枠に押し込めているのは誰？」
つられるように顔を上げると、注がれていた暁の瞳とぶつかった。引き込まれそうな――夜空に落ちていきそうな、深い輝き。
その色がアスタロトの意識を包む。
「――私、を」

「あなたの想いを、王は知っているわ」
アスタロトは驚いてルシファーの瞳を見つめた。
「え？」
「でも、許しはしないでしょうね」
寝椅子に座り、ルシファーの白い手を頬の脇に添えられたまま、アスタロトはルシファーの瞳から目が放せないでいた。
「力の均衡を崩すような事は認めない――。個人の感情なんて国の前にあっては打ち棄てるものだと思っている――、そういう男よ」
ゆらりと空気全体が動くような、そんな感覚だった。
彼女は怒っているのだ、と漠然と思った。
「自分の血を分けた子に対してだってそうだったんだから、当然かもしれないけど」
「ファルシオンのこと？」
「――」
「ファルシオンは……、レガージュは危険なの？」
ルシファーが笑ったのは何故だろう、とアスタロトは彼女を見つめた。
「……そうね。今のレガージュは危険でしょう。レオアリスを縛るものは幾つもあるもの」
「ファー！　どういう事？　――レガージュで何が起こってるの？！」
アスタロトは立ち上がり、ルシファーの両手を掴んだ。少し驚いた眼をして、くすりとルシファーが笑う。
「あなたは本当に、色んな事を知らないのね」
「ファー？」
ルシファーは逆にアスタロトの手首を捉え、瞳を覗き込むように顔を寄せた。
「もっと知らなくちゃ――自分を守れるくらいには」
強い力で掴んでいるとは思えないのに、手首が痛い。
暁の瞳に、光が宿っている。

昇る明けの光か、沈みゆく宵の残滓（ざんし）か、ゆらぐ光に目眩を覚える。
「一番いいのは忘れる事だけど」
「忘れる――いやだ」
ルシファーの言葉の意味も判らないまま、アスタロトはゆるゆると首を振った。
「忘れるなんて、絶対にできない」
アスタロトの言葉の何が気に障ったのか、ルシファーは細い眉を歪めた。
「――誰だって、いつかは忘れるのよ」
嘲笑うような響きの声だ。
「手から滑り落ちて行くものばかり――。あなたも、私も」
「――ファー」
アスタロトはルシファーに手首を掴まれたまま、糸が切れたように床に座り込んだ。
「あなたの憂いを取り除いてあげるわ。この先、あなたが傷付くのは、さすがに私も見るのは忍びないもの」
「――」
「アスタロト様から離れろ！」
ふいに鋭い声が飛び、ルシファーは視線を背後に投げた。
アーシアが開かれた扉の前に立ち、睨み付けていた。輪郭が滲むように青く発光している。
飛竜の姿に変わろうとしているのだ。
ルシファーはくすりと笑った。
「――ダメよ、それじゃ。今飛竜に戻って、どうやって主人を救うの？」
振り返った相手を見て、アーシアはそれがルシファーだと初めて気付いた。
「！　ルシファー様？！」
戸惑いがアーシアの面に交差する。

誰も客を通していなかったからこそ、アーシアは侵入者だと思ったのだ。
ルシファーなら、何も問題は――
いや、明らかにアスタロトの様子はおかしかった。ルシファーに手首を掴まれた状態で座り込み、アーシアにも目を向けない。
「ルシファー様、一体何があったのですか――アスタロト様は」
ルシファーが微笑んでいる。
その冷えた眼差しに、背中に氷水を流されたようにアーシアの身体は震え、強ばった。
動物が捕食者と相対した時に感じる、本能的な恐怖だ。
「ルシファー様――アスタロト様から、離れてください」
喉を塞がれたような息苦しさの中で、それでもアーシアは声を振り絞った。その事に、ルシファーは感心したように笑った。
「また会いに来るわ――今は行く所があってね」
「ル――」
アーシアが恐怖の呪縛を押し退け駆け寄ろうとした瞬間、ルシファーの姿はその場から溶けるように消えた。
アスタロトが床に崩れる。
「――ア……アスタロト様っ！」
アスタロトの名を叫び、アーシアは倒れている主に駆け寄った。
抱き起こして顔を覗き込む。
アスタロトは一度アーシアを見上げ、それからゆっくりと、瞳を閉じた。
ただ眠っただけのように思えるほど、穏やかな様子だった。
「アスタロト様！」
騒ぎに気付いた執事のシュセールが飛び込んでくる。
アーシアは何度もアスタロトの名を呼んだが、瞳は閉ざされたままだった。

六

フィオリ・アル・レガージュの街は街道を通ってやってくる旅人に対して、ここそが目的の場所だと示すように、斜面を下りながら目の前に広がっていた。
王都から二千里を経て続く石敷きの街道が、街を囲む街門で終わる。
大地の果て、諸外国との交易と親交の玄関口――二つの異なる要素を持ったこの街に対する修辞も、海に向って広がる姿はそれを実感させるに充分なものだった。
青く連なる瓦屋根の更に向うには、それ以上に青く輝く海が横たわり、更に遠くになだらかな曲線を描く水平線があった。
その光景は王都の近衛師団隊士達や、もちろん幼いファルシオンからも言葉を失わせ見入らせ、誰もが一度深呼吸するように感嘆の息を吐いた。
近衛師団の飛竜の隊列はしかし止まる事無く、緑の斜面を降りて街道の手前から門の上を抜けていく。
街門を越える時、天蓋部分の壁面に楕円の石板が掲げられ、一人の女性の横顔が描（えが）かれているのが目に入った。街を訪れる人々を迎えるようにも、街道の遥か先を見つめているようにも見える。
「あれはフィオリ・エルベの像です。彼女は街の名が示すように、三百年ずっとこの街の象徴なのです」
レオアリスの視線に気付いたビルゼンがそう言った。
彼女が、という思いでレオアリスはもう一度その横顔に目を向けた。
大戦時に、途絶えていたこの街の交易を復興する為に力を尽くした人物。道の先を見つめる真っ直ぐな眼差しには、意志の強さとしなやかさが感じられる。
ただ、どこか遠い印象があるのは、長い歳月の間に、彫り込まれた石が一部風化しているせいだけではないのだろう。

彼女は、もう三百年も前に失われた女性（ひと）なのだ。
剣士ザインの主であり、妻であった女性。
「――」
街門を抜け、地上の道なりに近衛師団の隊列が上空をゆっくり抜ける。
街の通りや窓、屋根の上にまで登って見上げているレガージュの人々にとっては、近衛師団などこの街では一生見る事がないと思っていたものの一つだろう。彼等はここ数日間で既に何度目か知れない驚きをもって近衛師団を迎えた。
飛竜の翼と翻る近衛師団旗の間から、隊士の姿に交じって幼い少年の姿が垣間見える。乗っているのは銀翼の飛竜の上で、銀翼は大将の乗騎だ。
何故それほど幼い少年が大将騎に同乗しているのか――、その容姿と年齢からそれが誰なのかに思い至ると、波のような騒めきは途端に大きなうねりになった。
「ファルシオン殿下じゃないか――？」
どこかで声が上がる。
「まさか」
「いや、ファルシオン殿下だ」
声はすぐに連鎖して広がり、次第に大きな歓声になった。
「近衛師団だって――」
「ファルシオン殿下が来てるんだ」
「王都の、王の剣士もいるって」
子供達が騒ぎながら交易組合会館の広場を駆け抜け、石段を走って登っていく。
ザインは一つだけ鎧戸の開いた窓から通りの様子を眺め、静かに息を吐いた。
もうすぐ、王太子を擁した近衛師団が――、レオアリスが、ここに着く。
ザインの脳裏に浮かぶのは、かつてのジンの姿だ。
記憶の中の瞳が、ザインに何かを語り掛けている。
ザインは窓に切り取られた海に目を向けた。瞳を射るような青い輝きが、脳裏のジンの姿を霞ませる。
青く輝くその色は、彼女を失った時の色だ。
「ジン――。許せとは言わない」
ただ、誰にも邪魔はされたくはなかった。

交易組合会館前の広場に、次々と近衛師団の飛竜が降りていく。先導の五騎とフレイザーが飛竜から降り膝をついて待つ前に、ファルシオンを乗せたレオアリスの乗騎が降りた。
既に会館前の広場は人だかりが出来上がり、若い近衛師団大将に導かれて降り立つ幼い王子の姿を、興奮と期待とともに見つめている。
近衛師団の大将がこれほどに若いとなると、それが第一大隊大将だとすぐに判る。
彼等が誇りとする剣士ザインと同じ、王に仕える二刀の剣士と、その跪く正面に立つ王子。
住民達の目に、その姿は不思議と、レガージュの街とザインの姿に重なった。彼等のザインに対する信頼と親愛故もあっただろう。
「ファルシオン殿下――本当に殿下だ」
「王太子殿下をお遣わしになるとは」
ファルシオンが長い間待ち望まれ、ようやく誕生した王子だと誰もが知っている。王にとっては、かけがえのない世継でもある。
「陛下はこの街にも、ちゃんとお心を向けてくださってるんだ」
マリの海軍船団によって街には不安が満ちていたが、王太子ファルシオンと近衛師団の到着は、この街にも王の、国の庇護があるのだという安堵を、ゆっくりとしかし確実に広げていった。

一方でファルシオンは、集まっている人々から注がれる視線を、背中にはっきりと感じていた。騒めきと視線から、言葉にはならない想いが伝わってくる気がする。
それはファルシオンがこの国の王子だからこそのものだと、ファルシオンは理解していた。
少し怖い。
ついこの間、誕生日の祝賀式典で王都の人々に手を振った時とは、それは似ているようで全く違った。
もっとずっと、質量のある想い。
向けられる期待に、どう答えればいいのか――
「殿下」
そっと呼ばれて顔を上げると、レオアリスがいつもと同じ笑みをファルシオンに向けた。
「彼等に目をお向けになってから、中にお入りください。今はそれだけで大丈夫です」
聞きなれた口調でそう告げられ、高まっていた緊張がすうっと溶けた気がする。
「――うん」
ファルシオンは瞳を上げて振り返り、レガージュの人々一人一人と目を合わせるようにゆっくり顔を巡らせた。
色んな表情が見える。
一人一人。
そうか、と思いついてファルシオンは懐に手を当てた。そこに懐中時計がそっと音を立てている。
（おんなじなんだ――）
「殿下？　どうかなさいましたか」
「ううん、大丈夫だ」
ファルシオンは頷いて、しっかりと背筋を伸ばして交易組合会館の階段を登った。扉の脇には金髪の大柄な男が既に膝をついて待っていて、ファルシオンの顔を見て素早く叩頭した。
「レガージュ船団長、ファルカンと申します。この度は我々レガージュ船団と交易組合の不徳により、多大なご迷惑をおかけし、お詫び申し上げる術もございません」
ファルシオンはファルカンの前まで行くと、立ち止まって彼を見下ろした。ファルカンの面には、さきほど丘の上でカリカオテが浮かべていた決意と同じ色がある。
束の間、ファルシオンは言うべき言葉を捜した。
「……良い。もうカリカオテからも聞いたのだ」
「は――」
ファルシオンがもう一言、言葉を継ごうとした時、一人の男が群衆を掻き分けて広場に出ると、階段を駆け上がろうとした。
気付いた人々が騒ぐよりも前に、男はあっという間に近衛師団隊士に取り押さえられ、階段手前の石畳に押しつけられた。
男は必死に顔を上げ、真っ赤になった顔をで自分を押さえている隊士達を睨み付けた。
「放せ！　私はレガージュの領事だぞ！」
「領事？」
取り押さえていた近衛師団隊士二人が、面食らった顔を見合わせる。
「私はホースエント子爵だ！　放せ、無礼者！」
「――これはホースエント子爵」
ロットバルトが階段を降りて近付く。ロットバルトの面には呆れた色がありありと浮かんでいたが、ホースエントは見知った顔を見付けて安堵を浮かべた。
「おお、ヴェルナー殿、良いところに」
「良いところかどうか。王太子殿下の御前に前触れもなく駆け出されるとは、幾分思慮が不足されているのではありませんか。万が一、問答無用で斬り捨てられたとしても文句は言えないでしょう」

「き、斬るとは、そんなまさか」
「私だったらうっかり斬っていたかもしれないな。冷静な隊士に感謝してください」
ロットバルトが隊士に放すよう指示すると、解放されたホースエントは一旦立ち上がり、石段の上から自分を見下ろしている幼い姿を見つけて素早く石畳の上に膝をついた。
広場にいた人々はすっかり静まり返り、ホースエントを見つめている。ホースエントはそれには気付かず、前に立っていたロットバルトへ視線を送った。
「ヴェルナー殿、殿下と話をさせていただきたい」
「――」
ロットバルトは階上を見上げた。グランスレイとレオアリスが脇に退り、入れ替わるようにスランザールがファルシオンの前に立つ。
「王立文書宮長、スランザール公です」
ロットバルトに言われて初めて思い当たったのか、ホースエントはあたふたと平伏した。
「ご……、は、初めてお会い致します、私はレガージュの領事」
「ホースエント。貴侯は何をしにここに顔を出した」
「は――そ、その」
スランザールの厳しい眼差しが、あたかもホースエントを打ち据えるように思える。ホースエントは縮るように見上げた。
「わ、私は――、ぎ、疑問がございまして」
「疑問？　疑問とは何じゃ」
「な、何故――、王太子殿下におかれましては、何故我が領事館にまず第一にお越しいただけないのですか」
「ホースエント――ッ」
ファルカンが怒鳴り付けそうになるのを堪(こら)えぐっと頭を提げたのが、レオアリスからも判った。レオアリスはスランザールの横顔を見た。スランザールは眼差しを緩めずホースエントを睨み据えている。
ホースエントは理解を求めようと薄笑いを浮かべた。
「本来、王家の方をお迎えするには、領事館が対応するのが筋と――交易組合は単なる街の組織に過ぎず」
「王太子殿下がどちらに赴かれるかは、その目的の如何(いかん)による。そなたの口出す事ではない」
スランザールはホースエントの言葉を遮り、ぴしゃりと告げた。ホースエントがおろおろと身を起こす。
「し、しかし、私は王から任命された領事です。これでは、これでは余りに不遇な処置に過ぎるのでは」
「領事を自認するのなら、何故これまで報告一つ上げなかったのか。昨日交易組合からこの段に至って漸く報告があった時でさえ、レガージュ領事館は何一つ報告を遣していない。それで領事と言えるか」
「ですが……その、」
「そなたの進退については、今回殿下がお心を煩わせる事ではない。追って地政院より沙汰があるであろう。それまで領事館で謹慎しておれ。どの程度の処置が下されるかは、そなたにも想定できよう。身の回りを整理しておくと良い」
突き放す響きにホースエントはぱくぱくと口を開け閉めし、ようやく声を絞り出した。
「――スランザール公、わ、私は……！　お待ちください！　――お待ちを」
だがスランザールはファルシオンを促し、もう既に会館の扉を潜ってしまった。
「領事館にお帰り頂くように」
ロットバルトは隊士に一言告げ、階段を登って扉へ向かった。隊士が丁寧に、だが断固としてホースエントを騒めく群衆の輪の外に連れ出した。

静まり返っていた広場が、再びざわざわと人々の会話に紛れていく。
ホースエントはしばらくうろうろと広場の周りを歩き回っていたが、群衆の意識はもう広間の中央に向いていた。
彼等の視線の先では、近衛師団の小隊がファルシオン達が会館に入るのを見送り、それから沖合いのマリ海軍の船と対峙するように向き直っている。
レガージュ船団の男達とも、普段領事館近くの詰所にいる正規兵とも違う姿に、レガージュの住民達はファルシオンが館に入った後もなかなか散っていかなかった。
ホースエントが繰り広げた騒動の余韻と、そして何より、次にファルシオンがあの扉から出てきた時に何を言うのか、それが気になっているのもあるだろう。
互いに興奮した顔を見交わしながら思い思いに予想しあい、じっと近衛師団と会館の扉に集中していたせいで、羞恥に顔を歪ませたホースエントが路地の隅でぶつぶつと何事か呟きながら会館を睨んでいたのには、気付いた者はほとんどいなかった。

七

広場と街の騒めきを厚い銅製の扉が閉ざす。交易組合会館の中は打って変わって静まり返っていた。
建物に足を踏み入れた瞬間、空気の中に一つの気配を感じて、レオアリスは天井を見上げた。
気配は上から、語り掛けるように降りてくる。以前、バインドと相対した時に常に感じていたのと同じ、レオアリス自身の剣の騒めきが今も感じられる。
ただあの時よりずっと静かな気配で、そこからは穏やかな人柄が想像された。
「上将、どうか？」
傍らに居たグランスレイは、先ほどのホースエントの処置について話をしていたレオアリスから返答が無い事に、訝しそうに問いかけた。
「いや」
そう首を振って歩きながら、レオアリスはもう一度すぐ近くにいる気配を視線だけで見上げた。
「こちらへ――」
カリカオテが先に立ち、ファルシオンとレオアリス達を案内して玄関広間を横切っていく。
二階への階段を登ろうとカリカオテが段に足を掛けた時だ。廊下の柱の陰からレオアリス達との間にぱっと小さな影が走り出た。
「殿下、後ろへ」
レオアリスはすっとファルシオンの前に出た。勢い良く飛び出して来た影を取り押さえる寸前で、一瞬驚きに瞳を見開く。
子供だ。
手首を掴み、通常ならそのまま捻り上げるところを止めた。
ファルシオンの前にはもう、フレイザーとロットバルトが立っている。
それを確認し、先ほどのホースエントの時の繰り返しに幾分苦笑を覚え

ながらも、レオアリスは改めて相手を見た。
「何だ――」
年齢は十歳程度だろう、黒く艶やかな短い髪をしている。燃えるような黒い瞳が手首を掴んでいるレオアリスを見上げた。
「父さんは裏切ってなんかいない！」
唐突な高い声には、しかし訴えるような必死な響きがあった。レオアリスはじっと子供を見つめ返した。
「父さん？　何の話だ」
「ユージュ！　王太子殿下の御前だ、失礼を」
ファルカンが駆け出て、ユージュの肩を引き寄せた。そのまま膝を付きファルシオンに向かって頭を下げる。
「重ねてご無礼を致します――この子は」
ユージュはファルカンの手を跳ね除けた。
「ユージュ！」
光る瞳がファルカンやカリカオテを睨む。
「絶対、何かの間違いだ！　父さんがこの街を絶対裏切ったりするもんか！　ここは母さんの街なんだから！」
「ユージュ、今は」
「父さんを出してよ！　皆ひどい――っ」
ユージュはレオアリス達に向き直り、誰に訴えていいか判らないままに彼等の上に視線をさ迷わせた。
「父さんはボクの見た夢を、ちゃんと確認するって言ってくれただけなんです！　マリの船を沈めたのは、」
「ユージュ！」
ファルカンは今度こそ、ユージュを捕まえた。怖い色をしたファルカンの眼に、ユージュも言葉を呑み込む。
レオアリスには状況が掴めなかったが、ユージュという名前ははっきり覚えていた。手紙をくれた、ザインの子供だ。
「夢？　裏切るとか――どういう事なんだ」
その単語に、どくりと心臓が鳴る。
ザインに、何があったのか――そういえば何故、ザインの姿がこの場に無いのかとレオアリスは訝しんだ。本来ならもう、姿を見せていてもいい立場だ。この館の中にいるのは先ほどから気配で判っている。
（出して、って言ったな……）
父さんを出して、と。
カリカオテが青ざめ、ファルシオンの前にひれ伏した。
「申し訳ございません、この子は、その」
「カリカオテ殿、事情がどうあれ、まずは殿下のご案内を。それとその子供も同席させて、話を聞いた方が良さそうですね」
ロットバルトがそう言うと、ファルシオンは頷いた。ファルシオンにもユージュの言葉は今回の件に深く関わっているように思えたし、レオアリスが気にしているのも気付いていた。
「そうしてくれ。私もその者の話が聞きたい」
ユージュはまだ何か言いたそうにしたものの、自分よりも幼いファルシオンの落ち着き払った様子に思うところがあったようで、喉の奥に溜め込むと俯いてじっと唇を噛んだ。
「ありがとうございます――ユージュ」
ファルカンがほっとした顔で手を伸ばすと、ユージュは躊躇ったあと、ふいと横を向いた。
ファルシオンの後について階段を上がりながら、レオアリスは斜め後ろのユージュへ視線を落とした。黒い髪は自分と同じだ。バインドも黒髪だったから、剣士の一族は皆そうなのかもしれない。
ザインも同じように黒髪なのだろうか。
一体何があったのだろう。
レオアリスがザインの事を考えたのが判ったかのように、ユージュはぱっと顔を上げた。黒目がちの、勝気っぽい顔がちょうどレオアリスの胸の高さにある。
「君が、ユージュか」

名前を呼ばれたユージュは、瞳を瞬かせてレオアリスを見上げている。
「俺に手紙をくれただろう」
戸惑っているので安心させる為ににこりと笑うと、白い頬にすうっと頬に赤みがさした。それから「あ」と呟く。
「もしかして、ジンの子供？」
最近は常に、「近衛師団の」や「王の」という枕詞がついていたから、ユージュのその言い方が珍しく思えてレオアリスは首を傾けた。
「ああ、そうか――」
同じ立場――剣士を父に持つからこその言い方なのだろう。もっとずっと、身近な感じがする。
確かに二人は、ザインとジンと、それぞれを父に持つ同じ立場だ。
「そう、ジンの子だ」
改めて自分で口にしたその言葉は、暖かな温度を感じられた。
「本当に来てくれたんだね！　きっと父さんが喜ぶだろうな――あ」
ユージュは瞳を輝かせた後、すぐにうなだれた。先ほどまでの高ぶりを思い出したのか、ぎゅっと両手を握って感情を堪えている。
「……それについては、後で話を聞くから」
だから心配するなと安易な事は言えないが、レオアリスにとってもそれは気持ちが急かされるものだった。ユージュは唇を噛み締めたまま頷いた。
ふと気になり、レオアリスは改めてユージュの腕を見た。
どちらも剣の気配は無い。まだ覚醒していないからか、それとも先ほどから館の中に満ちているザインの剣の気配に隠れて、感じ取りにくいのかもしれない。
そもそも、いわゆる混血のユージュには、剣はあるのだろうか。
それから改めて気が付いた。
（本当に、まだこれほど幼いんだな……）
確かブレンダンがそう言っていた思うが、こうして対面してみてもやはり、三百年の時を経てなお十歳前後の外見をしている。
剣士は長命種ではあるものの、それは剣の力を維持する為だと聞いていたし、幼い年齢で成長が止まるというのは考えた事が無かった。
（まだ剣が覚醒してないからなのか――？）
けれどレオアリスは剣が覚醒するまでも今も、年数そのままに成長している。
（――）
「どうぞ、お入りください」
カリカオテは廊下の突き当たりにある扉を開き、賓客を迎える為の部屋へファルシオンを通した。ファルシオンを迎えに出たカリカオテとビルゼンの他に、エルンストとオスロも先に室内にいてファルシオンの到着を待っていた。
カリカオテ達が処断される事なく戻ったのを見て、緊張していた二人の面に血の気が戻る。二人は急いで絨毯の上に両膝をついた。カリカオテがファルシオンを広い楕円の卓の上座に案内する間、じっと頭を伏せたまま、身を硬くしている。
スランザールがファルシオンの傍らに座り、レオアリス達は二人の斜め後ろに立つ。スランザールはファルシオンの顔を確認した後、膝をついたままのカリカオテ達を見た。
「面を上げ、卓に着くがいい。先ほど既に、王太子殿下は組合長カリカオテより謝罪をお受けになった。今はそれでよい。それよりもマリ王国の指定する刻限まで、あと僅か四刻ほどじゃ。まずはこの度の一件について、殿下に経緯をお聞かせ申し上げよ」
レオアリス達から向かって左手の壁に、凝った細工を施した円盤状の時計が掛けられている。どこで作られたものか――、使われている鮮やかな色彩は余り王都では馴染みが無く、交易先の国から来たものなのかもしれない。
室内に置かれた調度品やこの会館の造りにしても、王都の上層地区にある屋敷などと比べても引けを取らず、レガージュという街の繁栄ぶりを物語っているようだ。

時計の針はかちりと一つ時を刻んだ。
しばらくは、カリカオテの言葉の他は、その時計だけが音を立てていた。ファルシオンはじっと彼等の言葉に耳を傾け、ユージュも部屋の隅で、ファルカンの傍らにわざと少し離れて立ち、この場を見つめている。
カリカオテが語る経緯（いきさつ）は、昨日軍議の中やその後に読んだ法術士の報告書とほぼ変わるところは無かった。
ただこうして直接彼等の口から詳細を聞けば、やはりレガージュ船団がマリの交易船を沈めたとは思い難い。
レオアリスはカリカオテや、時に他の幹部達が補足する説明を聞きながら、じっと考え込んだ。
マリ王国側の示す「事実」と、レガージュ側が把握する「状況」と――どこかに掛け違いがある。それを探すのが今回の任務の一つでもある。
（そもそも、救出したマリの船員の内一人は、レガージュが沈めたんじゃないと言っている――）
その時はっきりと意識があった訳ではないようだが、ただ熱に浮かされた言葉だと片付けるべきではないだろう。
法術士から改めて話を聞いてみなくては判らないものの、アルジマールは昨日の時点で、早ければ今日にも目を覚ますだろうと言っていた。
間に合うか――。レガージュ交易組合はそこに強い希望を掛けている。
彼さえ目覚めれば、と。
レオアリスも、マリ王国に証拠として提示できるものがあるとしたら、今の時点ではそれが一番だろうと思う。ただ、不安な点が幾つかあるのも確かだ。
まずはそれが真実かどうか。こればかりは話を聞いてみない事には判らない。
次に、無事目が覚めたとして、証言できるのか――生死の境を彷徨っていた時の事を覚えているかどうかも含めて。
そして真実であり覚えていたとして、この状況を知った上で尚、母国であるマリ王国海軍に対してレガージュが沈めたのではないと、彼にそう言い切れるだろうか。
（何か他に、もっと確実な証明ができるものは無いか）
今回の一件にはどこか奇妙な落ち着かない感覚があるが、今の船員の話だけではマリ王国海軍の認識を覆すほどの証拠にはなり得ないだろう。
ただ一つ明確な疑問があるとしたら、昨日も感じた通り、マリ王国海軍が余りに早く登場した事だ。
昨日スランザールやロットバルトとも話をしたが、やはりその点の捉え方は同じだった。
（……そうだ――）
ふと、レオアリスは光沢のある楕円形の卓に視線を落とした。艶やかな漆塗りの表面は、その下の板に描かれた模様を柔らかく浮かび上がらせている。
登場、とたった今自分はそう考えていた。普通なら、現れた、と、そう表現するところを登場と考えたのは、ただ現われたのではなく計ったようだと――、まるで王都の劇場に掛かる演目の、舞台上に展開する物語の一節のように予め台本が用意されていたみたいだと、そう思えたからだ。
（じゃあこれは、昨日ケストナー将軍が言ったみたいに、マリの海軍が仕掛けたものなのか？）
計ったような登場。
目的は、この国に謝罪をさせ――？
その先は？
（隣接してるならともかく、マリとは領土を遠く隔ててる。領土の割譲とか、そんな目的じゃなさそうだ。国としての謝罪を求めるなら、目的は立場を強くして交易を優位に進める事か……でも駄目だ。それじゃいくら何でも）
マリ王国は実際に、交易船一隻とその乗組員を失っているのだ。マリ海軍の言葉をそのまま聞くのなら、軍船一隻も。

交易で優位に立つ為に、二隻もの船を自ら沈めるだろうか。
「殿下、少し私から確認をさせていただいてもよろしいですか」
レオアリスの問いかけにファルシオンは頷いた。
「かまわない――気になることは、今、できるだけはっきりさせたい」
ファルシオンは緊張した顔を向けた。レオアリスやスランザールがここで尋ねる事の意味とその答えを、マリ王国の国使と話をする為に、ファルシオンはきちんと理解しなくてはいけない。
「ありがとうございます」
ファルシオンに一礼し、レオアリスはカリカオテ達へ向き直った。
「レガージュ船団の船団長にお尋ねします」
まだファルカンは口を開いていない。レガージュ船団を率いる彼がどう考えているのかが知りたかった。
「何なりと、お聞きください」
ユージュの傍らに立っていたファルカンは、改めて膝をついた。
「俺は海の事は判らないので必要に応じて訂正していただきたいんですが――、今回の状況を聞いてまず気に掛かったのは、マリ王国海軍は、常時この近海まで航海するものなのかどうかという点です。演習の為の航路が元々存在するのか。彼等は余りに計ったように現われている」
ファルカンはレオアリスの言葉に瞳を見開き、ぐっと身を乗り出した。
彼もまた同じ疑問を抱いていて、王都の近衛師団大将がそこに疑問を持った事に、安堵したように見えた。素早く口を継ぐ。
「いいえ。マリ海軍の演習航路はもっと南の海域です。何かしら目的があれば別――多くは交易船の護衛ですが、それでも船団一つが護衛に着くほどの規模は滅多にありません」
「その確認は？」
「確認は……できていません。しかしそれだけの船団が航行する場合、事前に沿岸の港には伝令使を送るものですが、今回はそれはありませんでした。……レガージュに伝令使を出す前に、事が起ったのかもしれませんが」
「なるほど――」
それはどちらとも言い難い。レオアリスはほんの僅か考えを巡らせ、続けた。
「もう一つ。ゼ・アマーリア号が沈んだ時、その近海を航行していたレガージュ船団の船は何隻あったか、記録はありますか」
はっとして、ファルカンはカリカオテ達と顔を見合わせた。何故それを確認しなかったのかと、そんな思いが見て取れる。
レガージュ船団の船が物理的にマリの交易船を襲撃できるかどうか、それはマリ海軍の誤解を解く為の重要な要素だ。
「……航海予定表を、今持って来させます」
ファルカンが扉を開けて廊下にいた船団員へそれを取ってくるように指示を出す。
すぐに船団員が一冊の幅広の帳簿を抱えて来た。楕円の卓の上に置いて開く。
「記載の基準は？」と問い掛けたのはロットバルトだ。
「航海の履歴と予定をここに書き込んで管理しています。出港前に帰港までの予定を書き入れ、帰港後、航海日誌を元に履歴を付けます」
ファルカンの示した箇所はエレオノーラ号の航海記録欄で、当初の予定を書き入れたものと、そのすぐ下の欄にも実際の行程を書き込んだ跡があった。
「各船ごと月ごとに分けて表にしていますから、今日どの海域にいるかは、大体これで把握できます。無論天候などによって多少のずれがありますが」
帳簿をファルシオンとスランザールの前に差し出す。スランザールはレオアリス達を帳簿が見えるように手招いた。
「ゼ・アマーリア号が沈んだ時刻に、付近にいた船はあるのか」
グランスレイが問うとファルカンはもうそれを確認していて、筋肉の張った首を振った。頬に血の気が上がり、解決へ、手応えを掴んだようなそんな顔だ。

「予定上では、十海里以内を航行していた船はありません。――最も近くにいたのは初めにアマーリアの漂流物を発見しエレオノーラ号と護衛として付いていた三番船ですが、当時はアマーリアの沈んだ海域より北東におよそ十五海里離れた場所で嵐を避けて停泊していました」
カリカオテやビルゼン達は顔色を明るくしてお互いを見交わした。
「おお、そうだ……この帳簿なら、実質的にあの時間にアマーリアに近付けた船は無いという証明になる――」
「で、ではこれでマリに説明ができるのだな、沈めたのは我々では無いと」
「ならザインに言って、そうすればもう」
「――完全な証明にはならないと思う」
レオアリスは彼等の安堵に水を差す事に幾分罪悪感を感じながらも、そう言った。
「これは後から書き替えられるものです。書き替えてはいないと、そう確実に証明できるものじゃない。ただ、当然、状況を示す証拠の一つにはなると思いますが、マリを納得させるには」
「そんな――我々は書き替えてなどいない！　そんな事をする訳がない」
「判っています。けれどマリ側としたら、まずそれを疑って掛かるはずです」
「マリの言い分が正しいと――？　まさかあなた方まで我々を疑っていらっしゃるのですか」
「カリカオテ、それは違う」
ファルカンが宥めたが、カリカオテはファルカンを睨んだ。普段見る事のない激情が、疲労した顔の眼の中にあった。
「違う？！　お前は事情を知っているだろう、ファルカン。疑うべきは我々なのか、マリか？！　そうじゃないはずだ。本当はどちらでもなく、」
「落ち着いてください。今、我々の言っている事はそうした話ではありません」
ロットバルトの冷静な声が割って入り、カリカオテははっと口を閉ざした。自分の激高した様子が、いかに周囲に奇妙に映っただろうかと、慌ててファルシオンに頭を下げた。
「――も、申し訳ありません、醜態を」
「かまわない。不安なんだろう」
ファルシオンはそう言って首を振った。
「そこに書かれていることは、私もマリ王国の国使に伝えるつもりだ。でも、レオアリスが言ったことも、ちゃんと考えなくちゃいけない」
マリ王国を納得させられるだけの説明を、一義的にはファルシオンがする必要がある。カリカオテはもう一度、マリ王国の国使と会談するのがこの幼い王子なのだと思い出したようだった。
ロットバルトはカリカオテ達を見て、続ける。
「先ほどのカリカオテ殿の発言では、レガージュ交易組合は今回の件をレガージュ船団による行為では無いと考えているのは無論ですが――、マリ王国の仕掛けたものでもなく、第三者の存在を疑っているように伺えます。――そう捉えても？」
ロットバルトの言葉の間にも、カリカオテ達にみるみる緊張が走った。
「そ――」
ファルカンは頷きかけ、ぐっとそれを止めたように見えた。
「――その」
「第三者の存在があれば、この問題を解くのは少なからず容易になります。考えに入れるべきか、それとも除外すべきか」
カリカオテやビルゼンと、躊躇うような視線を見交わしている。それを見咎めたスランザールが叱責に近い声を投げた。
「何でも良い、疑念のある事は全て申せ。この期に及んで王太子殿下の前で隠し事は罷りならん」
「は――、わ、我々は」
ファルカンもカリカオテも、それでもまだ口籠もった。
スランザールは厳しい眼でカリカオテ達を見回した。普段のあの飄々

とした様子は今はすっかり影を潜め、レオアリス達も身を引き締めるような厳格さがあった。
「王太子殿下が国使としてマリ海軍のただ中へ出向こうとされている時に、そなた等が口を閉ざす事が許される案件か。それは殿下の御身を危険に晒す行為と心得よ」
「――父さんは、レガージュが沈めたんじゃ無いって思ってる！」
声を必死に張り上げたのは、ファルカンの横に立っていたユージュだった。室内の視線が一斉に集中し、ユージュは僅かにたじろいだものの、きっと睨むように見返した。
「父さんはボクが見た夢を信じて」
「ユージュ、待つんだ！」
「西海がマリの船を沈めたんだって、そう思ったんだ。でも、西海は危険だから、だから皆が父さんを閉じ込めたんだ！」
「ユージュ！」
レオアリスはユージュの放った言葉に、素早くグランスレイ達と瞳を見交わした。次いでスランザールに視線を落とす。スランザールは厳しい目をユージュへと向けている。
（西海――）
その言葉を今聞くとは、考えていなかった。
「皆だって同じじゃないか！　皆だって本当はそう思ってるくせに！」
「止めるんだ、ユージュそれは」
「西海とは」
スランザールが呟き、カリカオテやファルカンはぎくりと身を強ばらせた。
「その根拠は何じゃ」
「スランザール公、それは」
「ユージュとやら、そなたは説明できるかね」
スランザールはまだ躊躇うファルカンからあっさり視線を外し、ユージュを促した。ユージュは思わず身を縮めながらも、こくりと頷いた。
「では殿下にご説明申し上げるのじゃ」
「――ボクはあの日、マリの船が沈んだ時に、夢を見たんです」
唐突な言葉に戸惑いはしたものの、レオアリス達はそれを面に出さず、耳を傾けた。
ファルカンはその傍らでまだ迷いながら――しかしどこかほっとしたような表情を浮かべている。レオアリスはそれに気付いて、束の間彼の様子を見つめた。
おそらくファルカンは、ユージュが語る事を正しいと思いながらも、街としての対応との間で煩悶していたのだろう。
「その夢では、マリの船は嵐の中にいたんだ。すごく荒れて、波に揉まれてた。そこに、船が二隻きて――でも嵐の中なのにその船は揺れてなかった」
「二隻？」
レオアリスがユージュへ視線を向けると、ユージュは目の端を赤くしてぱっと目を逸らせた。
「ええと、そうです。それで、その二隻がマリの船にぶつかって、船を沈めたんだ。でも、違うんです。――だってあの船は」
ユージュの言葉は静かな室内に跳ねるように響いた。
「あれは、海から生まれたんだから。海の波が、船になって――あんなの絶対に、レガージュの船なんかじゃない！」
「――」
レオアリスはユージュの言葉を測るように瞳を細めた。
カリカオテやファルカンは何も言わない。ただ否定をする訳でもなく、ユージュの言葉がファルシオン達にどう受け取られるのか、それを恐れながら、一方では待ってもいるように見える。
期待して。
（――）
「海が、波が形を造って、すごくそっくりだけど、でも全然本物じゃない。あんなの誰も、何も運ばないもの――」

「海から生まれた船――いや、形成されたと言うべきか」
ロットバルトは呟いて、レオアリスを見た。その瞳に明確な光を見つけ、レオアリスは短く問い掛けた。
「覚えがあるか？」
「あります。しかし文献上の話です。私より老公がご存知でしょう」
「――スランザール公」
スランザールはじっとユージュを見つめていたが、ややあって静かに息を吐き、室内をぐるりと見回した。
「わしも直接見た事はない。だが確かに、西海にはそれを行える者がいた」
「で、ではやはり」
ファルカンが咳き込むように言って身を乗り出す。
「西――」
「まだ早計じゃ」
スランザールはきっぱりと言った。
「なるほど確かに――そなた等が言及を避けていた理由は判った。その判断は概ね賢明じゃの」
スランザールが一度自分に目を向けたのに気付き、レオアリスはスランザールの肩口辺りを見つめた。
「剣士ザインはこの一件に、どのように関わっておるのか」
（ザイン――）
胸の奥に微かな不安が過る。どうしても、連想してしまう。
（違う。全く別の事だ）
ユージュの声が答える。
「父さんは、レガージュが沈めたんじゃ無いって証明するつもりなんです」
「証明――どのようにして証明するつもりじゃ」
「ザインは――」
ファルカンが再び膝をつく。ファルシオンとスランザールに対して理解を乞うように膝を詰めた。
「西海の――三の戟が今回の件に関わっていると――捕える事で事実が明らかになると、そう考えました。しかしそれでは、今度は西海との紛争が避けられません」
誰にも口を挟まれないうちに、ファルカンは早口で言葉を継いだ。
「我々はザインと話し、マリとの話し合いが終わるまで、ザインを交易組合内に留める事にしました。ザインも承知の上です――今は、西海を騒がせるつもりは、ザインにも無いと」
「三の戟――そう考えた根拠は何じゃ」
ファルカンは額に汗を浮かべている。
「――おそらく、三百年前の大戦と似通った点があったからだと」
「ボクの夢と、マリの船員の人が言った言葉を聞いて、だから父さんは同じだって思ったんです！」
ユージュはもう卓の端に来て、その向こうから身を乗り出して訴えた。
「マリの船員？　彼は目が覚めて？」
レオアリスは船員の姿を探すように扉へ目をやった。目が覚めているなら、と思ったがファルカンは首を振った。
「いえ――、うわごとに……アマーリアを沈めたのは船ではない、と、そう言いました。ユージュと、ザインがそれを聞いています」
「『船ではない』？　だからザインは、西海が絡んでいると考えたのか」
「理由があるんです――三百年前、レガージュ戦線で西海軍の指揮を執ったのが三の戟の一人」
「そう、第二位のヴェパールじゃ」
スランザールは中空を睨むように言った。それきり黙り込む。
（――また、三の戟か）
レオアリスもやはり、その名を知っている。ビュルゲルと同じ海皇の守護部隊を率いる一人、三人の中で第二位の将軍だ。

（三百年前の、大戦の――。そうか……）
思い当たってしまう。
ザインの主の――
仇。
ザインは三百年、その相手を、待って
身体の中で、剣が脈動する。
（ずっと――）
ファルシオンが傍らのスランザールを見た。
「ザインに会って、話を聞きたい」
（ずっと、この日を待っていたのか。もう一度目の前に、現れるのを）
「それが良いでしょう。カリカオテ殿、剣士ザインをここに」
「は、はい。すぐに」
（三百年、少しも和らぐ事無く）
激しい焦燥を感じた。
何に向けた焦燥か。
（主の）
「レオアリス」
はっとして、レオアリスは顔を上げた。スランザールが自分を見つめている。傍らのファルシオンは瞳に気掛かりそうな色を浮かべていて、自分が想いに沈んでいたのに気が付いた。
スランザールはレオアリスの瞳を捉えたまま、ゆっくり告げた。
「――レオアリス、そなたもザインを迎えに行け」
万が一、ザインがここを出ようとした時の為と、レオアリスへの配慮と、スランザールの言葉にはその二つの意味が含まれている。
「……承知致しました」
レオアリスはそれを汲み取った上で頷くと、周囲には判らないようにそっと息を吐いて幾つかの感情を押しやり、右側に目を向けた。
「グランスレイ、フレイザー、二人はここに」
グランスレイとフレイザーが頷く。
「ロットバルトは一度、マリの船員の容体を確かめて来てくれ。法術士の話を聞いてきて欲しい」
「承知しました」
「ご案内します」
ファルカンが先に立ち、レオアリスがファルカンの後から部屋を出ようとした時、ユージュがぱっと近寄った。
「ボクも行っていい？　父さんのところ」
「――ああ、問題無いよ」
ユージュの顔が輝く。だがレオアリスが笑みを浮かべて手招きをすると、ユージュは少し照れくさそうにもじもじと俯いた。
「どうかしたか？」
「ううん」ユージュは首を振り、廊下を歩いて行く。
階段を登りながら、ユージュはレオアリスを見上げた。
「あなたの剣は、面白いところにあるね」
「判るのか？」
「うん、何となく」
やはり剣士だからだろうかと、レオアリスはユージュを見つめた。ユージュの中には、剣の気配らしきものは無い。
「面白いか、そうかもな」
「ジンも同じだったの？」
「ジン、は――、どうだろう。俺は絵姿しか見た事がないから、はっきりは判らない」
ただ数少ないジンの絵姿の一つに、腕から生じた剣ではない、抜き身の剣を右手に提げているものがある。
二刀は珍しいのかもしれないが、ジン――父の剣とやはり似ているのだろうと思った。
「会えたら良かったね」
「――そう、だな」

会えたら良かったね、と――、そんなふうに真っ直ぐ言われたのは初めてかもしれない。
「父さんはジンの方が、父さんより強かったって言ってたよ。ジンの方が年上で、憧れだったんだって」
「そうなのか……」
年上だとか、憧れとか、不思議な感覚だ。レオアリスにとっては遠い、物語の中のような存在なのに、ザインにとっては確実な過去なのだ。
「あなたはどうなの？　強い？」
「どうだろう。単純に比べるのは難しいと思う」
「ふうん」納得したように頷いてから、ユージュは少し突っ張った顔をした。「でも絶対、父さんの方が強いな。比べるのは難しくないんじゃない？　戦ってみたらすぐ判るもん」
「――」
レオアリスは黙っている。
「自信ないんでしょ」
「――俺は、剣士とは戦いたくないんだ」
レオアリスがどことなく困ったように笑ったので、ユージュはその表情を引っ込めた。
「ここです。お待ちください」
先に歩いていたファルカンが船団員の立っている扉の前で足を止め、扉を叩いた。
「ザイン――俺だ」
レオアリスは、鼓動が大きく音を立てて跳ねるのをじっと聞きながら、ファルカンが扉を開けて中へ入るのを見つめた。
剣の気配が伝わってくる。
自分がこの部屋の前に立った時から、その気配が大きくなったのが判る。
「父さん――！」
ユージュが部屋に駆け込んだ。レオアリスもまた、扉を潜る。

窓際に男が一人立っていて、ユージュは駆け寄ると男に飛び付いた。彼がザインだ。
一瞬、レオアリスはぎくりとして瞳を見開いた。
（バインド――）
違う。
その幻影は瞬く間に消え、再び見つめた男にはバインドの面影など全く無かった。
似ているのは黒髪と、身長くらいだ。あと一つ、見た目の年齢も、二十代後半ほどに見えるのが似ていると思った理由なのかもしれない。
鍛えられたすらりとした体型で、だが穏やかそうな面差しをしていた。
剣が鳴る。
何故鳴るのか。
（似て、る）
違う。
「上将？」
病室へ向かう為に部屋の前を立ち去ろうとしていたロットバルトが、訝しそうに眉を潜めた。レオアリスの後ろ姿に、常に無い緊張が見える。
「どうした――レオアリス」
ザインは立ち尽くしたまま動かないレオアリスを見て、薄く笑った。付き纏う感覚を振り払い、レオアリスはザインへと一歩近寄った。
「あなたが――」
ザインがユージュを脇にどかせる。
そのゆっくりとした動作と同時に、ザインの手元から閃光のように――彼の剣がレオアリスに向けて奔った。

八

アスタロト公爵家長老会の筆頭であるソーントン侯爵は、骨張った顔に厳しい表情を浮かべ、広い部屋の中央に立っていた。
彼の前には優美な造作の寝台が置かれている。天蓋から流れる白い薄羽のような布が、そこに眠る少女の姿を柔らかく隠している。
「――もう一度申せ」
ソーントンは噛み締めた歯の奥から声を押し出した。視線は彼等の年若い当主の姿に据えられたままだ。ずしりと重い空気が、窓の向こうの白く輝く陽射しを遮っているように感じられる。
アーシアはあの時からずっと走り続けている呼吸に、苦しさを押さえながら口を開いた。頬からは血の気がすっかり失せ、紙のように白かった。
「ルシファー様が、訪ねておいでした。私が部屋に戻った時には、あの方が――アスタロト様を覗き込むように立っていらして」
「――」
「私をご覧になり、笑って、――どうやって主を助けるつもりか、と、そうお尋ねに」
「アーシア」
ソーントンの鞭のように鋭い声が遮り、アーシアはびくりと身を縮めた。傍らに立つ執事のシュセールがそっとアーシアの肩に手を置く。
「その事はもう口にするな」
「――」
「確証なく口にしてよい言葉ではない」
アーシアは息を呑み、だがありったけの勇気を振り絞るようにして声を出した。
「でも――、いえ、ですが！　こうしてアスタロト様は」
もう二刻、眠ったまま、目覚める気配が無い。
ルシファーの前で倒れてから。
アスタロトを見下ろし、ルシファーは微笑んでいた。
背筋を冷たいものが駆け上がる。
「何か、お二人の間であったと、そう思うのが」
「西方公に責任を問えと言うか」
「それは」
アーシアが口籠もる。ソーントンは容赦なく続けた。
「お前が目にしたと、それだけの理由で、西方公の責任を問う事ができると思うのか」
「――そんな」
アーシアは一層血の気を無くして青ざめ、それでもぐっと拳を握り込み、食い下がった。
「ではせめて、ルシファー様に事情をお伺いできませんか。そうすれば、原因が判るかもしれないです。それだけでも――」
ソーントンは振り返り、アーシアの頬を力一杯打った。鋭い音と共にアーシアが床に倒れ込み、シュセールが膝を付く。
「ソーントン侯爵、お静まりを」
シュセールを押し退け、ソーントンはアーシアの前に立った。
「お前は、当主を最も身近で支える役を負いながらそれも果たせず、口にする言葉は他者の責任を問う事だけか！　選りにも選って、西方公だと？！」
「侯爵」
「アスタロト公爵家の当主が倒れた責を他の公爵家に問う事が、どのような意味を持つか、お前ごときでも判るはず」
「――、」
アーシアは何とかソーントンを説得しようと言葉を探したが、相応しいものが思い付かずに唇を噛んだ。血の味がする。
「侯爵、アーシアは決して嘘偽りや適当を申す者ではありません」
「シュセール。西方公を当主の部屋へお通ししたのか」
「――いえ」

「では問えまい。西方公が無断で、当主の部屋へ押し入り、当主を害したと申し立てるのか」
「そんなつもりは」
冷たい大理石の床に手をついたままアーシアが首を振る。
「お前の言ったのはそう言う事だ」
ソーントンは忌々しそうにそう吐き出した。
アーシアにもソーントンの言う事は判る。
けれどルシファーが倒れたアスタロトと何か話をしていたのは確かなのだ。何を話していたのか、何故眠り、目覚めないのか、アーシアには全く判らない。
「――アスタロト様を、どうしたら」
ソーントンは一旦寝台のアスタロトを振り返り、苦いものを噛み潰したようにかさついた声を出した。
「公爵家付きの法術士に極秘で治癒に当たらせよ。すぐに問題なくお目覚めになるかもしれないが、念の為だ」
「正規軍にはどのようにご報告なさいますか。本日は総司令部で、フィオリ・アル・レガージュでの王太子殿下の会談結果を待つご予定でございました」
シュセールが確認した内容に、ソーントンは重い息を吐いた。
「――正規軍にもまだ明るみに出してはならん。急遽体調を崩されたと、そう伝えよ」
まだ、とソーントンは言ったが、いつまでという想定がある訳では無い。まずは法術士によって目覚めれば、それが最善の結果だ。
「アーシア、お前には当面謹慎を命ずる。当主のお前への温情に免じて時間をやろう。その間に愚かな考えを棄てるのだ。当主の身の回りはシュセールに一切を任す」
「――」
ソーントンは薄い色の瞳でアーシアとシュセールを脅(おびや)かすように一瞥し、硬い靴音を立て部屋を出て行った。シュセールが見送りの為にソーントンについて部屋を出ると、室内にしんと沈黙が落ちる。
息苦しさを覚え、アーシアは壁に寄りかかって身体を支えた。両手を目の前に持ち上げ、その開いた指先を見つめる。
アーシアに注がれるアスタロトの気は、普段と全く変わらない。だからアスタロトの身体には何も問題は無いのだと、そう思えた。
(でも、目が覚めないんだ――)
身体に異常など何も無いと思えるのに――名を呼んでも、身体を揺すっても、全く目を開ける気配が無かった。まるで人形のようだ。
(――)
どんな話をしていたのだろう。アスタロトとルシファーは。
あの時、まるで、アスタロトの意思や命を吸い取るように見えた。
ルシファーに感じた、普段とは全く違う、魂が凍るような恐怖――。
アーシアにはあれが、根本的なところにあるルシファー本来の姿なのだと、そう思えた。人よりも鋭い、飛竜としての本能で。
(――誰か)
ルシファーはまた来ると、そう言った。
何の為だろう。
今は行くところがある、と――。
(どこに――、何故、アスタロト様を)
再び訪れて、どうするつもりなのか。
誰かに相談したかった。
アーシアの言葉を信じて、アスタロトを守ってくれるのは。
アーシアは背中を壁に預けたまま、両手を額の前で固く組み、体を縮込めるようにして目を瞑った。
一人――今、その相手はずっと遠い。
「レオアリスさん――」

視界の左隅に閃光が奔った。
白刃。ザインの右腕に現れたそれが、足元から掬い上げるようにレオアリスの上半身へと振り抜かれる。
「――ッ！」
ギィン！　と鋭く硬い金属音が耳を聾し、一瞬レオアリスの身体が床から浮いた。
胴を切り裂こうとしたザインの右腕の剣が、レオアリスの右手に握られた剣に阻まれ止まっている。
青白い光が明滅し、暗い部屋を微かに染めた。
刃が打ち合った音の余韻が消えていく僅かな間、レオアリスはザインの視線と真っ向から向き合った。
漆黒の、強い光を宿した瞳。
互いの力を削ぎ合い、刃同士が軋む。
すぐ傍に、ユージュ達の姿が見えた。
「――父さん……？！」
「ザ、ザイン、何を」
一呼吸の後、我に返ったユージュとファルカンが驚いた声を上げた。ロットバルトは剣の柄に手を掛け室内に一歩踏み込んでいたものの、その場から動けずにいる。
二つの剣の顕現に、室内の空気が電流を帯びたように震え、肌を打ち小刻みに伝わる。
レオアリスは剣に意識を集中し、奥歯を噛み締めた。
（重、い……）
抑えた剣から伝わる、腹の底に響くような圧迫感。
バインドの剣と打ち合った時と同じ――いや、それ以上の力で、レオアリスの剣を振り切ろうとしてくる。
剛剣だ。
咄嗟に引き抜いた右手の剣一本では、僅かでも気を抜けば押し切られそうだった。
「く」
そしてその緊張とは別に、剣から伝わる力に触発され、胃の腑の奥にじわりと沸き上がる、魂を掻き立てる感覚がある。
それは紛れもない、剣を交える事への昂揚感だ。これほどの相手と――。
レオアリスは唇の端に笑みを浮かべかけ――、ぐっと引き結んだ。
「……ザインさん。剣を引いてください」
ザインは打ち込んだ姿勢のまま、黙ってレオアリスの瞳を見つめている。レオアリスは真っ直ぐにその瞳を見つめ返した。
視界の端で、ユージュが父の腕に触れようとし、触れられずに狼狽えた顔をしているのが見えた。
「――ザインさん」
ザインの剣が尚も押し切ろうと力を加え――、僅かな呼吸の後、ザインはすっと剣を下ろした。
一歩退き、改めてレオアリスと向かい合う。
剣がゆっくりと右腕に沈んで行き、同化して見えなくなった。同時にレオアリスの手からも剣が掻き消え、室内を満たしていた震えるような圧迫感が消える。ファルカンは安堵にへたり込みそうになる自分の足を、ぐっと力を込め奮い立たせた。
「――見事な剣だ、レオアリス」
つい今まで表情を消していたザインの精悍な頬に、親しみの籠もった笑みが浮かぶ。
「そして良く、剣を抑えているようだな」
「それで、今の……」
ザインはまだ驚いた顔をしているユージュの頭を左手で引き寄せ、安

心させるように笑いかけながら頷いた。
「まだ制御しきれていないのなら教える必要があったが、どうやら俺の助言は不要のようだ。安心した」
レオアリスの中に沸き起こった戦いへの歓喜と、それを抑えた事をザインは見抜いてそう言った。レオアリスが、刃を交えている最中にも、ユージュを気にした事も。
近付いて右手を伸ばし、一度ぐっと肩を掴んだ。
「ジンに良く似ている。その剣も、姿も――、性格もかな。君に会えて嬉しいよ」
レオアリスはザインを見上げた。
三百年前の大戦――それ以前から、ジンと一緒にいてジンを良く知る人物。
ジン――父の友人。
想像の中にしかいなかった人物が思考の幕の向こうから歩み出てきたようで、今更ながらにじわりと実感が沸き上がった。
「――俺もです」
ザインの瞳に落ち着いた穏やかな色が浮かんでいるのを見つけ、ほっと息を吐く。つい先ほど、バインドを連想させたあの気配は、今はすっかり消えていた。
「でも驚きました、今のは。本気で振り抜かれていたら止められたかどうか」
「はは、悪かった――。だが一番最初に確かめておきたかったんだ。断りを入れてからじゃ実際のところは測れないからな」
ようやく状況が飲み込め、ファルカンは肩で大きく息を吐き恨めしそうな目を向けた。
「ザイン、あんまり驚かせてくれるな……肝が冷えたぞ。それに下には王太子殿下がいらっしゃるんだ。もしあんた達の剣で万が一の事があったら」
ファルカンにさえ、先ほどのあの肌を切るような恐ろしい空気は、はっきりと感じ取れた。張り詰めた、近付くだけで切り裂かれそうな空気が二人を中心に渦巻いていた。
いや、おそらく踏み込めば確実に、身を裂かれていた距離があったのだ。ファルカンはちらりと入り口に立つロットバルトに目を向けた。
この状況で瞬時に剣に手を掛けたのはさすがだ。だが彼も、踏み込めない境界を知っている。
怜悧な知性を感じさせる瞳がファルカンの視線に気付いて向けられ、同じ考えを見たのか僅かに苦笑を浮かべた。剣の柄に置いていた左手を離す。
ザインは改めて呆れた顔をファルカンに向けた。
「しかしお前はつくづく、俺の置かれている状況を忘れる男だな。相手が近衛の大将とは言え同じ剣士だ、こんな簡単に会わせていいのか」
「そういう訳じゃない。いつでも、意見を変えてくれればすぐ解除するつもりではいるが――」
そう言ってしまってから、ファルカンはレオアリスをちらりと見た。ザインがまだ西海に拘っていると、そうレオアリス達に思われるのは好ましくない。
「王太子殿下が、お前の話を聞きたがっておられる」
「俺に――」
「貴方の考えは伺いました。この件に関して、危惧をお持ちだと」
「慎重だな、君は」
ザインはレオアリスが西海という言葉を使わなかったのを見て、そう言った。
「近衛師団なのだから当然か」
それにはすぐに返す言葉が浮かばず、レオアリスは扉を示した。
「どうぞ。殿下がお待ちです。全ての話は、そこで」
ザインと会えたら話したいと思っていた事が、いくつもあった。だがそれは後回しだ。マリ王国との会談が無事に終われば、時間を取ることができる。話したい事は、その後ですればいい。

そう思っていたレオアリスを、ザインは呼び止めた。
「レオアリス――。ジンの事をどう聞いている？」
扉へ向かおうとしていたレオアリスは、ザインの問いかけに振り返った。
「育ての親は話してくれたか」
ザインの瞳にある光に引かれ、レオアリスは頷いた。
「――祖父達との思い出を聞きました」
語ってくれた過去は、思い出というには祖父達にとって辛いものだっただろうが、ジンの人となりを聞けた。語る辛い響きの中に、温かさが宿っていた。
「出会った頃から――、あの時まで」
「……そうか。――誰からも好かれる男だったよ、ジンは。俺はいつもジンのように強くなりたいと思っていた。十歳ぐらいしか違わなかったかな、俺達は。だがその差は少しも埋まらなかった。昔も、今もだろう」
ザインは懐かしそうに瞳を細めた。
親しみの籠もった様子に、レオアリスは聞かないままにしておこうと思っていた言葉を、口にした。ホースエントが王都で会った時に告げた事だ。
「あなたは――、その、父と同じ一族なんですか？」
ザインはレオアリスがそこに込めた想いを感じ取り、瞳に微かな陰を落とした。ただ、口に出したのは明確な否定でもある。
「いいや。残念ながら違うよ」
「――」
レオアリスは詰めていた息を、そっと吐いた。
「悪いな」
「いえ、全然、いいんです」
ザインの声には労りの響きが交じっていて、拘っている自分が子供っぽく思え、レオアリスは急いで首を振った。
ただやはり、心のどこかに、すうっと空間が空いたような感じがある。
唐突に、ぽん、と言葉が飛び出し、心の中に転がった。
独り――
期待していたつもりは無かったけれど。
（結局、俺は）
独り、だ。
どくん、と鼓動が跳ねる。
それは今までに感じた事の無い、心臓を掴まれるような感覚だった。
「――」
レオアリスは慌ててそれをしまい込んだ。
そんな事は考えるべきじゃない。
けれど心のどこかに期待があった分だけ、生まれた空白はレオアリスの中でその新しい存在を主張した。
ファルカンは察して口を挟まず、ユージュはじっとレオアリスを見上げている。ロットバルトは戸口に立ったまま、先日のホースエントがそこに居るかのように、廊下の壁の向こうに冷えた視線を向けた。
束の間の沈黙を、ザインの言葉が散らす。
「――聞きたい事は色々あるだろう。俺が答えられる事なら、何でも教えよう。余り時間はないが」
「いえ――」
今はザインをファルシオンの元に案内するのが先だ。ファルカンもそれを思い出し、ザインに促すように声を掛けた。
「ザイン、廊下にいるぞ」
そう言って扉に向かい、そこに居たロットバルトと一度眼を見交わして、部屋の外に出た。
「ああ、今行く。――ユージュ、お前もファルカンと廊下にいろ」
「でも」そう言いかけたものの、ユージュは大人しく父の言葉に従い、廊下へ出た。
しかしザインはその場に立ったまま、部屋を出る気配はない。会話を

急いでいるように、言葉を継いだ。
「王太子殿下の前に出た後は、もう話せる時間は無いかもしれない」
「――」
ザインは戸口に控えているロットバルトが会話を打ち切ろうとしないのを少し意外そうに眺め、それから再びレオアリスへ促すように首を傾ける。
「何でも構わない、聞きたい事があるなら」
レオアリスは少し躊躇い、それからザインを見た。
「貴方は」
それを聞くのは怖くさえあったが、それでもやはり聞きたかった。
ずっと、王都でレガージュの歴史を聞いた時から、疑問に思っていた事だ。
自分達の存在の、根本にあるもの。
実際には、レオアリスはもうそれを理解していたかもしれないが。
「剣の主を、失って――、貴方は、どうして、ここに」
その問いを初めから予期していたのだろう、ザインはあっさりと笑った。
「どうして、か。俺もそれはいつも思う。――ただ、離れられないんだよ、どうしても」
「――」
レオアリスは瞳を見開いたものの、もうその中にはどこかでザインの答えに納得している様子があった。
「この身もそうだが、何より心がね」
及ばなかった自分の力に、ただひたすら後悔し、歯噛みしながら過ごして来た。
「三百年――、それでも尚離れる事ができないでいる」
黙って自分の言葉を聞いているレオアリスに目をやり、ザインは穏やかに笑ってみせた。
「でも君には無縁な苦しみだろう。君の剣はジンの力を受け継いで強いし、何よりも、君の剣が選んだ主はこの国の王だ。俺はその事に、実はほっとしてるんだ」
「――」
ザインの瞳もレオアリスと同じ漆黒だ。だがその瞳には三百年の歳月が横たわり、深く、悲哀を湛え、そして底までは覗かせない。
「俺は自分の力不足で、フィオリを失った。――しかし王は、君の前から消える事はないだろう」
永きに渡って安定した国家体制を維持してきたのは、王個人に寄るところが大きい。
この国を統べ、繁栄させ、保ち。
誰にも、この王が玉座を離れる事など、現実のものとして想像がつかない。
例え後継者として、王太子ファルシオンの成長を喜んだとしてもだ。
「君の主は、この先も君の前にある」
「――」
ザインの言葉を聞きながら、レオアリスは無意識に鳩尾に手を置いていた。剣の鼓動が、少し騒めきながら伝わる。ザインの言葉を喜んでいるのか、それともまだ不安なのか。
ザインはふと笑った。
「こんな事を君に言っておいて、ずるいと思われるかもしれないが」
レオアリスの問い返す顔に、ザインは一旦廊下に眼を向け、口元の苦い笑みで答えた。
「ユージュには、主を選ばないで欲しい。そう思っている」
剣を捧げる主を得る事は剣士にとっての喜びであり、一つの存在意義だ。
そしてある意味では、剣に身を滅ぼす事と同じなのかもしれない。
表裏一体、ぎりぎりの薄氷（うすらい）の上に立つ。
フィオリと出会った事でユージュを授かった。フィオリとの出逢いは

ザインにとって得難く大切なものだ。
彼女を心から愛し、守りたいと思った。ザイン自身も、その身の剣も。
もう一度選択の機会が与えられたとしても、間違いなく同じ道を選ぶ。
間違いなく。
ザインの中にある矛盾。
それをずっと、身の裡に抱えてきた。
剣と共に。
ロットバルトはレオアリスに眼を向けた。斜め後ろからの表情は汲み取りがたいが、ザインの言葉に耳を傾けている様子は、ザインの考えを理解しているようにも見える。
「――上将、私は病室を見て戻ります」
想いに沈んでいたレオアリスははっとして、ロットバルトと開かれたままの扉を見た。もうザインをファルシオンのもとに案内しなければいけない。
「ああ……、頼む。目が覚めてくれればいいが」
ロットバルトは束の間レオアリスの瞳の色を見つめ、そして一度ザインへ視線を向けてから、案内のレガージュ船団員を促し部屋を離れた。
若い船団員の男はまだ驚きに呑まれた顔のままでいる。それを眺めてロットバルトは軽く息を吐いた。
（判ってはいるつもりだが剣士とは、あっという間に周囲を圏外に置き去りにするものだな）
剣に手を掛けはしたものの、その先が無い。自分達が完全に、埒外に置かれざるを得ないのが歯痒いところだ。
今回、ザインが本気では無かったから良かったものの、本気で振り抜いていたら、おそらくレオアリスの対応も違っていただろう。そうなると剣の余波で、あの部屋くらいは軽く弾け飛んでいたかもしれない。
あれで本気ではないとは、と呆れ、ふと眉を潜める。
（――あの瞬間）
レオアリスが咄嗟に剣を抜いて受け、足元が一瞬床から離れた。
剣を受けレオアリスが体勢を崩す事など滅多に無い。それ以前に、例えばグランスレイとの手合わせでさえ、レオアリスは剣で受ける事は少ない。大抵、紙一重掠める位置を見極めて躱す。
ザインの剣はやはり、不意を突かれたとは言え、レオアリスが咄嗟に剣で止めるほどのものだったのだろう。
ザインの剣については全く未知故に測り難いが、レオアリスはあの瞬間にも、すぐ傍にいた自分達に余波が及ばないよう、剣の力を集中させていた。
言い換えれば、意識を研ぎ澄まし一点に集中させながらも、ザインの剣を押し戻す事ができなかったと、そうも言える。
（――剣士同士……同じ、剣士か――）
先ほど、ザインを眼にして立ち止まったレオアリスの瞳の中に見た色。あの色を、過去にも見た事があった。
昨年の初冬――、王都に、バインドが現れた時に浮かんでいた色だ。
ザインは本気ではなかった――おそらく。
しかし本当に、目的はレオアリスの剣を測る事、それだけだったのだろうか。
（だが、他に？）
他に想定できる理由を、考えるべきなのか。
「――」
「こちらです」
船団員が立ち止まり、軽く叩いてから扉を開ける。ロットバルトは一旦思考を切り替えた。
開いた扉からまず最初に、濃い灰色の、法術士独特の長衣を纏った男の姿が見えた。彼が座っている椅子の両側に寝台があり、右側は空だ。
左側の寝台の白い上掛の布が盛り上がり、人が寝ているのが見て取れ

た。室内の明かりを落としていたせいだろう、法術士は被(かず)きの奥で眼を細め、開いた扉を眩しそうに見すかした。
「ヴェルナー中将か」
特にお互い面識がある訳ではないが、容貌を見て判断したのか法術士はそう言って立ち上がり、頭を下げた。
「王太子殿下をお迎えもせず、申し訳ない」
「いえ、貴方は患者に付いたままでと、元々殿下のご下命でもあります。――容態は」
法術士は皺の刻まれた顔を起こし、もう深刻な状況は脱したと、まずはそう言った。
「術に対する拒否反応も見られん。快方に向かっていると言えるだろう。後はいつ目を覚ますか、その点だけが我々の懸念だ」
「今日の一刻までに目を覚ます可能性はありますか」
「……難しいと思っていただきたい」
法術士の返事を聞きながら、ロットバルトは寝台に歩み寄り、半ば辺りでぴたりと足を止めた。
「――」
法術士が眉を上げ、途中で足を止めたロットバルトを見つめた。
ロットバルトは突然思いも寄らないものを目にしたように、じっと寝台に視線を落としている。その様子は何かに意識を強く引き付けられ、考え込んでいるように見えた。
「――何か、憂いがおありか、中将殿」
レオアリスや近衛師団の人間が見ていたら、普段滅多に見せないその驚いた様子に何事かと思っただろう。
ロットバルトは呼吸を整えるように息を吐き、法術士へ視線を向けた。
「――唐突な事をとお思いになるかもしれませんが、一つ確認を」
「何かね」
「この匂いにはお気付きですか」
「匂い？　ああ、少し籠もっているが、気になるかね」
そんな事かと法術士は微かな笑みを浮かべた。そんな事を気にするとは、という呆れも多少含まれている。
「しかし仕方ない、この男は三日間海を漂い陽射しに晒されてきた。潮と疲労と、幾つもの匂いが染み付いてしまっている。身体を拭いたくらいでは中々取れんのだ、我慢していただかなくては」
ロットバルトは法術士の言葉を聞きながら寝台に近付き、一旦枕元に手をついた。横たわる男の顔は目が落ち窪み頬が痩(こ)けているが、法術士の言うとおり快方に向かっているように見える。
マリ王国海軍との会談までに目覚めれば、問題解決に向けて一歩、前進ともなり得る。例え間に合わなくとも、マリ王国の判断を保留させるよう交渉はできるだろう。
この男はレガージュ交易組合が待ち望んでいる、希望だ。
（――希望、か……？　これは）
心の内でそう呟くとロットバルトは身を起こし、訝しそうに自分を眺めていた法術士へ顔を向けた。
「――彼が救出されたのは、確か五前だったと聞いていますが」
「そのはずだ。レガージュの説明では五日前の夕刻と言っておった」
「夕刻……」
呟いた面は、法術士が眉を潜めるほど厳しかった。
「その事がどうかされたか」
それには答えず、ロットバルトは別の事を尋ねた。
「――もう一つ……王都で同じような匂いを嗅ぐとしたら、どのような場所を想定されますか」
「匂い？」
「今漂っている、この匂いです」

面食らった様子ながら、法術士は改めて籠もった匂いを確認し、考えを巡らせた。
「これは独特な潮の香だ、先ほど言ったように単純に潮の香だけでもない。王都では無いだろう」
「夜会などの席では？」
「夜会？　この匂いが？　いや、そういう類のものとはかけ離れておる」
「この部屋で傍にいた貴方には、多少なりと匂いが移るでしょうね」
「そう思うが……」
法術士は戸惑いを隠せず、落ち窪んだ目を瞬いた。
「――失礼しました、奇妙な事をお聞きしました」
「ヴェルナー中将、何かおありなのか」
被きの奥の瞳は、戸惑いから懸念へ、その色を変えている。ロットバルトは束の間、法術士を見つめた。
「いえ……ただ」
先ほど岸壁の上で感じた香りよりもずっと強い――いや、近い。
日が経って少しずつ薄れてはいるものの、この部屋に漂うそれは、すぐにあの時を連想させた。
微かな笑みを浮かべながら告げたあの時の言葉が、脳裏に再び甦る。
『ああ、これ？　すぐに消えるわ――』
西方公、ルシファー。
関わりがあるのか。
あるとしたらどのような関わりが？
どちらに捉えればいいのか。
危惧すべきか。
（危惧でなければ、偶然だと？　偶然で片付けていいのか）
「中将」
ロットバルトは法術士に視線を向けた。
「――私は五日前の夕刻、王都の夜会の席で、同じ匂いを嗅いだ覚えがあるのです」
「王都？　この匂いを？　だから驚いていたのか。しかし、それはただ近い匂いだったという事では？」
「そうかもしれません」
当然、まずはそう考えるべきだと、そう思う。
日が経っていれば、記憶も変わる。
そして相手は、四大公爵家の一人だ。確証もなく取り沙汰せば、反る影響の方が大きい。
そもそも、既に消えてしまったものなど確認のしようが無い。
『すぐに消えるわ――、ほら』
そう言った時にはもう、消えていた。引き替えと言うように漂った、花の香。
『――残念ね』
浮かべられた微笑み。
「――」
ロットバルトは瞳を細め、その視線を上げた。
視線の先に、二千里もの距離を隔てた王都を見遥かす。
確証は無い。
だが、焦燥に似た落ち着かない感覚がじわりと沸き上がる。
もう一度眠っている男に視線を落とし、法術士へ礼を述べて、病室を出た。

十

ザインは楕円形の卓の手前で膝をつき、正面に座る相手に対し深く頭を下げた。
幾つもの思いが込もった視線が一斉にザインに向けられる。とりわけカリカオテ達の視線は、ザインに思わず苦笑を覚えさせた。
この場で、王太子の前で昨日のような事を言ってくれるなと、彼等の目はそう強く訴えている。
窓を背にして座る少年が、ザインに金色の瞳を注ぐ。その姿は窓からの陽光を纏い、少年が放つべき威厳を後押ししているように見えた。
だが、それでも。
王太子、ファルシオン。
幼い、と胸の内で呟く。
マリ王国海軍に対するのに充分と言えるのか。王太子とは言え、これほど幼い王子を向けるより、公爵なり国務の要職にある者を向ける方がマリ王国には受け入れられるだろうとそう思えた。
ザインには王がファルシオンをレガージュに向けた理由が見えない。
いや、そもそも彼は誰であれ、この件の
「剣士ザイン――」
まず口を開いたのはファルシオンの傍らに座す小柄な老人だ。この老人が王の相談役であるスランザールかと、ザインが瞳を細める。確かな威厳が皺と白い髭に被われた面にあった。
「そなたはこの度の件に、西海の関わりを懸念していると聞いた。それは誠か」
カリカオテ達が身を固めたのが気配で判る。ザインにあの雄弁な視線を送って来ている。
街の、レガージュの望みは、一つだ。
それは痛い程ザインに伝わった。
否定をしてくれ、と。
「――」
ザインは口元を引き結び、膝をついたまま真っ直ぐ顔を上げた。
「恐れながら――」
緊張が一点に向かって収縮する。
「私はそう考えています。この件で西海が裏で糸を引いている事は、ほぼ間違いありません」
「ザイン――」
ファルカンの呟きには、砂を噛むような苦痛の響きが交じっていた。だがザインは顔色を変えず、スランザールからファルシオンへ、視線を移した。
「王太子殿下、この件は、西海の首謀者をマリ海軍の前に引き立てない限り終わりません」
「――」
「私が、西海のヴェパールを御前に引き出して御覧に入れます。何とぞ、私にその役割をお任せくださいますよう」
伏せて避けるべきヴェパールの名を、何の遠慮も無く口にする。
レオアリスはファルカンやカリカオテ達の青ざめて俯いた顔を見つめ、そして膝をつき昂然と上げられたザインの顔を見つめた。
力強い言葉だ。だがさほど準備もされていない、説得力に欠けるものに思える。この場でファルシオンを――、王都を納得させるには急ぎ過ぎている。
西海、と名が付くものを相手にする時、いつであれ絶対条件として付されるものに、どう対処するのか、それをまず示さなくては。
スランザールは当然、それを突いた。
「言葉だけは勇ましいが――そなたの言葉を容れた結果、西海との関係は崩れよう。そなたはそれをどう繕うつもりか。もうひと月後には陛下が西海に赴かれ、条約再締結の儀に臨まれるという時に」
「スランザール公。このような状況を作り出しておきながら尚、西海が条約の維持を望むと本気で考えているのですか」

ザインの返した刄は、この不安定な関係の最も弱い部分を突いた。
条約の再締結に絶対不可欠なものは、双方の継続しようという意志に他ならない。
スランザールは眉を僅かに持ち上げる。
「過ぎた発言じゃな。そもそもまだ西海が関わっていると決まった訳ではない。そなたの言葉に確証は無く、ただの可能性の一つに過ぎん」
「確証がなければ目の前の厳然たる危機に対しても動けないと――それがこの国ですか」
「ザイン、いい加減にしろ！　あんたは」
ファルカンが堪らずザインに詰め寄り、腕を伸ばしてその胸元を掴み上げた。スランザールが皺枯れた声で宥める。
「落ち着くが良い、レガージュ船団長」
「しかし――我々レガージュは」
レオアリスはスランザールがファルカンを宥めた時、ザインが一瞬、ごく僅かだが何かの感情を口元に閃かせたのを認めた。
何だろう――
ザインがファルカンの手を払う。
「ザイン！」
「国の立場は私にも判るつもりです。その上で――」ファルカンには一顧だにせず、ザインはファルシオンとスランザールの顔をそれぞれじっと見つめた。
「一つ、私に考えがあります。ヴェパールを討ち取り西海の動きを制した上で、西海との関係を繕うならば、それが最も適切な方法だろうと」
「ザイン、これ以上は……！」
ファルカンが怒りを爆発させかけたちょうどその時、乾いた音を立てて扉が開き、マリの船員の病室へ行っていたロットバルトが戻った。それがきっかけで、収縮していた部屋の空気が一旦すうっと解ける。
フレイザーが先ほどの空気が戻らない内にというように、ロットバルトに問いかけた。
「マリの船員は？　どう？」
ロットバルトの答えによっては、今のこの場に重く横たわる問題が解決できる。それはフレイザーだけの期待ではなく、ザインを除く全員が同じ答えを待った。
一方ロットバルトは珍しく、この場ではないどこか別のものに意識を置いていたようで、答えには間があった。
レオアリスが気付いて訝しむ瞳を投げる。ロットバルトの蒼い瞳には微かな、だが確かな懸念の色があったが、彼はそれを誰にも向けなかった。
敢えてそうしたようにも見える。
「――順調に回復しているようです。しかし、今日の刻限までに目覚めるかとなると、かなり厳しい状況だと思えます」
返答が期待した芳(かんば)しいものではなく、フレイザーは思わず溜息をついた。
「そう」
「まだ起きられないのか――。じゃあ、マリの国使には、言えないな」
ファルシオンが困ったように眉を寄せる。ザインはすっと立ちあがり、再びファルシオンとスランザールを見つめた。
「王太子殿下――最早僅かな可能性を待っている段階ではありません」
ザインはまだ同じ話を続けようとしている。そしてその事への緊張とは別にもう一つ、場をひやりと冷やす何かがあった。
ザインは何を言おうとしているのか、その事への漠然とした不安――。
「先ほど申し上げたように、西海を制した上で尚、西海との関係を繕う方法はあります。おそらくこれが一番確かな手立てでしょう」
「――」
ザインがちらりとレオアリスを見、そして、ユージュを見た。
（何だ――）
どくり、とレオアリスは自分の鼓動が高く鳴るのを感じた。

自分を見た時のザインの瞳の色――それ以上に、ユージュを見つめた時の色には。
ユージュも何かを感じたのか、咄嗟に口を開こうと立ち上がる。「父さ――」
だがザインはもうスランザールに視線を向けていて、そしてはっきりと告げた。
「私がヴェパールを斬り、マリに証拠として差し出した後」
一歩、ザインが前に出る。頬にゆっくり、穏やかとさえ言える笑みが浮かんだ。
「近衛師団第一大隊大将――、彼に、私を討たせる事です」
レオアリスは瞬間何を言われたのか判らず、ザインを見つめた。
ファルカンやカリカオテ達もまた、レオアリスと同じように、ザインをまじまじと見つめている。ファルシオンや、フレイザー達もだ。
言葉の意味を飲み込むにつれ、レオアリスは愕然として眉を寄せた。
海皇が、ビュルゲルの死を以って、王国の追求を躱したように――。
斬れ、と。
「――そん、な事が、できる訳が」
「するべきだ。西海との調和の為だ」
先ほど、ザインはレオアリスとの会話を急いでいた。伝えるべき事を、早いうちに伝えてしまいたがっていたように思えた。
それは。
鼓動が喉につっかえる。
「調和――、でもそんなのは、始めから違う話じゃないですか」
息苦しさに喘ぐように漸く口にしたが、ザインには揺らぐ様子がない。
「そうしないのならば、今ここで俺を斬るしかない。でなければ俺は止められない」
「父さん！　止めてよ！」
「お前は口を出すな」
飛び出そうとしたユージュをぴしゃりと撥ね付ける。ユージュは本当に頬を打たれたように、息を呑んで立ち止まった。
レオアリスは初めて、怒りにも似た光を瞳に浮かび上がらせた。
「――無理に決まってる！　何を言ってるんだ、貴方は！」
「レオアリス、俺達はそういう存在だ。剣を以って主を護り、剣を以って主に殉じる」
「そんなのは、」
「俺は俺の主に。君は君の主の意志に従え。君の王は、君に俺を斬れと言うだろう」
「――」
言葉を失って茫然とザインを見つめたレオアリスの傍らで、フレイザーが翡翠の瞳に非難を露わにしてザインを睨んだ。
「自分勝手な事を言わないで」
「フレイザー」グランスレイの制止の手を押し切り、フレイザーはザインに向かい合った。
「そんな荷を負わせるつもり？」
「荷を負う？　それは違うだろう。近衛師団に属する以上、当然の責務の内だ」
「それがどれほど辛い事か――、大体貴方は自分の子供の前で、良くもそんな無神経な事を言えたものね」
ユージュはどうしていいか判らずに、じっとザインを見つめたままだ。
しかしザインは全く痛痒を感じていないように、軽く息を吐いた。
「女ならではの感覚か」
フレイザーはさっと気色ばんだが、先にザインを睨んだのはグランスレイだった。
「女だからと理由を付けて議論を逃げるのは卑怯だろう。レガージュの守護者の言葉とは思えんな」
「感情を害したのなら謝ろう。だが近衛師団が為すべき事は明確なはずだ。国として最善は何か、考えれば簡単な事だ」
「お前は」

「――確かに」
グランスレイが広い身体をザインに向けかけたのを制し、ロットバルトがゆっくりそう言った。
「王は、そう下命されざるを得ないでしょう。この国の王であり、我々は近衛師団です」
ザインの顔を見据える。
「しかし貴方の主は、本当にそれを望んでいると？　違うでしょう、貴方はそうは言っていない」
「――」
「互いの主に従うと言いながら、貴方自身は主の意志を明言せず、結局ただ自らの意志で動いている。当然――」
ザインは今までの中で一番、苦い顔をした。
「それが貴方の主の望みではないと、貴方自身が判っているからではありませんか」
「――」
レオアリスは瞳を上げ、ザインの横顔を見つめた。
「そもそも我々は近衛師団として、国家間の条約を揺るがすような発言を了承できる立場にありません。ですがファルシオン殿下に貴方の処断をお決め頂くような事態にはしたくない。この場で発言の撤回を明言してはいただけませんか」
ザインは一切感情を消したように平坦な顔をしていたが、次第に口元に笑みを滲ませた。
「撤回する気は全くない。止めたいのなら俺を斬るんだな」
ぐっと跳ね上がりかけた空気を、まだロットバルトが抑える。
「重ねて申し上げますが、斬るという選択肢はありません。撤回をされないのであれば、このまま事態の収束まで拘束を続けさせていただくしかない」
ふ、と、ある想いがレオアリスの胸中に落ちた。
これと同じような事が、ついこの間あったばかりだ。
『君が、僕を捕えれば』
そう言ったのはイリヤだった。
何故、皆同じ事を求めるのか。
王に仕える剣士としての、責務だと。
王の剣士とは、そんな存在でなくてはいけないのか――
王は。
どう命を下すのだろう。
もし――
王が、ザインを斬れと命じたら。
どくり、と鼓動が鳴る。
（――俺は、それに、従うのか……）
喉が詰まる。
「近衛師団は弱腰だな――残念だ。レオアリス、お前自身の意志はどうなんだ。いや、お前の主の意志を、尋ねず言われずともお前は汲むべきじゃあないのか」
ザインの言葉がまるで実体のように喉を掴んで息を詰まらせる。
「お前は」
「ザイン、もう良い。そなたの願いを聞くわけにはいかないのだ」
ファルシオンの幼いが断固とした声に、レオアリスは視線を向けた。まだとても幼い、ファルシオンの面。
「私はそんな命令はしない。ぜったいに」
ファルシオンの言葉が逆に、自分がひどく感情に左右されているのだと気付かせる。本来軍の大将という立場は、感情面での是非を第一に考えるものでは無い。
（――無いのか、本当に？）
そう割り切るべきなのか――
ファルシオンは眉を寄せた。
「もう良い。さがれ。その者も、この街も、悲しませてはいけない」
ファルシオンの金色の瞳に示され、ユージュは青ざめて唇を噛んだま

まの顔を父に向けた。
「――」
ザインはユージュに視線すら向けず、踵を返す。
「――父さんっ」
追い縋ろうとしたがユージュはその場から動けずに、父がまるで赤の他人のように自分の前を通り過ぎるのを、ただ見送った。
「レオアリス、ザインを部屋まで連れて行け。グランスレイ、そなたもだ」
スランザールの指示を聞いてザインは皮肉そうな顔をしたものの、何も言わずにレオアリスが先に廊下へ出るのを待った。
伏せたまま合わせようとしない瞳に懊悩(おうのう)が刻まれているのを見て取り、口元に複雑な感情を閃かせる。
誰も読み取らない内にそれは消えた。

十一

ユージュは床の上にしゃがみ込み、全く知らない場所に一人置いて行かれた子供のように膝を抱えていた。
普段なら手を握ってくれるはずの父が、視線も向けずに出て行って、ユージュはどうしていいか判らず混乱していた。
自分を、斬れと言った――。
(そんなの、嘘だよね――)
ずっと床を睨んだまま、ユージュは爪を立てて唇をぎゅっと引き結んでいたが、レオアリスが戻るとはっと顔を上げた。
「――」
黒い大きな瞳が激しい戸惑いと共にレオアリスに向けられる。レオアリスは無言のまま、ユージュの前に立った。
ユージュの手が伸びて、レオアリスの軍服を掴む。立ち上がり、レオアリスを強く睨み付けた。
「――父さんを……、父さんを斬ったら、許さないからな……ッ!」
声そのものが全身にぶつかってくるようで、レオアリスは口元を引き結んでユージュを見下ろした。
「……大丈夫だ。そんな事はしない」
そう言った後、レオアリスは思い直し、もう一度はっきりと口にした。半ば自分に言い聞かせる為にだ。
「俺は君の父さんを斬ったりしない」
「――っ」
ユージュは軍服を掴んでいた手を離し、その手を強く握り締めて床を見つめていたが、くるりと身を翻して部屋を駆け出した。
「ユージュ――」
ファルカンが手を上げて呼び止めかけ、溜息と共にその手を下ろす。その溜息が室内に重苦しく広がった。
「――どんな人間でも急かされ安易な考えに陥る事があるものじゃ。ザ

インは三百年来の――仇敵を前にして焦燥を覚えておる。剣士として駆り立てられる想いは、我々には想像し難いものじゃろう」
スランザールは束の間レオアリスを見、ただそこに答えを見つけようとした訳ではなく、すぐに逸らした。
「今すぐ考えを捨てよと言っても無理があろう。残念じゃがザインはこのまま一室に留め置き、会談が終わるまで監視を強化せよ。外にいる近衛師団を監視として待機させる」
「――異存は、ございません」
カリカオテが頭を下げる。詫びる言葉か弁護か、しばらく言葉を探そうとしていたが、上手い言葉が見つからなかったのかそれきり黙り込んだ。
十を数えるか数えないかの僅かな間、無言の状態が続いた。
ロットバルトがその沈黙を確認するように眺め、それからファルシオンとスランザールへ向き直った。
「殿下。畏れながら、これで状況把握に必要な要素はあらかた確認できたかと思われます。もう会談まで余り猶予もありません。マリ王国海軍に対しどう臨むか、それを纏(まと)める段階に進むべきでしょう」
既にマリ王国海軍が指定した時刻まで、既に二刻弱の時間しか残されていない。時間どおりマリ王国海軍船に赴くには、少なくとも刻限の半刻前には船を出す必要があった。
ファルシオンがスランザールを確認し、頷く。ロットバルトはカリカオテへ視線を向けた。
「カリカオテ殿、お手数ですが別室をご用意頂けますか。この後は我々だけで話をさせていただきたい」
カリカオテは首を振った。
「いえ、私どもが別室に引きましょう。御用の折はお呼びください。その間に王太子殿下をお送りする船を整えて参ります」
カリカオテ達が退席したものの、まず発言すると思われていたロットバルトはしばらく考え込んでいた。だからだろう、スランザールも口火を切らず、ロットバルトへその眼を向けている。
「――ロットバルト、どうかしたか？」
レオアリスが問いかけるとロットバルトは思考から瞳を上げた。
そう言えば先ほど、マリの船員の病室から戻った時にも、同じように考え込んでいた気がする。
その様子はレオアリスの中に胸騒ぎを覚えさせた。
「――マリの船員に、何かあったのか」
もしかして、先ほどは言えなかった事態が起きているのかと、まず思い当たる事はそれだったが、ロットバルトの答えは少し違った。
「いえ、船員自身は先ほどご報告した通り、変わりはありません。――ですが、彼と密接に関係すると考えられる事があります」
「マリの船員に関わる問題――？　どういう事だ」
ロットバルトはまだ、掴みにくい色を宿した瞳を、誰にも向けていない。
「……これはあくまでも推論――、それもごく薄い不確かな根拠しかない話だと、その前提でお聞き頂きたい」
ここまで曖昧な物言いをロットバルトがするのは珍しい。推論であっても大抵、口にする段階では既にある程度の根拠を持っている。逆に言えば、その段階まで口にしないのがこの参謀官の常だ。
レオアリスはグランスレイやフレイザーと顔を見交わした。ファルシオンが聡い瞳を向け、促す。
「かまわない――、気になることがあるなら聞きたい。どんなことでも」
ロットバルトはファルシオンに一礼し、だがまずは窓際に寄り、その一つを押し開けた。
緩やかな風が吹き込み、レオアリス達には馴染みの無い、少し熱を含んだ潮の香(か)が室内に流れる。部屋に凝(こご)っていた空気が解(ほぐ)れた。
ロットバルトはその風を追うように視線を向けた後、口を開いた。

「マリの船員が救出された状況と照らすと、今回の件に、西方公が関わっておられると、そう考えられる節があります」
根拠の薄い推論と言いながら、それは余りに直截（ちょくさい）な言葉だった。前置きも何もない。
唐突に飛び込んで来た名に誰もが面食らい、息を詰めている。
「西方公？　西方公がと言ったのか。ロットバルト、どういう事だ」
グランスレイの声には咎める響きが確かにあった。
西方公――もしくは他の四大公爵家の誰であっても、今の状況の中に簡単に名前が挙がっていい存在ではない。
ロットバルトは一人一人の様子を確認した。
驚きと疑問。
今示されたのは、当然出て然るべき反応だ。
問題はここからどのように、自分の推論を検討の余地のあるものとして捉えられるよう導くか。およそロットバルト自身、今のこの考えを導いたものは、ひどく感覚的で胡乱（うろん）な論拠だと思っていた。
だが、不確定な状況や立場上の配慮から口を閉ざす――今回のレガージュの混乱と事態の停滞を招いた最大の要因は、その対応にある。
反面、ファルシオンとスランザールがいるこの場では、近衛師団内部で単なる憶測を口にするのとは全く違う。慎重に、しかし検討の余地無しと遮断される前に、速やかに話を進めなくてはいけない。
「――もう少し相応しい表現で言い換えるならば、西方公がマリの船員を救った可能性が少なくないと……、そう考えられる要素がある、という事になります」
「西方公がマリの船員を救った？」
救った、というその言葉を聞いて、グランスレイやフレイザーは明らかにほっと表情を緩めた。受け止め易い言葉だったからだ。
「そうです」
実際はそれ以上の関わりを想定する事さえできたが、この場で口にできるのはあくまでもこの範囲までだ。それ以上踏み込もうとするのなら、あたかも結果としてその結論に行き着いたかのように引き出すしかない。
そしてロットバルトは、踏み込む必要があると考えていた。
「……要素とは何じゃ」
スランザールが一歩近付く。
「そなたがそう考えた原因は――、今ここで議論に挙げるからには軽いものではなかろう」
豊かな眉と皺の奥に隠れた小さな眼に、鋭い光が浮かんでいる。予想以上の厳しい色だった。
その光が何を表しているのか、それがまだ判らない。一旦、ロットバルトは方向を変えた。
「この潮の香――王都ではほとんど嗅ぐ事の無いものだと思いますが」
問いかけるような言葉には、一番始めにフレイザーが頷いた。
「そうね、言われてみれば」
「例えば――そうですね、少し手を加えて煮詰めるなどした上で、香水にして、夜会の席にいかがです？」
「煮詰めてって」フレイザーは想像しにくそうに眉間に皺を寄せた。
「……正直言って着飾った席じゃ好まれないと思うわ、それ。この香りのままならまだしもだけど。それに大体、南方の品を扱う雑貨屋とかも、香水は花とか果物の香りよね」
そう言ってから興味深そうに翡翠の瞳を閃かせた。「でも私より、貴方の方がもっと詳しいんじゃないの？　そういうものを贈り慣れていそうじゃない」
「具体的な品はあまり知らないんですよ。香水というのは贈るには少々面倒な代物で」
「ロットバルト、一体何の話をしている」
グランスレイが戸惑いと呆れの両方を含んで会話を止める。今の状況を思い出してフレイザーは照れ臭そうに軽く咳払いをした。

「それで、香水がどうしたの」
ロットバルトは口の端に、微かに笑みを浮かべた。
「失礼しました。――つまり考えられる要素とは、この独特の香りです」
「香り――」
幾つかの視線が開かれた窓に向かう。風が時折窓にかかる日除け布を揺らしている。
「この香――、匂いと言った方が相応しいでしょうが、これよりももっと強く凝った独特の匂いが、マリの船員の病室に籠もっていました。治療に当たっている法術士の話では、太陽と潮に晒されて海を漂っていた時に、身体に染み付いたものだという事です」
言葉を紡ぎながら、ロットバルトはまだ敢えて、誰とも目線を合わせなかった。
あくまでも疑問点の提示のみ、まずはルシファーがこの件に関わっている可能性があると想定させ、意識の隅に置かせる事だ。
「船員が救助されたのは五日前の夕刻――ちょうど王都では、西方公の夜会が開かれていた時刻です」
「あの時？」
思い当たってレオアリスが顔を上げる。
「そう言えばお前は西方公と少し話をしてたな」
ルシファーが、エアリディアルを居城まで護衛するようにと、レオアリス達に告げた。それが少し慣例から外れた依頼だった為に、ロットバルトはその事を確かめに行ったのだ。
「じゃあもしかして、西方公が、この香りを？」
フレイザーは香りを確かめるように、自分の髪に触れた。
「これじゃなくて、つまりもっとキツいものだってことね――」
「ごく僅かの間です。話をしていた時に漂っていて、珍しい香だったのでそう尋ねた時には、消えるところでしたが」
尋ねた時に、微笑んだ。
『もう消えるわ――残念ね』
消える――、いや、消した。
残念、とは。
それがいずれ何かしらの意味を持つと、そう思っていたからではないのか。
「レガージュに来て先ほどの丘で、海から吹き上がる風に、ふと思い出しました。しかしそれ以上に、マリの船員の身に染み付いた匂いが同じだと、そう感じました」
「なるほど――お前の言っている事は判る。確かに王都には無いものならば、単なる偶然とも言い切れん。時間帯も一致している」
グランスレイはそう言って、しかしまだ慎重な口振りのまま、腕を厚い胸の前で組みロットバルトを見た。
「だが偶然にも西方公がお救いになったのなら、まず昨日の軍議の場でそう報告があってしかるべきではないのか――？　マリの船員を救った時には気付いておられなかったとしても、あの軍議では関連がある事に気付かれるだろう」
グランスレイも昨日の軍議の場にいて、やり取りを見ていた。
「軍議の折、西方公は」
あの時、ルシファーは詰問に近い口調でレオアリスとレガージュの街との関わりを問い質した。
グランスレイは少なからず焦りを覚え、周囲も訝しく感じるほど、常に無い厳しい様子だった。
グランスレイの面に、ふっと疑念の色が差す。
「――あの時の西方公は、確かに普段と変わっておられた。しかし」
その続きは口を閉ざして発されなかった。細めた瞳を研かれた床の上に落としている。
どくり、と誰かの鼓動が鳴る。
「もし西方公が、マリの船員を」
フレイザーもそこから先を迷ったが、助けた、と、その言葉に落ち着

きたがっているのが、レオアリスにも判る。
だが何かがそれを妨げているような感覚が、今の室内にあった。
単純に誰がというのではなく、全体の空気のようなものだ。
「――」
レオアリスはふと、身体の裡(うち)に意識を落とした。
ごくゆっくりと、剣が脈打つように感じたからだが、それははっきりした感覚になる前にすぐ収まった。
「――例えば、西方公が船員を助けた事でマリの船が沈んだ事を知って、レガージュ船団の船がマリの交易船を沈めたと、そう考えておいでだったのか――穿ち過ぎかもしれないが」
そう言いながらレオアリスはロットバルトを見て、彼が瞳に先ほどまでとは違う、厳しい色を浮かべて何かに視線を据えているのに気が付いた。
(何だ――何を見て)
視線を辿った先には、スランザールがいた。
僅かに、息を呑む。
スランザールは苦いものを飲み込んだように、面に深く皺を刻んでいる。
レオアリスの視線に気付き、束の間じっと、レオアリスの瞳を見返した。
「――スランザール公、何か思い当たる事が？」
そう尋ねるのは何故か、労力が必要だった。
スランザールは意識しなければ気付かないくらいの沈黙の後、皺ぶいた顔に漂然とした表情を戻した。
「この件、ひとまずわしが預かる。直接尋ねてみねば真偽は判らん。早急に一度、ルシファーに問おう」
ロットバルトが卓を回り、スランザールの斜め前に立った。
「老公――、もしお許し頂ければ、私が直接尋ねますが」
「ならん！」
きっぱりと撥ね付けた後、スランザールはゆっくりとした動作で卓の上に両手を組み、ロットバルトを見上げた。
「わしから、この後すぐにでも確認を入れる。この件はこれまでとせよ。だが」
皺に埋もれた鋭い瞳が一人一人を見回し、レオアリスの上にも束の間留(とど)まった後、逸らされる。
「――様々なものに、注意を怠るでない」
(――)
暗示的な表現だ、とレオアリスには思えた。
それとも考え過ぎ、だろうか。
「ザインの推測は丸きり無視するものでもないじゃろう。先のビュルゲルの動き然り、来月の条約再締結の儀に向けて、不穏な動きに意識を張り巡らせる事も重要じゃ」
スランザールの言葉通り、今のレガージュには関連が不明確だが、どれも決して小さくはない問題が散りばめられている。
ザインの示す西海。
ザイン自身。
西方公ルシファーの行動。
マリの船の沈没を取り巻いて、複数の問題が次々とレオアリス達の前に示された。
王都が考えていた以上に、全体像が深く沈み込み見えにくい。
「しかしあくまでこれは我が国とマリ王国との会談。よしんばザインの推測通り、三の戟が絡んでいたとしても」
レオアリスは窓の外、輝く海とそこに浮かぶ十隻もの軍船に視線を向けた。
「まるで無関係なものとして、この会談を終わらせるのじゃ」
スランザールの言葉が室内を巡る。

その為に、レオアリス達はこのレガージュに来たのだ。
レオアリスが左腕を胸に当て、グランスレイ達が続く。
室内の空気がぐっと引き締まった。
「承知致しました」

十二

船はゆっくりした動きで桟橋を離れた。
フィオリ・アル・レガージュの旗を降ろし、一隻の護衛船すら付けずに、片側八本の櫂が波を掻いて進む。
旗を降ろし護衛船を付けず、と、それがマリ王国の指定だ。自らの誇りとも言うべき旗を降ろす事によって、恭順の意を示せと言っている。
だが一つ異なるのは、レガージュの旗の代わりと言わんばかりに、漆黒の旗が翻っている事だった。
遠見筒の中に翻る近衛師団旗を眺め、メネゼスは片頬に凄味のある笑みを刷いた。
「さて、こいつはどう捉えるべきだ？」
筒を降ろして傍らの副官を眺める。ヒュウ、と強い風が一度二人の間を抜けた。
「確かにレガージュの旗を降ろしちゃいるが、果たして我々の要求通りと言えるかね」
「自らの置かれた立場を良く判っていないのでしょう。火球砲を一撃してやれば目が覚めます」
「当然こっちはそう捉える――そいつを理解してない訳は無いと思うがな」
メネゼスは隻眼で船を睨み、慎重に呟いた。近衛師団が前方の丘に現われた時、敢えて隊列を示して到着を知らせたのは、交渉に向けた一手だ。
駆け引きというものを熟知しているとメネゼスは受け取った。
「つまりそれだけ、掲げてる玉（ぎょく）が派手って事か……」
「提督？」
「――まあ、火球砲は止めとけ。今さら威（おど）したって面倒だ」

メネゼスは近付いてくる船を睥睨しながら唇を歪めた。
ぐぐ、と船体が波に押されて揺れる。
今日は大陸から時折強い風が吹き、波も幾分荒かった。風の具合からすれば、船が船団に接舷する頃にはちょうど二刻、指定の刻限だ。
「予定通り話し合いが始められそうだな。ローデンの客人を呼んでやれ」

「ローデンの使者殿――セルメット殿」
マリの水兵が扉を叩いて呼ぶのがくぐもって聞こえる。
「もう少しでレガージュから国使が到着します。メネゼス提督が、共に面会の場にお立ち合い頂くようにと」
セルメット――ヴェパールは扉を睨み、そして室内を見回した。
「使者殿」
「――少々待たれよ」
「お急ぎください」
扉の向こうで水兵が姿勢を直したのが気配で判る。
さほど広くはない船室は、首を半分巡らさなくても隅々まで見て取れた。そこにはヴェパール以外、誰の影もない。
苛々とヴェパールは裂け目のような薄い唇を噛み締めた。
「何故来ない――」
マリとレガージュの会談の前に、ここを訪ねて来るはずだったのだ。この船室、と指定した訳ではないが、会談の時刻は告げた。
よもやヴェパールの居所が判らなかったなどとは言うまい。
「まさか、裏切るおつもりか」
「使者殿――会談が始まります。始まった後ではお入りいただけないがよろしいか」
再びマリの水兵の声が急かす。
船室の空気はそよとも揺らがない。
来ないつもりか。

「使者殿」
「――今、行く」
ぶるり、と身を揺すり、ヴェパールはセルメットの姿を取って扉を開けた。
廊下へ出て水兵が扉を閉じる間、もう一度だけ室内に視線を投げた。部屋の赤茶けた木板の腰壁が、誰もいない事を主張しているようだ。
「――」
来ない事は彼等にとって、どの程度の問題か。
「セルメット殿、ご案内致します」
水兵が先に立って細い廊下を歩いて行く。
セルメットは踵を返した。
――来なければ来ない、別にそれだけの事だ。
もともと員数外――彼が駒に組み込んでいた訳でもない。
この先も、あの気紛れな存在を要素に組み込んで考えるつもりはない。
ただ混乱を一つ、与え損ねた。
それが残念だった。

甲板への扉を開けると、高い帆柱の先端に、青く抜けるような空を背景にして翻る漆黒の旗が見える。
風は大陸から吹いている。
「ロットバルト」
レオアリスは揺れる船体を足に感じながら、飛竜とどちらが揺れるだろうと、そう考えた。取り敢えず、王都の穏やかな運河を行く船とは全く違う。
甲板に立っていたロットバルトがレオアリスの所へ来る前に、その隣に立った。自分が出てきた船室への扉に目をやり、戻す。
「スランザールから何か返りはあったか」
近くに隊士や船員はいなかったが、それでも内容を考えて声を抑えた。

ロットバルトの返答も低い。
「特には、まだ」
「――正直俺は、気になった。お前があの時気付いたスランザールの表情を、俺も見たからな」
互いにちらりと視線を交わす。
「グランスレイやフレイザーも多分違和感を感じてる。――できるなら、マリとの交渉の前にある程度結論が欲しかったが――それも仕方ないか……」
事が事だ。スランザールはすぐにでも確認すると言っていたが、そう簡単な話では無いのは充分に判る。
だが、決して無視できない重要な事だと、そう思う。
僅かでも状況が掴めれば。
ふと、アスタロトにそれとなく尋ねてみたら、という考えが浮かんだ。ルシファーとは親しい。最近の様子で、何か気付いている事があるかもしれない。カイを送って――
（いや――）
そこまで考えて、レオアリスは心の中で首を振った。
それは少し、拙速だろう。様子を尋ねるだけのつもりでも、アスタロトの性格ではルシファーに直接問いかねない。今回、それは避けるべき事のように思えた。
何故という訳ではないが――ただ、あの時のスランザールの表情が、レオアリスの意識に引っ掛かっている。
（最近――そういえばあいつ、元気が無かったんだったな）
様子がいつもと違うと、そう思うようになったのは、つい最近だ。
それは僅かに意識に爪を立て、だが何とも繋がらずに漂った。
あの時――ファルシオンの祝賀の宴で、アスタロトがルシファーといた、あの時の変化をレオアリスが見ていたら、もっと違った考えになったかもしれない。
王都にカイを送り、今のアスタロトが置かれている状況は、少なくともこの時点でレオアリスに伝わった。
アーシアの抱える不安も。
ただそれを知ったところで、今すぐ王都に取って返す事などできないが。
レオアリスは傍らのロットバルトを見上げた。
「お前は初めから、単純に『助けた』と思ってる訳じゃ無いだろう」
慎重にそう口にしたが、ロットバルトはあっさり頷いた。
「そうですね。ですがこの件は、簡単にその議論に進んでも困ると、そうも思っています」
「……その率直さが逆に厄介だな」
レオアリスは溜息をついた。そんな事は微塵も考えていなかったと、そう返して欲しかったのも事実だった。
危険とさえ言える考えを隠さないという事は、隠す段階を過ぎたのだ。
一つ、その段階は確実に、先ほどのスランザールの反応だろう。
「――」
「伏せられ隠されているものは、我々が想像する以上に多い」
「何だ？」
「以前老公が口にされた言葉です」イリヤの過去を探っていた時に、スランザールはそう忠告した。
「国を立ち行かせるには、情報の秘匿なども当然の手段でもあるでしょう」
「――この件は、そこに近いものだと思うのか？」
「どこまでか――、それが判りませんが」
「陛下も」
ご存知だろうか、と口にしかけ、レオアリスはそれを飲み込んだ。
何故だか、先ほどのザインの顔が思い浮かぶ。
そこにある関連に気付く前に、レオアリスは半ば無意識にその連想を打ち消した。

思考を切り替え視線を転じれば、行く手を遮るように並ぶ、マリ王国海軍の陽炎のような船影が見える。
レガージュの港を睥睨する火球砲の砲門は、まだ静まったままだ。
「師団旗に気付いていない訳はないと思いますが――メネゼスという指揮官、さすがに場慣れしているようですね」
「話はしやすそうだが、その分俺達がはっきりした証拠を示さないと納得も得られないだろうな」
風が強く吹き抜ける。帆が風を孕んで激しい音を立てた。帆から流れ落ちた風がレオアリスの黒髪を煽り、肩から流れる長布を巻き上げる。
レオアリスは風の流れを逆に辿り、視線を巡らせた。
レガージュの街の向こう、丘を越えて吹いて来る風。
「――上将？」
じっとレガージュの方向を見つめているレオアリスに気付いて、ロットバルトが問い掛ける。
「どうかしましたか」
「――いや」
首を振り、レオアリスは視線を下ろした。「もう四半刻で着く。殿下やスランザールと最終確認をしないとな」
船室への扉を潜る前に、レオアリスはもう一度、風の吹いて来る先を見つめた。

そこは常に、岸壁の下に打ち寄せる波の音が穏やかに鳴っていた。
レガージュの街から少し離れた岸壁の上に、小さな屋敷がある。浅い山型の橙色の瓦屋根に白い漆喰の壁、窓や玄関は木枠に松脂を塗っただけのものだ。
素朴で田舎家然とし、屋敷とは言いながら王都に建ち並ぶそれのような派手さは無い。
古い、今では造られなくなった建築様式は、詳しい者が見れば大戦以前のものだと気付き、そして驚いただろう。
屋根の瓦や漆喰の壁は、少なく見積もっても三百年余の歳月を経ているはずだが、そうは思えないほど美しく保たれている。
ただし鎧戸の開いたどの窓にも、住人の気配は感じられない。
屋敷は花壇や菜園に囲まれて緑豊かだが、しばらく手を入れる者はいないようだった。よく見ればこの季節には早い秋桜が咲いている。
この屋敷の周りだけ時が止まっているような、そんな印象を受けた。
軽い羽音が立ち、緑色の羽をした小さな鳥が花壇の傍に降りる。小鳥は煉瓦に蒸した柔らかな緑の苔をついばもうと嘴を伸ばしたが、何度か小首を傾げて丸い瞳を瞬かせた後、飛び立った。
薄い雲をちりばめた南の空へ飛んで行く。
小鳥を追って視線を向ければ屋敷の左手のずっと遠く、白い小さな丸屋根が見える。約半里ほど離れた場所にある、フィオリ・アル・レガージュの港を守る灯台の屋根だ。
この場所から街の姿は見えない。
ふわり、と風が吹いた。
風は屋敷全体を撫でるように吹き抜けた。花壇や周囲の草木が揺れる。
風が止んだ後

屋敷の姿が一瞬、歪んだように思えた。
しばらくの間しんと静まり返り――、からりと、どこかで小さな音がした。
二階の屋根の瓦がひと欠けら、一階の張り出した三角屋根の上に落ちていた。たった今欠けた事を証明するような、鮮やかな橙色の断面を覗かせている。
続けてカラカラと、瓦が細かい欠けらを零していく。
見ればそこかしこでカラカラと瓦の欠けらが零れ落ちていた。

いつの間にか瓦には無数の皹(ひび)が走り、それは音もなくしかし素早く、屋根から壁へ伝わり侵して行く。
漆喰の壁が剥がれる。窓がひび割れ、砂のように崩れた。
まるで止まっていた時が動き出したかのように、屋敷は静かに崩壊していた。屋根がすっかり崩れ、壁と床と柱が剥き出しになる。
終焉――残滓(ざんし)。
頂点に近い場所にある太陽の光が、朽ちていく屋敷の上に一つの影を落としている。
影に融けるような声が落ちる。それは聞く者の耳を涼やかに捉え、ただ鋭い刃を含んでいた。
「忘れない――」
地上に崩れた屋敷を見つめ、くすりと小さく笑う。
真剣な、必死な瞳でそう言った、あの少女はまだ幼い。
想いの強さと永遠を無条件に信じているほどに。
「全てはいずれ、風化して消えていくのにね」
時が全てを、容赦なく運んで行く。
止めようとすればそれは、歪(いびつ)な抜け殻になるだけだ。
美しく、ただ緩慢に。
それが耐えられない者と慣れる者と尚、求める者と。
視線が先ほど飛び去った小鳥を追うように、空を横切り、白い灯台の向こうに落ちる。
「――もし、この先もずっと、抱え続けるのなら……」
歌うように呟き、遥か遠くに、海面に浮かぶマリ王国海軍の船団の影を見つめた。

十三

太陽の強い陽射しが照り付ける。
遮るものの無い陽射しは海面に反射して拡散し、熱で立ち上る微かな水蒸気と相まって、十一隻の軍船の影を時折おぼろに揺らしていた。
そのマリ王国海軍船団の中央に位置する提督メネゼスの司令船に、レガージュの――アレウス国国使を乗せた船が横付けされ、船体の軋む音と共に止まった。
帆は既に巻き上げられて風を除け、帆柱の先端に一りゅう、漆黒の近衛師団旗がなびいている。マリ王国が旗を下ろせと指定したものに、それは反していた。
揺れる甲板上には左右二十名の近衛師団隊士が並び、船室から国使が出てくるのを待っている。
メネゼスは自分の船へ渡された渡り板の斜め前に立ち、まだ閉ざされている船室への扉へ視線を注いだ。
居並ぶ近衛師団隊士が一斉に踵を鳴らし、左腕を胸に当て姿勢を正す。
扉が開く。
銀髪の大柄な男が身を屈めて甲板へ出た。背に纏う長布と振る舞いから、一目で近衛の将校だと判る。扉へ向き直り、隊士達と同じように敬礼を向ける。
続いて現われたのは、若い、まだ十代後半の少年だった。
再び、近衛師団隊士が踵を鳴らす。空気がぐっと引き締まった。
メネゼスは片眉を上げた。
あの少年は、将校――それもどうやら先に出てきた大柄な男より官位が上らしい。
「ほう、こいつぁまた凄ぇな」
メネゼスの呟きを耳にして、副官が眉を潜める。
「彼が国使ですか――ずいぶん若い者を送って寄越しましたね」
「何言ってんだ、ありゃあ近衛師団の将校だ、国使じゃねェ。が」

アレウス王国近衛師団にあれほど若い上級将校は、一人しかいないはずだ。他国の軍に関する事も派手な噂は伝わって来る。ただ少し、呼び名は異なった。

「第一大隊大将――、アレウス国王の剣（つるぎ）だ」

「は……では、あの」

副官が感心した顔を再びレガージュの船に向けた。時折吹き付ける風が、レオアリスの纏う漆黒の長布を靡（なび）かせる。

「しかし」メネゼスが唸る。「だとすると、国使は」

扉から、小柄ながら威厳に満ちた老人が現れ、一度振り返って扉の奥に何事か言葉を掛けた。近衛師団隊士達がその場に膝を着く。老人と二人の将校は立ったまま、扉へ向かって恭しく頭を下げた。

こつ、と小さな靴音がした。

メネゼスが隻眼を細める。

現われたのはまだ幼い少年だ。

だが王家の色、暗紅色の生地に双頭の蛇の刺繍を施した長衣に身を包み、近衛師団が護る人物は限られている。

「て、提督」

「――王太子、ファルシオンか。いや、しかしこりゃあ」

やはり、と思いつつも尚、メネゼスは呆気に取られて口の中で呟いた。

そもそも近衛師団が来た時点で、相当な地位の国使を送って来たとは読んでいた。それによってアレウス王国の対話の意志は、メネゼス等マリ王国海軍に示された。

しかし国使に王太子を送って来る事までは、メネゼスも想定していなかった。

「なるほど旗を降ろさない訳だ――。しかし王太子はまだ五歳になったばかりと聞いているが――」

メネゼスは検分するようにファルシオンを眺めた。ファルシオンはメネゼスの視線に気付いたのか、じっと見つめ返して来るようだ。

「――幼いな」

メネゼスは口元にうっすら笑みを浮かべた。

両国は船の上で波を挟み、互いに向かい合っている。

左右十隻のマリ海軍軍船は横一文字の陣形を僅かにずらし、今は全ての船首がレガージュの船を覗き込むように並んでいる。その半数もの船首には、火球砲の砲門があった。

ファルシオンの乗った船は半ばマリ海軍の懐に収められた状態だ。メネゼスにその意志があれば、ファルシオンの生命すら簡単に危険に晒（さら）される。

それをどちらも理解していて、場はそれぞれの緊張に満ちていた。

ファルシオンは真っ直ぐに、対面の船に立つ大柄の男を見つめていた。

「恐らくあの男がメネゼス提督でございましょう」

スランザールがそっと告げ、レオアリスも眼を向けた。

マリ人に特有の浅黒い肌と陽に焼けた短い黒髪。グランスレイと並ぶ体躯と立ち姿からは、経験に裏打ちされた豪胆さが伺える。

何より左の額から頬にかけて長い傷が走り、左眼を閉ざしているのが印象的だった。右の眼光が鋭く、そして迷い無くファルシオンに向けられている。

マリ海軍は納得の行く説明を求めていて、それができないのなら国として謝罪をしろと要求している。レオアリス達はまだ、彼等を納得させるだけの材料を持っていない。

今できるのはただ、レガージュはマリの船を沈めていないと、それを改めて説くだけだ。

もしメネゼスがファルシオンの言葉を受け容れなければ――

ファルシオンは張り詰めた顔で、メネゼスをじっと見つめている。

「俺が先に参ります」
レオアリスはそう言って、隊士達の間をマリ海軍の船へ向かおうとしたが、ファルシオンはぐっと手を引いて止めた。
「殿下？」
「スランザール、レオアリス」
ファルシオンが瞳を見開くように、二人の顔を見上げる。黄金の瞳に光が揺れた。
「隊士たちは、この船に残す。私たちだけで行こう」
「――しかし、それでは殿下の警護の体制が不十分になりましょう」
「いいのだ。話し合いをするために行くんだから」
そうきっぱりと言った。
スランザールはファルシオンの言葉を吟味するように眉を動かした。どのような状況であれ、ファルシオンを最も安全に護る事が最優先の命題だ。
スランザールはレオアリスと視線を合わせ、ややあってゆっくり頷いた。
「殿下の仰せの通りに致しましょう」
ファルシオンも頷き、ただ頬を強ばらせている。レオアリスは膝を付き、口元に笑みを刷いた。
「問題ありません。御身は必ずお護りします」
ファルシオンは何かを言おうとして口篭ったが、レオアリスは一礼して立ち上がった。先導の為に一人、渡り板を渡ると、メネゼスの立つ甲板に降りる。漆黒の長布がふわりと翻る。
まるで気負う事の無い身のこなしに、左右の甲板に出ていたマリ海軍兵達は呑まれたように一歩、後退った。メネゼスの鋭い視線を向けられ、慌てて姿勢を正す。
レオアリスは数歩歩みを進めて立ち止まり、メネゼスを真っ直ぐに見て一礼した。
「マリ王国海軍提督、メネゼス殿とお見受けします」
「いかにも――貴殿はアレウス国近衛師団第一大隊大将か」
名乗る前にそう問われ、レオアリスは少し驚いてメネゼスを見て、頷いた。僅かに身体を向き変え、横付けした船を示す。
「アレウス国王が一子、ファルシオン王太子殿下です。貴マリ王国国王陛下の国使を受け、アレウス王国国王陛下より全権を委任され、この度の問題について話し合う為にアレウス王国国使として参られました」
「問題の話し合い、とは、提督」
聞き咎めた副官が憤りに顔を赤らめ、傍らのメネゼスに囁く。「我が国が求めているのは謝罪だと、まずそれを理解させるべきでは」
「――」
「必要なら見せしめに使者を斬ってでも再度意思を示し、例え王太子だろうと追い返すのが」
今、この若い将校はこの船にたった一人でいる。捕えるも斬り捨てるも簡単な事だ。
（通常はな）
メネゼスは隻眼を細めた。他国の兵に囲まれ、決して友好的とは言い難い状況にあって、落ち着き払っている。というよりは自然体に近いのだと思えた。
剣も何も帯びていない。それが油断でも傲（おご）りでも、ましてやマリに対する恭順の意でもない事を、メネゼスは理解している。
（剣士か――、まだこの眼で直接見た事はねぇが）
「会談に当っては、場に控える四名について貴船への乗船をお認め頂きたい。一名は殿下の補佐を務めるスランザール公、残り三名は我々護衛です。近衛師団隊士達は船にこのまま待機させます。その上で、護衛をこの人数以下にする事もまた、ご容赦頂きたい」
「――」
メネゼスは隻眼を細めた。護衛に付くのは僅か三名、二十余名の兵はレガージュの船に残るという事になる。

通常、王族を警護するにおいて、その交渉ならば過ぎる程の譲歩と言える。しかし
（それ以上――剣士一人で、待機させた近衛師団隊士二十名を充分補えるはずだがな）
「提督、如何されますか」
副官はアレウス国側が最大の譲歩をしたと、そう受け止めたようだ。
（乗せられてやがるな。王太子を持ってきて、尚且つ護衛を最小限にするとありゃぁ）
メネゼスはにやりと笑い、組んでいた腕を解くと頷いた。
「いいだろう、王家護衛の事情は判る。乗船を認めよう」
「有難うございます」
レオアリスはメネゼスに一礼し、渡り板の傍に歩み寄った。
初めにグランスレイが渡り、続いてスランザールが船を移る。
ファルシオンはロットバルトの手を借りて自分の胸の位置にある渡り板に乗ると、一人で細く不安定な板を渡った。レオアリスが腕を支え、危なげ無く甲板に降りる。
ロットバルトが渡った後、残ったフレイザーの指示で、近衛師団隊士達は渡り板を取り外した。
マリ海軍の水兵達が驚き、互いに顔を見合せて騒めく。
渡り板を外すなど、退路を自ら断つようなものだ。万が一の時に、近衛師団隊士達の救援も期待できない。
「帰り道は無くていいのかな」
メネゼスの笑い含みの問いかけに、スランザールが皺顔を上げる。
「これが殿下のご意志じゃ」
「ほお……まるで人質を取る気分だが」
「無論帰路は、貴船団が見送ってくださると信じておる。我々が危ぶむところは何もござらん。当然、この会談の結末もじゃ」
「なるほど――。だが互いに船を寄せ合えば、間に上がる波も高かろう」
そう笑い、メネゼスはファルシオンへ向き直った。
「ようこそ我が船にお越し頂けた――王太子ファルシオン殿下。一同、まずは歓迎致します」
親しげな口調とは裏腹の鋭い眼光が、他の誰でもないファルシオンに据えられる。
ファルシオンもメネゼスを真っ直ぐ見上げた。
メネゼスが今自分に向けているのは、興味を含んだ探る視線だ。
何ができるのか。何を言うのか。
期待をまさか裏切るまい、と。
メネゼスの視線が外れ、ファルシオンはそっと息を吸い、吐いた。
この中で自分が一番、何の力も無い事を、知っている。
スランザールやレオアリス達に助けてもらわなくては、何もできない。
もし――もっと自分が、せめてレオアリスと同じくらいの年齢だったならと、そう思った。
斜め後ろにいるレオアリスをそっと見上げる。レオアリスはすぐに気付いて、にこりと笑った。
『身命に代えても、王太子殿下の御身をお守り致します』
レオアリスは昨日の軍議で父王に対し、そう誓った。
剣の主に。
もし、ファルシオンの身に万が一の事が起これば、必ずレオアリスはそう行動するだろう――
心臓の鼓動が早くなっているのにファルシオンは気が付いた。
本当に、このやり方で正しかっただろうか。
危険に晒しているだけではないのか。
レオアリス達も、残した近衛師団隊士達も。
「こちらへ」
メネゼスはそう言うと、先に立って船室への階段を下りていく。
ファルシオンはぐいと顎を持ち上げ、メネゼスの後に付いて扉を潜った。

十四

『……の前で、それを証言できるといいが……』

誰かがそう言った。女だった。

微かに笑っていた気がする。

（――誰の、前だ）

聞き取れなかったが、確かにそう言った。

三日間海を漂っていた彼を見つけて

それから

（ど、こか――移動した。俺は船に乗ってたっけかな……）

まるで小型の帆船のような速度で波間を進んだ。頬に当る風と波を跳ねる浮遊感が感じられた。

（違う。あれは船なもんか。船長の寝台だったじゃねえか）

バラバラになった船の。

『船じゃない』

男の声がした。聞き覚えのある声だ。

（ああ？　何だって？）

『船じゃない』

判った。自分の声だ。

『あれは船じゃない』

（船じゃあないって、そりゃそうだ――寝台だったろ）

薄暗い視界が縦に横に大きく、不規則に揺れている。

嵐だからだ。

嵐の中に、彼の船は閉じ込められていた。

荒れ狂う風と波から何とか帆柱を守りながら、嵐が過ぎるのを待っていた。

ゼ・アマーリア号。

古参のいい船だ。

『船じゃない』

（ああそうだ。そこらに浮いてる物に必死に掴まったんだからな）

『船じゃない』

（だから、知ってるって――）

ふいに、暗闇を切り裂く雷光のように、映像が浮かび上がった。

嵐の中を、　　来た。

（二隻――）

船が、嵐の中を、二隻――真っ直ぐにやって来た。

彼はそれをはっきりと見ていた。

同じように嵐に閉じ込められた船だとそう思い、同じように帆柱を守ろうとしているだろう乗組員達を探して甲板を眺めた。

誰も。

誰もいない。甲板には誰も。

帆柱に張られた白い帆が、風に大きく膨らんでいるだけだ。

（おかしい――）

そう、それはどこか、おかしかった。

（あんなに帆を張っちゃ、柱が折れる）

荒れ狂う風が帆柱を折るから、嵐の時は何がなんでも最優先で帆を畳むものだ。それが生死を分ける。

（馬鹿か、何をやって）

そう思って、ぎくりとした。

おかしい。

帆は、船体に直角に張っていた。全身に風を受けるように。

だが風は、横から吹いていた。

前から吹き、横から吹き、後ろから吹いた。
帆は一度も、向きを変えなかった。
初めて――恐怖を感じた。
（来るな）
彼等の船に、ゼ・アマーリア号に、真っ直ぐ突っ込んで来る。
意志を持ち、悪意を発散し、ゼ・アマーリアを砕こうと
（来るな――、来るなッ！）
来るな来るな来るな来るな――！

衝撃があった。
バリバリと船体が裂ける音を、メネゼスは聞いた。

「……」
「……で」
「……が、早く……」
誰かがすぐそばで、ぼそぼそと話をしている。
言葉は、最初は頭に入ってこなかった。
何拍か置いて、それがマリ語ではなく別の国の言葉だと気付いた。どこの国かは思い出せなかったが、意味は判ったから知っている国だ。
「ファルシオン殿下は、マリ海軍の……メネゼス提督と、今ごろ……会談を……」
（メネ、ゼス――？）
自分の名だ。
いや、メネゼス提督と聞こえた。
それは自分の叔父の事だ。
「もう、間に合わないか……あんたには手を尽くしてもらったのにな」
壮年の男の疲れが滲んだ声に対し、落ち着いた老人の声が返る。

「いいや――この男が助かった事に変わりはない。それがまだしもだ。助かった事だけでも伝えるといい」
「ああ。だが、メネゼス提督は納得するかどうか」
「全ては殿下にお任せするしかあるまい」
（叔父だ――、叔父貴――）
そこにいる誰かを呼ぼうとして、束の間メネゼスは躊躇った。
唐突に恐怖を感じたからだ。
人の気配や話し声が、幻だったら――自分は今も海を漂っているのだと、思い知らされたら。
気が狂う。
船が沈んで故郷から遠い海に放り出されたメネゼスが、他国の人間の口から、叔父の名を聞くなど都合が良すぎる話だ。
ただの、自分自身が作り出した幻聴――
だがメネゼスは生きたくて、声を出した。
彼が助けてくれる。
『――叔父、貴』
一瞬の沈黙の後、驚いた気配が伝わった。
「眼が覚めたのか！　おい、あんた」
確かな声が返り、肩に手が当てられた。
喜びが沸き上がる。
メネゼスは重い目蓋を精一杯の努力でこじ開け、首を巡らせた。
暗い。
目が見えにくいのかと思ったが、実際に部屋の灯りを落としているせいだった。
大柄な金髪の男が顔を覗き込み、マリ語で尋ねた。
『判るか？　ここはレガージュの交易組合だ。あんたが海を漂っているところを見つけて、連れてきた。俺は――、レガージュ船団の船団長、ファルカンだ』
『海――、お、俺は、助かった……のか』

『そうだ、もう心配無い。この法術士の先生が治癒の術をほどこしてくれたからな』
メネゼスが視線だけを巡らせると、枕の横に座っていた老人がゆっくり頷いた。
『気分はどうかね』
『――いい方だ。少し、目眩がするけど』
メネゼスは息を吐きながらそう言って一度目を閉じ、それから首を振った。
『いや、すごく気分はいい――、踊り出したいくらいだ。助かったんだろ、俺は』
ファルカンが力強く頷く。
『そうだ。もう何も心配は無い』
『――』
メネゼスは押し黙った。
閉じた瞼の間から涙が盛り上がり、つう、と乾いた頬を伝う。
『生きてるのか――』
肩が小刻みに震え、押さえていながらも、嗚咽(おえつ)が洩れた。
ファルカンはしばらく黙って、メネゼスの額に手を当てていた。改めて見れば彼はまだ二十代半ばで、ファルカンからすれば船団の若い乗組員達に重なる。
『生きてるよ。本当に良かった。すぐに、マリに帰れる。すぐ帰してやる』
『――ありがとう――、ありがとうございます』
しばらくの間、室内にはメネゼスの嗚咽だけが流れていた。
落ち着いたのを見計らい、ファルカンが水差しを取り上げ細い注ぎ口をメネゼスの口元に当てる。メネゼスはゆっくり飲み込み、そしてゆっくり息を吐いた。
『――ありがとうございます。落ち着きました』
『ああ。水以外が欲しかったら言ってくれ』
『いえ――あの、ボリスは……寝台に、一緒に乗ってた』
ファルカンは重苦しい息を吐いた。この青年を見つけた時、一緒に乗っていた男は既に亡くなって数日経っていた。
『――駄目だった』
メネゼスは黙り込み、しばらくじっと左隣に視線を向けていた。
『そうですか……』
『――だが、あんたが助かって良かったよ。あんたは――』
メネゼスは明瞭に口にした。
『ディノ、メネゼスと言います』
ファルカンが眼を丸くする。
『――メネゼス？　海軍の？』
息を呑んだような沈黙があった。見上げれば、ファルカンは緑の瞳を驚きに見開いている。
『あんた――、まさか、海軍提督のメネゼスと関係があるのか』
何故驚くのか、それが判らなかったが、メネゼス――ディノは頷いた。それより何故叔父であるメネゼスの名前が出ているのだろう。
『叔父です』
ファルカンはまじまじとディノを眺めた。
『叔父の名が聞こえて、目が覚めたんだ――あなた達が話していた、と思う』
『――』
『？　どうか、しましたか？』
『いや……、いや』
そう言いながら、ファルカンの声はそれと判るほど上ずっていた。
『そうか、メネゼス提督の――』
ファルカンの緑の瞳の中に、強い光が宿る。
一気に、希望が見えた。
「殿下にお知らせ致そう。伝令使が良いか――」

「いや、彼を船に連れて行く。その方がいい」
「では私が送ろう」
二人は慌ただしく言葉を交わしている。
「おい、キース、来てくれ」
ファルカンは扉の外にいる部下に声を掛け、また法術士と向かい合った。
「すぐ送れるか。彼の体調は」
「さほど問題は無い、彼の寝台ごと送ろう。そうすれば身体にも負担が少ない」
「よし――！」ファルカンは勢い良く、右拳を左手の手のひらに打ち付けた。「行ける！　だが時間は無い、今すぐ」
『一体何が』
ディノはファルカンの服の裾を掴んだ。
『叔父が、まさか叔父がいるんですか』
ファルカンが興奮した様子のまま頷く。
『あ、ああ、いる。いるんだ』
『俺を――アマーリアを探しに？』
そこでようやく、ファルカンは肝心な事を思い出した。
『ああ――、そうだ、ディノ、あんたはゼ・アマーリア号が沈んだ経緯を話せるか』
『アマーリア、が』
『嫌な事を聞いて済まん――』そう言った後、ディノが首をかしげるほど、黙りこんだ。
『ファルカン団長？』
『あんたは――、ゼ・アマーリアを沈めた船を――、見たか』
ディノの返答は束の間の間があった。
『ディノ？』
ひやりとして、ファルカンが問い掛ける。まずかった、と思った。
沈めたのがレガージュの船だと、そう責めるのでは、と。
それほど厳しく暗い眼をしていた。
『ディノ』
『見た――』
息遣いには恐怖と、怒りがあった。
ファルカンと法術士は、息を呑んでディノ・メネゼスを見つめた。
『けどあんなのは、船じゃあねぇ』
「――それは」
ごくりと喉を鳴らす。
『それは、どういう、事だ』
『嵐の中で帆を張って、平然としていやがった。あんな、ふざけたもの――ありゃあ、別の』
ディノは不思議な事を口にした。
『別の生き物――いや、何かだ』
ファルカンは法術士を見た。法術士は黙って首を振ったが、心の中では判っていたかもしれない。
ファルカンもその単語を頭に浮かべた。
西海――
そしてそれを掻き消す。
そこには触れない――、王太子はそう決めたのだ。ファルカンも、カリカオテ等も触れるべきではないと思っている。
『ディノ。頼みがある』
改まった口調に、ディノは寝台の上に半身を起こしてファルカンと向き合った。
『その話を、あんたの叔父――メネゼス提督に伝えてほしい』
『叔父に――』
『メネゼス提督は、俺達レガージュ船団がゼ・アマーリア号を沈めたと思っている』
『――』

一瞬、確かに彼は身構えた。
叔父でもあり、海軍提督でもある存在の言葉は、彼には重いものだろう。彼が見たものを、見間違いだと、そう考え直させるかもしれない。
『今、メネゼス提督の船団がレガージュの港の前面に陣を置いている。レガージュ――いや、国として謝罪が無ければ、街を焼くと』
ファルカンは誠意を込めて、ディノを見た。
彼が、この街を救う希望だ。
ファルカンは腰に括っていた剣を鞘ごと外し、ディノの寝台の傍らに立て掛けた。
『だが、俺達はそんな事はしていない。剣と、船と海に誓って――決して』
それは船乗りの誇りを掛け、誓う言葉だった。
その言葉に彼等は命を乗せる。
『――』
長い間、ディノは黙って自分の手元を見ていた。
ファルカンは言葉を積み上げそうになるのを懸命に堪えた。
やがてディノが顔を上げ、ファルカンを見た。
『俺は、俺の見たものを、叔父に――メネゼス提督に伝えます』
ファルカンも彼の顔を見つめていた。
疲労はまだ色濃く、不安と緊張に満ち、だがそれ以上に明確な感情がそこにはあった。奥歯を噛み締め、軋んだ音が立つ。
『あの船――いいや、あいつは許せねぇ。アマーリアを――、船長やボリス達を沈めやがった』
船乗りにとって船は家、乗組員達は家族も同然だ。
それを無惨に沈められ、ディノの瞳には強く激しい憤りがあった。
『沈めて平然と、あの嵐の中を去って行った』
憤りに震えている肩を、ファルカンは右手を伸ばして震えを抑えるように掴んだ。
『絶対に許さねぇ』
『――』
『すぐに、準備をする。もう少し寝ていた方がいいだろう』
法術士がディノに横になるように促す。
『貴方をマリ海軍の船に送るから、話はその後だ』
ディノが寝台に横になり、ファルカンは彼の肩に置いた手を離し、ぐっと握り込んだ。
（ザイン――この男は、あんたが助けたんだぞ）
ザインのいる部屋の方を見上げる。ここにザインが居れば、考え方を変えてくれるのではないか。
そう考えながら、ふと廊下への扉を見た。
「？　どうした、遅いな――聞こえていないのか」
先ほど廊下へ声を掛けたのに、誰も入ってこようとしない。ファルカンは訝しそうに呟いて立ち上がり、扉に向かった。
がちゃりと扉を開く。
「おい――」
廊下に立っていたはずのファルカンの部下が、壁に持たれるように座り込んでいた。
「何をしてる――居眠りでも」
一歩近寄りかけ、ファルカンは足を止めた。
おかしい。
俯いているせいで、表情は見えなかったが、ぴくりとも動かない。
「おい、キース」
「船団長」
駆け寄ろうとして唐突に背後から声をかけられ、ファルカンは振り返った。
すぐそこにホースエントが立っていた。顔は紙のように白く血の気が失せ、肩で上下に荒い呼吸を繰り返している。
「ホースエント。どうした――何をしている。お前は領事館に戻ったんじゃ無かったか」

「――」
ホースエントは答えず、ファルカンに、ゆっくり近付いた。
「ホ――」
どん、と体当たりするようにホースエントがぶつかる。
ファルカンが目を見開き、右手でホースエントの肩を掴んだ。
腹に熱が走る。
視線を落とすと、ホースエントが両手に握り締めた剣の柄が見えた。
鍔(つば)から先は、ファルカンの脇腹に埋まっている。
ホースエントの向こうで、廊下に座り込んでいるキースの体の下に血が溜まっているのが見えた。
「――何」
背中に手を回し、探る。
背中から、剣の白々とした刃が突き出していた。
「――、ホースエント……、貴様」
突き出た剣の根元から、血が沸き上がり、ぼたりと木の床に落ちた。

十五

ギィイ、と船体が波に揺れる音が、天井の低い船内に籠もりなかなか抜けていかない。船内は波音と揺れと、取り巻く軍船やその兵士達の気配とが入り交じり、一時もたゆまず騒めくようだった。
案内された船室は、船としては充分な広さがあった。恐らく軍議などで使用しているのだろう。
メネゼスが先に入り、一番後ろに付いていたメネゼスの副官まで全員が入ると、扉が廊下から閉ざされた。
レオアリスはファルシオンのすぐ斜め後ろに立ち、視線を動かさずに室内を確認した。
扉は今入ってきた背後の一つだけで、正面に置かれたメネゼスの机の向こうに丸く小さい窓が三つ並んでいる。窓からは隣り合う軍船の船複しか見えなかった。
左右の壁に沿ってそれぞれ五名ずつマリの兵士が立ち、中央にいるレオアリス達に真っ直ぐ視線を据えている。
万が一、強引に退く事になったら、退路は後ろの扉しかない。だが、扉の向こうの廊下にも兵士を置いているのは気配で判った。
四人。
(いや、もう少しか。この中は気配が掴みにくいな)
「安心してもらおう。剣士を抑えるほどの人数じゃあない」
メネゼスはレオアリスを見据え、にやりと笑った。鋭い相手だとそう思いながら、レオアリスはメネゼスを見返した。
「その心配はご無用です。王太子殿下をお護りする為以外には、この場で剣を抜くつもりはありません」
「その通り――、謝罪以外、する事はないはずだ」
「それもまた、少なからずお考えになっているものとは違うと思っています」
「どうだろうな」

メネゼスは嘯(うそぶ)いたが、レオアリスはそれ以上の発言を控え、その事を示すように視線を落とした。
そうするとファルシオンの姿が視界に入り、ふと、気を引かれた。ファルシオンはメネゼスではなく、その斜め右側をじっと見つめている。
メネゼスの右側には男が一人立っていた。兵士ではなく、衣装からは軍属というより商人のように見える。
銀色の、平べったい印象を与える眼がファルシオンへ向けられている。それでいて、ファルシオンの瞳を真っ直ぐ受ける事をどことなく避けているように見えた。
男が目線を上げ、一瞬だけ視線が絡む。
違和感――何かの。
メネゼスはレオアリスの視線の先を見て笑い、据え付けられた机の向こうに腰を降ろした。
「紹介しよう――ローデン王国の使者、セルメット殿だ。ローデン国王の書状を、我が船団に持って来られた。正確には、マリ国王陛下に」
スランザールが険しい表情を浮かべる。
「ローデン――ローデンの船をも、襲撃し沈めたと」
「理解が早いな。この会談、ローデンの使者殿にも参加して頂く予定だ。後ほどその為の時間を設けよう」
「――」
（ローデンも――）
レオアリスは無意識に奥歯を噛み締めた。まさか、という思いがまずある。マリ一国でさえ対応が厳しい状況なのに、まるで考えもしていなかった要素がいきなり加わった。
唐突に。
ローデン王国の使者が今、この場にいる――その事への疑問と、収まりの悪さ。
それが改めて、事態が故意に、そして幾重にも張り巡らされているように感じられた。
漠然とした悪意――そこに要素を一つ足すだけで全て明確になる。
（――西海か）
数刻前に聞いたザインの言葉が、意識に強く訴えてくるようだ。西海の首謀者を引っ張り出せば、全てが解けると、確かにそう思わせられる。
（いや――、それはしない。できないんだ）
既に国としての方向は決まっている。
もともと不利は承知の上での交渉だ。
だからこそ、ザインの望みを全て断(た)って。
「ローデン」
小さな呟きを聞き取り、レオアリスはファルシオンを見た。ローデンは、ファルシオンに贈った懐中時計が作られた国だった。
いつか行ってみたいと、つい先日そう言っていた。
ファルシオンは服の胸の辺りを抑えている。幼い頬の上には戸惑いがあった。
「――殿下」
そっと問いかけようとした時、メネゼスが口を開いた。
「それで、アレウス国王は何と言っておられる。それとも謝罪の親書でも持って来られたかな」
スランザールがすっと顔を上げる。
「その前に、我々の説明するところをお聞き頂きたい」
「説明？　説明の必要があるか？」
「求めておられるのは、謝罪のみでは無かったはず――」
傍らにいた副官はあからさまに不愉快そうな顔をしたが、メネゼスは隻眼に浮かべた光をスランザールへ向け、しばらく考えるように椅子にもたれて腕を組んでいた。
やがてゆっくり身を起こす。
「――良かろう」

「では……」
「ただし、全ての説明は国使たる王太子殿下からして頂こう。他の方々は発言を控えてもらいたい」
ファルシオンは驚いて小さく息を呑み、スランザールがぴくりと眉を動かした。メネゼスはその様子を面白そうに眺めている。
「どうかされたか。まさか殿下は、ただこの場に立つ為だけにおいでになった訳ではあるまい。であれば人形でも構わないだろうからな」
レオアリスは唇を引き結び、喉元まで上がった反論を抑えた。
だが明らかに不利な状況だ。元々この交渉は、スランザールを中心に進めてようやく状況の打開、いや、維持が可能だと思っていた。
手元にはマリ側の認識を覆すだけの確たる証拠など、一つも無いのだ。
交渉によってレガージュへの攻撃を回避するのが第一、軍船を退かせる事ができれば、それは現状の八割打開だとも言えるだろう。
海軍を退かせ、改めて冷静な話し合いの場を設ける。
(その為には、一連の経緯にマリが疑問を持つように誘導する必要がある)
何故マリ海軍はこれほど早くにレガージュへ到着したか。その点が、今アレウス国側が出せる最も有効な手札だ。
ただ、単に手札を開いて見せるだけでは効果は無い。
ファルシオンはまだ幼い。王太子とは言え、通常でさえ難しい交渉を、五歳になったばかりの少年一人に担えとは、余りに厳しい条件だった。
(マリには、元々話し合いを受けるつもりは無いのか)
それほど、マリはレガージュ船団の船がマリの船を沈めた事に、確証を持っている事になる。
スランザールが穏やかに口を開く。
「無論、殿下が正式な国使である事に何の疑問もござらん。しかしメネゼス提督、私はアレウス国国王陛下より国使たる殿下の補佐を命じられ、その為に参ったもの」
いつもと変わらないゆったりとした口調でスランザールは続けた。
「その責務を果たさないとあっては、王都に帰る事もできぬ」
「それは貴殿等の都合、俺の預かり知る所ではない」
メネゼスは眉も動かさない。
「その通りじゃ。だからこそ、我が国王陛下に対しその点は譲れぬ」
スランザールとメネゼスは互いに温度の無い視線を交わした。マリの水兵達が何時でも剣を抜けるよう張り詰めたのが判る。
レオアリスは視線を動かさず、左右へ気を配った。
部屋に満ちた緊張を破ったのは、他ならないファルシオンだった。
「かまわない――私が国使として、メネゼス提督とお話する」
スランザールは眉を上げたが、何も言わなかった。黙ってその白髪を下げる。
今度はファルシオンが、メネゼスの隻眼と向き合った。幼い頬には張り詰めた緊張がある。
「ただ、間違ったことをお話するのは、良くないと思う。私はまだ、たくさんのことは知らないけれど、責任ある発言をしなくてはいけないから」
「――」
「だから、スランザール達に、私からたずねるのは、いいだろう？」
メネゼスは束の間ファルシオンを鋭く見据えてから、ふいに眼光を緩め、声を立てて笑った。
「なるほど――素直で聡明な殿下であらせられる。では、確認の為にお尋ねになるのは良しとさせて頂きましょう」
「ありがとう」
自然に滑り出たその言葉を耳にして、メネゼスは再び笑った。だがすぐに鋭い切り裂くような視線が戻る。
「重ねて申し上げるようだが、我々が一番に重視するものはアレウス国国王の謝罪だ。貴国にそれ以外ができるとは、残念ながら思っていない」
「レガージュは、マリの船を沈めてはいません」
ファルシオンは力を込めて、そう言った。

「私はそれを、お伝えしに来ました」
「口先だけでなら何とでも言える。千回でも万回でも言い続ける事は可能だが、何の価値も無いだろう」
全く無慈悲に撥ね付ける。
「かち」
「殿下がここに言い訳をしに来られたのなら、それは無意味な行為でしたな」
「――そ、れは」
王太子として育ってきたファルシオンにとって、自分の言う事を容赦無く否定される経験など、ほとんど無かっただろう。
それに加え、メネゼスにはファルシオンの為に易しい言葉で噛み砕いて話すつもりなど毛頭無い。
「言い訳じゃない――私はきちんと、レガージュの者たちから話を聞いたのだ」
「ほう、話を」
「レガージュは決してマリの船を沈めてはいないと、そう誓っている」
「ではその確証を出して頂こう」
「それは」
ファルシオンはスランザール達を見上げた。スランザールが首を振る。
「確証はございません、殿下。ただ幾つか示せるものはございます。それを」
メネゼスが口の端を歪める。
「確証が無いと認めているのでは話にならん」
「いいえ」
ファルシオンは振り返り、身を乗り出すようにして言った。
「あります、船の――ちゃんと日記を付けている」
「航海予定表か？　あんなものは確証にならないでしょうな。幾らでも書き替えられる代物です」
「書き変えてなどいません。それはちゃんと、カリカオテから聞いている」
「カリカオテ殿が知らずにいる可能性も無くはない。レガージュ船団の船が勝手に動いている事かもしれませんな」
「そんな事――、絶対ありません」
すっとメネゼスの纏う空気の温度が下がった。レオアリスが咄嗟に身の裡（うち）の剣の気配を探った程に。
「ほう。何故絶対と言い切れますか」
「レガージュは、マリの船が沈んだことを知って、すぐに探しに行っています。乗っていた人たちをを助けたかったから」
「それが、殿下が絶対と仰せになる理由ですか」
「自分で沈めたら、そんなことはしないと思う」
「それも、幾らでも言えるでしょう。もし船員を救出したのなら、何故レガージュは我々にそれをすぐ通告しなかったのか――この場には、貴国が救出した者は一人もいない」
「それは、連れてこれなくて――でも会館に」
ファルシオンの言葉を待たず、メネゼスは一つ息を吐いた。
「我々は、絶対に、レガージュ船団の船がマリの船を沈めたのだとも言い切れる。そう言おうと思えば」
「――」
先ほど絶対と言った言葉を逆に取られたのだと判り、ファルシオンは黙り込んだ。
「まあ、殿下は事態を明確に認識しておられないだけのようだ。我々がレガージュの行為をどう捉えているか、それから説明して差し上げるのが筋のようですな。そうすれば、我々が貴国に火球砲を突き付けている理由を、もっとはっきり理解して頂けましょう」
そう言って、メネゼスは副官に視線を向けた。
「ゆっくり聞いて頂こう。殿下に椅子を」
副官が壁際にあった椅子を掴み、どかりと乱暴にファルシオンの前に

置いた。レオアリスやグランスレイが眉を潜め、だが抗議をぐっと押える様子を見て、メネゼスが笑いながら副官の行動を嗜める。
「王太子殿下だ、敬意を払え」
再びファルシオンの瞳を捉える。隻眼に光が揺らいだ。
そこに一切の笑みは無い。
「申し訳ない――だが憤りを抑えきれないのだ、この船団の者は全員。この七日間と言うもの、吐き出すのを堪え、溜め込んで燻らせて来たのでね」
「――」
「さて、ご説明しよう」
メネゼスはファルシオンが椅子に座るのを待ち、机を挟んで真っ直ぐ向き合った。
「ちょうど七日前――我々の船団は、南海の海域でレガージュ船団の船と行き合った。正午頃だったか？」
「十一刻です、提督」
七日前。ゼ・アマーリア号が沈んだ、翌日だ。
皮肉な事に、ファルシオンの祝賀式典が行われた日とゼ・アマーリア号が沈んだ日とが同じせいで、すぐに逆算できた。
「周辺に交易船（おや）は見当たらず、レガージュ船団の船一隻のみだ。そいつは舳先にあるものを括り付けていた。それが何か――あなた方なら当然、想像が付くだろうが」
「――」
ファルシオンは大きな瞳に戸惑いを浮かべている。メネゼスはその瞳を射抜くように見つめた。
「ゼ・アマーリア号の船員だ」唇を笑みの形に歪める。
「もっともそうと知ったのは救出した後だがな。沈めたアマーリアの船員を、まるで戦利品のように、船首に掲げていた」
「――まさか」
「まさか？　何を以ってそう言われるのか。我が目の間違いだと？」
「でも、」
ファルシオンの抗弁を、メネゼスは一切耳にしていないようにやり過ごす。
「我々が船員を救出すると、直後にレガージュ船団の船は一直線に我が船団に突っ込んだ。そして私の軍船を一隻沈め、去った」
実際に、レオアリスは剣を抜く事態を覚悟した。それほどメネゼスの、室内の兵士達の怒りは激しかった。
「残念な事に、私はこれまで自分の手で作り上げて来た船団の一部を、あっさり奪われたという訳だ。それで私はノコノコと、このフィオリ・アル・レガージュまでやって来た――」
ぎし、と木の椅子を軋ませる。
「我が隻眼に刻み込んだ怒りを、癒す為にな」
メネゼスはただ救出した船員から事の経緯を聞いただけではなく、自身の眼で直接、『レガージュ船団の船』が攻撃したのを見ているのだ。
（まずいな……手元に何もなきゃ覆（くつがえ）しようがない）
レオアリスはスランザールを見、それからグランスレイとロットバルトを見た。一時はメネゼスを怒らせても、スランザールが話を進めるべきか――判断を迷う猶予は余り無い。
メネゼスはまだ抑えているが、室内のマリ水兵達は既に怒りではち切れそうだった。
（愚かな事だ――いずれもな）
目の前のやり取りを眺め、ヴェパールは密かに笑った。
ファルシオンも、補佐と言いながらろくな口出しもできずにただ子供に交渉を任せているだけのスランザール等アレウス国側も、ヴェパールの仕掛けにまんまと填まっているメネゼス等マリ王国海軍も、ヴェパールからすれば等しく愚かに見える。

まさか王太子を向けてくるとはと初めは危ぶんだが、今では逆効果だったと恐らくアレウス国側自身判っているだろう。
メネゼスやマリ水兵達の怒りはまるで解けていない。
もはやヴェパールが何もしなくとも、マリがレガージュの街に火球砲を打ち込むのは時間の問題だと言えた。
だが。
（待つより、波を立ててやろうか）

「メネゼス提督。失礼ながら」
それまで黙っていたローデン王国の使者が、一歩進み出ていた。
最初に感じた違和感が再びレオアリスの中に浮かぶ。チリチリと、腹の奥が熱を持つような。
セルメットは両手を胸に当て、ゆったりとお辞儀をした。
「そのような何の確証もない話に、いつまでも耳を傾ける価値がございましょうか」
メネゼスが興味深そうな色を隻眼に浮かべ、セルメットを眺めた。
「では貴殿はどうすべきと？」
「強い意思をお示しください。何なればこの場で王太子を弑（しい）し、一切の言い訳が通用しない事をアレウス国王に知らしめて差し上げれば良いのです」
「何を言う、ローデンの使者殿」
グランスレイが厳しい眼をセルメットに向けた。
だが、その場の空気を冷やしたのは、レオアリスだった。
「言葉には気を付けて頂きたい――、王太子殿下はアレウス国の国使としておいでです」
メネゼスですら肌に刃を当てられる感覚を覚え、セルメットからレオアリスへ視線を移した。再びセルメットを見てにやりと笑う。
「二者で争うのは想定外だな、セルメット殿。我々より先に貴国から交渉されるか？」
「何を仰います。マリ王国とローデン王国との立場は同じ、であれば互いに協力しあい、アレウス王国と対する事が必要です。個々の交渉だからと、王太子殿下は軽んじておられる」
色素の薄い皮膚が張り詰める。
「ローデンは必ずや、マリ王国と共に立ちましょう」
メネゼスはセルメットの言葉を吟味するように隻眼を細めた。
「貴侯の一存でそう決められるかな」
「マリ王国が意志をお決めになれば、必ず、我が君も」
「ふむ――」
「交易船を沈められた怒り――私とて同じです。提督、お忘れではありますまい。ゼ・アマーリア号を沈めたのは誰か」
セルメットはファルシオン達を睨み、マリの水兵達を同意を求めるように見回した。
「貴方の軍船を沈めたのは誰か――」
メネゼスの隻眼に、確かに怒りの色が宿る。
ファルシオンは首を振った。
「我々は、マリ王国の船も、ローデンの船も、沈めてはいない」
「口先だけなら何とでも言えよう」セルメットが畳み掛ける。「だが実際に救出された乗組員が、レガージュ船団の船を見ているのだ。それを見間違いと言い切るおつもりか？」
「それは、」
「確たる証拠も無く――、一国の王子ともあろう方が」
そのやり方を侮蔑し、いかにも不快な態度だと、そう言い放つ。
「メネゼス提督、何の躊躇う事がありましょう」
セルメットの言葉はメネゼスではなく、まず副官や部下達に効いた。
副官はまなじり鋭くファルシオン達を睨んだ。
「提督、セルメット殿の言うとおりです。我々が求めるのは決して単なる謝罪では無かった。非を認め、亡くなった者達に心から詫びて初めて、

癒されるのです。だが、王太子殿下はそれも理解しておられない」
メネゼスに静かな視線を向けられて副官は黙り込んだが、メネゼスはその視線をそのままファルシオンへ向けた。
暖かい光は一切無い。
「王太子殿下――ご覧の通り私もそろそろ、部下達を抑えるのは厳しくなって来た。ローデンの使者殿も、私の言葉などでは引き下がるまい」
室内の意識がメネゼスの言葉とファルシオンに集中している。
「先ほどから殿下が言われているように、我が国の船を沈めていないという証拠を見せて頂こう。それ以外、求めるものは無い」
兵士達の視線がファルシオンに突き刺さる。
「それができないのなら、今ここで、国として謝罪して頂く」
怒りの矛先がファルシオンに向いている事に、レオアリスはひやりと腹の底が冷える感覚を覚えた。
矛先を変えるべきだ。
（スランザール）
いや、自分が口を開いてでも。
「メネゼス提督」
先に言葉を挟んだのは、レオアリスではなくスランザールだった。
だがメネゼスの意識が移る前に、ファルシオンが再び、真っ直ぐ黄金の瞳を持ち上げてメネゼスを見た。
「ゼ・アマーリア号に乗っていた人が、レガージュにいます」
一瞬、室内はしんと静まり返った。セルメットは息を呑み、薄い皮膚に黒く血を昇らせた。
「ザインが助けて、今は法術士がようすを見ています。その人が、レガージュが沈めたのではないと、そう言ったんです。ザインがそう聞いている。私はそれを信じます」
マリの水兵達はお互いに顔を見交わし、戸惑っている。だがメネゼスは一度隻眼を細めただけだった。
「ほう――マリの人間が？」
「そうです」
「それは大きな証拠ですな。あなた方が強気になるのも判る」
メネゼスはあくまで静かに問いただした。
「しかし何故、その者が今この場にいないのです？　そもそも貴国がマリの船員を救った話など、我々はこれまで一言も聞いていない。我が国へ通達しなかった理由は」
思いも寄らなかった詰問にファルシオンは戸惑い、咄嗟にレオアリスを振り返った。幼い黄金の瞳には困惑がありありと浮かんでいる。
レオアリスに頼りたいところを、これまで一度もそうしなかったのは、自分が何とかしなければと、そう思って堪えていたからだ。
レオアリスはファルシオンの瞳を受け止めつつ、歯痒さを覚えて拳を握り込んだ。
（殿下は誠意を以って対応されている――ただ）
それだけでは通じない。
「すぐにお知らせしなかったのは、彼の回復を待ち、良く話を聞いてからと、そう思っていた為でしょう」
スランザールが口を挟んだが、メネゼスはその点を気にはしなかった。ただ、突き詰める。
「では何故、今のままでもこの場に連れて来られなかったのか」
「残念ながらまだ、動かせる状態ではありません。意識が戻ってからと、そう考えておりました」
「会談の出方を見て、場合によっては交渉手段にと？　つまりは人質として取るおつもりだったかな」
「そんなことはしない！」
「そう取れる」
ファルシオンは叫ぶように口にしたが、メネゼスはあっさり切り返した。
「我々の疑問は多い。幾ら投げ掛けても尽きない程だ。例えば、何故ザインがここにいないのか」

「それは――」
「レガージュの守護者は何をしているのです」
「――」
「唯一、その船員の言葉を聞いたのでしょう。その当人がこの場にいなければ、ただの見え透いた言い訳と取られても仕方がありませんな」
ヴェパールは膨れ上がった哄笑の衝動を抑えた。
平べったい銀色の瞳の底に光を滲ませる。
口籠もったファルシオンや、スランザール達の様子からも判る。
（何と）
彼等は、気付いているのだ。恐らく――いや、漠然としながらも、この件に対する、ヴェパールの、西海の関わりを。
ザインが助けた船員とは、メネゼスの甥の事だろう。ザインが気付き、そしてそれをザインの口からか聞いたに違いない。
だがその事をマリに知らせ、交渉手段として使うつもりは無いのだろう。
西海の関わりを認めたくないのだ。
だから王太子をこの場に出していながら、笑えるほど陳腐な回答しか示せていない。
（はは――なるほど、なるほど）
ヴェパールはそっとファルシオン達を見回した。
（三百年――波の立たぬ暮らしに慣れたか）
弱腰だ。
その通り、波風を立てるのを避ける事を選んだ。
（――愚かしい）
苛立ちすら覚えたのは、三百年前のあの戦乱を、ヴェパールが忘れていないからか。
経験した者だけが持つ感覚ならば――
（残念だな、ザイン）
三百年を経て再び、会う事もあろうかと、そう思ったが。
ヴェパールは心の内で笑った。
（私がレガージュを陥としても、そうやって見ない振りをしていれば良い）
最大の懸念だったメネゼスの甥は、まだ完全に意識を戻していないらしい。ファルシオンの言葉にはひやりとしたが、どうやら問題も無いようだ。恐らく名前すら聞いていまい。
それでもここに無理にでも連れてくれば、それだけでヴェパールの仕掛けは覆ったかもしれないが、今ここにいなければ、何の脅威にもなり得ない。
（一歩でも踏み込めば――、全て結末は変わっていたものを）
メネゼスは、レガージュが救った船員の話を、証拠として重視してはいない。その間にホースエントがメネゼスの甥を殺せば、彼等の貴重な証人は永遠に失われる。
「――残念だがファルシオン殿下、貴方の言葉は我々を説得しなかった」
メネゼスはそう言い、会談が始まってから初めて、立ち上がった。室内にいた十名のマリ水兵達が纏う空気を変えた。
「会談は、これで終わりだ」
十名の兵士が一斉に剣の柄に手を掛ける。
「――」
レオアリスはファルシオンの横へ、一歩踏み出した。
スランザールは口元をきつく引き結び、グランスレイとロットバルトも剣にこそ手は掛けないものの、意識を周囲の兵士へ向けている。
ヴェパールは満足げにそれを眺めていた。
メネゼスはレガージュの主張を退け、マリ海軍はレガージュの街を火球砲で焼くだろう。
それで全て終わる。
（甲斐無き終焉――いや、始まりか――新たな）

戦乱の。
今や一触即発のように見える室内を見回し、ヴェパールはそっと笑った。

十六

腹から剣が、ずるりと引き抜かれた。
「――っ」
言葉を発しようとしたファルカンの口から、濁った音と血の泡が洩れる。ファルカンはよろめき、廊下の壁に背中を凭れかけ、だが身体を支え切れず崩れるように膝を着いた。
ホースエントは荒い息を繰り返し、ぶるぶると震えながら剣を身体の前に突き出して、倒れたファルカンの身体を乗り越えて部屋に入った。
「……ま――て」
「ひぃ！」
ホースエントが高い声を上げて飛び上がる。ファルカンが左手を伸ばし、ホースエントの足首を掴んでいた。指がそのまま足首を砕きそうなほど食い込み、痛みを与える。
「ひぃい、は、離せっ」
振り下ろした剣がファルカンの左の二の腕に叩きつけられ、鉄が骨を砕く鈍い音がした。
「ぐあ」
「止めろ――何をしている！」
驚き、慌てた声が上がる。部屋の奥で法術士が立ち青ざめた顔を向けていた。ディノが身体半分、寝台の上に起こしている。やはり驚愕に眼を見開いていた。
法術士が落ち着かせるように両手を前に突き出し、一歩、そっと踏み出した。
「一体何を考えて――剣を捨てなさい。ファルカン団長、安心しろ、今すぐ手当てをする」
「に、逃げろ」
脇腹と左腕に感じる焼け付く痛みよりも、もっと恐ろしい考えが、ファルカンの心臓を鷲掴みにしていた。

ホースエントは、何をするつもりだ？
「逃げろ――、ディノ、を」
身体を起こそうとしたが、力が入らなかった。どくどくと血が流れ出ていき、急速に身体が重くなる。鉛のように鈍く感じられる腕をなんとか回し腰を探したが、剣が無い。
つい先ほど、外して寝台の脇に置いたのだ。
「く……そ」
法術士が寝台の前に立ちはだかる。
「落ち着くのだ。剣を置いて」
「ど、どけ、この！」
ホースエントは甲高くわめいて、剣を闇雲に振った。法術士の長衣が裂け、血が壁に飛び散る。
「貴様、……ホースエント、ッ」
ファルカンは寝台の傍らに立て掛けた剣を見た。
遠すぎる。
（せめて、剣が）
法術士は寝台から離れてしまい、ホースエントが向けている剣のせいで動けない。青ざめた顔はホースエントに釘付けになり、ファルカンの視線に気付いていなかった。
気付いたのはディノだった。
突然の事に青ざめ凍り付いていたが、おののく瞳がファルカンの視線を追って、自分の寝台の脇に立て掛けてある剣を見た。
「う、う動くな、動くんじゃないぞ、二人とも……！」
ホースエントは喚き、法術士とファルカンへ、交互に剣を向けている。
「おとなしくしてろ！」
ディノは一度ファルカンと目を見交わし、ホースエントの横顔を盗みつつ、そろそろと腕を伸ばした。
剣の鞘に指先が触れ――、だが掴み切れず、剣は固い音を立てて木の床に倒れた。
「ひぃ！」
ホースエントが飛び上がり、振り向く。
倒れた剣と腕を伸ばしていたディノを見て、顔が青ざめ、すぐに怒りに赤くなった。
「きさ、貴様――わ、私をな、舐めるんじゃないぞッ、舐めるんじゃない！」
「止めろ、ホースエント！」
ファルカンが制止の声を上げたが、ホースエントは剣を振り下ろした。
飛び込んだのは老法術士だ。ホースエントの腕を掴み、振り下ろされた剣は法術士の肩に当たった。
切っ先は幸い、法衣を裂いただけのようだった。
「な、な、」
ホースエントは慌てふためきながら、法術士の法衣を掴んだ。血に濡れた剣の先を、法術士の喉に押し付ける。
「よ、余計な事をするな！　動――動くなよ！」
剣はホースエントの怯えを移してぶるぶると震え、うっかりと法術士の喉を斬り裂きそうに見えた。
「何が、望みだ」
喉を仰け反らせながら、法術士はホースエントを睨んだ。
「そ、そいつを寄越せ。そいつを殺して、マリに突き出すのだ！」
「な、何を考えて」
「私はこの街の領事だ、わ、私に断りもなくこの男を――か、勝手は事は許さん！　私が、私がこの街を救って見せるのだ！　領事たるこの私が！」
唾を飛ばして喚く男を前に、束の間、法術士は皺の深い理知的な面に呆れの色を浮かべた。
「――お前は何か、勘違いをしている。第一彼を殺したら、それこそ」
「う、煩い！　私に指図するな！」
法術士の喉の前で切っ先が暴れ、薄い皮膚が裂けて血が溢れ出す。

「そいつを殺せば、わ、私は、」
「ホース、エント……貴様、いい加減に……」
ファルカンは床の上に倒れながら、右腕の力だけで床を這った。血を失って重い身体は大して前に進まず、床には血の帯が引きずられる。
「ここ、ここは私の街だ！　私の言うとおりにすればいいんだ！　そうしないから悪いんだ！　私の言うとおりにすれば上手く行く！　そ、そう言ったんだ！」
ホースエントは法術士を突き飛ばし、背中を斬り付けた。法術士がファルカンの目の前に倒れ込む。
「貴様」
ホースエントはぎくしゃく向きを変え、凍り付いているディノの上に剣を振り上げた。
「止、めろ、ホース、エント……ッ！」
「私が――私が領事だ！」ホースエントは叫んで、振り上げた剣をぶるぶると震わせた。
「レガージュには私が必要だと、この男を殺せばマリは引き上げると、そう言ったんだ！」
「ホ――」
「そう言った！　わ、私こそ！」
「誰が、お前にそう告げた」
冷徹な声が掛かった。
ぐい、と肩を掴まれて背後を振り返り、ホースエントは肩を掴んだ相手と向かい合った。
「――ザ、ザイン」

十七

「お前にそれを告げたのは誰だ」
ザインは射抜くような眼光をホースエントに向けた。入り口にはオスロが呆然と立ち竦み、室内の光景を見回している。
ザインが一歩近寄った瞬間、ホースエントは反射的に剣を振り上げた。
「この……！」
振り下ろされた剣を、ザインはまだ剣の現われていない右腕で止めた。
ぱきんと軽い音がしてホースエントの剣が根元から砕ける。ザインはその腕を伸ばし、ホースエントの長衣の襟元を掴んだ。
「ホースエント――街を裏切って、お前は何を欲している」
ホースエントの身体を掴み上げたまま、ザインは倒れているファルカンへ視線を向けた。脇腹から大量に血が流れ、左腕の上腕も骨が折れている。オスロがファルカンの横に膝を着き、顔を覗き込んだ。
「しっかりしろ、ファルカン団長――！」
ファルカンはうつ伏せたまま、浅い呼吸を繰り返している。ファルカンの傷を改め、オスロは青ざめた顔を引きつらせた。
「まずいぞ、ザイン、このままじゃ」
「――」
ホースエントを掴んだままのザインの右腕が、手首から肘にかけ、盛り上がった。
すうっと室内の温度が下がる。
ゆっくり、腕に添って骨が張り出すように、白々とした刃が現われる。
鈍く光を弾くその上に自分の目が映っているのを見つけ、ホースエントは恐怖に喉を鳴らした。
ザインは掴んでいるホースエントの襟元を、ぐいと引き上げた。
「ホースエント。お前には聞かせてもらう事が山のようにある」
目の前の剣から怯えた顔を背けながらも、ホースエントは早口でまくし立てた。

「わ、私には、味方がいるんだぞ！　お前が幾らお、脅しても、私が怖がると思ったら大間違いだ」
「味方？」
「そそ、そうだ、お前など、足元にも及ばない相手だ。すぐに後悔するからな」
「ほぉ――」
ザインはにぃ、と口の端を吊り上げて笑った。「ヴェパールか」
ヴェパールの名を切り札と思っていたホースエントはザインの口からその名が上がった事に驚き、青ざめた顔で黙り込んだ。
「意外だったな、領事のお前が西海と通じていたとは。王都が知ったらホースエント子爵家はその責を問われ、確実に断絶だろう」
「な、何を」
「幸い今は王太子殿下とスランザール公がレガージュにおいでだ。近衛師団もいる。詮議は早そうだ」
ホースエントは目をしばたたかせてザインの言葉を反復していたが、やがてその面から血の気が引いた。
「――ち、違う」
持ち上げた顔は冷や汗で光っている。口が何度か、声を立てないまま開け閉めされた。
「わた……私は、西海と通じてた訳じゃ」
「今さら気付いても遅い」
「違う、違うんだ、私はレガージュの為に」
「言い訳は後でしろ。案内してもらうぞ」
「あ、案内？」
ザインはホースエントの身体を放るように扉へと突き出した。ホースエントは二、三歩よろけるように進み、怯えた顔で振り返った。
「ザイン、私は、ほ、ほ、本当に」
「お前がヴェパールと会っていたのはどこだ。そこに連れていけ」
「ま……て、ザイン」
浅い息の下から絞るような声がザインを呼び止めた。
ファルカンが何とか上半身を起こそうとし、咳き込む。血が口の端から零れた。
「止めろ……」
霞む意識を必死に繋ぎ止めているのが見ただけで判る。
「ファルカン団長！」
オスロが起き上がろうとする身体を抑え、法術士も覗き込んだ。
「団長殿、まずは傷の手当てをする。おとなしく横になっていなさい」
だがファルカンは法術士の手を押し退け、ザインを見た。
「西海、には」
「――」
右手をザインへと伸ばす。
「どうしても、行くなら、まず俺を、殺せ」
「――死にかかっている奴が何を言っている。――ファルカン」
ザインはファルカンの傍に立ち、倒れている彼を見下ろした。冷えた、ファルカンの見た事の無い色の瞳に、微かに憂いがあった。
「お前には、お前自身のやる事があるはずだ」
ファルカンは浅く早い呼吸を繰り返しながら、ザインを見上げた。
「俺、のやる事は、あんたを止める、事だ」
意思は変わらない。だが傷は深く、ほどなく、呼吸は止まるだろうと思えた。
「王都の法術士殿、こいつに治癒の術を」
法術士は頷き、ファルカンの傍らに膝をつくとゆっくりと長い言葉を唱え始めた。
「いい――」ファルカンが法術士を払うような仕草をする。視線はずっとザインに据えていた。
「ザイン――、俺の命に、誓ってくれ」
「――」
「頼む。レガージュの、為に」

ファルカンは辛うじて腕を持ち上げた。
「その彼を、マリの船へ、連れて――メネゼス提督の、甥だ」
初めて驚いた顔でザインはディノを振り返った。ディノは青ざめ、寝台の上から心配そうに自分達を見つめている。
「レガージュの、守護者として、あんたが」
「団長、いいから。なあ法術士さん、傷は治ってるのか？　血がずっと止まってない」
オスロは傷口を抑えながら法術士を見上げて言った。法術士は厳しい表情を浮かべている。
「血が流れ過ぎている――術だけでは足りない、触媒が必要だ」
「触媒？　何を持ってくればいい、言ってくれ。うちの術士から貰ってくる」
「いいと、言っている――」
ファルカンは再びオスロを押し退けた。
「ザイン、あんたが……誓ってくれれば、それで、全て」
ザインはファルカンを見下ろし、はっきり告げた。
「いいや――俺には誓えない」
「ザイ……っ」
ファルカンは何度か咳き込み、血の塊を吐いた。
「まずいな、術が間に合わない」
「触媒を持ってくる、教えてくれ！」
「言っただろう――レガージュの守護者は、もうお前達だ、ファルカン」
ザインは右腕を持ち上げ、がり、と腕の内側を噛んだ。
瞬く間に傷口が閉じるその前に、腕から零れた血が数滴、ファルカンの脇腹の傷に落ちた。
一瞬、ファルカンの身体を包んでいた法術の術式が、半透明の模様のように浮かび上がった。青ざめた頬に僅かに赤みが差す。
「触媒の代わりだ。少しは繋げる」ザインは法術士を見た。「必要な触媒は？」
「――充分……い、いや、クリーグと、セドナの葉を」
「オスロ、お前ピストレットの所へ走って、今言われたものを持って来い。それまでは保つ」
「判った」
オスロは頷き、扉のところで立ち竦んでいたホースエントを押し退けると駆け出していった。
「ザ、イン」
ファルカンはまだザインを呼んだが、ザインはファルカンに背を向けてディノと向かい合った。
『君が、ゼ・アマーリア号の――。メネゼス提督の甥御か』
『ディノ・メネゼスです』
『――偶然があるものだ』
ザインはそう呟いた。『今回初めてだな』
これまでレガージュを追い詰めるような事ばかりが次々と起きていた中で、初めて出てきた、レガージュにとっての好材料だ。
ディノには意味が判らず、青年は問い掛けるような顔をしている。ザインはディノの疑問にはかまわず、その瞳を見つめた。
『君は、マリ海軍の前で君が見たものを証言できるか』
先ほどまで、いや、今も纏っている身を竦ませる空気とは違う、もう一つの光がザインの瞳の奥にあった。
レガージュを護る守護者が持つ光だ。
『――できる』
ディノはもう一度、アレウスの言葉で言い直した。
「できます」
しばらくザインは黙ってディノを見つめていたが、やがて頬に笑みを浮かべた。
悼むように。
「ゼ・アマーリア号への手向けは、俺がする」

踵を返し、部屋の隅にいたホースエントの肩を掴んで、部屋を出た。
ファルカンは止めようと腕を伸ばしかけ、だが術が呼び込む眠りに捉われて手を落とした。

レオアリスはファルシオンの右隣に立ち、周囲を見回した。
マリの水兵達は皆剣の柄に手を掛け、いつでも抜けるように身構えている。
もはや会談の体裁は、お互いがまだ剣を抜いていない事その一点で、辛うじて保たれているだけだ。
メネゼスがいつ、号令するか――それが十を数える間か、百を数える間か、ただその程度の差でしかない。

（少し物足りなかったか――）
結末を確信し、ヴェパールはセルメットの顔の下で笑った。
ヴェパールの画策が功を奏したからとも言えるが、いささか拍子抜けの感もある。アレウス王国は三百年の間に、すっかり弱体化し危機感を失った。
（ビュルゲルめ、この程度を動かせんとは、つくづく三の戟の面汚しよ。所詮三部に名を連ねるには力不足だったのだ）
かつての同僚をせせら笑いつつ、ヴェパールは改めて部屋の中央に立つレオアリスを眺めた。詳細までは知らないが、ビュルゲルを抑えた事はヴェパールも聞いている。
（だが結局、内陸部という自陣で、相手がビュルゲルごときではな）
一回、いや二回、探るような視線が向けられたが、ヴェパールの存在に気付いた様子はなかった。
（剣を研ぐ機会も失われ――その為に存在する者が、哀れな事だ）
まだ若く、戦乱を知らず。
ふと、たった今、あの若い剣士とぬるま湯に浸かりきったアレウス国の者達に、三百年前と同じ感覚を味わわせてやりたくなった。
どれほど面白いだろう――。
その衝動を押さえ込む。
（これから、嫌でも這いずる事になる）
マリ海軍がレガージュの街に火球砲を撃ち込めば、そこからもはや後戻りはできなくなる。アレウス王国も、マリ王国もだ。
互いに不毛な争いにはまり込み、容易には抜け出せまい。
見物だろう。
そして西海は、アレウス国の国力が疲弊するまで待つだけでいい。
（いや――、ただ見ているのはつまらんな）
どんな遊戯も、自分で駒を操り動かしてこそ面白いものだ。
大戦が終結して三百年、暗い深海は刺激が足りず、常に暇を持て余していた。暗く閉ざされた世界では、互いに食い合うぐらいしかする事が無い。
セルメットは駒を進める為に、一歩この舞台の中央に踏み出した。
「提――」
『メネゼス提督。会談は決しかけているように見えますが、我々はまだ充分には言葉を尽くしたとは言えません』
ヴェパールを遮って発されたマリ語は、アレウス国側からだった。
緊張を含んだ視線が集中する中、口を開いたロットバルトはファルシオンへ目礼してメネゼスと向かい合った。
「僭越ながら――我々の考えと貴国が目の当たりにされた事実とは、確かに相容れません。ですが議論を尽くす前に決裂するほど、我が国と貴国との関わりは単純ではないはずです」
スランザールはロットバルトの顔を斜めに見上げ、顔を戻した。
既に場は乱れ、始めにメネゼスが出した発言をファルシオンのみに限るという条件も現状に隠れている。
この状況は不利に見えて、実際には紙一重ではあるものの、好機に立っていた。

「今互いに選択しようとしているものは、確実に、複数の面から互いの国益を損ねるでしょう」
メネゼスは暫く黙っていたが、促すように視線を上げた。「――聞くに値するものかな。まあいい」
だが部下に剣を下ろせとは言わず、自身も剣の柄に手を置いたまま、鋭い隻眼を見極めるように向けた。
「聞こうか」
「有難うございます。――先に王太子殿下がお話した通り、我々は今回の件についてレガージュから詳しく状況を聞いています。ただ、貴国のお考えをまだお聞きしていません」
「考え？　充分に伝えたはずだが、まだ理解できていないのか？」
「それは事態の第一の見え方です。いわば外郭の部分であり、全てではありません」
メネゼスは黙って先を促した。
ファルシオンは傍らのレオアリスを見上げて彼の表情を見つめ、それから自分の後方にいるロットバルトの言葉に耳を澄ました。
何を言おうとしているのかファルシオンには判らない――ただ、何か見つけたのだろう。
「先ほど、南海でレガージュ船団の船が貴国の軍船を沈めたと仰いましたが――、それに対して一つ疑問があります」
「疑問？」
メネゼスが会話を続けるつもりなのを見て、ヴェパールは内心舌打ちをした。
（せっかくあと一歩の所だというのに）
落ち着いた会話など、させるべきではない。しかもアレウス国側は、ヴェパールの仕掛けを突こうとしているようだ。
だがローデンの使者としてこの場にいる以上、下手に煽り立てるのも良策とは言えなかった。
（――）
ロットバルトはメネゼスを見据え、ややゆっくりと告げた。
「状況をお聞きする限り、その船に、あなた方が不審を抱かなかったとは思い難いのです」
「――不審だと？」
「何故、わざわざ貴国の船員を見せしめのように掲げていたか――あからさまにレガージュ船団の船だと見せつけたのは何故か。そもそもあなた方の船団の前にその『レガージュ船団の船』が現われたのは、アマーリア号が沈んでから何日目でしたか」
「何を今さら、言い逃れを」
副官が鋭い声を発したのを、メネゼスは手を上げて抑えた。
「いい、続けてもらおう」
「しかし提督」
反論しかけ、メネゼスの顔を見て副官は口を閉ざした。メネゼスが口の端を上げる。
「なるほど――ゼ・アマーリアが沈められたのは前日の夕刻だ。距離を考えれば少し早いな」
ヴェパールは苛立ちに頬を歪めた。
「もし、仮に何らかの目的を持って船を沈めようと考えた場合――我々はその職務の特性上どうしても、自分ならばどう事を進めるか、その手法を考えるでしょう」
ロットバルトはメネゼスと副官を見つめた。
「提督、貴方の目からご覧になって、今回の『作戦』は如何です」
「――」
「マリ海軍はちょうど、近海にいた。ゼ・アマーリア号が沈んだ海域からそう遠くはなく、またレガージュの港も遠くはない場所です。迅速にレガージュへ船を進め、先手を取れる位置――潮流良く、と海軍では軍機をそう表現するようですが」
「――」
「ずいぶんと好条件です。そしてレガージュにとっては不利な条件でし

た」
今や室内の熱は下がり始めている。まだロットバルトの言葉を信じた訳ではないが、釣り込まれるように状況を振り返り、考え出しているのだ。
「普段、貴国の軍船が航路としている海域ではないとも聞いています。今回あの海域にいたのは、臨時の演習か何かかと推察しますが、理由をお伺いしてもよろしいですか」
「……我々の今回の目的は海賊討伐だ。情報が入ったからな」
「情報？」
「近年、交易路を荒らしている海賊共の根城の位置だ」
「なるほど――それで腑に落ちました。これほど迄に早く貴船団がレガージュに到着した背景が、我々には疑問だったもので」
メネゼスの隻眼がゆっくり細められる。
（――）
ヴェパールはちらりと船窓へ視線を投げた。
船団が浮かぶ海面がゆらりと揺れる。緑色の丸い光が海底に灯った。
動かす事はできる。
いつでも――用意する戦術は一手ではない。
「失礼しました、少々視点が逸れたようです。――しかしもし、レガージュがマリ王国の船を沈めようと画策したのなら、通常ならマリ海軍が近くにいる時は避ける。戦力差を考えれば、すぐに自分達が追い込まれるのは火を見るよりも明らかです」
副官がメネゼスの横顔をちらりと見る。
「いずれ避けられないにしても、まずは伝令使なりを用いて貴国の情報を得、マリ海軍が近海にいない時を選び、介入時期を引き伸ばすのが常套でしょう」
ロットバルトは一度、言葉を切った。「――レガージュに、マリの船を沈める目的と利があるのなら」
マリの水兵達は戸惑い、ロットバルトの顔とメネゼスの顔を見比べている。
「敢えて海軍を挑発して見せた、そこから伺える目的は、ひどく歪んでいます。稚拙で一貫性も妥当性も無く、ただ悪意だけが見える」
レオアリスは少し緊張を以ってロットバルトに意識を集中させた。西海の関わりこそ口に出してはいないが、かなり際どい選択をしている。
「翻って、レガージュが目指すレガージュにとっての利とは、交易港として栄える事です。レガージュこそがアレウス国の窓口と、貴国を含めた諸外国に認知される事こそ、レガージュの存在意義であり誇りとするところ。おそらくそれは、あなた方の国の交易港でも同じ事なのではありませんか」
「――」
「だからこそレガージュは王都を見つつ、同様の比重で諸外国を見ています。貴国との関係を崩す事は即ち、レガージュ自身を崩す事に他なりません」
既に室内の熱は冷め、マリの水兵達は無意識の内に剣の柄から手を離していた。
「今起こっている事はレガージュを窮地に陥れこそすれ、決してレガージュに利の無い事です。引いては我が国にも」
ロットバルトはそこで言葉を切った。レオアリスやグランスレイ、そしてファルシオンも、微かに息を詰め、メネゼスの反応を待った。
メネゼスがどう捉えるか――。
メネゼスは束の間腕を組んで口を閉ざしていたが、やがて組んだ腕を解いて隻眼に光を浮かべた。
「――なるほど、確かに一理ある。だが貴侯の言うとおり、レガージュが無実であるのなら、まずそれをどうやって説明付ける。我々はその答えを聞きたいのだ」
（乗せた――）
レオアリスはゆっくり息を吐いた。

メネゼスは対話を受けた。
スランザールがその先を引き取る。
「あなた方を完全に納得させるだけの説明を、すぐに提示するのはやはり難しい。ただ、調査の余地は充分にありましょう。その間、貴国が船団をほんの少し退いて頂く分には、さほど状況の変化はござるまい」
「はは――！　また随分と大きく出られたな。火球砲の射程を引けば、飛竜を有する近衛師団が有利になるが」
喉を反らせたメネゼスに対し、ファルシオンが数歩、近寄って見上げた。
「近衛師団は、動かさない――ちかって」
メネゼスや副官の剣が届く位置だ。レオアリスは踏み出そうとする足を抑えた。
ここでレオアリスが踏み出せば、再びマリ水兵達に緊張を与える。
メネゼスはレオアリスの心情を読んだように、レオアリスの眼を見て笑った。それからファルシオンへ視線を落とす。
「誓う？　何に誓われますか。我々の戴く王は違いましょう。各々誓っても意味が無い」
「――これにちかう」
ファルシオンは胸元を探り、細い銀の鎖を引き上げた。
胸の前に掲げられた鎖の先で、丸い、銀色の懐中時計が揺れる。
「――ほう、それは」
メネゼスはこの場には意外なものを眼にして眉を上げ、そしてセルメットへ視線を投げた。ローデンが得意とする象嵌の技巧を用いた懐中時計だ。
「これは私の宝物です。これはたぶん、レガージュをとおって来たんだと思う」
ファルシオンの言葉と細工の美しさに引き込まれるように、副官もマリ水兵達も、微かに光を弾く銀の懐中時計に見入っている。
セルメット以外は。
「遠い国でつくられて、海と陸を旅してきたのに、おんなじ時間があって……ふしぎです。生まれた場所と、ぜんぜん違う国にいるのに。――この時計みたいに、どこにいても、誰にでも、同じ時間が流れているんだって」
レオアリスはファルシオンの言葉に聞き入りながら、メネゼスの様子を眼で追っていた。
メネゼスは何故か懐中時計ではなく、セルメットへ視線を向けている。
（――）
そのセルメットはまるで無関心に、忌々しそうな顔でファルシオンを眺めていた。
「色んなものがレガージュから入って来て、レガージュから出ていく」
自分の言うべき言葉が求められているものに合っているのか、正しいのか、ファルシオンには判らない。けれどファルシオン自身がそうであって欲しいと、そう思う言葉を口にした。
「だから私たちは、レガージュでつながってるんだ」
ファルシオンは掲げていた懐中時計を、大切そうに両手に包み込み、額を寄せた。
「だから私は、この時計にちかう」
室内の空気は先ほどまでの緊張と刺が拭い去られ、澄んでさえ感じられた。
メネゼスは首を巡らせてそれを確認し、再びセルメットを見た。
「使者殿――、貴侯はどう思われる」
セルメットが顔を上げる。
「どう、とは」
セルメットは呆れた顔でファルシオンを睨んだ。「どうとも思いませんな。所詮言い逃れの為の戯言でしかありません」
「――ククク」

メネゼスが喉の奥で笑い、セルメットは不審そうな顔を向けた。
レオアリスは身の裡で剣が騒めくのを感じた。
メネゼスは。
「それだけか」
「提督？」
メネゼスは剣の柄に手を置き、セルメットへ身体を向けた。
「ローデンの使者殿――アレウス国が王太子殿下の掲げられた懐中時計、あれは貴国のものでは無かったかな」
「――、！」
セルメットは息を飲み込み――、ばっとファルシオンを振り返った。
「象嵌と銀細工は貴国の最も得意とするところ――だが商人たる貴侯が興味が無いか」
室内の空気がざわりと揺れる。
「――ッ」
セルメット――ヴェパールはファルシオンを睨み、それでも青ざめた頬に無理やりひきつった笑いを張り付けた。
「い、いや、それはただ、今は船を沈めた事が先決と」
「面白い男だ。俺達に都合良い条件を持って現れ、商人と言う割りには軍人のような考え方をする――」
「提」
ヴェパールはぎくりと息を飲み、口を閉ざした。
メネゼスの抜いた剣の切っ先が喉に向けられている。
「どこから来たのか――、だがローデンではあるまい」
隻眼に鋭い光を浮かべ、低く歯の間から押し出すように尋ねた。
「何者だ」
副官やマリ水兵達は驚きも一瞬の内に捨て去り、セルメットを睨んで剣の柄に手を掛けた。

十八

マリ王国との会談が始まって、そろそろ一刻弱になろうとしている。
ファルシオン達が中に入ってから、船に残ったフレイザー達はマリ海軍と互いに船上から監視し合っているだけで、これといった動きはなかった。
鮮やかな陽射しで彩られた空と、輝く青い海に囲まれ、安泰にすら見える。
ただそれも、表面上に過ぎない。
フレイザーはちらりと右手を見た。その先、フィオリ・アル・レガージュの対岸のすぐ先は、もう西海――バルバドスの領海だ。
「――」
レガージュの剣士、ザインの横顔が思い出される。それを努めて意識から押し出し、フレイザーは変化の無い甲板を、焦燥感を抱えながら見つめた。その下で会談が行われ、ファルシオンやグランスレイ達がずっと交渉を続けているはずだ。
（――、判ってるけど）
会談がどういう方向に進んでいるのか、全く情報が無い事がより焦燥を高めている。不安定な船の揺れが、余計にそれを助長するようだった。
いっそ乗り込んで行きたいとも思うが、自分の役割はこの船をファルシオン達が戻るまで何事も無くここに保つ事だと、何度もフレイザーは自分を宥めていた。
降り注ぐ太陽の熱がじりじりと肌を焼く。
胸の奥まで慣れない熱が届くようだ。
こんなに焦燥を覚えるのは、きっとこの熱のせいだと思った。
暑さに深く息を吐いた時、ふと、マリ海軍の甲板がざわめいた。
ざわめきはすぐに騒ぎになった。
「中将、あれを」
傍らの准将が指を差す前に、フレイザーの眼もそれを捉えていた。船

縁に駆け寄り、手すりを掴んで身を乗り出す。
たった今までマリの水兵しかいなかった甲板に、何かが現れていた。
マリ水兵達の間から、それが見えた。
「あれは――」

メネゼスの剣の切っ先が真っ直ぐセルメットの喉元に向けられている。
副官やマリ海軍水兵達もまた、最初こそ驚いた様子を浮かべたものの、今は剣の柄に手を掛けていた。
足元が一度大きくうねる。船が波に揺られたからだ。だが誰も足元を乱す者はいなかった。
セルメットは噛み締めていた唇を解き、引き攣った頬を尚も笑いの形に歪めた。
「これは提督――、剣を向ける相手が違うのではありませんか。一体どうされたのです、私には何の事だか、さっぱり訳が判りませんな」
「そうかな。貴侯は物事を良く判っていそうだが」
メネゼスの行動に驚いたのはセルメットだけではなく、ファルシオンやレオアリス達もまた、驚いて顔を見合わせた。
レオアリスは口元を引き結び、メネゼスと――ローデンの使者、セルメットを見た。
いや。
メネゼスは「何者だ」と、そう言った。
ファルシオンの掲げたローデンの懐中時計を見て――、懐中時計を目にしたセルメットの反応を見て、何かを確信し、剣を抜いた。
それ以前に、メネゼスにはセルメットへの疑念があったのかもしれない。
（――ローデンの使者じゃあない）
ならば、どこの。

どくりと鼓動が鳴る。
探る視線が集中する中で、セルメットはつい先ほどまでの動じた様子をすっかり収めていた。
「物事なら良く判っておりますとも。ここから眺めていた私には、何が一番の問題か良く判ります。懐中時計一つが何になりましょう――それよりも、レガージュが嘘偽りを述べて貴方を騙そうとしていると、何故お考えにならないのです」
メネゼスはにやりと笑った。
「その可能性も無くはない。アレウス国の言い分はそもそも確証に欠けるからな」
「ならば先ずは剣を下ろし、私の話をお聞きください。誤解を解かせてはいただけませんか。まさか提督、レガージュへの疑いを全て解いてしまった訳ではございますまい」
セルメットは剣を向ける事を躊躇わせるような、悪意の無いにこやかな笑顔を浮かべた。メネゼスの視線がファルシオン達の上に動く。
「まさか。それもあり得ん」
その口調に、まだメネゼスがレガージュへの疑いを完全に解いていないのを感じ取り、セルメットは我が意を得たりと言葉を継いだ。
「では、どうぞ剣をお納めください。私共ローデンは、マリと事を構えるつもりは毛頭ありません」
セルメットはさほど声を張り上げている訳ではないが、室内にはっきりと響いた。その発言にこの場の者達全員が注目しているからだ。
「しかしもし、提督の思い違いで私を斬れば、ローデンは用意している兵をレガージュではなくマリへ向けるでしょう。そうなれば、ご自身と船団は、本国でかなり困ったお立場になるのではありませんか」
副官がメネゼスをちらりと見た。セルメットはその微かな動揺を見て取った。
「私をローデンの使者ではないと決め付けるのは早計です。勘違いをしておられる。提督が今選ぼうとしている行為は、あたら貴国と我が国と

の国交に罅を入れるものでしょう」
　セルメットは余裕の表情で蕩々と言葉を紡いでくる。メネゼスの剣先は下がらないものの、その言葉と態度はマリの水兵達の上に僅かながら戸惑いを生じさせていた。
　ローデン王国はアレウス王国よりも距離的にも近く、彼等の母国と親しい。セルメットが事実、ローデンの正式な使者ならば――そう不安を覚え、お互いに顔を見合せる。セルメットは更に言葉に力を込めた。
「レガージュが何か確証を示せていますか――。奴等に確証など無いのです、提督」
「――」
「剣をお収めになられた方が良いでしょう――マリ王国とローデン、二国の友好の為に」
　副官がメネゼスの判断を求めるように顔を向ける。「提督――」
　メネゼスは副官を見て、その視線をセルメットへ戻した。
「――貴侯の言う事はいちいち尤もだ。なるほど――、俺もそろそろ、剣を持つ腕が疲れてきた事だしな」
「では」
　近寄ろうとして、尚外されない剣先が喉を突きそうになり、セルメットは慌てて一歩退いた。
「メネゼス提督」
　苛立ちの籠もったセルメットの声に重なるように、廊下がバタバタと騒がしさを増した。
『提督……！』
　勢いよく扉を開けた水兵は、剣を抜き放っているメネゼスの姿に驚いてたたらを踏んだ。
『提』
『見りゃ判るだろう、取り込み中だ。後にできねぇか』
『い、いえ――、たった今、甲板に、レガージュから来たという者が現われ、その』
　水兵は室内の様子と自分の抱えて来たものとで少々混乱したのか、舌を噛みそうな様子でそう言った。メネゼスがセルメットに剣を突き付けたまま、呆れた口調を返す。
『泡食ってちゃ判らねぇ、いいから落ち着いて話せ』
『は、その――ゼ・アマーリアの船員が、レガージュ船団長と共に、今甲板に』
『船員？　アマーリアのか』
『は！　その船員が自分を、ディノ・メネゼスと――』
『ディノ――？』
　一瞬の間の後、メネゼスの面に明瞭な驚きが沸き上がった。『ディノだと？』
　水兵がほっと胸を撫で下ろす。
『やはり、提督のお身内の』
『――その名前は確かに俺の身内だが、何故レガージュの船団長とここに来る』
『それについては詳しくは――、ただ、至急提督とお話したいと』
『自分でそう言ったのか』
『はい』
「何だ？」
　レオアリスはマリ語を学んでおけば良かったと思いながら、ロットバルトを振り返った。辛うじてレガージュという単語は聞き取れた。
　ロットバルトが掻い摘んで伝えた内容に、グランスレイと顔を見合わせる。
「あの治癒を受けていた船員か――」
　メネゼスの、身内だと、そう言っていると。
（まさか――、そんな偶然があるのか。広大な場所を漂っていた相手を見つけて、それが……）
　ふっと眼を上げる。ロットバルトと眼が合い、それからグランスレイ、スランザールと眼を合わせる。

そこにある同じ考えを見い出し、レオアリスは鼓動が鳴るのを感じた。
あの船員を助けたのは――。
ルシファーが纏っていたという、強い潮の香。
（――何を意味してる……）
何故、感じているものが安堵ではないのだろう。
メネゼスの視線がファルシオンに向けられたのに気付き、ロットバルトは戸口の水兵とメネゼスを見た。
『先ほども申し上げた通り、確かにレガージュが救助した男がいます。ただ、会話ができるまで回復していなかった為に、港を出る時点では、素性などは判っていませんでした』
『――』
『意識が戻ったのであれば、我々も彼の話をお聞きしたい。本来はその人物の話を聞いて、この会談に望みたかったところです』
メネゼスは束の間唇を引き結んでいたが、セルメットに向けていた剣を下ろすと右肩を回した。
『――連れて来い』
『は』
水兵は踵を返し、甲板へと駆け上がって行く。セルメットが一瞬肩を跳ねさせたのを見て、メネゼスは隻眼を細めた。
「セルメット殿――やはり少し風向きが変わっているようだ。新たな証言者はどうも俺の身内らしい。アレウス国側は歓迎するようだが、貴侯も当然、証言を聞くだろう」
「――」
ヴェパールは内心で鋭く舌打ちした。
（ホースエントめ、役にたたん）
しかしそう、メネゼスの言うとおり、確かに風向きが変わったのだ。
あの時、あの女がディノ・メネゼスを捜し出し、ザインの元に導いてから。
あの女は、初めからそのつもりだったのか。
ヴェパールの遣り方に口を出さないと言いながら、どこかで手を突っ込んで、掻き回すつもりだったのだ。
それが何を意図しているのか。
だが、一つ確実な事がある。
ディノ・メネゼスは、ヴェパールの仕掛けを崩す証言者足り得る――
ヴェパールは周囲をそっと見回した。
ほどなく、甲板から降りてくる足音が聞こえた。木の板目は良く音が立つが、ずいぶんゆっくり歩いている。
『失礼します――』
扉が開き、入ってきた男達の姿を眼にして、ファルシオンはびっくりして声を上げた。
「ファルカン――、どうしたんだ！」
入室したのはファルカンと老法術士、そしてゼ・アマーリア号の船員の三人で、だがファルカンは脇腹を血で真っ赤に染めている。青白い顔には、血を流した事だけが原因ではない、張り詰めた緊張があった。
傍らの法術士の灰色の法衣もまた、肩口に血が滲んでいる。
ファルカンはその場で膝をついた。力を失ってよろめいたようにも見えるが、しっかりした動作で頭を下げた。
「殿下――、詳しいご説明は後ほど――しかしまずは彼の話をお聞きください」
ファルカンがそう示した船員も、マリ水兵に支えてもらってようやく立っている状態だ。
だが顔を真っ直ぐにもたげ、メネゼスを見つめている。
ファルシオンはレオアリスの顔を見上げ、唇を結んだ。
『メネゼス提督――』
ディノは叔父と呼ばずに、そう呼んだ。室内がしんと静まり返り、二人に注目する。

メネゼスは束の間ディノを見据え、やがて息を吐いた。
「ディノか。良く――」
メネゼスは敢えてアレウス国の言葉を使った。ここがあくまでも公式の場であり、会見の一環だと示す為であり――、自分を提督と呼んだディノに応える為でもある。
傍らの副官はディノを見知っているのか、メネゼスの顔と交互に見つめ、安堵と喜びを露(あら)わにしていた。その様子に苦笑を浮かべる。
「良く生きて戻った」
メネゼスはそれだけ言うと、剣を身体の前に立てディノを見据えた。
「ゼ・アマーリア号の災禍について証言する事があると聞いた。間違いないな」
「はい。私はこの眼で、アマーリアを襲ったものを見ました」
「聞きたいのは一つだ。ゼ・アマーリアを沈めたのは誰か」
ディノは一度息を呑み、それから口を開いた。
「誰か、とは答えられません」
「おかしな事を言う。見たんだろう」
ディノが真っ直ぐに頭をもたげる。
「見ました。――けど、俺には判りません」
「判らない？」
「あれは、船なんかじゃ無かったからです」
奇妙な言葉に、神妙に聞いていた副官やマリ水兵達はポカンとした表情を浮かべた。メネゼスも呆気に取られている。
ディノは怯まず、言葉を継いだ。
「あれは船ではなく、俺には……全く何か、別のモノに見えました。あれの甲板にゃあ誰もいませんでした。本当です。あの嵐の中で、帆は張りっぱなしで……、なのに風とは全く無関係にアマーリアに突っ込んで来たんです」
メネゼスは室内へ視線を巡らせ、その場の様子を眺めた。
水兵達は唖然としながら、一体どういう事なのかと互いに顔を見合わせている。
レオアリスやスランザール達アレウス国側は、一言も発っさずに緊張に満ちた面持ちでディノを見つめていた。
セルメットはただ、口元を引き結び視線を前に向けている。
しばらくメネゼスは、ディノの言葉を反芻するように黙って隻眼に光を浮かべていたが、一つ息を吐いた。
「ディノ――、お前は、恐怖で夢と現実とをごっちゃにしてやがる訳じゃあねぇな？」
ディノは打って返すように頷いた。「頭はしっかりしてます。絶対に、船なんかじゃありません。あんなものは――、俺達の乗る船じゃねぇ」
一度息を吐き、ゆっくり、熱を帯びた声で続けた。
「あれを船だなんて、俺は認めません。あんなものに命預ける船乗りはいねぇ」
「――ふん」
ディノの憤りに口の端を上げる。
だが、メネゼスにも判る。
同じ船乗りとして、命を乗せる船は絶対だ。
「船じゃねぇ――なら、化け物か。海の魔物(ヴァイパル)に沈められたと？」
ファルシオンはその単語を聞いた時、身を震わせて――、セルメットを見た。スランザールがぴくりと眉を上げメネゼスを見上げる。
「ヴァイパル？　提督、失礼じゃが」
「行き逢う船を沈める海の怪物の事だ。レガージュじゃ少し違うか」
スランザールは皺顔の中の小さな眼に光を浮かべ、口を引き結んだ。
レオアリスはファルカンへ視線を向けた。ファルカンは血の気の薄い面を更に蒼白にしている。
「レガージュでは……、いえ」
その単語を口にするのを思い止まり、レオアリス達を見上げたファル

カンの面に、警告の色がある。
ファルカンの危惧を、レオアリスは読み取った。
（ヴァイパル――）
どうしてもこの件は、そこに行き着くのか。避けて通る事はできないと。
「甲板には誰もいなかった――」
メネゼスはディノが言った言葉を低く呟いて、副官を見た。
「お前等、覚えがあるだろう」
副官が瞳を見開く。
「――あの時、二番船を沈めた、レガージュ船団の……」
そう言って一度、口を噤んだ。
「確かに、甲板には誰も――いませんでした」
接近して来る船を遠見筒で確かめた時も、肉眼で甲板を確認した時も。
「体当たりで船一つ沈めておきながら、無傷で引き上げて行きやがった。――怒りに目が眩んでたな」
メネゼスが冷えた笑いで頬を歪めた時、「だれ……」ファルシオンがポツリと呟やいた。
「殿下？」
レオアリスが視線を落とす。ファルシオンは真っ直ぐにセルメットを見つめていた。少し青ざめた額の下で、黄金の瞳が、不思議な輝きを帯びている。
「レオアリス――」
ファルシオンはじっとセルメットを見つめたまま、小さく呟いた。
「かたちが、変だ」
「形？」
どくり、と、剣が鳴った。
ファルシオンの言葉の意味を理解した訳ではない。
だが。
（不味い――）
背中に冷たいものが走る。
「お下がりください、殿下」
潮騒や船の気配と入り交じり、目の前の男の気配は掴みにくい。
ただ、今男が纏うものは、先ほどまでの「セルメット」の気配とは、確実に違った。
肌を、ざらついた布が撫でるような、不快感。
メネゼスは再び、下ろしていた剣を掴んだ。
ファルシオンの瞳の奥で光が揺れる。
「だれだ」
セルメットが口元を歪める。
「誰とは、また妙な言いがかりを」
「ちがう」
「何が……、――」
言葉の最中に両手を僅かに持ち上げ、セルメットは瞳に驚愕を浮かべてその手をじっと見つめた。
崩れていく。
身体が――微細な光の粒子を纏い、変容しようとしている。
隠していた形が暴かれ、強制的に、元の姿に戻されようとしていた。
セルメットの平べったい銀色の瞳が、ギラギラと光りファルシオンを睨んだ。
（馬鹿な、こんな事が……）
蒼白い肌が湿り気を帯び、ぬらりと光る。
抗（あらが）いがたい。
「――は」
黄金の瞳。
幼い王太子の――、いや、三百年前、かつての戦場で、アレウス国王が纏っていた、その同じ光――

セルメットはファルシオンを見、レオアリス達とファルカンを見、メネゼスと――そしてディノを見た。
「ははは！」
喉に哄笑を弾けさせ、セルメットはその姿を変えた。
「！」
メネゼスが隻眼を見開き、次の瞬間には構えた剣を突き出した。
剣が音を立てて突き刺さる。
だが捉えたのは壁だ。
「チ」
セルメットはメネゼスの横をすり抜け、ファルシオンへ手を伸ばした。
鉤爪が奔（はし）るように伸びる。
「殿下！」
スランザールはファルシオンを庇おうと手伸ばしかけ、そして全身で安堵の息を吐いた。
セルメットの手はレオアリスの左腕に阻まれ、ファルシオンに触れる事無く止まっていた。
グランスレイとロットバルトが抜いた剣の切っ先が、セルメットの喉元に向けられている。
マリの副官と水兵達も剣の柄に手を掛け、ただ、まだ起った事が理解できずにその場で緊張に息を呑んだ。
「レ……」
ファルシオンはレオアリスの右腕に抱き抱えられたまま、寸前で止まった鉤爪を見つめた。
セルメットの指先から伸びた鉤爪は、レオアリスの左手首から肘の間を貫いている。
通常の剣ですら、レオアリスの身体に触れた瞬間に砕けるはずだ。
ぽたりと血が滴る。
「レオアリス！」
「グランスレイ、殿下を」
レオアリスは目の前の男を見据えたままそう言った。
今や男はセルメットではなく、レオアリスにも覚えのある深海の住人の姿を現わしていた。
歪（いびつ）に突き出た後頭部と、血の気が失せ濡れたような肌。
銀の皿に似た両眼が光を弾く。
レオアリスの身体を微かな青白い光が取り巻く。
セルメットがレオアリスの左腕から鉤爪を引き抜くのと、メネゼスが再び斬り付けるのは同時だった。
メネゼスの切っ先が飛び退いたセルメットの影を掠める。
グランスレイがファルシオンを抱き取り、レオアリスは立ち上がると、まだ血が滴る腕に一度視線を落とした。傷はゆっくり閉じていく。
（――）
メネゼスは驚きと言うより呆れに近い表情を浮かべて、再びセルメットに剣を突き付けた。
「何者か、と聞くべきかな――だが、その姿は文献で見た事がある」
それに答えたのはスランザールだ。
「その者がどう答えても、我々にはとんと判らぬ答えじゃろう」
「――」
メネゼスはスランザールを斜めに見て、傷の走る頬を歪めた。
「どうやら貴侯等は色々知っていたようだ。詳しく説明してもらいたいものだが――」
そう言ってセルメットだった男を見据える。
「だが確かに、アレウス国には禁忌があったか」
アレウス王国と西海バルバドスとの間で交わされている不可侵条約は、マリや他の国々でも知られている。
「効力があるのか？　その条約は」
「――」

「まあ守る守らないは俺達の知った事じゃない。問題は一つ」
スランザールの様子を横目で眺め、メネゼスは軽く息を吐いた。切っ先の向こうのセルメットを睨み据える。
「――どうやら俺達は、利用されていたようだ。初めからか」
その言葉をセルメットはせせら笑った。
「今頃気付くとは、マリ海軍も大した事もない」
「アマーリアを沈めたのは貴様か、それとも他に仲間がいるのか」
セルメットはゆっくりと言い直した。
「私だ」
その一言に、この場に一人立つセルメットの自信が凝縮されている。
レオアリスやメネゼスだけではなく、マリ水兵達もまた、そこにいる男が内に秘める力を僅かなりと感じ取っていた。姿を変えた今それは遮るもの無く、得体の知れない、喉元に重しを乗せられるような圧迫感となって打ち寄せて来る。
メネゼスは部下達の様子を見て取った上で、再び注意深くセルメットを見据えた。
「詰めが甘かったんじゃねぇのか。もう正体は割れた。今ここで、これ以上貴様に何ができる」
「正体が割れた？　まさか。お前達が私をどれ程知っていると言うのだ、提督。我が名を唱えられると？　西海を行く愚かな船が、我の牙を逃れんと身を縮めながら我が名を唱えるように？」
嘲る口調でそう返し、セルメットは肩を震わせて笑った。
「我が名はヴェパール、西海が海皇の戟が一人――」
その名を口にした瞬間、セルメット――ヴェパールの身から風が吹き上がるように、圧力が叩き付けた。
『ヴァイパル……！』
マリの水兵達が息を呑み、恐怖に怯えた様子で一歩身を引く。
メネゼスでさえ隻眼に驚きを浮かべ、そしてそれを用心深く細め、奥歯をぎり、と噛み締めた。
「船を喰らい、引き摺り込む者」
ヴェパールの唇が、裂けるように広がる。
「船を操り、惑わす者――」
レオアリスはゆっくり息を吐き、体の裡（うち）で騒ぐ剣を宥めた。
（ヴェパール……）
ザインの。
三百年前の――彼の主の仇。
「そう恐れられる由縁を、教えてやろう」
海底で緑色の光がぼう、と点った。
横一列に展開する船団の、一番右端に位置していた船が、一瞬大きく揺れる。
船を囲む海面がぞぞ、と盛り上がる。
甲板に立つマリ水兵達が気付かないまま、薄い膜のように、海水は船体を這い上がり包み込み始めた。
ヴェパールは身体の奥で、海水が船体を覆っていくのを感じていた。それに比例して笑いが込み上げる。
「マリの提督――お前は船団を展開させて尚レガージュに配慮を示したが、もうじき奴等には無駄な配慮だったと判るだろう」
「……何をするつもりだ」
「何、大した事じゃない。ただお前の代わりをしてやろうと言うのだ」
嘲る笑いを含み、まるで舞台上の一幕を見るような目付きで、ヴェパールは室内の人間達を見回した。
「今からでも遅くはない、私と手を組んではどうだ――？　私がレガージュを陥（お）としてやる。お前はその功績を本国に持ち帰るだけでいいのだぞ」
「手を組む？　船を沈めた張本人の貴様とか。笑わせる話だな」
「――残念だ」

ヴェパールは耳元まで裂ける笑いを浮かべた。
低い、だが鼓膜を揺らす炸裂音が響いた。
「何だ！」
メネゼスがぎくりとして音の方向を睨む。
メネゼス達にとっては何より馴染みのある音だ。
数瞬遅れて、どおっという激しい衝撃音が届く。
「火球砲――何故撃った！　何番船だ！」
マリの軍船が、火球砲を撃ったのだ。
「そんな命令はしてねぇ」
メネゼスの視線を受け、一番扉寄りにいた水兵が廊下へ飛び出す。
「私がしたのだ」
「――何だと」
メネゼスは肩口から、ヴェパールを睨んだ。
「いいや、命令ではないな。命令など無くとも何の支障もない。海の上では全てが、我が意のもとにある。幾らでも――、そう、ここにいる船全て、私は意のままに操れる」
ヴェパールは部屋の真ん中に立ち、ぐるりと見渡した。その視線をメネゼスに戻す。
「提督。お前達マリ海軍は交易船を沈められた報復として、国使であるアレウス国王太子を殺し、その後レガージュを攻撃、焼き滅ぼす――」
「――」
ヴェパールはまるで、預言者が託宣をするようにそう言ったが――、それは筋書きだ。
預言よりも確実な。
メネゼスは一歩踏み出した。
「これ以上、俺の船で勝手はさせねぇ」
「船に頼らねば海を征けぬ存在が、何を吠える」
「メネゼス提督――」
ヴェパールの放つ圧力に、すうっと別の、薄い刃のような空気が切り込む。メネゼスは声の方へ目をやった。
ヴェパールの向こうに立つレオアリスの姿を、青白い薄い光が取り巻いている。
「王太子殿下の御身をお護りする為――、この場で剣を抜く事を、お許しいただきたい」
スランザールがレオアリスを見て、「レオアリス」と一言だけ言った。
レオアリスが頷く。
メネゼスは口元を歪めて笑った。
「律儀だな――、いいだろう」
レオアリスの右手がその鳩尾に沈む。
青白い光が零れ、室内を染めた。
誰もが息を飲み見つめる中、白刃が現れる。
月の光に浸したような青白い光を纏う、飾り気の無い、切り裂く事そのものの為にある剣（つるぎ）――
ヴェパールはのっぺりした平坦な顔に浮かべていた笑みを、ゆっくり消した。
右手に剣を提げ、レオアリスはヴェパールと向かい合った。

十九

マリ海軍の軍船から放たれた火球砲は、一直線にフィオリ・アル・レガージュの港に突き刺さった。
水柱と水蒸気が高く立ち昇る。
居並ぶ十隻ものマリの軍船が驚愕にどよめく中で、火球砲を放ったその船だけが奇妙に静まり返っていた。
船は完全に、薄い海水に覆われていた。目を凝らさなければ見えないほどの薄い膜だ。
甲板も帆柱も帆も――操舵も。
海水の膜に全身を包まれた水兵達が、ゆらゆらと不規則に身体を揺らしながら甲板や船室に立っている。
甲板の下、舳先にある砲室では、マリの下士官が一人、やはり不自然に身体を揺らして砲台の前に立っていた。砲手の口元まで、薄い海水の膜が覆っている。
半ば意識を失って青ざめ、呼吸もままならずに身体を痙攣させながらも、尚も砲身に手が伸びる。
ごぼ、と口の端から泡と、声が漏れた。
『撃、て……』
一本の光の筋が浮かび、砲身の周りを回転し始めた。
じわり。
砲門が再び、微かな赤い光を帯びる。
軋む音を立てて船が動く。
向かい風の中櫓を漕ぐ者すら無く、だが船は海面を滑るように、ゆっくり、陸へと進み始めた。
『何で命令もなしに撃ちやがったんだ！　一体どうなってる！』
マリ海軍九番船船長、中将バレットは青ざめて怒鳴った。
砲撃した十番船のすぐ隣に停泊していた九番船甲板は、僚船の惑乱ともいうべき突然の行動に混乱していた。慌しく船舷に駆け寄る者や、バレットの指示を仰ぐ声が飛び、特に砲室からは自分達も砲撃準備をすべきかと、伝声管がひっきりなしに問い合わせてくる。
『提督の指示はまだか！』
レガージュの港が俄かに動きを増したのが見て取れる。
初弾は港の入り口に落ちた。遠目でははっきりと確認できないが、おそらくはまだ、レガージュの港に損害は無い。
マリ海軍が射程の外に停泊していた為だ。
街に直撃しなかった事に彼等が安堵したのは、元々マリ海軍に攻撃の意志が無かったからではなく、指揮官であるメネゼスの指示が確認できていなかったからだった。
そしていざ戦端が開かれれば、簡単に終わらない事も知っている。
だがレガージュの港に火球砲を撃ち込んだ僚船は、彼等の焦りを嘲笑うかのように、レガージュへ向かって進み始めた。
呼び掛けても信号を送っても、返信は無い。
バレットは操舵室の窓に駆け寄り、身を乗り出した。
甲板にいる十番船の兵士達は、誰一人振り返らない。
『何をやってる――！』
初めに、誰かが沖を指差した。
「マリが――、火球砲を……！」
会談中のマリ王国海軍の様子を港から見つめていたカリカオテ達にも、それはすぐに見て取れた。横列に展開している船団の内、左端にいた一隻の船首部分に光が集まっている。
「――まさか、撃つのか？　そんな」
「会談はまだやっているはずだろう――、第一ファルカン団長が彼を連れて行ったばかりではないか」

「殿下はどうされた――まさか殿下の御身に何か」
ビルゼンが前にいた船団の男を押し退け身を乗り出した時、初めの光が放たれた。
「！」
「わああ！」
空気を揺さ振る低い音が遅れて届く。
次の瞬間、港の入り口、防波堤の手前に火球が突き刺さった。
どお、と高く水柱が立ち、水蒸気が吹き上がる。
衝撃が風となり、カリカオテ達の頬を叩いた。水しぶきがここまで落ちる。停泊していた船が波に煽られ、帆をぶつけ合うほどに大きく船体を揺らした。
港は――、街はしんと時を止めたように静まり返り、ついでわあっと騒がしくなった。あちこちで悲鳴や怒号が飛ぶ。
「撃ってきた――！」
「攻撃してきたぞ！」
「どういう事だ、カリカオテ！　何でマリは」
「マリは戦争を始めるつもりか！」
「王太子殿下は――会談はどうなったんだ！？」
「わ、判らん……、私にも、」
カリカオテは白髪に包まれた頭を小刻みに振った。ビルゼンがカリカオテをきっと見据える。
「決裂したんだ！　マリは攻撃してきた。最悪の結果だ――」
「殿下は」
「近衛師団が――、王の剣士が付いてる、ご無事に決まってる」
ビルゼンは息を潜め、低い声を押し出した。
「船団を出そう」
「――それは」
「自分達で守らなくてどうする！　何の為の船団だ！」
「しかしまだ、殿下からは何のご連絡も」
「じゃあ何故攻撃してきた！　――もう会談など意味はない。せめて殿下をお救いすべきだ！　それが我々のできる唯一の」
ふいにザザアッ、と驟雨（しゅうう）のような音が届いた。
カリカオテ達は辺りを見回し、街の斜面の途中に視線を止めた。
領事館の手前――正規軍の駐屯する館から、紅い飛竜が十数騎、飛び立つのが見えた。
僅かに遅れて、交易組合の前に待機していた近衛師団の飛竜も飛び立つ。
港へ降りてくる。
それは戦乱の始まりに見えた。
「やはり、もう会談は……」
近衛師団も正規軍も、その指示を受けたのだと、そんな声があちこちで上がる。
「――ザインを」
「ザインを連れて来る！」
そう言って数人の男達が駆け出す。
「待て――」
カリカオテは彼等を止めようとしたが、上げた手を虚しく下ろした。
火球砲を放ったマリ海軍の船団を呆然と見つめ、豊かな白髪の頭を力なく落とす。
「――何という事だ」
全て、何一つ上手くはいかなかったのか。
レガージュは、無実を証明できないまま、マリ王国との戦争に進む事になるのか。
それが完全に、向うべき方向を違えているのは確かなのにも関わらず。
カリカオテの絶望に、街の誰かの声が差し込む。
「動いてるぞ……」
「向かって来る」

顔を上げたカリカオテの視界に、ゆっくりと動き出したマリ海軍の船が見えた。
近付いてくる。
レガージュへ。
「街を――、射程に入れるつもりなんだ！」
新たな混乱が、風に吹き散らされる炎のように街を駆け上がった。

フレイザーは高く上がった白い水柱を睨んだ。
何が起こったのか――理解したのは一呼吸した後だ。
レガージュの港のちょうど入り口に、火球砲が撃ち込まれたのだ。
それが威嚇故か、射程が不足していただけなのか、フレイザーには読み取れなかった。
だが砲撃の事実に変わりはない。
「――何故」
船の左舷を振り返る。
メネゼスの司令船がそこにある。
ファルシオン達はまだ出てきていない。会談が終わったのか、まだ続いているのか――今の今まで、指令船に取り立てた動きはなかったはずだ。小隊長のセオネルが走り寄る。
「中将、乗り移って殿下をお救いすべきでは――上将からの指示は」
「待て。何かおかしい」
フレイザーは眉を潜め、司令船の甲板を睨んだ。フレイザー達からも、司令船の甲板の混乱がまざまざと見て取れた。マリの水兵達は舷の手摺りに鈴なりになって、明らかに砲撃をした僚船を見て驚いている。
「まさか、マリ海軍は、知らなかった――？　何が起こってるの――」
火球砲を撃ったのは、一番左側に布陣していた船だ。
その船体が陽光にゆらりと揺らぐように見えた。
「港に損害は無いわね？　レガージュは」
レガージュ船団の船は三隻停泊していた。三隻ともおそらくすぐにでも動ける状態にあるはずだ。
だが船団を指揮するファルカンは今、マリ海軍の司令船にいる。指揮官が無く、レガージュ船団は混乱しているだろう。
「状況が解らない内に船団を出したら不味い。先ずは港に伝令使を」
「中将、砲撃した船が動きます！」
フレイザーはセオネルが指差した方向を見て頬を張り詰め、それから司令船を振り返った。靴音高く船舷に歩み寄り、声を張り上げる。
「私はアレウス国近衛師団左軍中将フレイザーだ！　今そこでメネゼス提督の意を受ける指揮官は誰か！」
ざわついた後、四十歳ほどの士官が縁に立った。フレイザーは男と真っ直ぐ向き合った。
「マリ王国海軍に問う――両国の会談が行われていながら、我等が王太子殿下が船に戻られぬ内に、何故砲撃した！　これがメネゼス提督の意思と取るが、相違ないか！」
フレイザーの鋭い詰問に対し、マリの士官はずっと混乱を面に浮かべたまま、首を振った。
「て、提督は――」

紅玉の鱗を持つ十二騎の飛竜が次々飛び立つ。正規西方軍第七大隊レガージュ駐屯部隊の兵士達は飛竜を港に向けた。
空からと――、地上でも歩兵隊が港へと駈け降りていくのを見送り、ザインはホースエントの襟元を掴んで身を隠していた路地から出た。
領事館と正規軍の駐屯地は隣り合っている。軍の正門前を避け、ザインは領事館の高い塀を回り込んで裏門へ向かった。
途中、一度振り返って街を見渡す。領事館前からも港を一望する事ができる。港に集まる者達、細い坂道を駆け上がる者達、慌てて家から飛び出す者達がぶつかり合い、通りは住民達で埋まっている。どこかで子

供の泣き声が聞こえる。
混乱しているのが良く判った。
交易組合会館の前から、近衛師団の飛竜が飛び立つ様子が見えた。港に向かって降りて行く。もうザインが会館を抜け出した事にも気付いているのだろうが、騎首を領事館に向ける者はいなかった。
「――」
ザインはそれを確認し、背を向けた。
「始めから、レガージュを攻撃する予定だったのか？」
それが自分に尋ねたのだと気付いて、ホースエントは首が外れそうなほど横に振った。
「し、知らない……知らなかったんだ、本当だ」
「どうだろうな」
「本当だ！　だ、大体、レガージュの守護者のお前が、こんなところで何をやっている。マリが火球砲を撃ったんだぞ！　今はあれを何とかするのが先だろう。街の奴等は不安になってる、カリカオテ達だけじゃ収められないぞ！」
「領事らしい言葉じゃないか――。お前が行って収めるか」
かぁっと血を昇らせ、ホースエントは唾を飛ばした。
「わ、私はふざけてる訳じゃないぞ！　あれを何とかしなくちゃ、レガージュはおしまいだ！　判ってるのか、攻撃を受けたのはレガージュなんだぞ！」
「静かにしろ。――」
そう言い差して、ザインはまじまじとホースエントの顔を見た。
「な、何だ」
ホースエントが狼狽えて顔を引く。
「――いいや。ただこれまで、領事としてお前ともう少し、向き合うべきだったのだろうと思ってな」
「――そ」
思いがけない言葉に、ホースエントは忙しなく瞬きを繰り返した。ザインはもう先を歩いている。
「行くぞ、時間が無い。ヴェパールとの密会場所へ案内するんだ」
「……マリ海軍はどうするんだ。あんたが」
一度だけ、ザインは港を振り返った。
「近衛師団がいる」
そう言い切り、領事館の門を潜る。
彼等が領事館に入ったのと入れ違うように、火球砲を放ったマリ海軍の船がゆっくりと動き出した。

甲板が騒がしかったが、ここは切り離されたように静かだった。
メネゼスはそこに現れた一振りの剣を、感心した眼差しで眺めた。
剣が発する凍り付く気が、室内に満ちている。指先を動かして空気に触れただけでも断ち切られそうな、鋭利な刃の気配。
彼の部下達は驚きと畏れに意識を掴まれて息を呑み、身を竦ませている。
（無理もねぇ）
その凄まじい気配の中心にいる者が何故平然と立っているのかと、ついそんな事を思わせられる。
（あれと打ち合ったら、俺の剣じゃ保たねぇな）
保つ剣があるのか、それも疑問だが。メネゼスは視線を左へ向けた。
（――さて）
ただこの場でもう一人、ヴェパールだけは微動だにせず、侮蔑さえ感じさせる眼差しで白刃を見下ろしている。
（どう動く）
レオアリスはヴェパールと睨み合ったまま、背後に指示を出した。

「グランスレイ、ロットバルト、殿下とスランザール公をお護りして退け」
「は」
グランスレイは間を置かず頷いて、ファルシオンの肩にそっと手を触れた。
「殿下、失礼いたします。船へお戻りを」
グランスレイの手に促されながら、ファルシオンは首を巡らせた。
「レオアリスは」
「私の事はお気になさらずに。殿下が無事にお戻りになる事が第一です」
「――」
ファルシオンが唇を噛む。その不安そうな顔を見て、レオアリスは言い方が悪かったのだろうと、笑い掛けた。
「大丈夫です。俺は。信じてください」
「――うん」
ファルシオンはまだ顔を曇らせたまま、それでも頷いた。
ヴェパールが喉の奥で笑う。
「王子をどこに連れて行くつもりかな？　この海の上で、どこかに安全な場所があると思っているのか」
「お前を抑えればいい話だ、三の戟」
「はは！　ずいぶん傲慢な物言いだな若造」
銀色の瞳の底が鈍く光を弾く。
「条約はどうする。お前達には不可侵条約を破る勇気など無いだろう」
「勇気？　言葉の使い方が間違ってる。だが、確かに、アレウス国に条約破棄の意思は無い」
レオアリスは右手に剣を提げたまま、ヴェパールを真っ直ぐに睨んだ。
「お前には、西海に退いてもらう。これ以上――、何事も無くだ」
ヴェパールが耳元まで裂ける笑みを浮かべる。
「――私を、ビュルゲルごときと一緒にするなよ」
甲板から新たな喧騒が落ちる。すぐに廊下に足音が響き、マリの水兵が飛び込んだ。
『提督！　火球砲を撃った十番船が、レガージュへ向かっています！』
『何だと』
レオアリス達も息を呑む。
室内の空気が音を立てて静まり返るようだった。
レガージュへ――。
射程に入るつもりなのだと、瞬時に判った。
『すぐに停船命令を出せ――レガージュへの一切の攻撃を禁ずると、全船に伝えろ』
水兵が駆け出すのを見送り、メネゼスはその隻眼でヴェパールを睨んだ。
『貴様……俺の船に何をしやがった』
『バレット中将、ど、どうすれば』
航海士が咳き込んで尋ね、バレットは奥歯を噛み締めた。
止めるべきなのか――、それとも会談の結果を受けたメネゼスの指示が十番船にだけあったのか、それが判らない。
メネゼスの指示ならば、彼等の船も攻撃の態勢に入る必要がある。
十番船はゆるやかに、だが確実にレガージュとの距離を詰めていく。
『――いや』
バレットはぐっと木の窓枠を握り込んだ。
メネゼスの指示だとは思えなかった。メネゼスが船団に混乱を来すような指示をした事など、これまでに一度も無い。
見回した僚船は皆、彼等と同じように混乱している。
メネゼスの指示ではない。
『止めるべきだ――』
そこに、司令船の信号手から慌しく信号が飛んだ。
〝レガージュへの攻撃の意思無し〟

〝十番船は即時停船せよ〟
だん！　と拳を窓枠に打ち付け、バレットは声を張り上げた。
『――止めろ！　引き戻せ！！』
マリの軍船が慌ただしさを増す。
司令船やバレットの船を含めた僚船から引っ切り無しに信号が発されているが、十番船は停まる気配を見せない。
十番船を睨んで、バレットはぎくりと動きを止めた。それに気付いた他の水兵や僚船からも、呻きに似た声が上がる。
十番船の右舷の砲門が、微かだが、赤く熱を帯び始めていた。
『また撃とうとしているぞ――！』
船は最早、レガージュの街への射程内に達している。
今撃てば、確実に港に停泊している船や建物を焼く。
司令船の指示は変わらず、繰り返し停船を命じている。十番船の行動は最早明らかに命令違反だった。
二撃目を受ければレガージュも黙ってはいまい。確実に、戦闘になる。
もうメネゼスは、レガージュへの攻撃の意思なしと通達しているにも関わらずだ。
バレットは覚悟を決めたように、ぐっと顎を引いた。
『――回り込め！　船で止める！　十番船の前に出るんだ！』
『船長！』
『迷ってる暇は無いぞ！　出せ！』
操舵士は顔を白く張り詰め、頷くと操舵を握り締めた。
船体をレガージュとの間に置いて、盾に――それしか止める手が無い。
ぐぐ、と船首が方向を変える。
だが陸から向かい風が吹きつけ、思うように速度が上がらない。
『急げ――！　櫓を降ろせ！』
片側十本の櫓が降り、波しぶきが上がる。櫓が海面を漕ぐが、向かい風に押され、追い付く気配が無かった。
十番船はまるで風は向かい風などではなく、追い風だとでも言うかのように進んでいく。
『帆を畳め――！』
砲門が強く赤い光を帯びる。
追いつかない。
『船尾でいい、ぶつけろ！』
『――間に合いません！　撃つ……！』

二十

「カイ」
レオアリスの声に、羽音と共に彼の肩に黒い鳥が降りる。
「フレイザーに殿下が戻るのを待てと――それと街に残した部隊には、指示があるまで街を護る事を最優先にしろと伝えろ。正規と船団にも指示を徹底させるんだ。――もう一つ」
その先は口にされなかったが、カイはレオアリスの指示を読み取ると、一声鳴いて姿を消した。
ヴェパールが嘲笑う。
「諦めろ。もうレガージュの街に二発目の火球砲が撃ち込まれる。貴様等には何もできん。――さぁ、まずは大人くファルシオンの命を差し出せ」
「断る」
短く返し、レオアリスは床を蹴ってヴェパールの懐に踏み込んだ。剣が一瞬、青白い尾を引く。
足元から、喉へと切り上げる。
ヴェパールは上体を反らせ、切っ先は喉元を掠めた。
「甘い剣筋だ――、！」
レオアリスは剣を振り抜きざま、その回転を乗せるように左脚を跳ね上げ、上体を反らせていたヴェパールの腹に踵を叩き込んだ。
後方に弾かれたヴェパールの身体が壁に打ち付けられ、薄い壁板が音を立てて割れる。その先は隣室だ。
ヴェパールの身体は壁の割れ目にはまり込むように倒れた。
「船を余り壊すなよ」
メネゼスの声にレオアリスはちらりと苦笑を浮かべ、更に踏み込んだ。
ヴェパールの喉を白刃が追う。
起き上がろうとして服の裾を壁の割れ目に取られ、ヴェパールの顔が一瞬、怒りに染まる。
白刃が喉を捉える寸前、ヴェパールは面を上げ、かっと赤い口を開いた。

まさに火球砲が放たれようとしていた瞬間――、ぱしん、と泡の弾けるような音を立て、十番船を覆っていた海水の膜が一斉になだれ落ちた。
波立った海面に船体が大きく振られる。
『何だ？！　今、何か落ちたぞ――海水か？』
マリ海軍の水兵達が顔を見合わせる。
『おい、まだ――』
視線の先で、だがまだ砲身は光を湛えていた。三重の白く輝く円が砲身を取り巻いている。
マリ海軍が誇る火球砲は予め法陣が組み込まれ、法術士の詠唱を要しないところに最大の特性がある。
ヴェパールの呪縛が解けそこここで倒れている水兵達を尻目に、組み上がった法陣は、一度明滅した。
次の瞬間、砲身が火を吹いた。
『！』
だが荒れた波により既に船首はレガージュから逸れ、火球はレガージュの港から二十間近く離れた岸壁に突き刺さった。
岸壁が抉（えぐ）れ、砕けた岩が炎を纏いながら海面に落下して水柱を高く上げる。
『外れ――』
固唾を飲んでいたバレットや水兵達は、誰からともなく安堵の息を吐いた。十番船は今は止まり、荒れる波にその身を揺らしている。
ただ、安堵の溜息はすぐに張り詰めた緊張に変わった。
撃った――。
街に当りこそしなかったものの、二撃目を。

レオアリスの剣はヴェパールの首を捉える寸前で止まっていた。
ヴェパールの喉の奥から突き出した戟が、その三股の刃の間に白刃を捉えている。
ヴェパールはちらりと視線を壁に投げ、忌々しさに眉を寄せた。
船の支配が解けている。
咄嗟に戟を呼び出す為に、船を操る『手』を離さざるを得なかった。
始めからヴェパールの操作を断つ事が狙いだったのだと、そう気付いて薄い皮膚を更に怒りに染める。
だが、火球砲が再び放たれた事を示す低い炸裂音と直後の着弾音が響き、再びヴェパールは笑いを浮かべた。
「残念だったな――」
喉の奥から生えた戟がぐぐ、と伸び、レオアリスの剣を押し返す。
「――」
レオアリスは微かに瞳を細めた。力を抜いているつもりはない。
だが、ヴェパールの喉から持ち上がる戟に、少しずつだが剣を押されている。
「グランスレイ――今の内に殿下を」
グランスレイは頷き、今度こそファルシオンを抱え上げた。
再び、水兵が足音を鳴らして駆け込み、状況を告げる。
『報告します！　に、二撃目は、三十度逸れてレガージュ左対岸の岸壁に着弾しました』
ヴェパールが顔を苛立ちに歪める。
室内には安堵と緊張が複雑に入り混じった。レガージュの街を逸れたとは言え、着弾の事実は変わらない。
船上から混乱の騒めきが伝わって来る中、レオアリスは剣を押し戻す力を押さえ込みながら、メネゼスに視線を向けた。
「メネゼス提督、貴方は海上の指揮をお願いします」
メネゼスはちらりとヴェパールを見た。
「ここは私に。船の混乱は貴方でないと抑えられません。レガージュとの争いの回避を」
「――そうしよう」
メネゼスは抜き放っていた剣を鞘に戻し、副官と部下達を見回した。
『全員来い――ディノ、お前達もだ』
『しかし提督、この場に兵は』
『いても邪魔になるだけだろう。俺達の仕事は海上だ。行け』
副官が頷き、室内にいた水兵達に指示を出す。
「ファルシオン殿下、貴方も甲板へ」
メネゼスに促され、グランスレイは目礼するとファルシオンを抱えて廊下へと出た。ファルシオンの瞳がレオアリスに向けられ、すぐに断ち切られる。
「老公」
ロットバルトがスランザールとファルカン達を退かせ、最後に残っていたメネゼスも室内を一瞥すると扉を潜った。
残ったのはヴェパールとレオアリスだけだ。
「マリとアレウスが手を組むか――、面白い」
床の上に横たわった不利と見える体勢のまま、ヴェパールは喉の奥で笑いを転がした。
「だが、無駄だ」
「！」
ヴェパールの喉から戟が矢の如く吐き出される。三股の戟先がレオアリスの剣を絡め取り、そのまま右肩を貫いた。
「ぐ……ァ」
戟の勢いは止まらず、レオアリスの身体を引き摺ったまま、反対の壁に突き立った。
ヴェパールが悠然と身を起す。レオアリスは自分の肩を壁に縫い止めている戟を見た。戟先は木の板に深く食い込んでいる。

「――チ」
右手を動かそうとするだけで、肩から指先まで激痛が走る。ぎし、と板壁が鳴った。
ヴェパールは割れた壁を抜け、室内に立った。
「お前達の未来は何一つ変わらん」
「――お前の言葉は何一つ、実現しない」
レオアリスはヴェパールを睨むと、肩に食い込む戟の柄を左手で掴み、一息に引き抜いた。刃先に備えられた返しが肉を抉る。
「ッ」
噴き出した血はすぐに止まり、傷口が瞬く間に塞がる。ヴェパールは平らな瞳を細めた。
「さすがに治癒能力が高いな。ザインと同じか」
低い笑いが起る。
「ザインは来ないのか――恨みを晴らす絶好の機会だと言うのに」
「――来ない。だからこそ、お前には退いてもらう」
レオアリスは引き抜いた戟を反し、ヴェパール目がけて投げた。
戟はヴェパールの腹に突き刺さり――、ずるり、と、柄の石突きまで飲み込まれた。飲み込まれた跡に波紋のような漣（ささなみ）が立つ。
「な――ンだそりゃあ」
思わず呆れて呟き、レオアリスは戟を追って踏み込んだ。剣を凪ぐ。ヴェパールの太腿から戟が斜めに飛び出し、レオアリスの剣を弾いた。
弾いた戟が瞬く間に引っ込む。
ヴェパールはただ後ろ手に腕を組み、悠然と立っている。
レオアリスは瞳を細め、口元を引き結んだ。
（厄介だな――どんな仕組みだよ）
どこに武器を持つのかが判らなければ、剣筋が読めない。
間合いを殺そうと踏み込んでも、思わぬ角度から戟が飛び出して来る。
（まあ俺も、他人の事は言えないが――）
頬を掠めた戟の柄を、レオアリスは剣で弾いた。頬が切れ、血が散り、塞がる。
体勢を戻した時には戟はヴェパールの中に消え、レオアリスの剣撃に合わせて現れる。
懐に入りたいが、思いがけない位置から現れる戟に阻まれる。
やりにくい――
だが、右手の剣ともう一つ、身の裡（うち）に残した剣が、伝えてくるものがあった。
剣が常に望む――戦う事への歓喜だ。この状況を喜んでいる。
左の剣（つるぎ）が訴える。
出せ。
レオアリスは口元に浮かびかかる笑みを打ち消した。
（我慢しろ。こいつは――）
ただ、西海へ退かせる。
ヴェパールはレオアリスの面に一瞬浮かんだ笑みを見つけ、苦々しく奥歯を噛み締めた。
戟を操りながらも、あの剣を押し返すだけの状況を作り出せずに、色素の薄い頬に苛立ちを昇らせる。
（なるほど、あの男が手の内に入れただけはある――）
右手の剣一本ではヴェパールを捉えきれまい。
ただ、その身の奥に、もう一つの気配がある事にヴェパールも気付いていた。
（何故抜かない）
言葉通り、ヴェパールを退かせる事だけを目的としているからだ。
この状態は、ヴェパールの身体を脅かすほどのものではないのは事実だ。
ただ――、船の支配が利かない。

意識を逸らせば剣は容易くヴェパールの身を捉えるだろう。
（――それが目的か）
時間を置けばそれだけ、レガージュ側に猶予を与える事になる。メネゼスとファルカン、そしてアレウスの王太子という顔触れは、事態を収束させるに充分だ。
刃が打ち合う高い音が室内に響く。
ヴェパールは口元を歪めた。
「――だから貴様等は愚かなのだ。ただ切り裂けば、話は簡単に終わるものを」
「――」
「お前の本心は、これで満足ではないだろう？」
青白く光を纏う剣の向こうで、漆黒の瞳に複雑な光が宿る。
ふっとレオアリスの剣に掛かっていた圧力が消える。戟が引いたからだ。
崩れた体勢を戻しかけたところへ、ヴェパールの肩から戟が飛び出し、レオアリスの脇腹を掠めた。
戻る戟先より早く、剣が青白い尾を引く。
剣が戟を捉え、噛み合う。
レオアリスは右手の剣を反して戟の切っ先を押さえ込み、左手で戟の柄を掴んだ。三股の刃に絡んだ剣を引き、同時に戟の柄をなぞるように踏み込む。
一瞬捉えたヴェパールの銀の目の奥に、鈍い光りを認めた。色素の無い面の薄い唇が、赤く三日月形に広がる。
（不味い、誘いか）
「ここでは埒が明かん――。我が領域へ、貴様を招待してやろう」
退こうとした瞬間、戟の柄が、ぐん、と唸った。
足が浮く。
「！」
ヴェパールは戟を横薙に振り抜き、レオアリスの身体ごと壁に叩きつけた。
板壁が砕け、飛び散った破片を照らして薄暗かった室内に光が差し込む。
咄嗟に掴むものを探ったが、身体はそのまま、宙へ放り出された。
（しまった――）
そう思った瞬間には、目の前に青い海面があった。
降り注ぐ陽光が一瞬目を眩ませ、レオアリスの身体は海中に落ちた。

二十一

二発――

二発目は外れたとはいえ、撃ち込んだ事実は変わらない。

フィオリ・アル・レガージュの港は遠目に見ても慌ただしさを増していた。飛竜が次々と港に舞い降り、また上空に上がる。

マリ海軍の船団は落ち着きなく騒めいていたが、甲板にメネゼスが姿を現わした瞬間、さっと空気が変わった。

『提督――！』

司令船の水兵達が安堵の表情を浮かべてメネゼスのもとへ駆け寄る。先ほどフレイザーと話した士官が忙しく踵を鳴らした。

『申し訳ございません提督！　十番船が二発砲撃を――、その、何度も停船命令を発しましたが止まらず、先ほどようやく』

『落ち着け――』

斜め左前方に、十番船が船体を揺らしながら停まっている。甲板の上に動く気配はない。

メネゼスは視線を巡らせ、甲板から船団を見渡すと朗々と声を張り上げた。

『聞け――！　十番船に関わらず、いかなる砲撃指示も出してはいない！　ただ、十番船が砲撃した原因は、既に把握している。それはお前達の不手際じゃあねぇ』

『――！』

『改めて全軍に告げておく』

兵士達はメネゼスの言葉に耳を傾けて静まり返り、そしてぐっと顎を引いた。

『会談の場に於いてレガージュへの疑いは解けた――我が船団にレガージュへの攻撃意思は一切無い！　もう一度、確実に船を自らの意思の下(もと)に置いておけ！』

全兵士が一斉に踵を打ち鳴らし敬礼する音が、大気を揺らす。船団は完全に落ち着きを取り戻し、水兵達は船の点検に動き回り始めた。

もう一度全体を見回してそれを確認し、メネゼスは隻眼を細めた。十番船を動かしたのはヴェパールだが、何をしたのか。視線を士官へ向ける。

『報告しろ。撃った経緯、着弾状況、十番船の様子だ』

『はっ！』

メネゼスがファルシオンを乗ってきた船へと導く仕草を見せると、近くにいた水兵達はファルシオンを送る為に敬礼を向けた。ファルシオンがこの船に来た時には一切無かった行為が、水兵達のメネゼスへの信頼を伺わせる。

その間にも士官の報告が続く。

『十番船はいきなり砲撃しました。その後レガージュへと前進し、二撃目を――。指令に対しても返答は無いままです。ただ二撃目の発射直前に一瞬、その』

見たものを口にすべきか迷って、士官はメネゼスを見上げた。

『何だ。どんな些細な事でも残さず伝えろ』

『その、制御を失ったように見えました。膜が落ち……』

『膜？』

復唱され、士官はますます自信の無い口調になった。

『膜、いえ、何か、船全体を覆っていたようなものが落ち、海面がうねって――その振動で船体が大きく振られた為に、砲撃の着弾が逸れています』

『なるほどな』

ただメネゼスはそれで納得したように頷いた。レオアリスの剣が引いた青白い光の帯を思い出し、口元を吊り上げる。

『だいぶ運がいい』

『提督？』

『いや、お前達の見たそれが、おそらく事の核心だろう。十番船は今ど

うしてる』
『現在確認の為に九番船が寄せています。まだ十番船からの返答はありません』
『迂闊に乗り込むなと伝えろ。少し様子を見る』
『は――！』
士官はメネゼスの指示を伝える為に通信官に駆け寄った。
『奴等が気付いたものが全てなら、もう十番船への支配は解けているだろうが』
『そう思いたいです』
副官が張り詰めた面持ちで頷く。メネゼスは足元の甲板に視線を落とした。
『あれを抑えている限りは、か』
レオアリスの剣から発される身を切るような気配――そしてそれと同じく、ヴェパールの戟からも圧倒的な力を感じた。
いずれも互いを凌ごうとし、力を削ぎ合う。
刃を交えるごとに生じる余波が、足元に伝わるようだ。
『だが、互角とは言えねぇ。不利は覆（くつがえ）らん』
足場が限定されている。既にその時点で、レオアリスとヴェパールは同じ条件下にはいない。
『提督？』
メネゼスはファルシオンを見た。ちょうど船の間に渡し板が渡されたところだ。ファルシオンは不安そうな瞳を、片時も逸らさず足元に向けている。
『――早く王子を港へ送りたいな』
そう呟いた時、船縁にいたファルカンが手摺りに手を付いて身を乗り出した。
「船団が」
「――我慢できねぇ……！　俺は出るぞ！」
レガージュの港に集まっていた船団の男達の一人がそう吐き出し、荒々しい靴音を立てて桟橋を停泊している船へと向かった。
「おい、カリカオテは待てと」
引き止める一人の傍らで、別の男が駆け出す。
「俺も行く」
「待て――、まだ会談の結果が」
「会談？　ファルシオン殿下と、団長が話に行ってから撃ちやがったんだ！　まだ戻って来てもいねぇのに――、二発もだぞ？　会談なんてとっくに終わったんだよ！」
「そうだ！　黙って突っ立ってたら焼かれるだけだ！」
「正規軍と近衛師団は動いてない――指示があって様子を見てるんじゃ」
「俺達の街だ――船団がレガージュを守らなくて、何の為の存在だ！」
三人目が駆け出し、それが後押ししたかのように、気持ちを決めかねて立ち尽くしていた船団の男達全体に広がった。
競うように船に乗り込み、巻き上げていた帆を降ろす。
気付いたカリカオテが止める間もなく、停泊していた三隻のレガージュ船団の船は、風を掴んで動き出した。
彼等を指揮し、今であれば無謀な行動を抑えるファルカンもいないまま、攻撃された事への恐怖と、それを上回る怒りが満ちていた。
レガージュ船団の男達は次第に距離を狭めていくマリ海軍の船影を睨んだ。マリ海軍の軍船とレガージュ船団の船とでは、例え一対一だったとしてもレガージュの不利は明らかだ。
接舷する前に火球砲を撃ち込まれたらレガージュ船団には勝ち目など無い。
それでも、止まる気は無かった。
「船をぶつけてでも――、一隻だけでも沈めるんだ」

緊迫した声の響きに引き寄せられ、メネゼスもファルカンの視線の先を追った。
ファルカンが見ているものはメネゼスからも見えた。
港に停泊していたレガージュ船団の船に白い帆が張られている。レガージュ船団が動き出していた。
『王子の出迎え、じゃあねぇだろうな。――二発も受けて、さすがに収まりが着く訳がねぇか』
だが今さらレガージュと戦闘になるのは、何も意味が無い。
『伝令使を出せ』
『レガージュ船団が信じますか』
『一割だな。俺達に説得の根拠がねぇ――今度はな』
つい半刻前のアレウス国と同様だ、と口元に皮肉の笑みを刷く。
『どのような』
『くどくど言っても混乱する。一言、戦闘の意思無し、だ。王子を始め、一人も欠けず来た船で戻る――。いや、一人もとは言えねぇか』
レオアリスは退けまい。メネゼスが再び甲板に視線を落とした時だ。
足元のすぐ下で、振動が響いた。木の板が砕ける音。
『船を壊すなと言ったろうに……』
呆れた口調は続く水音に一旦閉ざされた。メネゼスの隻眼が水音を追い、次にファルシオンへ向かう。
ファルシオンはグランスレイに促され、船の間にかかった渡し板をちょうど渡ろうとしていた。再び足元が揺れて、グランスレイが抱え直す。
渡し板が外れて手摺りの向こうに消えた。
ファルシオンは危うく海に落ちかけた事さえも気付かないまま、金色の瞳を見開き、真っ青な顔で水音のした方向を見つめていた。
全身を冷えた水が包み込んだ。
叩きつけられるように落ちたせいで勢いが止まらず、数間もの深さへと一息に沈む。
自分がどこを向いているのか、一瞬全く判らなかった。大量の白い泡が身体を覆い、すぐに消えていく。
消えていく先に、揺れる丸い光が見えた。
円が零れ、また結ばれ、零れる。
揺らぐ円の周りに巨大な影が幾つも揺らいでいた。
（船――と、太陽……？）
あれが海面だと判った瞬間、不意に丸い光が弾けた。
海面を破って黒い影が飛び込み、影から伸びた手がレオアリスの喉を掴む。
「！」
立ち昇る白い泡のすぐ向こうに、ヴェパールの平べったい顔が覗いている。
喉を締め上げられ、噛み締めた歯の奥から泡が零れる。食い込む指に左手を掛けたが、まるっきり外れる気配が無かった。
息が保たない。
その間にも身体は止（とど）めるものもなく沈んで行く。
（不味い……）
黒い影のようなヴェパールの向こうに、水面に差す陽光と浮かぶ船が見える。ファルシオンやスランザール達はまだ、あのどこかの船にいるはずだ。
（水面、に、出ねぇと）
ファルシオンを。
右手の剣を握り込んだ瞬間、その動きが見えたかのように、手首をヴェパールのもう一本の手が捉えた。
（く、そ――、動きが……）

視界が霞み始めている。
手足に海水が重く纏い付き、踏みしめる大地も無く、ただ沈んで行くだけだ。海中ではこの状況に陥る事は判っていた――いや、これほどまでに自由が利かないのは、確かに想定外だった。
自分の甘さに怒りを覚える。
ファルシオンを、必ず守ると誓ったはずだ。
王に。
それを。
どくん、と、身体の中で鼓動が鳴った。それが耳の奥にくぐもって響く。
ヴェパールの手が、咄嗟に退こうとして一瞬弛みかけ、すぐに再び力が籠められた。
「……せっかく我が領域に招待したのだ、楽しんでもらいたいところだが――」
ヴェパールの言葉は船上にいた先ほどまでよりも、耳にはっきり届いた。
「まずはマリ海軍を動かさないといかん。悪いが、お前の相手は後回しになる」
ヴェパールの胸が、微かにさざ波を生じているのが、霞む視界に映る。
「それまで生きていればな」
（不味……い）
そう思った直後、さざ波の中心から三叉の戟が飛び出した。
動きを封じられたまま避けようもなく、戟は深々と、レオアリスの胸に突き立った。
「――ッ」
すぶり、と肉に食い込む。
のけ反った喉の奥からは声は音にならず、代わりに肺の奥に残っていた僅かな酸素が零れる。
海水が赤く血に染まり、それもすぐ流れに散らされる。
戟は三つの刃先が背中から覗くまで埋まり、動きを止めた。
（――）
見開かれた瞳が浮かぶ船影を捉え、次第にただの硝子玉のように、その奥から光が失われて行く。
右手の剣が一度明滅し――、
掻き消えた。
ヴェパールは手を伸ばして髪を掴み、顔を覗き込んだ。瞳は半ば開かれ、だがヴェパールの姿を捉えてはいない。
「戟はしばらく預けておこう」
低く笑い、掴んでいた手を離した。レオアリスは指先一つ動かさないまま、ヴェパールの足元に浮かんでいる。
その向こうで一度光が明滅し、暗い水の底から、拳ほどの大きさの緑の光が上がって来た。光はヴェパールの胸の前に止まり、ゆっくりと揺れてたゆたう。
ヴェパールは海流に服の裾を揺らしながら、光の差す海面を見上げた。銀色の平らな両眼に海面に浮かぶ全ての船影を映す。
ふと前方に視線を止め、瞳を愉快そうに細めた。
「レガージュが、ようやく動いたか」
緑の光が明滅し、ヴェパールを中心に海流が揺れた。
ファルシオンはグランスレイの手を振り払って、船の手摺りを掴んで海を覗き込んだ。
「レオアリス！」
はっきりと、そう言った。
グランスレイとロットバルトは視線を交わし、ひと呼吸もなくロットバルトは足を船室へ向けた。グランスレイがファルシオンの肩を引く。
「殿下、ここは危険です、どうぞ船縁からお離れください」
「――」

ファルシオンはグランスレイの声も聞こえていないように、金色の瞳を見開き、手摺りの隙間に覗く青く輝く水面を見つめている。
グランスレイは状況をほぼ理解しながらも、無意識に息を潜め、ロットバルトが降りた船室への階段を睨んだ。

つい先ほどまで会談が行われていた部屋へ駆け込み、ロットバルトは奥歯を噛み締めて立ち止まった。
「――」
レオアリスの姿も、ヴェパールの姿も無い。扉の正面の板壁に大きく亀裂が開き、その向こうに空とマリ海軍船の船体が覗いている。
あの剣の気配すら無い。
ロットバルトは割れ目に寄って海面へ視線を走らせ、壁に拳を叩き付けると、踵を反した。
一番、避けたかった展開だ。水中に落ちたとなると、どう考えてもレオアリスに有利な要素など無い。
（元々足場が限定されている分、可能性は高かったが……いや、元からほとんどがヴェパールの領域か）
ただここが西海ではないという、それだけの地理的優位しか初めから自分達には無かったのだ。
だが、それも承知の上であり、西海がここまで大胆に絡んでくるとは想定できていなかった時点で、不利を挙げても始まらない。
（今は――）
再び陽差しに晒された甲板へ戻る。無言で問いかけるグランスレイへ一度視線を向け、それからファルシオンの傍らに膝を着いた。ファルシオンは真っ先に、咳き込むように尋ねた。
「レオアリスは？！」
あの船室を見てきたかのように、ファルシオンは大きな金色の瞳に不安を浮かべている。ロットバルトはそれには答えなかった。
「殿下、貴方は船へお移りください」
「いやだ」
「――安全な場所へ身を置くのも、殿下の務めの一つです」
安全、と自分で口にしておいて、ロットバルトは心の内だけで笑った。自分達に許された領域は、今となっては不確かに浮かぶ僅かな範囲でしかない。近衛師団はもとより、マリ海軍でさえ、能力が機能するのは海上戦に於いてだ。
一体どこが安全と呼べる場所だと言うつもりなのか。
ロットバルトの僅かな迷いを読み取ったのか、ファルシオンはまた首を振った。
「レオアリスはどうしたんだ」
「心配ありません。殿下をお守りする為に別の場所におりますから」
「――うそだ」
「殿下」
「そなたはうそを言ってる」
ファルシオンの瞳を見て、ロットバルトは少しだけ困ったように口調を緩めた。
「どうぞ近衛師団の役目をご理解ください」
「やくめ？」
「何があっても、殿下を第一にお守りする事が近衛師団の使命です。今は確実に、その使命を果たさなくてはなりません」
「……そん、な」
唐突に先日のレオアリスの言葉が心を掠め、ファルシオンは身を竦めた。
使命。
『この身に代えても必ず、殿下をお守り致します』
レオアリスは父王に――剣の主に、そう誓ったから。
（だから一人で残ったんだ）
ファルシオンがそこにいたせいで。
「そんなの――」

呟きかけ、それが言葉にならない内に、ファルシオンは金色の瞳を見開いた。
どくり、と鼓動が鳴る。
鼓動は早鐘のようにうるさく音を鳴らし始めた。
「――レ」
一瞬――、気配が、伝わった。
「殿下？」
ロットバルトとグランスレイが訝しそうに瞳を細める前で、ファルシオンは膝の力が抜けたようにすとんと甲板に座り込んだ。
「殿下？！」
「レオアリス……」
胸が、どくどくと脈を打って気持ちが悪い。
一息に押し寄せた不安に、ファルシオンは甲板に両手を付いた。
甲板を――船の下に広がる、青い海を見つめる。
「殿下、どうされました」
「あ……」
ファルシオンが青ざめた瞳を向けた時、ぐらりと足元が揺れた。
波の揺れより大きい。
「何だ」
グランスレイが素早く辺りを見回す。ロットバルトはファルシオンを抱き上げた。
「いやだ――レオアリスが……」
縋ろうとするように、ファルシオンが甲板に手を伸ばす。ロットバルトはその様子を束の間見つめ、そして視線を引き離した。
ファルシオンが何を感じたのか――、だが、確実にファルシオンをここから遠ざけなくてはいけない。
「――貴方がお退きになられなければ、他の者が退けません。スランザール公も――、そこの船で待機している近衛師団隊士達もです」
そう言って甲板の中程にいたスランザールの傍らに降ろす。ファルシオンは一瞬我に返って、スランザールと老法術士を見回した。ファルカンは船縁にいるが、怪我のせいで顔は青ざめ苦しそうだ。
今いる船のすぐ隣には乗ってきたレガージュの交易船がいて、甲板ではフレイザーや近衛師団の隊士達がファルシオンを待っている。
「――で、でも」
ファルシオンは首を振り、足元へ瞳を落とした。
「でも」
老法術士はファルシオンの前に出て膝を折る。
「私が殿下を港へお送り致します」
「私は――いい……、そうだ、スランザールと、ファルカンを、先に」
「申し訳ございません……今の私では、殿下お一人だけに」
老法術士もまた、肩や背を赤く染めている状態だ。
それでもファルシオンは尚も首を振った。「私だけなんて、ダメだ――私は残る……」
「殿下、あの混乱した港へお送りできるのはお一人のみなのです。ですが一度道を通せば、その後は術を用いるのも容易になります。どうぞ今は」
「ダメだ！」
払いのけるように、ファルシオンは鋭く叫んで後ずさった。
「ダメだ……」
ここを離れたくない。
（助け、なきゃ……）
何が起きているか、ファルシオン自身判っている訳ではない。
それでも鼓動は早鐘を打っている。
「殿下」
「いえ――港へお送りするのは避けた方がいい」
予想に反して、首を振ったのはロットバルトだった。
「レガージュ船団が出て来ています。目的は判りませんが、二発の火球

砲を撃った以上、船団が出る理由は殿下の救出かマリ海軍との交戦、このいずれかでしょう」
　ファルシオンはロットバルトの示した方角を見つめ、それから瞳を見開いた。ロットバルトの言っている意味は、幼いファルシオンにもはっきりと判った。
「そんな――だってファルカンがここにいるのに。ファルカンはそんなこと言ってないだろう」
「その通りです。おそらくレガージュの総意では無いでしょう。しかし万が一にも交戦になる事は、双方にとって全く意味がありません。回避する最善の手段として、マリ海軍は殿下がここに来た時と同様に、同じ船で問題なくレガージュへ戻るその様を、明らかにレガージュ船団へ見せる必要があります」
「――」
　ロットバルトは膝をつき、深く頭を下げた。
「殿下――、恐れながら貴方には、アレウス国の国使として、儀礼に則って帰途に着く責務がある事をお考えください」
「国、使……」
　ファルシオンは唇を噛み、足元を見つめた。
　さきほどの感覚は微かで、それが不安をどんどん大きくして行く。
「どうぞ――。殿下が国使として動かれる事を、陛下も望んでおられます」
「――」
　嫌だと、首を振りたい。
　それでも、ファルシオンは頷いた。
「わかっ……た――」
　どおっと波音が船体に打ち付ける。
「!?」
　再び、今度は先ほどよりも大きく船体が揺れた。
　辺りを見回した兵士達の目が、海面に落ちる。
『何だ……み、見ろ！』
　海面が盛り上がり、それから、海水が停泊しているマリ海軍の船体を這い上がり始めた。
　十番船と同じように――、ただ十番船を包んだ時は微かな水音すら立てなかったそれが、今は無遠慮に音を出している。
　びちゃり、びちゃりと爬虫類が壁を登るように、不快な水音を誇示してゆっくりと這い上がる。
『提督……！』
『チ』
　メネゼスは隻眼をきつく眇め、隣り合う二番船の船体を睨んだ。
　薄い、海水の膜が、二番船の船体を下から覆おうとしていた。その隣も、いや、マリ海軍の軍船十一隻、全てを。
『海水――なるほど、十番船をこうやって操ったのか』
『提督、一体』
　会見の場にいず事情を知らない兵士達は、何が起こっているのか理解できないまま、辺りを見回している。
　どの船も例外無く、確実に海水に覆われていく。
　ちらりと視線を走らせれば、前方には船足の早いレガージュ船団の船が近づきつつあった。メネゼスは帆柱に置かれた伝令台を見上げ、号令を掛けた。
『――櫓を下ろせ！　百三十度回頭――退く！』
　陸から吹く風を捉え、まずはレガージュ船団との距離を取り、火球砲の射程の外に置く必要がある。また距離を取る事で、レガージュ船団へ戦闘の意思が無い事も示す事にもなる。
　メネゼスの号令が信号となって全船へ飛ぶ。マリの兵士達は甲板や船倉を慌しく駆け回った。
『帆を張れ！　回頭して風を掴む』
　両側計二十本の櫓が慌しく海面に落ちる。
　だが、降りた櫓は飛沫すら上げず、兵士達が力を込めて漕ごうとして

も、固定されたようにぴくりとも動かなかった。
『何だ――』
メネゼスは足音も荒く船舷に寄った。
見下ろした海面で、既に水が櫓にがっちりと噛んでいる。
既にメネゼスの軍船は全て、港に停泊した船よりも更に強固に、海に船体を捕らえられ縫い止められていた。

二十二

『――くそ』
メネゼスは手摺りに手をついたまま這い上がってくる海水を睨み、じっと考え込んだ。
びちゃり、びちゃりと不快な音を立てているものの、這い上がる速度はいっそ焦れるほど遅い。その遅さがまるで、手の打ちようが無い彼等を嘲り、弄ぶようだ。
事実、手は無い。マリ海軍の事情などお構い無しに、レガージュ船団は追い風を受けて進んでくる。
『前門の何とやらだな。厄介だぜ、威嚇にも撃つ訳にはいかねぇ』
だが間違い無く、ヴェパールはもう一度、彼等に火球砲を撃たせようとしているのだ。海水が完全に船を覆えばそうなる。
レガージュ船団が距離を詰めるほど、操るヴェパールには好都合。
『提督』
『……まあとにかくレガージュ船団へ伝令使を送れ。全船には間違ってもレガージュを攻撃するなと伝えろ』
副官は頷いて操舵室へ向かった。メネゼスが振り返る。
「アレウスの近衛師団」
グランスレイとロットバルトがメネゼスへ顔を向けた。
「貴侯等はヴァイパルの戦法に詳しいか」
ロットバルトが目礼して口を開く。
「――残念ながら、実戦経験は既に三百年も前の歴史上の記録に過ぎません」
「まあそうか」
「近衛師団は水練経験もさほど。正規軍も同様でしょう」
「ほう――では、いざ戦端が開かれた時には、陸上に防塁を築き誘い込む予定だったか――レガージュに？」

どことなく、鋭い刃を感じさせる問いだった。陸上に防塁を築く事により蒙るだろう街の被害をちくりと刺している。
ただロットバルトはそこには答えなかった。当然、そんな議論をする余裕は無いのはメネゼスも承知の上だ。
「条約上、水軍を保持しない条件になっています。争う事自体を想定していません。今現在も、それは変わっていないのです」
「厄介な条約だな。すると今も――近衛は港から海上へは一歩も出ないと言う事か」
そう言って陸を見た。飛竜の影が港の上空を飛んでいるのが判る。
「戦闘目的では。しかし」
ロットバルトの口調が含みを帯び、メネゼスは隻眼を細めた。
「ファルシオン殿下の救出と、マリ海軍がレガージュ港沖で遭遇した不測の事態に対し、『救援』を向けたとしても問題は一切生じないと考えます」
「――」メネゼスは呆れを覚えて口を閉ざし、一瞬突き上げた笑いを堪えた。『こいつぁ全く』
アレウス国には、西海の関わりを認める気は一切無いと、そう明言しているのだ。
要はヴェパールとの争いはマリ海軍の中で収めてくれないかと、そういう腹積りでいて、隠しもしない。
『この期に及んで拘るか。既に破綻してると思うがな』
『堅持しています。今後も』
独り言のつもりだったがそう言えばマリ語を解したかと、メネゼスは肩を竦めた。ロットバルトはてらいも無く続けた。
『そもそも海戦など、我々がにわか仕込みでやったところでマリ海軍の足元にも及びません。火球砲を有するマリ王国海軍は南海の覇者でしょう』
『海戦にならねぇんだよ、判ってんだろうに』
『期待を掛けていましたが』
『そりゃ有難い。だが足が動かねぇんじゃ意味がねぇ――せめて目標が見えりゃあ少しは違うがな。大体俺達の船はこんな状況を想定して造られちゃいねぇんだ、北の氷の海に行く奴でもない限り、足が固まるなんて状況は考えやしねぇ。まあこの鬱陶しい代物は破砕もできなさそうだが』
メネゼスは這い登る水に眼をやった。ぶよぶよと形が無く、鎚の勢いなどあっさり飲み込むだろう。
『情けねぇ話だが、諦めて船を放棄するしか手が無い』
メネゼスは諦めた様子は微塵もなく、そう言った。
ロットバルトは一旦メネゼスの隻眼を見つめ、一礼した。
「――力が足りず、申し訳ありません。我々もレガージュ船団へ伝令を向けます。彼等が納得して引き上げるのが先か」
ヴェパールの支配が先か。
ロットバルトは背後のファルシオンへ視線だけを向け、もう一度マリの言葉に変えた。
『万が一の場合、ファルシオン殿下だけは何を於いても、この場から退避させていただきます』
『それがいい』
ゆっくりと、レガージュ船団が確実に射程に入るのを待つようにヴェパールの操る海水は船体を這い登り、だが今や船首に開いた火球砲の砲門に達しようとしていた。
四角い窓を越え、びしゃりと音を立てて、砲室に海水が落ちる。寒天のようにぶるぶると震え、あたかもそういう生き物のようだ。足を這い上がってくるそれを水兵達が慌てて払い落とすが、切りが無い。
『は、入って来ました！』
『提督、ご指示を』
『これは一体』
伝声管がひっきりなしにメネゼスの指示を求めてくる。メネゼスは今や船体の三分の二までを覆っている海水を睨んだ。

櫓を漕ぐ事もできず、風を捉える為の回頭もできない。ファルシオンを船で送り返し、レガージュ船団へ意思を示す事もできない。
あと少しすれば、火球砲はマリ海軍の意思とは無関係に、レガージュ船団に撃ち込まれる。
メネゼスはゆっくり、息を吐いた。
『――まだ火球砲は操れるな』
副官はメネゼスの横顔を見た。長年従った上官の考えを汲み取り、額を青ざめさせる。
『提督――』
『自分の意思で操れる内に砲門を破壊するしかねぇだろう。レガージュ船団に撃ち込んだら本国を確実に巻き込む事になる』
『――』
『それなら船団と引き換えた方がまだ安い』
メネゼスはあっさりとした口調でそう言ったが、副官はぐっと奥歯を噛み締めた。
この船団は、メネゼスが腕一本で作り上げてきた、いわばメネゼス自身だ。マリ王国海軍は七つの船団を持つが、船団の半数もの船が火球砲を備えているのはメネゼスの船団を入れて二つ――王国第二位の海軍船団だった。
軍船の下賜は、国王の信頼の証――
彼等、メネゼスが率いる水兵達の誇りでもある。
『すまねぇな。――火球砲を発動させたら、全員船尾に退かせろ』
『いえ――！』
副官は返す言葉が見つけられず、踵を打ち付け、敬礼した。彼から視線を外し、メネゼスは再びグランスレイとロットバルトを見た。
「アレウスの――王太子殿下を港に送った方がいい。それから、兵の救出に飛竜を出してもらえると有難い」
「――了解しました」
グランスレイはメネゼスの選択を察して黙礼し、フレイザーへと合図を送った。ロットバルトはファルシオンの前に膝を着いた。
「殿下、状況が変わっています。貴方はいつでも、法術士と港へ飛べるようにお待ちいただきます」
いやだと反対するかと思ったが、ファルシオンはじっと俯いている。ロットバルトはファルシオンを促そうとして手を止めた。
ファルシオンの瞳に、金色の光が揺れている。
「――あれは、何？」
「殿下？」
ファルシオンの視線は甲板に落ちていた。
いや、それよりも先を、ファルシオンは見ている。
「緑色の――光がある」
「光？　……どこに」
「海中だ――」
指を差す。
メネゼスはファルシオンを見て、船縁から海中を探った。ファルシオンが指差したのはちょうど隣り合う三番船との間辺りだ。
『――あれか』
光を反射する波間に、微かに揺れては隠れる緑の玉が見える。
海中の――
『水深は判らねぇな。――』
二、三拍、呼吸を止める。
ファルシオンは先ほど、セルメットに化けていたヴェパールの正体を見破った。
すうっと息を吸う間に意思を決め、拳で手摺りを打った。
伝令官を振り仰ぐ。
『全船へ通達しろ。海域を離脱する――！　火球砲を、下方七十五度へ向けろ！』
メネゼスの号令が各船に伝わり、船上はにわかに慌ただしさを増した。火球砲を備える五隻の砲室では、砲手が粘つく水を踏み分けて砲身へ

寄った。
術式が発動し、鋼の砲身を光の文字が円となって回る。
『一番船と三番船は目視で緑の光を狙え！　他は狙いは要らん、合図と同時に、とにかく海中に撃ち込め！　砲撃後回頭、南進する』
「マリが火球砲を撃ちます。殿下、お身体を低く」
意識を海面に奪われていたファルシオンは、火球砲という言葉にはっとして顔を上げた。
「ダメだ、うたないで――！」
あの光の傍には。
ファルシオンの制止は、メネゼスには届かなかった。
『撃て！』
「ロットバルト、止めて、レオ……」
割れ鐘のような音を立て、火球砲の砲門が一斉に火を吹いた。大気が烈しく震える。
ロットバルトがファルシオンの耳を被うようにして身体を抱え込み、その肩ごしにファルシオンは青い空を見た。
幾つもの水柱が吹き上がり、水が砕ける音が弾ける。
振動が船体を揺さ振る。
甲板やそこにいた者達の上に、海水が雨のように降り注いだ。
「――ああ！」
ファルシオンは鋭く悲鳴を上げたが、辺りを圧する音に掻き消された。

「何だ――！」
レガージュ船団の男達は、マリ海軍が海面に向けて火球砲を撃ち込んだ事に、驚きの声を上げた。
「海中に撃ったのか？」
「あいつら、何やってやがるんだ――」
マリの伝令使が戦闘の意思なしと伝えた時には一顧だにしなかったが、目の前のこの行動はさすがに頬を叩かれたような効果があった。
「速度を落とせ――！」
「おかしいぞ」
帆を操って風を逃し、レガージュ船団の三隻の船は徐々に減速していく。
その帆柱の上を三騎の漆黒の飛竜が一旦通り越し、それから騎首を戻して旋回した。
「おい、近衛師団だ」
三隻それぞれに飛竜が降下すると、舳先の辺りに浮揚した。船団の男達が駆け寄る中、飛竜の背から近衛師団隊士が声を上げる。
「王太子殿下はご無事だ。ファルカン団長の尽力もあり、マリ王国と我が国との間の誤解は解けている」
「団長が？」
「じゃあさっきのマリの伝令使は本当だったのか――でもじゃあ奴ら何を相手にしてるんだ」
驚いてマリ海軍を眺める船団員達の上を次々、近衛師団の飛竜が駆け抜けて行く。次いで紅玉の鱗の、正規軍の飛竜も飛んだ。船団員達は戸惑いながらそれを見上げた。
「どうなってんだ」
「マリが回頭してるぞ」
「おい――あれを！」
指差した先でマリ海軍の軍船が回頭し、南進しようとしている。
その船の後を、波ををぐぐ、と擡げ、海が追うのが見えた。

「ザイン、待ってくれ」

領事館の廊下を歩き時折ザインに背中を押しやられながら、ホースエントは何度も後ろを振り返った。
「私は、本当にヴェパールとは」
ザインは厳しい眼差しを崩さず、ホースエントの言葉を聞き入れる素振りも見せない。
床に厚い絨毯が敷かれているせいか、それとも港の騒ぎに出払ってしまっているのか、廊下には誰も出て来ない。誰かが二人を見つけて止めてくれればとホースエントは何度も思ったが、願いは全く叶わないまま、寝室の前に着いてしまった。
ザインはホースエントの右腕を掴み、もう一方の手で扉を開けた。
さっと光が差す。
前面に並ぶ何枚もの硝子の折れ戸から陽光が差し込み、室内は光に満ちていた。輝く青い海が硝子戸から覗いている。
二間ほどの前室があり、扉は無く主室へ続く造りだ。白い漆喰の塗り壁と、青や橙、黄色をちりばめて模様を描いた陶器の床。同じく陶器で造られた寝台の柱と天蓋。
その鮮やかで平穏という言葉が相応しい部屋へと、ザインはまるで違う場所にいるように、凍てついた空気を纏って踏み込んだ。前室との境に立ち、明るい室内に視線を巡らせる。
「どれだ？」
「ど、どれとは」
ホースエントの背中をぐっと掴んで部屋へ押し込む。ホースエントはつんのめってから振り返った。
「ヴェパールを呼び出す小道具があるだろう」
「そんなものは……」
ホースエントの視線が泳ぐ。その先、寝台の反対側の隅に一角、長い布が覆い隠すように垂らされていた。
ザインは歩み寄り、布に手を掛けた。
「ま、待て」
構わず布を引く。天井に仮留めされていた布が外れ、空気を孕んで落ちる。
その向こうに、小さな円卓に乗せた水盆があった。
両腕で抱え込めるくらいの直径で、深さは親指の関節ほどしかない。
「手を洗うとも思えないな――これか？」
「ち、違」
「お前は判り易い。どうやればいい」
「知らない」
ザインは苛立ちの混じった溜息をついて身を返し、ホースエントの前に立った。
「知らないはずがないだろう。ヴェパールをここに呼び出せ。今すぐにだ」
ホースエントは必死に首を振った。
「本当に、し、知らないんだ……！　私は、私から呼び出した事は無いんだ、いつもあいつが、勝手に」
「嘘を言うな。俺がこの場でお前を斬らない保証はないぞ」
「本当だ！」
ザインはホースエントの眼を正面から覗き込んだ。
ホースエントの喉が緊張に動く。
今にも剣を現わしかねない、息が詰まるほどの気配に、恐怖が募る。
実際今にも――、ザインはホースエントを切り裂くかと思えた。
「ひ、ひぃ」
恐怖のあまり、ホースエントはガチガチと歯を鳴らし、ぐっと眼を瞑った。
「知らない……知らないんだ本当に」
「――」
ザインはホースエントの有様を眺め、苛立ちに奥歯を噛み締めた。
どうやらホースエントは本当に知らないようだ。
何一つ。

右腕の剣が騒めく。
ゆっくり、目の前のホースエントが気付かないほどにひどくゆっくりと息を吐き、ザインは沸き起こる怒りを抑えた。
ゆっくり、三度。
苛立ちのまま、ホースエントを斬り捨てたい衝動を。
ザインはホースエントを見、部屋の片隅の水盆を見た。
ヴェパールへ直接辿り着く手掛かりだと思っていた。
届くと思って手を伸ばしたところで、足元の梯子を蹴り飛ばされたように感じられる。
硝子戸の外へ眼をやる。露台と港の先に張り出した岸壁に阻まれ、マリ海軍や港の様子は見えない。
（初めから船で出ていれば――）
だがそれでは、ヴェパールに近付ける根拠が無かった。可能性が高かったからこそ、ここに来たのだ。
憤りが溶岩のように胸の内で沸き起こっている。
「――」
ホースエントはそろそろとザインから離れ、ただ扉へは行けずに硝子戸に寄った。
ザインの怒りが肌に伝わって来る。これほど焦り、怒りを纏うザインの姿を、ホースエントはこれまで見た事が無かった。
剣士を恐ろしいと思った事は無い。
だが今は、恐ろしかった。
心底。
陽光に満ちて暑いほどの部屋が、凍り付くように感じられる。
逃げ出す道を探してホースエントは窓の外へ目をやった。ホースエントの立っている場所からは、港が見える。ちょうどレガージュ船団の船が、沖を目指し岸壁を回り込んで行くところだった。
何の目的で船を出したのかは判らないまでも、ホースエントは思わずザインを呼んだ。
「ザイン――」
だが、そのままホースエントの視線は固まった。
ザインは硝子戸側を向き部屋の中央に、ホースエントは硝子戸の傍にザインを挟んで隅の水盆と向かい合う形で立っていた。
ザインの向うに水盆が見える。
その表面が、微かに波打っていた。
ホースエントは目を凝らしてまじまじと見つめ、それからひゅっと息を吸い込んだ。ザインが気付いてホースエントへ視線を向ける。
「何だ」
「あ、あああれ」
ホースエントが指を上げ、それを追って、ザインは水盆を見た。
「――」
ザインは水盆に向き直り――、笑みを浮かべた。
「どうやら、向こうから訪ねて来たようだな」
再び水盆に近付く。
水盆がさざ波を立てている。それは次第に揺れる幅を増すようだった。
「ザ、ザイン……あ、あ、危ないぞ……」
「――」
黒く鋭い眼差しに、光が踊った。
ザインの右腕が盛り上がり、剣が生じる。
さざ波はすぐに大きくなり、水盆から零れ落ちそうなほど渦巻いた。
「ザイン――！」
ザインは水盆に生じた渦の中心を睨んだまま、動かない。硝子戸に背中を押し当て、ホースエントは震える声を張った。
「ザイン、に、逃げた方がいい」
「――違う」
低く声を押し出し、ザインは渦の中心から、ゆっくり眼を上げた。
動いているのは水そのものではない――

水盆の水を波打たせているもの、その原因は、ザインの目の前にあった。
細く。
風が渦を巻いている。
小さな竜巻のようだった。
それが水盆の中心に立ち上がり、浅い水に渦を作り出している。
「な……」
ホースエントが良く見ようと首を伸ばした時、不意に水は、内側から砕けるように散った。
「！」
水しぶきが硝子の玉のような固さでザインに叩き付ける。
渦巻く風が弱まり、その中心に、白い爪先が降りてくる。
「ひっ」
ホースエントは息を吸い込みながら短く悲鳴を上げた。風の渦の中に、足先から、人の姿が現われる。風が中空を彫るように、形を作り上げていくかに見えた。
ほっそりとした足。身に纏う薄布が風になびく。
ほころぶ花のような笑みを浮かべた唇。
ザインは右の拳をぐっと握り込み、数歩、――足を退いた。
暁を思わせる、紫の瞳。
耳の下辺りで切られた緩く波打つ黒髪。
美しい、どことなく少女を思わせる空気を纏う女だった。
ザインの右手の剣が、微かに白い光を帯びる。
「――誰だ」
低く鋭い、だが抑えた声の響きに釣られ、ホースエントはザインの背中を見た。ホースエントにも判るほど、ザインは緊張している。
ザインが。
女は、微かに笑った。風が揺らす花弁の触れる音を思わせる。
「初めまして――会えて嬉しいわ。剣士ザイン」
「誰だ」
もう一度、ザインは低い声で尋ねたが、先に答えたのはホースエントだった。
「さ、さい……西方公――！？」
裏返った声で叫んで、ホースエントはその場に突っ伏した。
「こ、このような場に――わ、わたくしは、その」
先日のファルシオンの祝賀で遠目に眺めた、その人物だ。
「――西方公？」
ザインはホースエントを見つめ、再び女に視線を戻した。
「そそ、そうだっ！　お前も、ザイン、ひ、膝を着け！」
「――」
だがザインはぐっと歩幅を開いて立ち、女を見上げた。
「何故、西方公がここにいる？」
「ザイン！」
ホースエントは真っ青になって怒鳴った。女――ルシファーの唇に浮かんだ笑みが深まる。
「お前の事は良く知っている。ずうっと、気になっていたの。――そう、私たちはお互い似た境遇だとでもいうのかしら」
歌うように涼やかに、柔らかな口調だった。だがザインには、そうは感じられなかった。
感じているのは、剣に伝わる振動――
「でも、私とお前とは決定的に違う」
その瞬間だけ、ふっと紫の瞳が陰った。
「――」
危険だと。
剣が振動している。
ルシファーの瞳がザインの右腕の剣に落ち、笑った。
ただそれだけの仕草に、すうっと背を冷たい手で撫でられる感覚が

あった。
水盆の少し上に浮いているルシファーと向かい合う。まるで体重を感じさせない。
「――このレガージュに、何の用でいらしたのか」
「守護者らしい言葉ね。でもレガージュには用はないわ。あるのは、」
軽やかな笑いを含んで告げる。
「ザイン、お前」
ザインは無意識に奥歯を噛み締めた。底の知れない、明け方の光に払拭される前の闇を孕んだ、紫の瞳。
剣が急き立てる。
今すぐに。

斬れ。

「――」
その意思に触れながら、ザインは少なからず、驚きを覚えていた。
剣は――
剣は、怯えているのだ。
だがそれ以上に、ルシファーの次の言葉に驚いた。
「もしお前が望むなら、――ヴェパールに会わせてあげるわ。少しくらいは力も貸してあげられる」
「――どういう」
どういう事だと尋ねかけて、釣り込まれる事に危機感を覚え、ザインは一旦口を閉ざした。
同時に幾つもの疑問が頭に渦巻いている。
何故、たった今現われたこの女からヴェパールの名が出るのか。力を貸すとは。会わせると言ったが、何故ザインの置かれた状況を知っているのか。
何故、この領事館に現われたのだ。
（まさか、全てを見ていたとでも――？）
何の為に。
「ここに居てもヴェパールは出て来ないわ。今はマリ海軍の相手をしているし」
「――」
「それにちょっと困ってるのよ。レオアリスが、危険な状況で」
ザインはぴくりと剣先を動かした。視線が一瞬、硝子戸の向こうの海に流れる。
「助けなきゃね？」
何でもない相談をしているように、ルシファーは両手の指先を絡めて頭を傾けた。
「――貴方は、何を、どこまで――知っている。この件にどこまで関わっている？　何が、目的だ」
「あら、今言ったと思うけど」
「貴方の言葉の、どこに真実があるのか俺には判らない」
「そんな事を聞いている暇はあるの？」
ルシファーはザインを見下ろし、困ったように微笑んだ。そして肩を竦める。
「まあ、そうね。……私はあの娘を、余り泣かせるつもりはないの。困るのよ、このままだと――、色々とね」
ザインは僅かに苛立ちを昇らせ、ルシファーを見据えた。
剣士としての直感だ。
この女は優しく親密な言葉を囁く。
――信用すべきではない。
「――仰る意味が判らないな。貴方は敢えて俺を煙に巻こうとしているようだ。申し訳ないが、これで話は」
「フィオリ・エルベを知っているわ」

それまでザインが纏っていた空気が、一変した。
ルシファーの言葉に対する疑念に取って代わり、表情に渦巻く葛藤が浮かぶ。
ルシファーの示そうとしているものへの興味と、警告。そしてそれ以上に、その名がもたらす希求、喪失、飢餓。
ルシファーは面白そうに瞳を煌めかせ、それを眺めた。
「私もかつては、この辺りを良く訪れていたの。三百年前までのことよ。その時、まだ少女の頃の彼女に何度か会ったわ。彼女はレガージュの領主の娘だったしね」
「――」
ザインは黙ったまま視線を床に落とし、両手を握り込んで立っている。
「とても可愛らしい少女で、その中に聡明さがあった。長く続く戦乱を幼い頃から憂えていたわ。彼女の微笑みや彼女との会話を、私もまだ覚えてる。彼女の言葉は、自然と人に力や希望を与えるようだった――」
ルシファーはザインをじっと見つめたまま、言葉を継いだ。
「彼女の事は私なんかが語るより貴方の方が詳しいわね。あなたの主で――、大切な伴侶ですもの。ただ一人の」
囁くように、悼むように告げる。
「一緒にいられたのは何年？　二年か、三年だったかしら。たったそれだけで奪われてしまった。でも――」
風が囁く。そこに何か、意識を逸らしがたい欠片があった。
何かの、感情。
「忘れられるはずがない」
ザインの表情は見えない。
「私たちは、ただの昔話にはできない。過去に押しやる事は。――違う？」
ルシファーはふわりと水盆の前に降り、ザインへ左手を差し伸べた。
「お前は選ぶ事ができる」
ザインはゆっくり顔を上げた。
ルシファーがその唇に、鮮やかに笑みを刷く。
「私が手を貸し、仇に報(むく)いるか、――それとも、ここで何もせず崩壊の始まりを眺めるか」
ザインはしばらく黙ってルシファーを見つめていたが、その視線を差し出された白い手に落とした。後ろめたさを隠す時にするような、視線を逸らしたようにも見える仕草だった。
「……ヴェパールを俺の前に連れて来れるのか」
「連れて来るんじゃないわ。あなたが行くのよ」
「ザ、ザイン」
ホースエントが硝子戸に背を押し付けながら首を振る。
「だ、だ、駄目だ」
炸裂音が響き、部屋の窓が振動で割れんばかりにびりびりと鳴った。
火球砲だ。先ほど港に撃ち込まれた時の比ではない。
マリ海軍が全ての火球砲を一斉に撃ったのだが、そこまではザインには判らず、ただ、ザインの中に焦りを生んだ。
誰と、戦っている――？
落としていた視線を戻す。
「――いいだろう。乗ってやる」
ザインはそう言うと、あっさりと差し出された手を掴んだ。
「もう私の思惑は聞かないの？」
「必要無い。従う気も無いからな」
「――いいわ」
ルシファーの口元の笑みが広がる。
細い身体と、ザインの周りを風が取り巻き始める。
「ザ」
ホースエントはおろおろと二人を交互に見た。
引き止めるべきだと判っていながら、喉の奥に舌が張り付いたように声が詰まり、口に出す事ができない。
「――ザ」

「父さん！」
幼い、高い声が走った。
ザインは打たれたように肩を揺らし、それから振り返った。
戸口に立っているユージュを瞳を見開いて見つめ――、視線を逸らす。
「父さん待って」
ザインは聞こえていないかのように、もう全く振り向こうとしない。
ユージュが駆け寄る。
「行っちゃダメだ――！」
伸ばした手が父の腕を掴めずに、風に弾かれる。
「父さん！　行かないで！」
父が何をしようとしているのか、ユージュには判っていた。
そうしたらもう、戻って来ない。
「父さん――！」
ルシファーはユージュを見つめ、堪らない遊びを見つけた子供のような笑みを浮かべた。
二人の姿が消える瞬間、ルシファーは右手を延べてユージュの手を掴んだ。

二十三

唐突に、ぶつりと何かが途切れる音すら感じさせ、船体を覆っていた海水が剥がれた。
一瞬の空白の後、どっと海面になだれ落ちる。
砲撃で荒れた海面に更に波がうねり、船が揺れる。
『回頭しろ！』
メネゼスの号令に、舳先がぐぐ、と水を分けて動いた。自由になった櫓が水を掴み、掻き分ける。
船体が大きく右に傾ぐ。
「！」
ファルシオンを抱えたまま滑りかけたロットバルトの腕を、グランスレイが掴んだ。
「――法術士殿」
グランスレイは振り返って法術士を呼んだ。大きく張られた白い帆が風を掴み、船は南へと進み始めた。
ファルカンに支えられていた法術士が頷き、反対側に揺り返す甲板に手を付きながら、ファルシオンへと近寄る。
「殿下」
「――で……」
ファルシオンはロットバルトの手を振りほどき、声を振り絞るように叫んだ。
「何でうったんだ！　レオアリスがいるのに！」
ファルシオンの黄金の瞳には、幾つもの感情がごちゃ混ぜになっている。
憤りと悲嘆と、おそらく不信すら。
ロットバルトはゆっくり、息を吐いた。そこに含まれているものも単純ではない。
「――殿下、恐れながら今は、マリ海軍とレガージュ船団との戦闘を避

ける事が最も重要です」
幼いファルシオンには、それは冷徹とも感じられたかもしれない。金色の瞳を見開き、ただ首を振った。
「海面への砲撃と、船の回頭――この二つの行為は二つの意味を持ちます。ヴェパールの支配を断ち、レガージュ船団に疑問を抱かせる。メネゼス提督はそれを狙ったはず」
「そんなこと、聞いてるんじゃない」
「いいえ、殿下。今はそう行動すべき時です。掛かっているのは貴方のお命はもちろん、レガージュ船団の乗組員の命であり、マリ海軍の兵士の命です。近衛師団大将の判断も、おそらく今と同じでしょう」
「そんな、の……」
その先は続かず、ぎゅっと唇を噛み締める。
「――」
黙って下を向いたファルシオンを一度見つめ、ロットバルトは横に控えていた老法術士を見た。法術士が頷き、術式を唱え始める。

六隻計十二門の一斉砲撃は、確実に海中を揺らした。
メネゼスの司令船が放った火球が白い泡を大量に纏いながら、ヴェパールの頭上に迫る。
「――っ」
ヴェパールは頭上に向けて大きく口を開いた。
口が耳元まで裂け喉がぐぐ、と広がり、弾けるように喉の奥から塊が吐き出される。
一抱えもある水の塊だ。
火球とぶつかり合い、激しくせめぎ合う。
火球と水球は同時に砕けた。
砕けた欠けらが流星のように水中に散る。
落ちて行く幾つかが、ヴェパールの足元に横たわるレオアリスの傍を掠めた。
微かに――、指先が動いたように見えた。
ヴェパールはそれには気付かず、辺りを見回した。撃ち込まれた火球砲が、身に纏う海水を沸騰させながら、海底へと斜めに落ち、幻想的とすら言える光景だった。
だがそれがヴェパールを楽しませる訳もなく、水を伝わる熱が薄い皮膚を炙る。ヴェパールは忌々しく舌を打ち、腕を引っ込めて袖の下に隠した。
頭上でマリ海軍の船が動き出している。
船を覆い尽くそうとしていた支配が切れたからだ。当然、それを狙って火球砲を撃ち込んだのだろう。
ただヴェパールを視認できている訳ではない。火球砲は連射が利かず、次弾の発射まで一定の時間を要する。
それをメネゼスは一斉に撃たせた。
一か八か――、次弾を考えるより、ヴェパールの支配を断つ事に賭けたのだ。
「――所詮、悪あがきに過ぎん」
ヴェパールの傍らで緑の光が瞬く。ヴェパールは光の玉に手をかざした。光は、地上の法術で言えば触媒に近いものだ。ヴェパールの意思を素早く確実に、海中に伝える。
ヴェパールの苛立ちを示すように一度、大きく明滅した。

法術は、船の急激な揺れに途切れた。
「！」
風を受けて走り出していた船が、つんのめるようにがくんと船体を揺らす。
安定していた甲板が跳ね、その衝撃に体重の軽いファルシオンの身体は、宙に放り出された。

「殿下！」
ロットバルトやグランスレイが伸ばした手を邪魔するように、再び揺れが走る。
船がその場で舳先を支点にし、横風に煽られて方向を変える。
ファルシオンは甲板の手摺りの向こうに落ちた。
海だ。
「殿下――！」
甲板から同じく数名の兵士が振り落とされるのが見える。
ロットバルトとグランスレイが手摺りに駆け寄る前に、銀色の影が上空から真っ直ぐ急降下した。
「ハヤテ――！」
手摺りの向こうを矢のように横切る。
銀翼の飛竜は海面すれすれでファルシオンの身体を救い上げると、その傍に落ちたマリ海軍水兵の身体を脚で掴み、再び上昇した。
一度船を通り越して旋回し、甲板のやや上に浮く。
ハヤテより遅れ、近衛師団と正規軍の飛竜が降下し、海に落ちた兵士達を拾い上げていく。
「ハヤテ、良く来てくれた」
マリの兵士達が駆け寄り、ハヤテの脚の爪に引っ掛かっている同僚を甲板に降ろす間、ハヤテはその場に器用に留まりながら甲板を見渡した。
青い瞳が問い掛けるようにグランスレイ達を見つめる。
自分を呼んだレオアリスがいないのを不思議に思ったのか、ハヤテは瞳をぱちりと閉じた。
「――ハヤテ、殿下をそのまま港へお連れしろ」
「ダメだ！」
ファルシオンはハヤテの背で身を起こし、叫ぶ。
帆はまだ風を受けていたが、船は船体を斜めにして舳先を北西に向け、やがてぴたりと止まってしまった。
『チ』
メネゼスは舌を打ち、海面を見下ろした。
『これまでか』
『提督！』
再び、今度は先ほどまでの遅さが嘘だったかのように、海水は船体を這い登り始めた。
『もう復活しやがった――火球砲を』
メネゼスが指示を終える前に海水はあっという間に砲門に至ると、砲身を飲み込みさらに甲板へ辿り着いた。
メネゼスやマリの水兵達、そしてグランスレイ達の足元を膝まで覆い尽くし、帆柱を這い登り、物見台にいたマリの兵士を捉える。
「ハヤテ」
グランスレイがハヤテを急かすと、ファルシオンはハヤテの背で身を捻った。
「ダメだ、私はここにいる！」
「申し訳ありません」
飛び降りようとするファルシオンの背を、グランスレイはぐっと抑えた。
「副将、老公を」
グランスレイはファルシオンの背を抑えたまま右腕を伸ばし、ロットバルトが抱えていたスランザールを、ハヤテの背に移す。
「わしは良い。それよりも殿下には護衛が必要じゃ」
「無論承知しています。しかしこの水のせいで足も上がらない。申し訳ありませんが……」
海水は膝の位置まで達し、そこで止まったものの、重く脚に絡み付いている。スランザールは眉をしかめた。
「ヴェパールめ、あくまで見せる肚か」
意識を奪う事なく、ヴェパールがマリの軍船を操りレガージュを攻撃する所を見せようという意図が見え隠れしている。

「まずはできる限り上空へ。殿下の護衛には、今飛竜で来た者を付けます」
「ハヤテ」
グランスレイがハヤテの首を叩く。
ハヤテはもう一度レオアリスの姿を探して辺りを見回し、それからばさりと翼を打った。
ハヤテのはばたきと、海面が唸るのは同時だった。
海水が竜巻となって立ち上がる。
ロットバルトは海面を睨んだ。
（ヴェパールはどこまで見えている――）
ビュルゲルとの戦いから判ってはいたが、これほど大量の海水を自在に操るという事に驚かされる。今はハヤテの翼に任せるしか手が無い。
飛び立つ近衛師団の飛竜を追って、次々と竜巻が立ち、或いは海上を走り或いは高く伸びる。
マリ海軍の船団が、まるで木の葉のように揺れる。
竜巻が舳先を掠め、船首の帆柱を折る。
船体は音を立てて軋み、身動きがとれないまま兵士達は身を縮めた。
『無理だ――船が保たない！』
軋む音はますます激しく、あちこちで悲鳴が上がる。それはハヤテの背にいるファルシオンにも届いた。
「ハヤテ、戻れ！」
ファルシオンは必死にハヤテの鞍に掴まり、後ろのスランザールの手をぎゅっと掴みながら、それでもそう叫んだ。
ハヤテはファルシオンの言葉を聞き入れず、追いかける海水の柱を縫うように飛んだ。竜巻が次々立ち塞がり、それを避けて方向を変える。
ファルシオンにはもう、もといたメネゼスの船がどれかも判らない。グランスレイやロットバルト、ファルカン達の姿も見えない。
海は荒れ、今にもマリ海軍の軍船全てを引っくり返し飲み込みそうだった。
「戻れったら――！」
唐突に、目の前に海水の幕が出現し、ハヤテは直角に方向を変えた。
「うわ」
「で、殿下」
姿勢を崩したスランザールが滑り落ちそうになり、ファルシオンは必死に捕まえた。
ハヤテを追って海水の幕が真横に伸びる。
ぐぐ、と伸び切りハヤテの尾に迫ったが、そこで限界に達したのか、ふいにただの海水に戻って眼下の船に降り注いだ。
ザァァ、と水滴が甲板や海面を叩く音が響く。
ハヤテが再び身体を向けた先に別の竜巻が立ち上がる。ハヤテは行き場所を探して旋回した。ヴェパールはどうあっても、ファルシオンをこの海域から出さないつもりなのだ。
ファルシオンの瞳が海面をさまよう。
あの緑色の光が、どこかにあるはずだった。
あれを見つけて――
（見つけて……）
どうするのか。
眼下の海は荒れ、波と立ち昇る幾つもの竜巻が浮かぶ船を揺さぶり、軋ませている。
（――父上なら）
ここにいるのが。
ここにいるのが父王であったなら、全てを救っている。
自分は、ただ護られるだけ。
何の力も無い。
だからレオアリスが、ここにいないのだ。
喉の奥が熱く重くなり、ファルシオンは俯いた。
「レオアリス――」

二十四

まるで現実のものとは思えない光景だ。
耳元を轟轟と風と水の音が唸る。
十数本もの水の竜巻が天と海を繋ぐように立ち上がり、それが天然の檻となってマリ王国海軍の船団を取り巻いている。十一隻の軍船もファルシオン達の乗ってきたレガージュの交易船も、竜巻が起す荒れた波に木の葉のように揉まれていた。
それでいて、船体をぶよぶよと固まりに似た海水が捕らえている。
操舵は全く利かず、竜巻の間をすり抜ける無謀な行為さえ叶わなかった。
重く糊のような水に足を捉えられたまま、メネゼスは荒れた風が周囲を渦巻く中それを見上げた。
『ふざけた力だ――』
船を捕らえ、そして竜巻や水の幕を操る。それを全て一人の男が動かしているとは、実際眼にしていても信じ難い。
『ヴァイパルめ』
船を操り沈める海の魔物――そんなもの相手に、一体何をすればいいのか。
ここを切り抜け、兵士達を無事――、できる限り無事に、連れて戻るには。
『括りつけられて動けねぇんじゃ話にならねぇ』
見渡す甲板はどの船も、混乱し、兵士達は青ざめ怯えた顔でこの光景を見回している。
荒れた海とそこから立ち上る幾つもの竜巻。
その向こうの奇妙に青い空。
終わりに、見える。
『提督！』
竜巻が船腹に迫り、船が斜めに傾ぐ。足を水に固定されたままで、身体が振られる。帆柱の物見台にいた水兵が、ずるりと足を滑らせ、甲板へ落下した。
わっと声が上がる。
皮肉にも寒天状の水の塊が衝撃を吸収し、水兵の体はその上で一度弾んだ。だがすぐに落ちた肩から水に沈んで行く。傍に居た二人の水兵が慌てて手を伸ばし、同僚の身体を引っ張り出した。
メネゼスは息を吐き、それから足元の水を睨んだ。駆け寄ろうとしたが僅かに二歩、前に出れただけだ。
『チ』
『――メネゼス提督』
斜め後ろにいたロットバルトが、メネゼスの向こうに落ちた水兵と、マリの兵士達が彼を引っ張って何とか立たせるのを見つめながら口を開いた。
『好機かもしれません』
『何だと？』
このどこが好機なのかと、メネゼスは半ば呆れた顔でアレウス国近衛師団の参謀官を振り返った。
『どこがだ』　口に出してもそう言う。
ロットバルトは落ちた男を指差した。
『今、帆柱から落ちたのは、足を滑らせたからだと見えました』
『そうだろう。あれだけ傾けば、さすがに熟練でも立ってるのは無理だぜ』
『足を滑らせたという事は逆にこの海水、これの捕捉力が弱まっていると考えられます。あの兵士を引っ張り上げられるのがいい証拠です』
メネゼスは落ちた兵士を再び振り返り、男がまだ青ざめた顔をしているものの、甲板に断っているのを見、それから自分の足元を見た。
『ヴェパール一人でこれだけの質量を操るには限度があるはずです。十二隻の船を押さえ込むのに加え、あの水竜巻を操るのに要する精神力は並大抵ではないでしょう。見方次第では、好機とも』

二歩しか動けなかったと取るか、二歩、動けたと取るか。
『ヴェパールは敢えて我々を完全に覆いつくす事をしなかった。我々にレガージュとの戦いの結末まで見せようという肝(はら)でしょうが、それは今、裏目に出たとも言えます』
『――、なるほど』
メネゼスはぐ、と力を籠め、重く粘つく水を断つように、足を踏み出した。ざぶりと足元の水が鳴る。
『そういや、火球砲も生かしてくれてたな――』

耳元で風が唸っている。交じり合う激しい水音。
唐突に向きを変え目の前に迫った竜巻を、ハヤテは潜るように躱した。その向こうにもう一本の竜巻が迫り、斜め左へと抜ける。
ファルシオンは右へ左へと疾駆するハヤテの背から、荒れる竜巻と海を見下ろした。できるのはこうして見下ろす事だけだ。
無理な飛行を強いられ、ハヤテの強靭な翼にも負担がかかっている。ぎゅっと眼を瞑る。
(父上だったら――)
今ここにいるのが父王だったらと、何度も何度も思わずにはいられない。そう思わせる理由はまた別のところにもあったが、ただその事がファルシオンの頭を占めていた。
父王ならば全てを救い、この混乱を収めたはずだ。
そもそも会談の時から、父王であれば何の問題もなく話を進め、結果は全く違っていたに違いない。
父王ではなくても、他の公爵達の誰かなら。もともとスランザールやロットバルトだけなら。
今この場で自分だけが、何の役にも立っていない。
何故父王は、何の力もない自分をこんな大事な場に向けたのだろうかと、そう思った。ファルシオンはただ助けられるだけで、誰も助けられない。
こんな姿を父王が期待していた訳ではないはずだ。
もっとできると期待をかけられていて、ファルシオンがそれに応えられていないだけなのかもしれない。
自分はもしかしたら、父王の命令を断るべきだったのかもしれなかった。自分には無理だと、そう正直に言うのもファルシオンの立場では大切な責任だった。
(そうだ――そうしたら)
グランスレイやロットバルトがファルシオンだけを逃がしたのは、ファルシオンが王太子だからだ。
レオアリスも――
唇を噛み締める。
(父上に、約束したから)
ハヤテの背で俯いたファルシオンを見て、スランザールは眉を寄せた。
「殿下」
俯いたファルシオンの視界に、傾(かし)ぐ船の甲板が見える。
ふとファルシオンはその甲板に目を留めた。
そうして、丸い瞳を僅かに見開く。
甲板の兵士達はまだ動こうとしていた。膝上まで水の固まりに捕らえられて尚、それを何とか取り除こうと必死に動いている。煽る風から船体を守ろうと、身動きの取りづらい甲板で帆を操っている。
二つ先の船の甲板に、グランスレイやロットバルトの姿が見えた。彼らはファルシオンを見上げている。表情までは見えない。けれど。
「殿下」
スランザールの緊迫した声に顔を上げると、目の前に水の壁があった。壁と思えるほど巨大な水の竜巻だ。渦の層までがはっきりと見える。
「!」

ハヤテが旋回する。ぐぐ、と水の壁がハヤテを追って動く。ファルシオンやスランザールの上に雷雨のような水と音が降り注いだ。
圧し掛かって来る。
ふいに、炸裂音が響いた。
首を竦めた瞬間、ファルシオン達を追っていた竜巻を、赤い閃光が貫いた。
メネゼスの指令船が放った火球砲だ。
竜巻の渦が一瞬止まり、次いで崩れ落ちる。ハヤテは翼を打ち、一気に抜け出した。
水が滝のような音を立て海面と船団の甲板の上に降り注ぎ、ファルシオンは首を巡らせてその飛沫（しぶき）の粒を見つめた。
一つ一つの水の粒に、眼下の軍船の姿が映っている。その甲板にいる兵士達の姿。
メネゼスや、ロットバルトやグランスレイ、近衛師団隊士達の姿。
（――ちがう）
何で自分に力が無いのだと、嘆くのはおかしい。
今しなくてはいけない事は、そんな事じゃない。
ファルシオンは船団を取り囲む竜巻を見つめた。
ハヤテが再びこの海域を抜け出そうと試みる。妨げられながら幾度も。その諦めない翼。
荒れる海に縫い止められ砕けそうに軋む船は、それでも諦めず、甲板の兵士達が必死に舵を取り帆を操って、自分達を掴む海水から抜け出ようとしている。
あの会談で、スランザールやロットバルト達は諦めず言葉を重ねた。
メネゼスは船を絡め取られた時も諦めずに、火球砲を海中に撃ち込んで船を動かした。
不利と判っていながら船を出したレガージュ船団も、傷を負いながらもディノを連れてきたファルカンも。
ファルシオンは全部、目の前でそれを見てきたのだ。
全て。
今もまだ、誰も諦めてはいない。
どれほど道が無いように見えても。
ファルシオンもまた、一度だって、諦めていない。
「――」
もう一度、ファルシオンは荒れる海面に瞳を向けた。
船室で、ファルシオンの前に立ち、剣を抜いた後姿が鮮明に浮かぶ。
ファルシオンの瞳の金色が色を増す。
どうすればいいだろう。
「殿下？」
スランザールはファルシオンが黙り込んだのに気付き、幼い頬を斜めから見つめた。
「――スランザール」
それは今までのファルシオンとは少し違った響きの声で、スランザールはファルシオンの言葉を待った。
「これを収めるには、どうしたらいい」
声には、強い意志が感じられた。まるで王その人の前にいるように思え、微かな感銘を覚えながら、スランザールは頷いた。
「――まずは船や飛竜の行動を妨げているものを、取り除く必要がございます」
「たつまき――？　……ちがう。――本当は、ヴェパールがあやつるのを止めさせなきゃいけないんだ」
「仰る通りです」
スランザールは頷いたが、ヴェパールを止める事は難しく、竜巻を止める事すら簡単ではない。
ハヤテは立ち塞がり追尾する竜巻と水の幕とを避け、常に疾駆している。海中のヴェパールの居場所を見つけるのは困難だ。

そして、見つけたとして？
だがファルシオンは瞳にくっきりとした光を浮かべている。
竜巻が、それそのものが意志を持ったかのように、火球砲を放ったメネゼスの司令船の船腹へぶつかる。
船が傾ぐ。
船体が激しい水の渦に軋み、今にも砕けそうな音を立てた。
（無くなれば）
ファルシオンは荒れる竜巻を睨んだ。
黄金の瞳が、じわりと輝きを宿す。同じ光がファルシオンの身体を包んで行く。

鼓動が鳴った。
一つ。
どくん。
沸き上がるようにもう一つの音が重なる。
レオアリスはうっすらと瞳を上げた。
ドクン。
意識の奥底を掠める、金色の光。
唇が、微かな呟きを浮かべた。
（……王――）
剣の、主。
近くにいる。
どこに。
守る為にいたのだ、自分は。
こんな所で、何を、しているのか――。
「――」
レオアリスの腕が上がり、胸に突き立っていた戟の柄を掴む。
青白い光がじわりと滲み、全身を包んだ。

自分の中に受け継がれる王の血――それをどう使うのか、ファルシオンはそのやり方をまだ良く知らなかった。
ただ、あの竜巻をどうにかしたいと、それだけだ。
メネゼスの司令船にのしかかり船を砕こうとしていたそれが、一瞬金色の光を内側に含み、次の瞬間に弾けた。
「！」
ファルシオンの身体が衝撃に押されたようにがくんと揺れる。スランザールがその背中を支えた。
「やった――」
竜巻が散ったその向こうに、青い空が広がっている。
「殿下、ご無理は」
後ろから覗き込んだファルシオンの額には汗が浮き、呼吸も荒い。ただ大きな瞳には結果への驚きと、喜びがあった。
「だいじょうぶ」
高揚した瞳をスランザールへと向ける。生まれて初めて、ファルシオンは自分の持つ力を意識して使った。
「もっと……、一つづつ、やらなきゃ」

ヴェパールは海上へ視線を向けた。光が幾筋も差し込む世界を分ける膜の向こうで、幾つかの変化が起きている。マリ海軍と
「ファルシオンか――またとない機会だ、この手で捕らえ我が君へ献上しようと思っていたが」
まだ発現を始めたばかりの微かな力の波動――そう侮り放って置くほど、ヴェパールは戦場での経験は浅くは無い。
手のひらの上に文字どおり浮かんだ緑の光球が明滅する。
「死体でも事足りる」

ヴェパールの周囲の水がぐぐ、と筒状に持ち上がった。

急激に海面が筒状に立ち上がったと思うと、ファルシオンの周囲を覆った。途端に周囲の一切の景色と音が断たれ、轟轟と鳴り響く音に包まれた。

「！」

ファルシオンはそそり立つ水の壁を見つめた。四方をすっかり取り囲んでいる。

「――スランザール」

何を言おうとしたのか自分にも判らないまま、声が掻き消される。

水の壁に空を切り取られ、ハヤテはやっと翼を広げられるだけの空間で必死に浮揚した。水は海面から上空へ、手を触れれば指を断ち切りそうな勢いで吹き上がっている。

ファルシオンは出口を求めて辺りを見回し、気が付いた。心臓が跳ねる。

水の壁が、次第に狭(せば)まり始めていた。

ハヤテの翼の先に激しい水流が触れ、翼を弾かれたハヤテは声を上げ、体勢を崩した。

「ハヤテ！」

ファルシオンは放り出されそうになりながら、懸命にハヤテの首に掴まった。ハヤテは体勢を立て直したものの、次第に逼る水流の壁で身動きがとれず、浮揚するのがやっとの状態だ。

ファルシオンの瞳に再び金色の光が揺れる。

「――止まれ」

水流は微かに金色の光を移し、逼る速度を落した。

だが、それだけだ。

止まる気配は無く、腹の中に抱えた者を押し潰そうと確実に逼ってくる。音が肌に触れるほど響き、心臓がぎゅっと掴まれるような気がした。

ファルシオンは眼を瞑りたい衝動を堪え、懸命に水の壁を見据えた。

「、止まれったら――！」

声を張り上げて、けれど何も変わらない。

ハヤテが苦しげに体勢を捩る。もうハヤテも翼を真っ直ぐに広げていられず、飛竜の身体は次第に水面に向かって落ち始めた。

頬や髪が飛沫に濡れ、しがみつく手が滑る。

ファルシオンを捕える事を確信したかのように、水流が激しさを増す。眼下の海面では水がすり鉢のように渦を巻いていた。

逼る水流の壁はもう目の前にあった。

ぶつかる。

（――レオアリス）

身を震わせる衝撃を感じた。

水流がとうとう身に触れたのだと思い、ファルシオンはもたらされる苦痛を予想して思わず顔を伏せ――、そしてその伏せた視線の先に奔る、青白い閃光を見つめた。

「――あ」

ファルシオン達を押し潰しかけていた水柱を、斜めに断つ光。

どくんと鼓動が跳ね、喩えようのない嬉しさが沸き上がった。

（剣、の――）

ハヤテが高らかに鳴いた。

二十五

海面を突き抜けた青白い閃光が、ファルシオン達を捕えていた水柱を斜めに断った。
断たれた水の柱は一度動きを止め、初めからただの水の塊だったと言うようにざぁぁと音を立て海面に落ちる。
甲板の上でロットバルトとグランスレイは、それを仰ぎ見た。フレイザーが船縁に駆け寄り、近衛師団隊士達が飛竜の上で身を乗り出す。
「あれは――」
青白い閃光。
良く、知った光だ。
降り注ぐ水流の中からハヤテが飛び出す。
「……殿下は、ご無事か」
その背の上のファルシオンの姿に安堵の息を吐き、ロットバルトは海面へ目を向けた。今の閃光は確かに、レオアリスの剣が生む余波だった。
「上将――」
安堵が沸き起こると同時に、疑問も生じる。
あの下で、何が起きているのか、覗き込む海面からは窺い知る事ができない。

ヴェパールはのっぺりした面に驚愕の色を浮かべ、耳の傍を通り抜けた光の先を睨み、そしてゆっくり、視線を足元へ下ろした。
青白い光が目を刺す。
斜め下に、レオアリスが立ちあがっていた。
「――」
右手に青白い光を纏う剣を提げ、左手でヴェパールの戟を掴んでいる。
ヴェパールの視線の先で、戟は水が飛び散るように、形無く砕け散った。
ヴェパールは喉の奥で息を溜め、それを驚きと共に押し潰した。
「まさか――我が戟を、砕くだと」
先ほどまで戟が貫いていた胸にはかすり傷一つ見当たらず、揺らぐ海中でレオアリスは地上と変わらずに身を起こし、海面を見上げていた。
瞳にあるのは明確な意思ではなく、剣が纏うのと同じ青白い光だ。
何を見ているのか――、自分に一切向けられる事のない視線に、何かがヴェパールの意識に警鐘を鳴らす。
「――」
ヴェパールが掲げた右手の内に、細かな光の粒子が集まり形を作る。
戟が再生されていく。
レオアリスの瞳が向いた。
青白い閃光がヴェパールの顎の先を奔(はし)った。形成されたばかりの戟があっさりと砕ける。
「！」
閃光はそのまま海面を貫いた。

再び海面を切り裂いて光が奔る。海面からマリ海軍の軍船の一隻へ逼り、波に煽られて揺れた船体をほんの僅かに掠めて、消えた。
帆を張る為の船首の梁が断ち切られ、ぴんと張られていた縄が空中に跳ね踊る。
甲板にいた者達は弾けた縄に声を上げて身を竦めたが、メネゼスを含めほとんどの視線は海上に向いていた。
彼等の視線の先で、それまで海面を荒らしていた水竜巻がふいにぴたりと止まり――、崩れた。
船を被う海水も同じく力を失い、波が引くように船体を滑り落ちる。
拘束を解かれ、兵士達は驚いて辺りを見回した。
『何だ』

『消えた――何だったんだ』
『とにかく助かった――』
竜巻の消えた空は何事も無かったかのように青い。マリの水兵達は互いの顔を見合わし、びしょ濡れになった姿に、込み上げる笑いと安堵を堪え切れず笑い声を立てた。
『ひでえな……泳いで来たみてぇだぞ』
『他人の事を言えんのかよ』
「――」
ロットバルトは周囲が解放された驚きと安堵に湧く中で、先ほど剣光が掠めたマリの軍船を見た。幸い船首の梁が断たれただけで済んでいるが、それは波に煽られた為だ。
剣光はそのまま、船体を切り裂いていた可能性もあり得た。
光の消えた海面に視線を落とす。
海面を切り裂いた剣光、あれは、一つの光景を思い起こさせる。
熱を帯びた海の上に、北の黒森の凍てついた空気を呼び込む。

ヴェパールは胸と顎から散った血を眺めた。たった今、剣光が抜けた場所だ。
傷は瞬く間に塞がったものの、ひやりとした感覚を残している。
何より、今、そこにいる者の気配が、船上にいた時と全く違った。凍てついた気配――それが更に研ぎ澄まされて行く。
その気配に当てられたように、ヴェパールは思わず目の前の存在を見据えた。
ヴェパールの視線の先で、レオアリスの右手の剣が鼓動を打つ。
左手が鳩尾に当てられ、ズブリと沈む。
ひどく無造作に、何の躊躇いも無く、レオアリスはその剣を引き抜いた。
青白く怜悧な――凍る光を纏う、もう一振りの剣。
「――」
互いを写したような二振りの剣が、青い色を重ねる海の中で更に青く、静かに脈打った。
剣の脈動が水を伝い、ヴェパールの皮膚に届く。肌を切る感覚にヴェパールは思わず腕に目を向けた。何事も無い。
「――二刀目」　一刀のみと相対していた先ほどよりも、感じる圧迫感が違う。
「……だが、まだそれだけだ。貴様は我が領域の中にいる」
この海中にいる限り、ヴェパールの圧倒的優位は覆らない。それは確かだ。
それでいて、この喉を締めるような感覚は何なのか。
まるで、存在そのものが変わったような――、別人を前にしているようにすら感じられる。
既に海上の支配が途切れているのは気付いていたが、ヴェパールはレオアリスへ向き直った。
「何ができる」
その言葉に含まれた微かな感情を無視し、ヴェパールは左手を緑の光球にかざした。水が振動する。
ヴェパールの周りを取り囲み振動していた水は、円を描くように六箇所、鋭利な先端を持つ杭となって突き出した。
それぞれがレオアリス目がけて奔る。
レオアリスは二振りの剣を無造作に提げたまま、逼る水の杭を眺め、口元に薄い笑みを浮かべた。

「――ダメだ」
上空を旋回するハヤテの背から海上を見下ろしながら、ファルシオンは無意識に呟いた。

今、海面は凪いだように静まり返っている。
「殿下？」
スランザールが聞き返す。見開かれた金色の瞳に不安の色があるのをスランザールは見て取った。
「剣を――」
駄目だ。

このまま、剣を振ってはいけない。

眼下の海面に、青白い光が揺れている。
「レオアリス――剣を振っちゃダメだ！」
叫んだ瞬間に、海面が六ヶ所、盛り上がったかと思うと杭のように突き出した。
鋭利な先端が船首や手摺を掠め、或いは砕く。
『何だ！』
水の杭はメネゼス達の目の前であっけなく崩れ、ただの波になって海面へ戻った。再び海面が静まり返る。
『提督、二番船が……！』
メネゼスは振り返り、奥歯を噛み締めた。中央にいた二番船の左舷の上部が、一部削ぎ取られている。
『くそ、まだヴァイパルが何かしてやがるのか』
メネゼスは苛立ちを吐き出したが、ロットバルトは口元を引き結び、海面を見下ろした。
ファルシオンの制止の声を、確かに聞いた。
（――殿下は、何に対して制止された……？）
剣を振るな、と――
嫌な予感が胸の奥に湧き、渦巻いている。
（あの下の状況を知る事ができれば）
知れたところでどうなるのかと、思考の端で呟く。

誰が止めるのか。
（……早計だ）
今、浮かんでいる考えを否定したい。
それが難しいと気付いている自分の意識に苛立ちを覚えながら、ロットバルトは海面を睨んだ。

ヴェパールは水の杭が貫いた箇所を、まじまじと見つめた。
自分の腹を。
貫いて行った。
驚きが解けるのを待っていたかのように、ゆっくりと傷が閉じていく。
目の前に漂っている腕を見つけ、ヴェパールはそれを掴んだ。たった今切断された右腕だ。
切断された傷口に当てると、苦も無く付いた。右手を確かめるように幾度か握り込む。
「――」
瞼のない銀色の双眸が、レオアリスへと向けられる。レオアリスはただ二刀を提げてそこにいる。
（何をした――）
それも実際の行為は判っていた。弾き返されたのだ。
レオアリスはただ、剣を一閃した。
気付いた時には全てがヴェパールへ向かっていた。
「――ふざけた真似を」
どくん、と脈動が伝わる。
それがレオアリスの持つ剣の鼓動だと気付いて視線を落とし、その視線をレオアリスの顔へと持ち上げて、ぎくりと息を呑んだ。
無機質な瞳――、その上に、愉悦がある。
ヴェパールも良く知っている、好むものだ。三百年前、いつもその中

に身を置いていた。
戦場での歓喜。
思う様、敵を追い詰め、いたぶり、命を絶つ。
怯えながら往く船を沈める。
その時に感じる愉悦、それと同じもの。

どくりと剣が脈打つ。
脈動はレオアリスの中に幾重にも重なり沈んでいく。
戦いを。
「――ス」
微かな声が落ちてくる。誰か――、知っている声だ。
それは剣の脈動に掻き消された。
（――）
音にならない微かな呟きが零れる。
黄金の、良く知った光が頭上のどこかにある。
その光の前に、目の前のこの相手を引き据えるのだ。
「――首だけでも、構わないな」
全ての力を削いで、完全に沈黙させる。
その方が確実に、主を守る事ができる。
その方が――
楽しい。
剣が青白い光を纏い、脈動する。
レオアリスはヴェパールを見上げた。
「ダメだ――！　ハヤテ、降りて！」

ファルシオンの言葉に何を感じ取ったのか、それまで一切命令を聞かなかったハヤテが、海面へと急降下する。
「殿下、一体」
スランザールはファルシオンの肩に手を置いた。
「海面に近付くのは危険です。上空へ」
「ダメなんだ！」
ファルシオンはその手を振り解き、叫んだ。
「レオアリス――！　剣を戻して……！」

剣が、脈打つ。
レオアリスは両手の剣の柄を握り込んだ。

「よせ、レオアリス」
ふいに伸びた手が、レオアリスの右手の剣を掴んだ。
研ぎ澄まされた刃がそれを掴んだ掌に食い込み、滲んだ血が海水に溶ける。
ザインはレオアリスの正面に立ち、はっきりと告げた。
「お前は、戻れ――」
ザインの剣が鼓動を打つように淡く発光する。その光に呼応するように、レオアリスの剣が一度、脈打った。
無機質だった漆黒の瞳の奥に、ぽつりと光が灯る。
レオアリスはザインの顔を見つめ、それから忘れかけていたものを思い出すように、瞳が焦点を結んだ。
「ザ――イン、さん」
途端に、それまで一切感じていなかった息苦しさに、レオアリスは喉元を押さえた。

「！　っ――」
ザインがレオアリスの肩を押す。押されて離れていくレオアリスをじっと見つめ、それからレオアリスではない、誰かに告げた。
「早く連れて行け」
「――」
「彼を助けるんだろう」
レオアリスは喉を押さえながら、霞む視界の中のザインを見つめた。
（……何の、話を）
誰と。
（他に、誰かいるのか――）
そう言えばザインは、どうやってここに来たのか。何故平然と、まるで地面に立つようにそこに立っているのか。
「どうした。俺に語った事は全て偽りか」
ザインが語りかける声が耳の奥で反響する。
「――ザ」
まったく唐突に、すうっと呼吸が楽になり、レオアリスは喉元に当てていた自分の手を見下ろした。
「……、何だ……」
その理由はすぐに判った。手の指や手のひら――、身体の周囲に、薄い幕のようなものがある。
それが海水とレオアリスの身体とを隔てていた。
「――ザインさん！　一体何を――」
ザインは何をしたのか。
誰と、話している。
「ザインさん！」
レオアリスの声はザインへは届いていないのか、それとも聞こえない振りをしているのか、ザインはレオアリスへは視線を向けなかった。
「くそ」
身体が思うように動かない。ただ浮いているだけだ。
誰と話しているのか。
何をしようとしているのか。
ザインがここに来た理由を。
確認して――
止めなくては。
けれど漂う身体を止める事すらできず、レオアリスはザインの姿を追った。

ザインは辺りを見回した。
あの日、彼女を見送った青。
一度眼を閉じ、肌に伝わる感触を確かめる。
それから、ゆっくり後ろを振り返った。
そこに三百年もの間、待ち焦がれていた相手の姿があった。
「――三の戟」
ヴェパールはレオアリスから、ザインへと視線を移していた。苛立ちと、興味の合いまった視線を投げる。
「ザインか」
ザインの唇が、笑みの形に吊り上った。
「ヴェパール――、会いたかったぞ」

二十六

海面から揺らぎながら差し込む光が、互いの姿を照らす。
「長かったのか短かかったのか――、だが、待ちくたびれたのだけは確かだ」
ヴェパールを眺め、ザインは獰猛な獣が牙を剥き出すように笑った。
「三百年振りだ――」
目の前に立つヴェパールの姿が、ザインの脳裏に三百年前のあの日をまざまざと甦らせる。
船は燃えながら、この海に沈んで行った。
彼女を連れて帰る事は叶わなかった。
守れと。
彼女が言ったからだ。レガージュと、その街の人々を――。
ザインはその言葉に殉じてきた。剣の主の意志に。
だが、もういい。
ファルカンやカリカオテ、街の住民達の顔を思い起こす。
もう彼等には、ただ一人の守護者など、不要だ。
レガージュは三百年の間に、充分に発展してきた。アレウス国の交易の窓口として内外にその名を知らしめ、その通り機能する。港には様々な国の交易船が入港し、街には常に活気が満ちている。
それは彼女がかつて望んだとおりの姿だろう。
もう、充分だ。
あの日彼女と交わした約束は。
（フィオリ――）
彼女の姿は今でも鮮明に脳裏にある。三百年、まるで薄れる事は無く、ザインの記憶に寄り添っていた。
ただ今、その眼差しに浮かぶのは、どこか悲しそうな色だ。語りかけるような瞳。
何故、と。
その眼差しがザインの胸を刺す。
（理由を問うのか、君が）
何故。
ザインは微かに笑った。
（もう君は俺の名を呼ばない。それが理由だ）
彼女は悲しげに瞳を伏せる。その姿は、別の面影に変わりかけた。
それはもっとずっと幼い――
ザインはそれを無意識に――いや、判っていて、押し込めた。ヴェパルを正面から見据える。
湧き上がる。
ふつふつと、身体の――魂の奥の方から、湧き上がってくる。
その感情に身を委ねる。
抑えていたものを解放する。
（ようやく――）
剣士の、本能――
ヴェパールは瞼の無い目に嘲る色を刷き、ザインを眺めた。
「久しぶりだな。と言ってもあの時、私とお前はほとんど刃を交えていなかったが――。三百年、のんびりできただろう？　毎日良い想い出に浸れたはずだ。死による劇的な別れほど、人の心に美しく残るものはない」
ヴェパールの嘲りに返すように、ザインの口元に笑みが浮かぶ。
「ああ――、毎日、考え続けてきた」
レオアリスはヴェパールへの憤りを覚えながらも、相反する不安と共に届かない距離に立つザインを見つめた。
ザインは淡々と、笑みさえ浮かべたまま答えている。
いや――。
昂ぶる意思を抑え、宥めすかし、――その沸き立つ感情を、味わっている。

レオアリスは、その姿を良く知っていた。
かつて対峙した剣士と、同じだ。
「ザインさん！」
ザインは振り向かない。
右腕の剣が脈打つのを眺め、ヴェパールは身体の前に浮かぶ緑色の光球に手をかざした。
「ふん――剣の主すら守れなかったお前が、今さら何をするつもりだ？三百年間、ただ剣を錆付かせて来たのだろう」
海水が微かな振動を伝える。ヴェパールは肌を打つその冷たい気配に眉を寄せた。ザインの剣の振動だ。
ザインが笑う。
「――俺が何故、主を失ってからもずっと生き恥を晒してきたか――、すぐにお前にも理解できる」
レオアリスは息を呑んだ。ザインの纏う気配が、変わっていく。面に浮かんだ表情――
もはや隠す様子もなく、ザインは喜色を顕（あらわ）にした。
「ようやく、貴様をこの手で切り裂ける」
嬉しくて堪らない、と。歓喜に溢れ、狂気に似た――。
それは、バインドが抱えていた狂気だ。
ザインは自らの剣を完全に制御し、剣士としての本能を律していた。少なくともレオアリスにはそう見えた。
バインドの狂気は、剣士の本能でもありながら、それでもバインド自身の性質に寄っているのだと、どこかでそう思っていた。
けれど今、ザインは。
自ら、剣の渇望を選んだ。
どくりと鼓動が鳴る。
バインドが笑う。
お前にも、選べる――
「……駄目だ――！　ザインさん、剣を引いてください！　このままじゃ」
戻れなくなる。
その言葉が思考を掠め、はっとする。つい先ほど、定かではない意識の中で、ザインがレオアリスに告げた言葉だ。
『お前は、戻れ』
（あれは）
ザインは初めから、全て決めていたのか。
選んだ。
『お前が俺を斬れ』
（――っ）
身体は動かない。ザインは対照的に、まるで大地を蹴るように軽々と、足元を蹴った。剣が白く発光する。
「止めろ！」
ヴェパールの前で海水が渦を巻き、ザインとの間に広がる。
防御壁だと判ったが、ザインは構わず右腕の剣を振り下ろした。
海水がたわむ。
剣はあっさりと防御壁を断ち切り、ヴェパールの額に落ちた。
ヴェパールの身体が沈み、剣はただ海水を斬り裂く。ザインの剣が過ぎた後に一瞬真空が生まれ、海水が瞬く間に流れ込んでそれを埋める。
「っ！」
海水の振動が叩きつけ、レオアリスは瞳を細めた。身体を覆う空気の膜が震える。
レオアリスが剣を合わせた時に感じた通り、豪剣と言える太刀筋だ。剣は全てを巻き込み、砕こうとしているように見えた。
ヴェパールはザインから離れながら、剣が掠めた額を抑えた。骨まで

覗いた傷が素早く閉じる。
緑色の光球に手をかざす。ザインを取り囲む海水がぐぐ、と縮み、押し潰そうと圧力を掛けた。
「それで海水を操るのか？」
ザインは笑って右腕の剣を振った。
剣はやすやすと圧し掛かる海水を斬り裂き、ザインを解放する。そのままザインは再び、足元を蹴り間合いを詰めた。
ヴェパールの腹部に波紋が立つ。
（戟――）
レオアリスが警告を発する前に、波紋の中心から戟が飛び出す。ザインは意に介さず、剣を薙いだ。
戟がザインの左腕に突き立ち、同時に横薙ぎの剣がヴェパールの胸を裂く。
ヴェパールが退き、ザインの腕に突き立っていた戟の切っ先が外れる。ザインの剣がヴェパールを追い、海を断った。剣の波動が海底まで伝わり、海中に砂が巻き上がる。
ザインとヴェパールの間が巻き上がった砂煙に隔てられる。視界を妨げられたのか、ザインはその場で辺りを見回した。
砂煙の間から戟が飛び出す。戟は不意を受けたザインの腹部を抉った。
ザインは笑っていた。
戟の柄を掴み、矛先が更に食い込むのも構わず砂煙の中からヴェパールを引っ張り出すと、そのまま、ヴェパールの右腕を断った。
ヴェパールの苦鳴が響く。
（何て戦い方だ――）
まるで防御など気にしていない。そして剣を振るう事そのものを、楽しんでいる。
（あの動きも……、この海中であれだけ動けるのは何故だ）
レオアリスは腕を上げる事さえ満足にできない状態にあり、それはただここが水中だからと言うよりは、手足に重りをつけられているように感じられた。
ザインとの差異があるように見えて、これは同一のものだ。
誰かが、介在している。
恐らく先ほどザインが話していた相手が。
（王都か、レガージュの法術士か――？）
違う、と感じた。法術の気配は感じられない。
それがどういう相手なのか――、判らないながらも、ザインの味方だとは何故か思えなかった。
（――）
だがこのままなら、ザインはほどなく、完全にヴェパールを捕える。
これはザイン個人の問題ではない。国と国との、西海との条約再締結に関わる問題だ。
ザインの姿を見上げて浮かんだ考えを打ち消し、レオアリスは重い腕を持ち上げ鳩尾に当てると、右の剣を引き出した。
ザインがちらりとレオアリスへ目を向けた。「――いつまで、ここに置いておく。俺に語った目的とずいぶん違うな」
（まただ。一体誰に）
レオアリスは辺りを見回した。誰の姿も見えない。
ただ、どこかで誰かが笑った気配がした。
唐突に、右腕が誰かに掴まれたように重くなる。
「何だ――」
剣を握った右手は、力を込めてもぴくりとも動かなかった。
ザインが眉を潜める。
「連れていけと、そう言っているんだがな」
「貴様、誰と話している」
ヴェパールが猜疑を含んだ声で鋭く言った。
「知っているんじゃないか――？」
ザインが踏み込み、刃と戟が激しく噛み合う。戟の柄がしなり、白い

刃がヴェパールの喉の目前で止まった。
「――貴様……まさか」
ヴェパールはのっぺりとした顔をどことなく青ざめさせ、合わせた剣越しに、ザインの背後へ視線を走らせた。
「よそ見をしている余裕があるのか？」
ヴェパールが気付いて戟を退こうとする前に、ザインの剣が戟の刃を砕いた。喉元を掠めた切っ先が皮膚を裂き、血を迸らせる。
「――！」
ヴェパールは片手で喉を押さえると砕けた戟を振り捨て、傍らの緑色の光球へ手を伸ばした。
ザインの剣が緑の光球を捉え、断ち切る。光球は砕け、霧散した。
「これが無くても、お前は船を操れるのか？」
「――」
ヴェパールの面が怒りで染まる。その怒りを、目の前のザインではなく、その背後のどこかへ向けた。
「――御方」
「――」
「これは一体、どういうおつもりか」
ザインが瞳を細める。ヴェパールはしばらく黙り、何の反応も返らない事に面を苛立たせ、再び続けた。喉から吹き出る血を押え息を切らせながらも、薄い唇を歪め、蔑む口調で問う。
「これは、あの方への裏切りと、そう受け取っていいのでしょうな」
返事は無い。
「御方――、今更、王国での立場が、惜しくなられたか」
ザインは面白そうに笑った。
「やはり、繋がっていたな。まあどうでもいいが……」
ちらりとレオアリスを見て、一瞬だけ瞳に何かの色を走らせる。
その色に、レオアリスは何故か判らないまま不安を覚えた。

（――誰だ）
何故、ザインは自分を見た。
ヴェパールは何を言っている？
王国での立場……？
「御、方――」
低い、ようやく吐き出したような声だった。ヴェパールは一目で判るほど息を切らしていた。手で押さえている喉から、指の間を縫って血が染み出し続けている。
「よもや、この海を、お忘れか。この海は、あの方の、愛した――」
どこかで、誰かが笑った。
「回復しないのね……傷」
そっと囁くような声に、ヴェパールが不快そうに口を引き結ぶ。
「そこまでなりふり構わないお前は、初めて見たわ。あの触媒はずいぶん大事だったみたいね」
レオアリスは声のする方を探った。海面から光が降るように、声が降ってくる。
（女……？）
くぐもって聞き取りにくいが、口振りはどうやら女のようだ。
「大事なものはしっかり守らなきゃ」
「――」
ヴェパールは慎重に、掠れた息を吐いた。「初めから、こうする、つもりで……」
微かな笑い声が降る。
「別に裏切るなんて言っていないわ。第一」
一瞬、ひどく酷薄な間があった。
「もういない相手を、どうやって裏切るの？」
「……だが、貴方は、まだ」
「――あはは！」
笑い声が弾けた。海中に反響し、あちこちから降り注ぐ。ひとしきり

笑った後、嘲るように言った。
「お前がそんなに夢想家だとはね。小娘みたいに、永遠を信じているの？」
「――ふざ、けるのは」
レオアリスはこめかみの辺りでどくどくと血液が脈打つ音を聞いた。
くぐもって聞き取りにくいが、どこかで、聞き覚えがある。
この、話し方。
口調。
（誰、だ……）
どこで聞いた。
「まあ、協力すると――そんな事を言った気もするわね。どう？　貴方にも義理が無い事も無いし、協力して欲しい？　その方が公平でもあるわ」
ザインは黙ってやり取りを聞いていたが、肩を竦めた。
「くだらない茶番だ。もういいな？」
「そうね――茶番よ。全て」
声は再び嘲った。
「ならもう終わりだ」
右腕の剣が発光する。
ヴェパールは既に肩で大きく息をし、喉を押さえてよろめきながらザインを見た。自らの命運が尽きかけている事に対する信じ難いという思いと、僅かな、だが確実な恐怖がそこにある。
「御方――」
「命乞いか？　似合わないぞ、三の戟。貴様もいつも、誰かの命乞いを聞いて来ただろう」
ザインの剣の切っ先が、ヴェパールの額に当てられる。額からぷつりと血が滲んだ。「それを受け入れた事があったか」
「待て……」
ザインは冷酷と歓喜を含んだ瞳でヴェパールを見下ろした。
「三百年、待った」
「ザインさん――！」
「茶番だから……もう少し付き合ったら？　ここからは見応えがあるわ。――特にお前には」
剣の動きがぴたりと止まった。ザインの瞳が見えない相手に向けられる。
「――何を企んでいる」
含み笑いと声が降る。耳に溶かし込むように囁く。青い世界が揺れる。
ゆらゆらと揺らぐ、浅い夜のような世界。
「お前がもし、想いを抱え続けたのなら――私はお前を助けたのにね」
「――」
「でももうお前は、抱え続けるのに疲れてしまった」
「……何を」
「三百年――」
声には遠く、懐かしむ響きがあった。
「私は忘れたわ。もう、顔も定かじゃない」
ザインはヴェパールに剣を突き付けたまま、その切っ先を睨んでいる。
「お前は抱え続けるのを止めた。永遠が苦しいから。永遠など無いのに」
ザインが奥歯を噛み、剣を握り込む。
「――思い違いだ」
女はくすりと笑った。
「お前には、未来があったのにね――ほら」
ザインがぎくりと黒い双眸を見開く。そして油の切れた人形のような仕草で、それを見上げた。
（……どうしたんだ……）
レオアリスはその視線を追った。
海面の近くに、丸い光が浮かんでいる。
ザインが奥歯を噛み、息を吐き出した。
「――ユー……ジュ」
（ユージュ……？）

レオアリスは驚いてその光を見つめ、瞳を見開いた。
視線の先で、丸く不安定な泡に包まれたユージュが落ちてくる。ユージュは球の中に膝を着き、ザインの姿を見て、必死に叫んでいる。
領事館で、ザインを追ってきたユージュの姿がザインの脳裏に閃く。
「――貴、様――ッ！」
肌を震わすような怒りを纏い、ザインは姿の見えない相手を睨んだ。
「どういうつもりだ――ユージュを放せ」
「お前はその未来だけを、大切に守っていけば良かったのに」
「ふざけるな」　ザインは吐き捨て、ヴェパールに突き付けていた剣を外した。剣が白く発光する。
両眼に切迫した光が差す。
「放さないなら、貴様から斬る」
「その子が育たないのは何故？」
唐突に問われ、ザインは黙り込んだ。
「――」
「簡単な話――」
声が憐れむように囁く。
「お前に、守られる存在である為よ」
「……黙れ」
「いつでもその子は、お前の心の奥底にある渇望を感じていた――。お前の心は別の場所に向けられていて、その子の上には無い。その子はお前のすぐ傍にいたのに」
「――」
クスクスと笑い声が降る。その鈴を振る声に重なり、低い笑い声が忍び寄ると辺りに満ちた。
「ほぉ……あれは、お前の子供か。お前と、お前の主の」
ザインは視線を落とし、瞳に強い動揺を浮かべた。
ヴェパールは喉を押さえていた手を離していた。砕け散ったはずの緑の光球が胸の前に浮いている。波の間から、光の粒が集まり、光球はみるみる元どおりの姿に戻った。
ザインが再び剣を突き付ける前に、ヴェパールは波を立ててザインから離れた。
「良く似ている」
追おうとしたザインの足が、がくりと止まる。たった今まで自在に動いていた手足が、重い。
ザインの面から血の気が失せた。
「――手を出すな」
「手を出すな、か、面白い。先ほどまでは嬉々として私を殺そうとしていた奴が」
ヴェパールは平べったい両眼に愉悦を浮かべ、ザインを眺めた。
「手を出すなというのなら、それなりの代償が必要だろう」
ヴェパールは耳まで裂ける口を大きく開いた。
喉の奥から戟の切っ先が現れる。
柄の途中まで現わした戟を、ヴェパールは吐き出した。
ザインは身動き一つせず、ヴェパールの戟はザインの左脇腹を易々と抉った。
「ザインさん！」
レオアリスは右腕に力を込めた。
まるで動かない。
「っ」
「父さん！」
ユージュが泡の壁を叩き、何度も何度も叫んでいる。
「御方は楽しい趣向を与えてくださった――。命乞いをするのは、今度は貴様のようだな」
脇腹を抉った戟は向きを変え、ザインの左肩を後方から切り裂いた。
通り過ぎ、再びザインへ切っ先を向ける。右頬をざくりと切る。致命傷には至らない程度で、鉾はザインの上に傷を刻んでいく。
「止めろ――！　いい加減にしろ！」

レオアリスの右手の剣が青白く発光する。ぎし、と身を包む檻のような空気の膜が軋む。
身を包む、空気。
頭の片隅を思考が掠める。
酸素――海水の中から精製している。
法術ではない。もっと別の。
例えるなら、王やアスタロトに似た能力――
大気。
チカチカと警告が明滅する。
だがレオアリスは目の前の光景を睨んだ。
「止めろ！」
右手の剣では足りない。
戟がザインの左脚の腿を切り裂く。
ヴェパールは肩を震わせて笑った。
「抵抗もしないとは――、それほど子の命が惜しいか、ザイン」
ザインは黙ったままヴェパールを睨み、立っている。怒りを、抑え込んで。
肌に届くその怒りの波に、ヴェパールは笑みを深めた。
腹立たしい。先ほどザインは自分に、浅ましい感情を与えた。
命乞いをさせた。
ヴェパールの口元が、大きく吊り上る。
「当然、惜しいだろう。大切な主の忘れ形見だ」
緑の光球が明滅する。ざわりと海中が揺れた。
ヴェパールの背後に影が生じたかと思うと、その影の中から巨大な鮫が身をくねらせ、現われる。
小船ほどもあろうかという鮫は、浮かんでいるユージュの横を擦り寄るように通り過ぎた。並んだ鋭い鋸歯と、その奥の深い口咽。
「止めろ」
鮫は尾びれでユージュを包む泡を叩いて過ぎる。泡は弾けそうにたわんだ。ユージュが青ざめた瞳を見開き、身を縮める。
「こいつに餌をやりたいところだが――どうするか」
「止めろと、言っている」
「は――」
ヴェパールは勝ち誇り、喉を反らして笑った。
「ならば――そうだな。お前のその剣を差し出してもらおうか。少しは腹の足しになるだろう」
「父さん！　そんな事しないで――！」
ユージュは首を振り、父の姿を見つめた。
ずっと――、母を守り切れなかった事を後悔してきたのを、知っている。
いつも家の先のあの場所から、輝く海を見つめていた。
父の望みが何か――。
ユージュには、良く判っている。
「父さん――いいよ」
止めに来たつもりだった。ゼ・アマーリア号が沈んで以来、父の姿は今まで見た事がないほど、怖かったから。
ユージュの知っている優しい父がいなくなるように思えた。
けれど、そんな事はもっと嫌だ。
「いいから……」
「どうする」
鮫は再び、ユージュの周りをぐるりと巡った。ユージュはびくりと首を縮めながらも、血の滲むほど唇を噛み締め、湧き起こる恐怖を堪えた。
ザインは黙っている。ヴェパールは苛立ち、舌を打った。
「子よりも、主の仇を討つ事を選ぶか？　さすがは剣士といったところだな。まあそれもいい」
鮫の尾びれが海水を叩く。ユージュを包む泡が震える。
「では、餌の時間だ」

「――待て」
低い声が遮る。ヴェパールは悠然とザインへ視線を投げた。
ザインはヴェパールを射抜く光を浮かべ、だが右腕を降ろした。
「いい心掛けだ」
「父さん、駄目だ！」
ユージュは自分を包む泡を必死に叩いた。これが割れてもいい。喉は半分掠れかけている。
「止めてよ――！　父さん」
あの部屋で、自分を全く見てくれなくて、怖かった。
でも、今の方が怖い。
「父さん――、ボクはいいから……」
ザインはユージュに視線を向けず、ヴェパールを見据えている。
緑の光球がぼう、と揺れる。鮫は尾びれで海水を叩き、ザインへと向かった。
「嫌だ――！」
ザインの右腕に、鮫が喰らい付く。ユージュは両手で顔を被った。
ぶつり、と音がした。
鮫はザインの剣を右腕の肘から食い千切り、尾びれを動かして擦り抜けた。
「――わああ！」
ユージュが泣き叫ぶ声が響く。
怒りに目の奥が眩むような感覚の中で、レオアリスは右腕にあらん限りの力を込めた。
「動け――動けよ！　畜生ッ！」
右の剣だけでは、足りない。
まだ空の左腕に力を込める。
ザインは食いちぎられた右腕を押え、よろめくとその場に膝を落とした。
レオアリスはぎくりと息を止めた。
鮫が再び、向きを変える。腕を押え顔を伏せたままのザインへと向かっていく。
「――動け」
ジリジリと苛立ちが増すほどではあるが、左腕が上がる。力を入れ続けていなければ、すぐに押し戻されそうだ。
鮫はザインの背後から迫り――、横を擦り抜けた。ザインはぎくりと血の気の失せた顔を上げた。
鮫はユージュへと、正面から近付いて行く。
「や、めろ――。手を出さないと」
「誓ったのか？　誰が」
「――止めろ……」
ザインはよろめく身体を起こした。
鮫が牙の並んだ顎を開く。その前にユージュを包む泡がある。
レオアリスは持ち上げた左腕を、鳩尾に当てた。
鮫が泡ごと、ユージュに食らい付く。
「ユージュ……！」
「父さ――」
ユージュが腕を伸ばし、ザインを見た。
口が閉じ、二人の間が閉ざされる。ユージュを呑み込んだ鮫は、悠然と身を反した。
一瞬、辺りは全くの無音のように静まり返った。
「っ」
レオアリスは息を抑え、剣を掴んだ左手を引き上げた。
青白い光が零れる。
（間に合う――、間に合え）
鮫はまだ空腹を抑え難いかの如く、身を捩ってザインへ向かった。
ザインは俯いたまま、身動ぎ一つしない。ヴェパールは堪え切れない愉悦を滲ませた。

「そいつも喰らっていい。ザイン、昔のよしみだ、子供と共に主の下へ行かせてやろう」
「――いい加減にしろ！」
レオアリスは左の剣を引き出した。海中が鼓動するように一度揺れ、鮫が怯えたように身を躱した。
女が笑った。
「邪魔しちゃダメよ」
「――！」
ずしりと左腕に重圧が掛かる。
ヴェパールはレオアリスから眼を離し、再びザインへ視線を戻した。鮫が海中を旋回し、再びザインへと向かう。
「主との再会だ」
「――ザインさん……！」
目の前に鮫が迫っても、ザインは全てを諦めたのか、俯いてぴくりとも動かない。
鮫はザインの右肩から胸に喰らいついた。
鋸のような平たく鋭い牙が食い込み、肉と筋肉、骨を断って行く。
ザインがぎり、と奥歯を噛み締め、初めて顔を上げた。
「――」
レオアリスは、僅かに息を呑んだ。
ザインの上に、それまで見せていた狂気は、欠けらも無い。
鮫に食い付かせたまま、ザインは左腕を持ち上げた。
腕を、鮫の喉に突き立てる。皮膚を破り、肉を裂き、ずぶりとザインは腕を沈めた。
鮫は逃れようとして身を捩り、ザインから顎を離した。ザインの身体に刻まれた全ての牙の跡から血が噴き出す。海水が止(とど)まるところを知らず、血を流し溶かしていく。
自らの血が辺りを赤く染めるのも構わず、ザインは左腕を更に沈めた。喉から硬く白い皮膚を裂き、腹へと達する。
確かな感触があった。
そのまま、掴み、ぐいと引く。
「――ユージュ」
暴れる鮫の腹を蹴り、ザインはユージュを引き摺り出した。

二十七

（父さん――）
伸ばしたユージュの手を捕まえるものはなく、父の姿が閉ざされた。
身体の周りを重くぬるぬるとした壁が取り巻き、全身を押し潰そうと絞め付けて来る。
その感触と、光も無く圧迫してくる闇にぞっとして、息が苦しくなった。粘膜の壁――喉だ――今、生き物の中にいて、やがて自分が溶けていくのかと思うと、喉が引き攣りますます呼吸ができなくなる。

どこかで鼓動が聞こえる。

（――）
たぶん、自分の怯える心臓の音で、そうでなければ自分を飲み込んだ鮫の鼓動だ。
（だって、父さんがいるもん）
父がいてくれるから、必要ない。

どくん。

『その子が成長しない理由が判る？』

どくん。

『お前に、守られる為よ』

どくん。

父の傍にいたかったから――だから自分は、ずっと寝ていたのだろうか。
子供のまま。
そうかもしれない。
（だっていつも、父さんは、遠くの海を見てた）
笑いながらユージュに向ける、その瞳の向こうにも。

どくん。

鼓動が煩い。
眠れない。
どくん。
（うるさい）
どくん。
（ずっと、眠ってればいいんだから……）
そうすればずっと守ってくれる。
ずっと、傍に。
どくん。

微かな声がした。

――守ったよ
少し幼い、きれいな声だ。
でも何故か意地悪でひやりとさせられる響きで、首筋に刃物を当てら

れたようにユージュはびくりと身を縮めた。
――守ってきてくれたじゃない
耳を塞ぎたいのに声は容赦なく入ってくる。
――三百年……ずっと守られるままだった
声はユージュの内側からしていた。
――だから、ほら
声の示す方へ、ユージュは恐る恐る目を向けた。
落ちていく先に、微かに白く、光を放つものがある。
良く知っている光。いつも傍にあった光。
ユージュは叫び声を上げた。

――父さんの剣が、落ちていく

鮫の腹からユージュを引き摺り出すと、ザインはその姿を見つめた。
「ユー……」
僅かに息を飲み込む。一瞬、複雑な光をその眼差しに浮かべた後、口元を引き結び、片腕でぐったりとした身体を抱き締めた。
「――ユージュ」
ザインは肩を大きく上下させ肺に溜め込んでいた息をゆっくりと吐き出すと、呼吸と共に身体を支えていた力も全て吐き出したかのように、ユージュを抱えたまま膝から力を失って倒れた。
肘から先を失った右腕と、胸や背に空いた傷口から、血が数十もの帯のように海中に漂い、溶けていく。

レオアリスはザインの姿を、声もなく見つめていた。
目の前でザインが傷を負い、ユージュが呑まれ、それでも動かない腕と何もできない自分に気が狂いそうな程のもどかしさと怒りを感じたが、ザインの姿はその感情すら打ち凌ぎ、声を失わせた。
何一つ迷わず、ただ、ユージュを助ける為に。
無意識に剣の柄を握り込む。
ザインの上に、会った事も無い父の――ジンの姿が重なる。
ジンも――、ザインのようにまるで躊躇いもなく、そうしたのだろうか。
あの時。
我が子を、
(俺を)
助ける為に。
――何故、と思う。
どうして彼等は、自分の命を顧みないのだろう。
それが当たり前だ、と、『彼』なら言うのかもしれない。
“お前が気にする事はない”
朗らかに笑いながら。
ぐっと唇を噛み締める。
(――でも)
軍服の下、胸に掛けた小さな青い石を思い起こす。それからザインの腕の中で目を閉じたままのユージュを見つめた。
ユージュだけの望みだろうか。
それとも。
(……俺達は、傍にいて欲しいんだ――)
ザインはユージュを抱えたまま動かない。
それまでヴェパールは呑まれたように目の前の光景を見据えていたが、ようやく自分を取り戻すと、口元に勝ち誇った笑みを浮かべザイン

へと近付いた。
手にした戟が海水に小刻みの振動を撒き散らす。
「全く、貴様はくだらない」
どくん。
剣が鳴る。
レオアリスの二振りの剣（つるぎ）。
レオアリスは意識をせず、たいして力を込めてはいなかった。
ただ、父から受け継いだ青い石を想い、彼が自分にくれたものを想っていた。
父から受け継いだ剣。
それまで腕を押さえ込んでいた戒めが、ぐぐ、と押し返される。
どくん。
剣が鳴る。レオアリスの剣と。
ルシファーは瞳を細めた。
レオアリスの剣はもう、彼女の手から解き放たれる。
それを眺め、呆れ混じりの笑みが零れる。
「ほんとうに、剣士は厄介ね――」
そう呟き、ザインと、そしてユージュにもまた、その瞳を向けた。
ヴェパールはザインの前に立つと、ザインの肩を掴んで、ぐい、と頭を引き上げた。
ザインが閉じていた両眼を薄らと開く。だが目の前のヴェパールを認めた様子は無く、血は全ての傷口から止まる事無く流れ続けている。
ヴェパールの口元が笑みに歪む。
「残念だったな。もう少しで、三百年積もりに積もった私への恨みを晴らせたものを」
せせら笑いも耳には届いていないのか、ザインは言葉を返す様子もなく呼吸は既にあるか無いかに細い。ヴェパールはザインの失われた肘から先を眺め、そして残った左腕と上体でユージュをしっかりと抱え込んでいる様に、愉悦含みの眼を向けた。
「そのザマで、まだ守ろうとしているつもりのようだが――初めから見捨てていても、何も変わらなかったな。哀れな事だ――」
戟の切っ先をザインの首筋に当てる。
「三百年振りに、主のもとへ行くといい。すぐにその子供も送ってやる」
その時になってようやく、ザインが、微かに、何事かを呟いた。
「何だ？　最後に聞いてやろう」
ヴェパールは聞き取る為に頭を寄せた。
「――悪、い、な」
「主に詫びか。どうせすぐ、話ができる……」
刃が肉を突き通す鈍い音がした。ヴェパールの笑みが途中で凍り付く。
ヴェパールは瞼の無い平たい両眼を見開き、脇腹を見下ろした。
残っていた愉悦の欠片が、消える。
「貴様……、どうして、それを」
「ユージュが、戻してくれた」
ヴェパールの脇腹に、食い千切られたザインの右腕の剣が突き立っていた。
鮫の腹から引き摺り出した時、ユージュがその両手に抱えていた。

ヴェパールは一度大きく息をして、まじまじと自分に突き立った剣を見た。
「――、貴様」
ザインが剣を引き抜く。剣は躊躇う事無く、ヴェパールの傍らに浮いていた緑の光球を断ち、そのままよろめくヴェパールを追って斬り付けた。
「悪いな」
ザインは口元だけで笑った。「レオアリス――」
ヴェパールの左肩が裂け、深く開いた傷が血を撒き散らす。
「俺は、望みを通させてもらう」

ヴェパールの胸へ、ザインの剣が奔(はし)る。ヴェパールはザインの首筋に当てていた戟の刃を引きかけ――、二つの刃は同時に弾かれた。
「駄目です」
戒めを断ち切ったレオアリスの二振りの剣が、ヴェパールの戟とザインの剣を抑えている。
ヴェパールは戟を抑えている剣を、荒い呼吸と共に睨んだ。ただ抑えているだけに見えて、戟はまるで動かない。
ザインがレオアリスの剣を見て笑う。たった今身体を動かせていたのが冗談だったかのように、ザインは急速に疲弊し、微かな呼吸をようやく繰り返していた。
「ああ、やっぱり――、ジンに良く、似てるな」
どこか楽しそうなその言い方に、レオアリスは遣る瀬ない怒りを感じた。
いや、多分、悲しいのかもしれない。
どちらの感情も良く、似ている。
「――貴方には、復讐よりも大切なものがあるはずだ。すぐ目の前に。それを見てください」
ザインは無音で笑った。

「判っているさ」
「いいや、判ってない」　レオアリスは一度、ゆっくり息を吸った。
漆黒の瞳が真っ直ぐザインを見つめる。
「――それは、俺達にしか、判らないんだ」
「――」
ザインはレオアリスの瞳を見つめ返し、そしてそれをユージュの上に落とした。
ユージュが必死に自分を呼んでいた姿が目に甦る。捕えられた泡の中で。領事館の部屋や、交易組合で。
二人で暮らした家の、緑なす岸壁の上で。
いつでもユージュは、自分を呼んでいた。
成長しないユージュの原因は、ただ剣士の血のせいだろうと思っていた。
けれどルシファーの言うとおり、それだけでは無かったのかもしれない。
（俺の、せいか――）
ザインはふと、レオアリスを見上げた。
レオアリスが今、自分の上に見ているのは、ジンの姿だ。
十七年前の冬の日の、一度も見た事すらない父の姿。
「――」
その瞳の色に胸を突かれる。
ユージュと同じ、漆黒。
ふいに、叩きのめされたように、思った。

ユージュは自分をいつ、どう思い起こすのだろう。

見ない振りをしていた後悔が、膨れ上がって塊になる。
「……俺は、身勝手だな――」
ザインの呟きが、ポツリとレオアリスの耳に届く。
「ザ――」
思い直してくれたのだと、ほっとして見下ろしかけた時、ザインは力を失ってレオアリスの足元に崩れた。
「ザインさん――、！」
ヴェパールの戟が跳ね上がる。レオアリスは左の剣で戟を弾いた。
ヴェパールは衝撃を抑えきれず数間の距離を押し出された。ザインの剣によって深く抉られた腹の傷を抑え、よろめきながらも尚も身を起こす。
平たい銀色の瞳にぎらぎらと憔悴と怒りを宿し、レオアリスと、ザインを睨んだ。
「この借りは、必ず返す」
「お前はまだ」
憤りを覚え、レオアリスが口を開きかけた時、すぐ後ろで悲鳴が上がった。
「父さん！」
胸を鳴らし素早く視線を向ける。いつの間にかユージュが身を起こして瞳を見開き、その恐怖を湛えた瞳で、自分に覆い被さるように倒れているザインを見つめていた。
レオアリスは這い上がる冷たい予感を押し殺し、唇を噛み締めた。
ザインの傷が、全く癒えていない。
血はもう、流れてもいなかった。
「――」
（まだだ）
ザインはまだ、ユージュと何も言葉を交わしていない。
（違う、そうじゃない、まだ）
まだ終わりじゃあない。
（まだ早い――、早いだろ）
ユージュはまだ、十年もザインと過ごしていない。
でも、剣の気配が無い。
（まだだ！）
「――父さ……父さん、しっかりして――」
震える声が、そっとザインを呼ぶ。
「父さん――起きて」
ユージュは恐る恐るザインの身体を揺すったが、ザインが瞳を開く様子は無かった。
「ユージュ」
肩に触れようとしたレオアリスの手を、ユージュは払い除けた。
「父さん――、剣が、ほら――」
ユージュはザインの右腕を繋ぎ合わせようと、腕と肘の断面を押してた。
「剣があるから――起きて」
父の顔を覗き込み、強張った頬に笑みを浮かべる。
「父さん、ねえ」
「――ユージュ……」
無駄だと、そう言うべきだと判っていながら、それでも何とかなるのではと期待に傾く。
剣さえ。
確かに、剣さえ戻れば、何とかなるんじゃないか。
バインドは、剣を失っても生き延びた。
今、ここで剣が戻れば。
食い千切られた傷痕に合わせようとして、腕は何度もユージュの手から滑り落ちた。
「何で――、付かない、何で――そんなはず無い！」

何で、とユージュは繰り返している。繰り返しながら何度も腕を押し付け、次第に呟きは切羽詰り、悲鳴のように高くなった。
「いやだ――、いやだいやだ、いやだよ……！」
哀願する声に反して、ユージュの抱えていた腕から、水に溶けるように剣が消えていく。
ユージュは両手を伸ばし、引き止めようとするように消えていく刃を掴んだ。
「ボクはもう寝ないから――守ってくれなくてもいいから」
剣はユージュの指を傷つける事すらなく、消えた。
「父さん――！」
ユージュはザインの身体に飛び付いた。全身から迸るような悲鳴が長く尾を引く。
「ユー……」
ユージュの悲鳴に重なるように、笑い声が響いた。ヴェパールが自身の傷を抑えながらも、頬を愉悦に歪める。
「引導を渡してやりたかったが、必要無かったか。結局私を殺す事もできずに、主と同じく私に命を捧げる運命だったのだ。可哀想になぁ」
「黙れ」
「お前はどうする？　同じ剣士だろう。ザインの仇を取るために私を斬らないのか」
「――」
「仲間の仇も討とうとしない、その剣に意味があるのか？　簡単な事だろう。ただ次の条約再締結を放棄すればいいだけだ」
完全に、その意思が無い事を判った上で、嘲笑っている。
レオアリスは苛立つ剣を抑えた。
抑えながらも、思わずにはいられない。
この光景、ヴェパールが引き起こした結末を見て、何故、それでも本当に、抑える必要があるのか。
息を、意識して吸い、吐く。
言い聞かせるように。
（――ある、はずだ）
条約の破棄がもたらすものを、選ぶ訳にはいかない。
ヴェパールの嘲笑う姿。
レオアリスには確信があった。
恐らく、アレウス国が条約破棄を選んだ時に、その笑みは更に深まる。
「どうした」
そう思っても、怒りが腹の底で渦巻く。怒りに連動して、剣が跳ね上がりそうになる。
（抑えろ……）
「ザインは、三百年無駄に過ごしたな。あの時、主と共に殺してやった方が親切だったかもしれん」
「――ッ」
ギリ、と奥歯を噛む。
その瞬間、何かに全身を叩かれた。
（何だ――）
後ろ――、寄せた波が、いや、気配が、全身を叩いた。
レオアリスが振り返る前に、幼い、憎しみを含んだ声がした。
「――殺してやる」
ぎくりとして、レオアリスは振り返った先のユージュに視線を落とした。ユージュはザインに縋りついたまま、二つの大きな瞳に涙を溜め、ヴェパールを睨んでいる。
双眸に満ちた、相手を容赦なく斬り裂く光。激しい憎しみと、怒りとがごちゃ混ぜになっている。
「ユー……」
ユージュの中で打った鼓動が、レオアリスの剣に伝わる。
どくん。

レオアリスはユージュを見つめた。
（まさか）
その正体――、それに思い当たった時、ユージュの内側から何かが叫んだ。
（覚醒だ）
闇の中で雷光を見たように、はっきりと、判る。
先ほどよりも激しく、波が叩く如く剣の気配が肌を叩く。
ユージュはザインの身体を抱き締めたまま、ヴェパールを睨んでいる。
その腕が、光を発し始めた。
「父さんを――よくも」
双眸が、滴る怒りで揺らぐ。
「殺してやる」
隠しも抑えもしない、純粋な殺意がレオアリスの肌を撫でる。それは、バインドから感じたものと同じだった。
バインドは愉悦に満ち――、ユージュは憎しみに満ちていた。
そして憎しみに満ち黒く塗り潰されたまま、ユージュは覚醒しようとしていた。
（まずい）
剣の覚醒はひたすら、剣の力の発露と意志が起こす暴風と対峙しなければならない。
剣を抑えられなければ剣に意思を喰われるか、肉体を内から破壊され、破滅する。
だから剣の覚醒には、補助者が要るのだ。
そしてただでさえ荒れ狂う刃の風に手を突っ込むような状態で、更に怒りや憎しみのままに覚醒しようとすれば、危険は加速度的に高くなる。
（補助を）
「ユージュ」
そう言っても、レオアリスは覚醒の補助の仕方など知らない。だが一刻の猶予もなく、ユージュの剣は姿を現わし始めた。
ザインと同じ右腕に、骨が盛り上がる。
ユージュはヴェパールを睨み据えたまま、発現する剣が生む、骨が変容し自ら砕け散りそうなほどの苦痛に呻いた。
噛み締めた唇が切れ、血が流れる。身体は内から吹き上がる衝動と闘い、激しく揺れた。
「――ぁ、あ」
盛り上がった骨が、砥石で磨ぐように鋭さを増していく。毛細血管が破れ、右腕は赤い霞を纏うようだった。
見開かれた瞳に、明確な意思の光は無い。唇が、笑みの形に釣り上がる。
痛みに肩で激しく呼吸しながら、ユージュは憎しみに打ち震え、笑っていた。
剣が発現する喜び。
斬り裂く事への、喜びだ。
ユージュは剣に呑まれようとしていて、それに逆らう意思は見当たらなかった。
「ユージュ……！　意識を剣に集中しろ！　抑えるんだ」
ユージュの剣が跳ね上がる。
ヴェパールへと奔る剣を、レオアリスは右手の剣で受けた。
「呑まれるな」
全く加減されない力が、剣に伝わる。余波が肩や腕の皮膚を裂く。
「クク……お前が私を守ってくれるのか、有難い。ザインはさぞや悔しがるだろうな」
レオアリスは唇を引き結び、背後のヴェパールに視線を走らせた。冷酷な光が漆黒の瞳を過る。
「黙ってろ。まだ、俺の剣は一振り空いてる。この状態からでも、今のお前は捉えられる」
「私を斬れればな」

「――余り、甘く見るなよ」
レオアリスが纏った青白い陽炎を見つめ、ヴェパールは一瞬息を飲んだ。ゆっくり吐き出す。
「――はったりを」
それだけ言って口を閉ざした。ヴェパールもまた身動きが利かないほどに弱り、自分を回復させるのに全ての意識を集中させている。
回復する。
何事も無かったかのように、生き延びる。
「――」
憤りは抑えがたいほど強い。
それでも、ユージュにヴェパールを殺させる訳にはいかなかった。
それは西海との条約の為というよりも、ユージュ自身と、ザインの為だ。憎しみのままに剣を振らせたくない。
ユージュは邪魔をするレオアリスに苛立ち、闇雲に斬り付けてくる。闇雲の太刀筋など身を掠める訳もないが、一切の加減が無い剣は受け続ければレオアリスの剣すら押し切りそうだった。
それ以上に、このままではユージュの精神が危うい。
(覚醒の、補助――)
発現した剣はユージュの身体などお構いなしに、ただレオアリスと、ヴェパールを斬り裂こうとしてくる。ユージュの細い腕は毛細血管が破れて筋肉が限界を示すように捻れ、軋んでいる。腕の骨も、このままでは持つまい。
「――ユージュ」
レオアリスは短く息を吐き、ユージュの剣を受けていた右手の剣を消した。途端に振り切られた刃が右肩に落ちる。剣が右肩に食い込み、骨を噛んだ。
「っ」
レオアリスはそのまま手を伸ばし、ユージュの二の腕を掴んだ。
(思い出せ――俺は、どうだった)
何も判らず、気付いたら剣を手にしていた。初めはただ、剣が自ら切り裂こうと動くのを眺め――、自分の意識が戻った瞬間、刃の嵐の中に放り出された。
剣は全く自分の意志を受け付けようとせず、無力さに疲れ、全て諦めて、剣に呑まれても構わないと思った。
(何で俺は、呑まれなかったんだ)
ふと、瞳を見開く。
一つの光景が脳裏に浮かんだ。
あの時――
誰かが、剣に触れた。
剣は束の間、ぴたりと荒れ狂うのを止めた。
(そうだ)
バインドと対し、二刀目に呑まれそうになった時にも。
そして、つい先ほど、暴走しかけたレオアリスの剣を、ザインはその手で掴んで抑えた。
(――)
剣に触れる。
一言でそう言っても、それは決して容易い行為ではない。
暴走し、ただ相手を斬り裂く事だけを欲する剣の前に立つ事は、自らの命を剣に晒す危険な賭けだとも言えた。
抑え切れなければ、まず補助者が斬り裂かれる。
けれど、剣士にとって相手の剣に触れる事は、その剣士と向き合う事でもある。
剣士としての、存在そのものと。
(そうか――)
その考えは、すとんと自分の中に納まった。
そういう存在なのだ、自分達は。

「――ユージュ」
右腕を捕まれて動きを抑えられ、ユージュは苛立ち、獣のように声を上げた。瞳には既に意思の光は一切見当たらない。
それでも、まだ間に合うと、そう確信していた。
「ユージュ」
レオアリスは抑えていた二の腕を離し、肩を切り落とそうと食い込む刃を、掴んだ。ユージュの瞳が一瞬、驚いたように見開かれる。その瞳を覗き込む。
「――呑まれるな。この剣は、父さんから受け継いだ剣だろう」
刃を掴む指から血が滴る。一言一言区切るように、レオアリスはユージュの瞳を見ながら告げた。
「君の父さんは、そんな事は望んでいない」
できれば、このまま剣を持たないで欲しいと、そう言っていた。
「自分で良く、判ってるだろ――、ずっと、傍にいたんだ」
押し切ろうとする剣の力が、はっきりと弛む。
レオアリスは腕を伸ばし、ユージュの身体を抱き締めた。剣が戸惑いを顕(あらわ)にして、揺れる。
ザインが――、ジンが、レオアリスに示したもの。
「戻って、生きるんだ」
束の間の沈黙の後――
ユージュの右腕から剣が消え、ユージュは全身の力を失ってレオアリスの腕の中で崩れた。
抱き止めた身体からは意識が失われている。
だが、少し眠った後に目覚めるのは、レオアリス自身が良く判っていた。
ほっと息を吐きかけた時、ふいにユージュの身体の内側で、何かが脈打った。
「何だ――」
まだ剣が落ち着いていないのかと眉を潜めたが、違う。剣ではなく、何か、別のものだ。
「――」
緩めた腕から離れ、ユージュは両腕で膝を抱えて丸くなった。
見つめる先でユージュは次第に身体の内から差す白い光に包まれ、それは繭に包まれたような光景だった。
光の中でユージュの身体が少しずつ変貌を始めた。
手足がすらりと、しなやかに伸びる。
短かった黒髪が、海中にふわりと波打つ。
幼い面差しが、ゆっくりと大人びていく。
「嘘だろ――育つのか」
剣の覚醒に促され、ユージュの中で止まっていた時間も、目覚めて動き出したかのようだ。
身を包んでいた光がゆっくりと収まり、現われたユージュの姿に、もう一度、レオアリスは息を飲み、驚いた。
ザインに寄り添うように丸まっているユージュの面差しは、少女のそれだった。
「――」
詰めていた息を吐いた時、耳を掠めるように、声がすぐ傍で聞こえた。
「可愛い子ね」
「――！」
振り返ったレオアリスの目に映ったのは、白く閃く布の端と、胸に戟を突き立てられたヴェパールの姿だ。
「な――」
まるっきり、気配も無かった。
だが離れた場所から見ても、もはや息が無いのが判る。
例え弱っていたとは言え、ヴェパールが何の抵抗も無く自らの戟を突き立てられた事が信じ難い。
そしてユージュに気を取られてはいたが、レオアリスの手にはまだ剣

があったのだ。
「――」
レオアリスは左手に顕現していたままの剣の感触を確かめた。
「フィオリに良く似てるわ」
この、声。少しくぐもり、海水と空気の膜に隔てられてはいる。
しかし。
「――何のつもりだ。一体、何をしたい」
「手を出せない貴方の代わりに、私が手を下してあげたんじゃない」
声の主の姿を探して、視線を配る。力を失って海中に横たわるヴェパールの姿。
見えるのはそれだけだ。
「西海との条約がある」
「抑える必要なんてないのよ」
「抑える必要はあった。今でも」
「そんな事じゃあその内、大事なものを失うわ」
確信的な声。見てきたかのような。
何かを。
呼吸を抑え、吐き出す。
その問いを口にするのに、全身の力を使った。
「――、貴方は、誰だ」
音は無く、だがはっきりと、笑う気配があった。すぐ後ろだ。
「判っているんじゃないの？」
レオアリスが振り返ろうとした瞬間、重いものを水に落とすような音が続けざまに響いた。
見上げた視線の先で、海面から次々と、泡を纏った塊が飛び込む。
マリ海軍の水兵達だ。
海中のレオアリス達を見つけ、器用に近づいてくる。
「――」
レオアリスは振り返り、自分では意識しないままに、ゆっくりと溜めていた息を吐いた。
澄み渡る海中のどこにも、女の姿は見つけられなかった。

第五章　「変　転」

一

ゆらぐ海面を抜ける。
まず眼に入ったのは太陽だった。低い位置にあってもなお瞳に突き刺さるような強い光が、たった今までいた淡い光の落ちる海の中とは違うのだと、改めて感じさせられる。
抜けるような青い空も、海中に広がる天空とは違う。そこに黒燐と紅燐の飛竜が十数騎ゆっくりと旋回していた。見慣れた風景だ。
レオアリスはまだ眠ったままのユージュを抱えて海面に浮かび、喉の奥に流れ込んでいた海水のせいで何度か咳き込みながら辺りを見回した。
周囲を取り巻くように停泊するマリ王国海軍の軍船。
陽光を弾く青い海面の眩しさに目を細める。すぐ先を、マリ海軍兵士達がザインを抱え、軍船の船縁から下ろされた縄梯子へと泳いでいくのが見えた。
戻ったのだ、と思い、同時に胸の内にそれまであった重苦しい想いとは別のものが浮き上がる。
まだきっと、間に合う。
メネゼスの司令船には王都の法術士が来ていた。王都法術院の中でも最高位の治癒師だ。
眠っているユージュの顔に視線を落とす。明るい陽光の下で見れば、初めからこうしてただ眠っていただけのように思える。
眼が覚めたらきっと、色々と驚く事が多いだろう。疑問は幾らでもあるが、レオアリスの中にはそれへの答えはない。
持っているのはザインだ。
息を吐き、レオアリスもまた船へと向かおうとした時、海面が翳った。
見上げるのと、力強い翼の音が落ちるのと、幼い声が同時だった。
「レオアリス！」
視線を上げた先の空から、銀翼の飛竜が一直線に降りてくる。その背に、ファルシオンがいた。
「殿下――」
幼い姿を見た瞬間、強い安堵がどっと湧き上がった。
ハヤテは海面ギリギリまでおりると浮揚し、ファルシオンが身を乗り出す。後ろにいたスランザールは今にも飛び込んでしまいそうな様子に慌て、ファルシオンの身体を押えた。
「良かった――、ぶじだったのだな」
そう言って、スランザールの心配を余所に更に身を乗り出した。
「レオアリス、手を」
小さな手がレオアリスをハヤテの背に引き上げようと、うんと伸ばされる。レオアリスは微かに笑った。掴んだら多分、一緒に海に落ちてしまう。
「――危険ですからお止めください。スランザール、貴方は」
「わしは無理じゃ。ハヤテにしがみ付いているのですっかり体力を使い果たしてしまったわい」
「私は大丈夫だ。レオアリスぐらい、ぜんぜん引き上げられる」
「じゃあ先に、この子をハヤテの背に乗せていただけますか」
レオアリスが押しやった娘を見て、ファルシオンは眼を丸くした。
「――ユージュ……？」
一目でそう言った事に少なからず驚きも覚えながら、レオアリスは頷いた。
「そうです」
「怪我してるの？」
「いいえ。眠っているだけです」
「――」
ファルシオンは不思議そうにじっとユージュを見つめ、それからユージュの手を掴んだ。ファルシオンがユージュを引き上げようと力を込めている間に、ハヤテに気付いた黒燐の飛竜達が数騎、降下して来る。
「上将！」
そう声をかけたのはフレイザーの部下の左軍少将ベルツだ。

「ベルツか、ちょうど良かった。この子と俺を引き上げてくれるか」
「承知しました」
「私は」
「殿下はスランザール公を船の上に戻して差し上げてください」
レオアリスの言葉にスランザールが頷くのを見て、ファルシオンはハヤテの瞳を見つめた。三騎の飛竜は背にユージュと、レオアリスと、そしてザインを乗せると海面を離れた。

飛竜から降り、硬い甲板に足がついた途端、くらりと視界が回り、レオアリスは船縁の手摺りに手を付いた。海中で、空気の膜が身体を取り巻いていた時よりも呼吸がしにくく感じられ、大きく息を吐く。
ゆっくり、何度か深呼吸をすると、肺は次第に普段の調子を取り戻した。
「――、はぁ」
肩で息をつき、それから右手を広げ、それを見つめた。海中で取り巻いていた膜は最早跡形もない。飛竜で海上を離れた時には、もう消えていただろう。
脳裏にちらりと、海底に沈んでいくヴェパールの姿が過った。同じ手が成したものだ。
「――」
「レオアリス！」
軽い足音が甲板を蹴り、今度こそファルシオンはレオアリスに飛び付いた。
「殿下――」
抱きつき面を上げたファルシオンを見下ろす。伝わってくる暖かな体温に、改めてファルシオンが無事でこの場にいるのだと実感した。
「良く、ご無事で――」
そう言ってから、ファルシオンを濡らしてしまうと気付いて軍服を見回し、驚いて息を呑んだ。つい先ほどまで海の中にいたにも関わらず、既に乾きかけている。
（あの、空気の膜か……）
「レオアリス？　怪我をしたのか？」
レオアリスはファルシオンの手を解くと、後ろに下がり跪いた。追いかけるファルシオンの瞳が、まだ不安の色を残しているのが判る。自分が海に落ちた事で、どれだけ海上が混乱したのかと、まずそれを思った。
レオアリスにはファルシオンの置かれた状況が一切掴めていなかった。本来誰より傍近くに控える役目のはずなのにだ。
膝をついたまま深く頭を伏せた。
「御身をお護りする為にありながら役を果たせず、申し訳ございません」
「そんなの――、いいんだ、レオアリスが無事だったんだから」
そんな事は問題にはならないのだと――そう返す言葉をレオアリスが持っているはずが無い。
自分の取るべき道は正しかったのだろうかと疑問が浮かぶ。
ファルシオンの身を護る事を第一に考え、海上でヴェパールを討つ事に全力を向ける方が正しい選択だったのではないか。
結局、今や西海との均衡は崩れかけている。
「ちゃんと、そなたの部下が守ってくれた。ハヤテもだ」
ファルシオンはくったくなく、後方に立つグランスレイとロットバルトを見て、再び上空を旋回しているハヤテを示した。
「ちゃんと、近衛師団はにんむをはたしている」
そう言ったファルシオンの表情が、ほんの少し前よりも大人びているように思え、レオアリスは束の間、ファルシオンの黄金の瞳を見つめた。
「――勿体ないお言葉です」
「上将」
グランスレイが歩み寄る。グランスレイと、その後ろにいるロットバルト、それから上空を旋回している飛竜の騎影を見上げる。
「良く、殿下を無事護ってくれた」

グランスレイが目礼を返す。
「貴方と同様に――我々自身の任務でもあります」
「上官が指示を下ろせない状況にあっても任務は全うするのが、いい部隊の証拠だ」
ぎし、と甲板を踏む足音と共にそう声を掛けて来たのはメネゼスだ。
「逆に言えば俺達は、常にそれを求められる。ファルシオン殿下の仰るとおり、今回、近衛師団としての任務は果たしただろう」
声に顔を向け、レオアリスはファルシオンに一礼して立ち上がった。
「メネゼス提督」
メネゼスへ目礼し、メネゼスが歩み寄るのを待ってから、レオアリスは改めて辺りを見回した。
周囲に浮かぶ十隻の船はみなどこかしら損害を受けている。この司令船も船縁などがあちこちが傷み、厳しい状況に置かれていた事が読み取れた。
「有り難うございました。色々と助けて頂きました」
「いいや、礼を言うのは俺の方だ。あのまま船をいいように操られてたら、今頃半数は沈んでたかもしれん。そう考えるとぞっとするぜ」
メネゼスはうんざりした口調でそう言うと、少し離れた位置に下ろされたザインとユージュへ視線を向けた。
「あの二人は」
「レガージュの剣士と、彼女はその娘です。詳しい説明は後で――」
甲板に横たわっている姿に、レオアリスはゆっくり息を吐いた。
間に合ったと、そう思える。
「ロットバルト、法術士を呼んでくれ。ここにいるか？」
「すぐに」
ロットバルトが踵を返し、甲板で治癒に当たっていた法術士へ近寄る。
「――ザイン！？」
驚いた声が甲板から上がり、レオアリスは声の方へ視線を向けた。
ファルカンが立ち上がっている。
「ザインか？　何でこんなとこに――まさか」
その先は喉の奥に飲み込まれた。
レオアリスはファルカンの問いかけへの言葉が浮かばず、ザインに視線を落とした。
どう説明するのか――、考えなくてはいけない。
スランザールとグランスレイ、ロットバルトに視線を向けると、それぞれの視線が返る。
レオアリスはファルシオンに一礼し、立ち上がると横たわっているザインの傍に寄った。ファルカンが怪我の治りきっていない身体をよろめかせて近付き、ザインの傍らに膝を落とした。
「ザイン、おい、しっかりしろ――」
肩に触れかけて初めて、ファルカンはザインの右腕に気が付いた。
「右――腕が……」
茫然と息を飲み、血の気の引いた顔を上げてレオアリスを見た。
「大将殿、ザインの」
「――」
「まさか――」
何度か躊躇った後、ファルカンはようやくそれを口にした。「まさかヴェパールと、戦ったんですか」
黙ったまま見返してくるレオアリスの表情を見て、ファルカンは腹立たしいのか悔しいのか、判らない顔をした。
「――何やってんだ」
拳が甲板を打つ。
「何やってんだ、ザイン！　あんたは――、あんたはレガージュの守護者じゃないか！」
襟元を掴もうとした手を、横から伸びた手が押さえた。隣に来ていた老法術士が、落ち窪んだ目をファルカンに向ける。
「落ち着け、ファルカン団長。とにかく術を施す」

「助かるのか――」
「やってみなくては判らない」
ファルカンは身体を起こし、気持ちを落ち着けるように息を吐き、肩を落とした。それから、改めてザインの傍らに横たわる少女を眺めた。黒い緩やかな髪を腰の辺りまで伸ばした、見たところ十六、七歳ほどの娘だ。
「この、女の子は」
「――その子は、ユージュです」
「――ええ？　まさか――」
ファルカンは一瞬ザインの事すら忘れるほど驚いて、ぽかんと口を開けたままもう一度少女をまじまじと眺め、唸った。
「剣が覚醒しました。その影響だと」
「ああ、いや……確かに、フィオリの絵姿に似てる、のか……」
何度も首を捻り、だがどことなく安心したように言った。
「なら、ザインは起きるしかないじゃないか」
「――そう思います、俺も」
ユージュがいるのだから――ザインが伝えていかなくてはいけないのだから、目を覚まさないはずがない。
法術士は既に術式を唱え始めている。レオアリスは黙ってその動きを瞳で追っていた。
ゆっくりとした低い響きが続く。長い術式だ。ザインの身体をごく淡い白い光が包んでいる。
低い響きにつられるように、甲板の上に静寂が落ちる。マリの兵士達でさえ、固唾を呑むようにして法術士とザインを見つめていた。
ふと、ザインの顔を覗き込んでいた老法術士の面に苦汁の表情が掠めたのに気付き、レオアリスはつられるように膝をついた。
法術士が顔を上げ、視線が合う。
どくりと、心臓が鳴った。
「――どうしたんです」
「――」
ファルカンが二人の顔を見比べる。
「何だ……。法術士殿――、ザインは助かるんだろう？」
法術士は答えず、しばらく術式を唱え続けていたが――やがて口を閉ざした。ファルカンが法術士とザインを見比べる。
「……どうしたんだ。終わったのか」
その声に、微かな不安が交じっている。レオアリスは法術士の瞳を正面から捉えた。
「続けてください。まだ、術は半分も」
「――私の術では足りん」
法術士はゆっくりと、だがきっぱりとそう告げた。
「そんな事は無い。貴方は王都でも一番の治癒師じゃないか。貴方になら」
法術士はレオアリスを真っ直ぐに見て、だが首を振った。
「申し訳ないが、大将殿、貴方もご存知の通り、法術は万能ではない――流れた血が多すぎる。もう間に合わん」
「間に、合わない――？」
「剣の欠損も――いや、これこそ私には補えん。もしここが法術院ならばあらゆる手を尽くせるだろうが、そうだったとしても」
一度、口を噤む。それから首を振った。
「今は、触媒すら事欠く状態だ。これ以上続けても」
「しかし」
レオアリスは茫然と法術士を見つめた。頭が、混乱してくる。
間に合うと言って――
（違う、俺がそう思っただけだ）
海中の世界が非現実的過ぎて、あまりに慣れた当たり前の世界に戻り、そこでは問題など何もないと、そう思えたからだ。
ザインは剣を失い、何一つ、状況は変わってなどいないにも関わらず。
（剣――でも、バインドは）

剣を失っても、バインドは生き延び、左腕に新たな剣を宿した。
バインドが剣を失った時、こんなに高位の術士はいなかったのではないか。
（だから間に合うんじゃないのか）
法術士の瞳の中には、レオアリスの期待に応える色がない。
「――そんな、はずは」
心臓の辺りが冷たくなるのを感じる。
なら、ユージュはどうなるのだ。
「力が及ばず、申し訳ないが」
「触媒――」ファルカンはぽつりと呟いて、ふいにレオアリスの腕を掴んだ。レオアリスは驚いてファルカンを見た。
「ザインはさっき、腹を刺されて死にかけた俺に、自分の血を触媒にして助けくれた。そうだよな、法術士殿」
「――」
「血――？　血が触媒？」
どういう事か判らない。そんな事は聞いた事が無かった。
けれどレオアリスは、剣士でありながら剣士という種について、知っている事の方が少ないのだ。
判っているのは、このまま何もできなければ、ユージュが自分と同じ立場になるという事だけだ。
全てを見てしまっている分だけ、何も知らなかった自分よりもっと辛い。
ファルカンはレオアリスの腕を掴んだまま、視線は真っ直ぐ法術士へ向けている。指先に込められた力がファルカンの期待を伝えてくる。
「同じ事をすれば、きっと」
法術士は戸惑い含みの様子でファルカンを見、それからレオアリスを見た。
「確かに。しかし」
「しかし？　何か問題があるのか？　あの時結局、オスロの持ってきた触媒は必要なかっただろう」
「いや……。大将殿、どうされる」
レオアリスは少しのためらいも無く頷いた。
「可能性があるなら、何でもやろう。俺の血が足しになるなら、それでいい。どうすればいいんです」
「確証などないのだ」
「確証はいらない」
法術士は息を吐き、意を決したように頷いた。
「――数滴、血を頂く。術中に被体に落として貰う」
「いつ」
「それも判らんよ。いつでもいい」
どの道効くかも判らないのだから、という含みを言外に感じ期待が揺らぐ。それを押し退けて、レオアリスは法術士を見た。
「やろう。――始めてくれ」
再び、法術士は術式を唱え始めた。ゆっくり、ザインの身体を先ほどと同じ淡い光が包んでいく。
レオアリスは右手を鳩尾に沈め、剣を引き出した。
左腕をザインの上に掲げ、手首の内側に刃を当てる。
普段剣は、レオアリス自身の身を傷つける事はない。
だが今は、レオアリスの意思に従い、すうっと引かれた刃の後に赤い筋が浮かんだ。
ファルシオンが制止に口を開きかけ、両手で声を押さえる。
赤い血が数滴、ザインの上に落ちる。ザインを包む光が確かに、強さを増した。
視線が集中する中、法術士は長い術式を唱え続けた。その間がまるで永遠のように感じられる。
やがて静かに、最後の一節が紡がれ、ザインを包む光に吸い込まれるように消えて行った。
しん、と痛いほどの静寂が落ちた。幾つもの期待に満ちた沈黙だ。

その沈黙に押し囲まれ晒されながら、法術士は束の間ザインの姿を見つめた後、重々しく首を振った。
「反応が無い。もう」
レオアリスは初め、法術士の言葉の意味が掴めずに小さく繰り返し、それから身を乗り出した。
「――血が、足りないなら」
「いいや」
ファルカンが拳を握り、法術士を睨む。
「何故――何で駄目なんだ、俺の時は」
「不明だが……或いは作用が限定されるのかもしれん」
「限定？　どういう」
「ザインはあの時、触媒を用意するまでの繋ぎと言った。同じ剣士に作用するほどには、触媒としての効果を持たないのだろう」
「――」
レオアリスは唇を噛み締め、ザインに瞳を落とした。
「……ユージュがいるんだ」
眠ったままのユージュを眺めていたファルカンがぽつりと呟く。両手を伸ばし、ザインの襟首を掴んだ。
「――ザイン」
引き上げた時から何も変わらないザインを睨み付ける。その姿は頑なに、眼を開ける事を拒否しているようですらある。
「ユージュはどうする……ここにいるんだぞ。このまま――、このまま残して行くのか！」
ファルカンは激昂し、ザインの身体を何度も、力一杯揺さ振った。
「呆れるぜ――この三百年、一体何を見てたんだ？　あんたの大切なものはフィオリだけか！　あんたが護るものは！　ユージュは」
ザインの頭が何の抵抗も無く揺れ、肘から先を失った右腕が甲板に当たって音を立てる。
「ユージュはそうじゃ無いとでも言うのか！」
「ファルカン団長、もうよせ」
「ユージュはあんたの娘だろう！　街だの、主の意志だの、そんなものは一切関係無い。切り捨てたって何も変わらん。レガージュにはもう船団も、組合もあるんだからな。あんたが言うとおり、守護者に頼り切る時代は終わったさ――。だが、ユージュは違うだろう！」
甲板にはファルカンの声しかない。それが空しく響くのか、それとも意味を持つのか、誰もが測りかねたまま、黙ってファルカンを見つめている。
「ザイン――！　眼を開けろ……」
ザインの耳に届いているのか。
「他の誰でもない――、ユージュこそ、あんたが護らなくて誰が護るんだ！」
しん、と再び波のように沈黙が寄せる。
ファルカンは肺から息を吐き出し切って、ゆっくり、ザインの襟首を離した。
一度も、ザインの身体の指先さえ、ほんの僅かの反応も返す事は無かった。
「――」
吹き上がるものを押え、唇を噛み、ファルカンはザインを睨み付けていたが、やがてその眼を、微かに瞼を震わせながら閉じた。
「――連れて帰る」
低く、そう言った。取り巻く輪の中に立つメネゼスを振り返る。
「メネゼス提督――船団の船をここに付けさせていただけますか」
「――問題は無い」
ファルカンは立ち上がり、ふと輝く海を眺めた。
今は穏やかに横たわる、三百年ザインが見つめ続けてきた海。
「それともザインは、主と同じ海に眠りたいのか――」
「――」
レオアリスは重い息を殺して右手の剣を消しかけ――、何かに吸い寄

せられるように白刃を見つめた。
微かに――、青白い光が脈打っている。
呼応するように。
傍らのユージュを見て、それからザインを見た。
「――鼓動」
「上将？」
レオアリスは膝をつき、ザインの身体を掴むようにして胸に耳を押し当てた。
「大将殿……」
ファルカンは声を上ずらせ、同じようにザインの横に膝をついた。
「ザイン」
どくん、と――レオアリスの耳が鼓動を捉えた。
初めはゆっくり一つ打ち、次第に回数を増し、やがて確かな連続になる。
途絶えていた呼吸が、戻った。
覗き込むファルカンと、レオアリスと――、ファルシオンや、メネゼス達すら息を飲む中、ザインは二、三度瞬きをし、眼を開けた。
「――ザイン」
「ファルカンか……」
ごほ、と僅かに噎せ、ザインは身を起した。茫然とザインの様子を眺めていたファルカンが、慌てて押し留める。
「ま、待て……まだ起きるのは無理だろう。生き返ったばっかりだぞ」
「何の話だ。――ああ」自分の右腕に視線を落とし、ザインは暫くの間、口を閉ざした。
無言のまま何を思うのかレオアリスは息を詰めたが、それも長くは無く、ザインは振り切るように息を一つ吐くと、辺りを見回した。
「ユージュは。無事なのか」
一番初めに口に出した言葉を聞いて、ファルカンが嬉しそうに破顔する。
「そこだ。あんたの隣だよ」
ファルカンの示した先に横たわる少女を見て、ザインはたった今失われた右腕を見つめた時よりもなお、黙り込んだ。
「――」
「覚醒、したんです」
レオアリスは幾分躊躇いつつ、ザインに声をかけた。ザインはユージュが覚醒し、成長した時、それを見ていない。驚いただろうと、そう思った。
「今は眠ってるけど、それだけで問題は無いと思います。でも俺より、貴方にしっかり確認してもらわないと何とも言えませんが」
ザインは振り向かず、何も問い返さずにまだユージュを見つめている。
「――ザインさん？」
「ザイン、」
「えっ」
ようやく振り返り、そしてもう一度ユージュを見つめたザインの上には、たった今死の淵から戻ってきた事も、三百年もの間フィオリ・アル・レガージュの街を護ってきた剣士の面影も全く無い。
「ユ、ユージュ？」
「俺も驚いた。でも、確かにフィオリの絵姿に似てると思ったら、何となく納得したんだが……」
「ファルカン」
「何だ」
「――どうすればいい」
「……」
「今まで十歳程度で……いきなり成長って、そんな事を言われても」
メネゼスはレオアリスの横に立ち、不審そうに尋ねた。
「あれがレガージュの剣士か？　どうにも情けねぇな。何がどうなってる」
「いえ、今まであの子は十歳くらいだったので――急に成長したと言う

か」
「何だそりゃあ。剣士ってのは皆そうなのか？」
「――残念ながら、俺にも良く」
レオアリスが苦笑して見せると、メネゼスはますます不可解そうな顔をした。
まだザインは狼狽し、半ば頭を抱えて困り果てている。
「だって十代の、これくらいの女の子って言うのは、色々難しいものなんだろう？　ど、どうすれば」
「お、俺は知らん、独り身だからな。俺に聞かないでくれ」
「しかし」
混乱しきっているザインへ一つ溜息を吐き、ファルカンはユージュの身体を起すと、ザインへぐい、と押し出した。
「幾つだろうが――、あんたの子だ。あんたと、フィオリの」
「――」
ザインは左腕だけでユージュを受け止めた。眠っている顔を見つめる。常に遠くを見つめていた双眸に、ユージュの姿がはっきりと映っている。その瞳を柔らかく細めた。
「――フィオリに、良く似ているな……」
「そうだ。だが俺にはあんたにも良く似ているように見える」
「――ああ。そうかもしれない」
そう言うと、眠っているユージュを起さないようにして、ザインはその腕の中にそっと抱き締めた。

二

レガージュ交易組合長カリカオテは、ファルシオンとマリ王国海軍との会見が始まってからずっと、港の桟橋に彫像のように立ち沖合いに並ぶ軍船を見つめていた。
マリの火球砲が撃ち込まれ港が騒然とし、レガージュ船団の男達がマリ王国海軍へと船を駆った時――近衛師団と正規軍の飛竜が飛んだ時、その都度、これで戦いを避けられないのかと覚悟した。
マリ王国海軍が海中に火球砲を一斉に撃ったのを見て何があったのかと驚き、海が立ち上がり荒れ狂う姿に、もはや引き返せない所まで踏み込んだと思い、膝が震えた。
マリ王国だけではなく、西海との争いに発展する事と、そして万が一にも、あの場にいるファルシオンが命を落とす事があったら、と――
いつの間にか港も街もしんと静まり返り、荒れ狂う海と波に揉まれる船、そしてその背景の奇妙に青い空が別世界の出来事のように感じられていた。まるで伝説の中の時が止まった街のように、誰もが立ち尽くし言葉を失って沖合いを見つめている。
ひしめき海に落ちそうなほどの人だかりができていながら誰一人その場を動かず、そして唐突に、空は何事もなかったかのように晴れ、海は静まり、マリ王国海軍の軍船さえも動きを止めた。
ふいに海から立ち上がった一陣の風が、カリカオテが纏う長衣を飛ばしそうなほど吹き付け、街の斜面を駆け上がってその先の丘の向こうへと消える。
傍らに立っていたエルンストがぶるりと身を揺すり、冷たい手を襟筋に当てられたような顔で風の抜けて行った先を振り返った。その風が合図だったかのように、レガージュに再び騒めきが戻る。
「カリカオテ――、一体何が、どうなっているのだ」
ビルゼンはそう口にしたが、彼もまたカリカオテがそれに答えると思っていた訳ではない。

「殿下は……」
言葉が続かない。
穏やかに静まった海が余計に不安を掻き立て、カリカオテもエルンストもビルゼンも、食い入るように沖合いの船団を見つめた。港はざわざわと揺れながら、まだ呑まれたまま、具体的に何か行動に移そうという者はいなかった。
ふと、誰かが腕を上げ、船団を指差した。「おい、あれを見ろ――」
マリ王国海軍の船団がゆっくりと動きながら左右に割れ、中央から一隻の船が進み出る。
船は青い空を背に真っ白な帆を張ると、帆に風を受け、レガージュを目指して進み始めた。
「殿下の船だ――」
どこかで声が上がり、カリカオテも頷いた。確かに、会談に赴くファルシオンを送った船だ。
次第に近付く船影の、帆柱の先に旗が靡(なび)いているのが見える。
「旗だぞ」
港を出る時には、船は近衛師団旗だけを掲げていた。
カリカオテは鼓動を押さえ、目を凝らした。傍らでエルンストが息を呑むのが聞こえる。
旗は二旗、風に靡いていた。
近衛師団旗と――、レガージュ。
会談の始まりにはマリ王国海軍が掲げる事を認めなかったフィオリ・アル・レガージュの旗が、海原と空にその姿を示すように翻っている。
カリカオテは声が震えるのを感じながら、呟いた。
「――では、会談は」
港に歓声が上がる。それは瞬く間に街全体に広がった。
夕暮れになっても港はざわざわと騒がしさを収めなかった。港には今、マリ王国海軍の軍船が他の交易船やレガージュ船団の船と並び、重そうに威風漂う船体を揺らしている。
フィオリ・アル・レガージュの港に十一隻もの軍船が停泊するのは、国内外の物を問わずおそらくこの三百年来初めての事だろう。レガージュの住民達は港に集まり、まだ不安混じりに、しかし今は珍しさの勝った様子で居並ぶ軍船を見上げていた。
船が桟橋に接岸し、降り立った王太子ファルシオンを見た時の歓声と、負傷したザインやファルカンの姿への驚きがまだ残っている。やはりマリ王国海軍と戦ったのかと思ったが、ファルシオンが近衛師団と正規軍を従えて桟橋に立ち、後から接岸したマリの軍船から降りた将校を迎えた事で安堵と少なからず新しい疑問に変わった。
港だけではなく街のあちこちが騒がしい。当然、王太子ファルシオンとレオアリス達近衛師団将校、ファルカンやザイン――そしてマリ海軍の将校数名が入ってしばらく経つ交易組合会館の前の広場にも、多くの住民達が集まっていた。
レオアリスは室内に揃った顔触れを見渡し、つい三刻ほど前にはもっと深刻な表情で、同じこの場所にいた事を思い返した。マリ王国の疑いをどう晴らすか――、確証も手段もほとんど無く、室内は重苦しい緊張に満ちていた。
今はファルシオンが座る円卓の対面に副官を従えたマリ王国海軍提督のメネゼスが着き、円卓の右側壁際にレオアリス達が、左側にはカリカオテやエルンスト等とファルカン、そしてザインが立っている。
それは事態の収束を物語る姿に見える。
（収束――）
レオアリスは束の間、窓の外の海に瞳を向けた。その言葉に実感は無い。

「マリ王国メネゼス提督閣下、フィオリ・アル・レガージュへおいでくださり、お礼をもうし上げます」
ファルシオンは幼い顔を躊躇わずメネゼスへ向け、そう切り出した。その大人びた様子に、レオアリスはファルシオンを見つめた。
ファルシオンもまた、港を出る前と今とで、大きく変わったように思える。それは若木の枝に鮮やかな緑が芽吹く印象があった。
「本当は早くお体をやすめていただきたいけれど、我々はもう少しお話をしなくてはいけないと思います」
「王太子殿下の仰せの通り、王へ報告する前に互いの内容を整理する必要があるでしょう」
メネゼスはそう頷き、そこに居るのがまだ幼い王子ではなく、成人した一人の国使と相対するように黙礼した。
「ファルシオン殿下。貴方のお陰で我々は、愚かな過ちに踏み込まずに済んだ。その事にまず、御礼を申し上げます。そして何より、この美しく豊かな街にこうして身を置ける機会を失わなかった事に」
ファルシオンは柔らかい頬を紅潮させた。
今、この場こそが、アレウス王国国使ファルシオンとマリ王国国使メネゼスとの正式な会談の席と言えるのかもしれない。
カリカオテ達はメネゼスの言葉でマリ王国の疑いが晴れたのだと実感し、ようやく僅かに肩の力を抜いた。けれど依然として、場には慎重な空気が漂っている。メネゼスはその空気を切り裂くように続けた。
「既に互いの間にあった亀裂はほぼ埋まっています。だが、原因がどこにあったか、何が行われたか、明らかにしなければなりません」
原因、とレオアリスは呟いた。ゼ・アマーリア号の襲撃もマリ王国海軍への襲撃も、それがヴェパールの仕組んだ計略によるものだという事実は、既にメネゼス達の上にも明白になっている。
だが、それが結論ではない。
ファルシオンとメネゼスが挟む円卓の、漆で塗られた艶やかな表面とその下に浮かぶ異国の様式の模様が、海面で隔てられたあの別世界に意識を誘う。
地上とは全く違う。それが西海と、相容れない由縁だろうか。
（相容れない――）
そう言い切る事に、まだ違和感はある。
けれど船上に戻り、初めてファルシオンの無事な姿を確認した時に押し寄せた後悔に近い疑問――自分は本当に重視すべきものを見誤っていたのではないかという疑問もまた、レオアリスの中にあった。
「大将殿」
呼ばれて、レオアリスは思考から意識を戻した。メネゼスの隻眼が自分の上にある。
「我々にとって不明なものがさほど多いとは思っていない。ただその内一つは貴侯が知っているものだろう。正直に言えば最も気になっていたところでもあり、おそらくこの場の者全て」
メネゼスは一旦、ファルシオンやスランザール、ファルカン、そしてレオアリスの傍らに立つグランスレイ達を見渡した。「船上に残っていた者達にとって、一番の関心事だろう。まずはあの海の中で何があったのか、説明していただけまいか」
「――」
どう説明するのが、最も波乱の少ない方法なのか――、レオアリスは咄嗟に迷って頬を張り詰めた。港に戻る間にスランザール達と検討する時間が取れなかった分、その方針が定まっていなかった。
だが確かに、メネゼス達マリ王国側には真実を知る権利がある。躊躇っているレオアリスを見て、メネゼスは苦笑と同情が入り交じった笑みを頬に刷いた。
「そう言えば、貴国は面倒な禁忌を抱えていたな。ならばまずは俺から尋ねよう」
隻眼がレオアリスへ据えられる。
「ヴァイパルは倒したのか」

メネゼスは場に漂う空気をあっさり切り裂くように、遠慮もなく口にした。
「――」
ファルシオンやスランザール、ロットバルト、グランスレイ、フレイザー、そしてザインの、それぞれの問いかけるような視線を感じながら、まだほんの僅か躊躇い――、そしてゆっくり息を吐くと、レオアリスは顔を持ち上げた。
どの道、伏せたままで通る話では無い。王都に戻り、王と諸侯の前に立った時、この言葉がどんな波紋を広げるのかと、ちらりと考える。
「――ヴェパールは、おそらく、死んだはずです」
ある程度状況からそれを予期していながら、スランザールもグランスレイも、ロットバルトもさえも息を詰めた。ザインは彼等とは別種の感情を浮かべたが、すぐにそれを消した。ただの結果として聞いたのはメネゼスだけだ。
「大将殿が？」
「いいえ」
レオアリスの口から出た否定に、他の誰よりも驚いたのはザインだった。今度は感情を消しきれず、強張った顔で身を乗り出した。
「お前じゃない？　じゃあ誰が」
そう口にして、ふいに瞳が険しさを帯びる。
「――まさか」
「ザイン、落ち着け」
ファルカンが宥めるように肩に手を置く。
レオアリスはザインを見つめ、ザインはあの声の正体をどこまで知っているのだろうかと思った。
「その瞬間を俺は見ていません。誰が手を下したのか――どうやったのか」
自らの戟を胸に突き立て海中に横たわるヴェパールの姿が浮かぶ。あっさりと言っていい程容易く、ヴェパールは命を断たれていた。
ユージュの覚醒に意識を取られていたとは言え、レオアリスはその気配に気付きもしなかった事に驚いていた。
その手段もだ。
（奴自身の戟――あれが致命傷とは思えない）
レオアリスがレオアリス自身の剣では傷付かないのと同様に、ヴェパールの戟もそういう性質のものだ。
（――見せしめ……いや）
そんな意図すら感じられない。
ビュルゲルの時とは全く違う。
ただ単に、もう必要が無かったからではないか――そんな印象を受ける無造作さ。
あの笑みを含んだ軽やかな口調。それに良くそぐうと、そんな事さえ思える。
一度、手のひらに視線を落とした。包んでいた空気の膜。その手を握り込む。
「明確には言えません」
「明確には、か。幅を持たせた言葉に聞こえるが、考え過ぎか？」
「――いいえ」
「上将――前回と同じではないと？」
グランスレイは驚きと戸惑いを含んだ口調でそう聞いた。ビュルゲルの時と――つまりは、海皇が手を下したのではないのか、と。
レオアリスはきっぱりと首を振った。
「違う。その気配は全く無かった」
「――」
「手を下したのが誰か――、証明できない。そもそも、全ての証明が難しい。ヴェパールが本当に死んだのか、手を下したのが誰で、何の為か」
息を吐き、明瞭に告げる。
「あの場にいたのは、俺だけだ」

レオアリスの瞳には微かな、だが複雑な要素を孕んだ光が宿っている。
「――」
ロットバルトは眉を潜めた。ヴェパールが死んだとあっては、西海がこの件に関してアレウス国側の責任を追及して来た時、著しく不利な状況に置かれる。
（しかも上将の立場にはかなり影響が出るだろう）
影響、という範疇を越えているかもしれない。
レオアリス以外誰も、その場を見ていない――。つまりは、レオアリスがヴェパールを斬らなかったという証明もまた、できないと言う事だ。
グランスレイと視線を交わし、そこに同じ懸念を見つけてこの先の困難を想定しながら、レオアリスの面を見つめた。
レオアリスが瞳に浮かべた光から、この状況が意味するものを、レオアリス自身良く理解しているのだと判る。
（どうする――躱しようはあるだろうが、そう簡単じゃあない）
幾つかの方法について、既に試算を始めながら、ロットバルトはレオアリスと、ファルシオンとメネゼスを見た。
重く漂った空気の中、一番に口を開いたのはザインだった。
「俺もいただろう」
視線がザインに集中する。ザインはレオアリスへと鋭い瞳を向けた。
「まだ俺の提案は生きている。俺を斬って王へ報告するのが一番手っ取り早いかもしれない」
「ザイン！」
ファルカンやカリカオテ達が青冷める。レオアリスは思わず殴りたくなり、相手はあれでも重症者なのだと言い聞かせて抑えた。
「貴方はまだそんな事を――。そんな提案は元々何の意味もない。いいからユージュの傍にいてください。大体まだ体力だって本調子じゃないくせに、他の事なんて考えてる場合じゃないでしょう」
身も蓋もない言われ方に、ザインは眼を瞠って少し顎を引いた。
「――意外と、厳しいな」
「これが普通です」
ユージュはまだ眠ったままだが、もう明日にでも眼が覚める。剣が覚醒し、その上急激に成長して、ユージュはきっとひどく混乱するだろう。そうしたら一番に必要なのは父であり、導き手であるザインの存在だ。
「とにかく、話にならない」
きっぱりと言い切ると、それ以上はザインも言い募る事はなかった。ザインはユージュを寝かせている部屋がある方へ一旦視線を投げ、口元に微かな、だが温かい笑みを浮かべた。
「――素直に受けるよ。もう今更、ユージュを置いて行けないからな」
そう言いながら、ザインはまだ重い自分の身体を不満そうに動かし、床に敷き詰められた絨毯の上に膝をつくと、ファルシオンを見上げた。
「ファルシオン殿下。そうだとはしても、私がこの場を騒がせたのは紛れもない事実です。負うべき責任は果たすつもりでおります。いかようにも、ご命令を」
「――私たちは、本当のことを、ちゃんと知らなくちゃいけない」
「その件なら、私はお役に立てるでしょう」
「ザインさん」
確信を帯びたザインの言葉にひやりとして、レオアリスは言葉を挟んだ。ザインの瞳がレオアリスへ向けられる。
「もう一人、関わっていた者がいる。レオアリス、お前は気付いていなかったかもしれないが、俺がヴェパールと戦った時、その相手もあの場にいた」
「――」
レオアリスは息を詰めた。
「その様子だと気付いていたか。相手が誰かも――」
「それは、確証が」
『もう、判っているんじゃないの？』
（――）
呼吸を抑えるように、奥歯を噛み締める。

ふと視線が部屋の窓に止まり、レオアリスはロットバルトがこの部屋で、それを示唆した事を改めて思い出した。
あの時、あの窓を開けて、ロットバルトが風を入れた。
意識して、呼吸を押さえ、たった今窓が開き潮風が流れ込んだかのように、再び窓を見つめる。
言葉を選びながらも――、ロットバルトの示した内容は決して穏やかでは無かった。
決定的なその事実に、すうっと血が足元へ下がる思いがする。
ザインが構わず続ける。
「俺は会って、直接話もした」
退きようがない。
それまでレオアリスは、あの声の主の姿を脳裏に浮かべられる状況にありながら、それを避けていた。
「――」
「お前は迷っているようだが、どうするつもりだ。俺が話した限りでは自らの意思で関わっているのは確実だが、だからこそお前の為の証言に立つとは思えないな。放っておけば、必ず身の内から肉を食い荒らすぞ」
「上将？　何の話です」
グランスレイが眉を顰める。ロットバルトはレオアリスの瞳に浮かんだ色とザインの言葉に、何に思い当たったのか、再びレオアリスの瞳へ視線を注いだ後、素早くスランザールへ向けた。スランザールは誰でもなく、部屋の一点を睨んでいる。
「――」
「――誰のこと？」
ファルシオンが訝しそうに尋ね、レオアリスは渦巻いていた思考を意識して振り解いた。今この状態で、何の検討も確認も無くファルシオンに上げる内容ではない。
「いえ――。少し疑問のある点がありますが、俺一人の考えで口にできるものではありません。まずはスランザール公と相談をさせてください。その上で、改めて殿下にご報告いたします」
ファルシオンはじっとレオアリスの瞳を見つめ、そこにファルシオンが不安に思うものがあるのかどうかしばらく考え込んだ後、頷いた。
「わかった。そなたに任せる」
ザインはレオアリス達の様子を確かめるように見回し、再び頭を下げた。
「先ほど申し上げたとおり、私はいつでも、証言を致します。いつなりとお命じください」
そう言って立ち上がり、彼の用件は全て終わったと示すように口を閉ざした。ややあって、スランザールが全員の顔を見回す。
「――今の問題は一つ。ヴェパールの死をどう説明するかじゃ。ビュルゲルが関わった前回と西海の目論見はそう違うまい。それでいてビュルゲルの時と異なり、これほど西海に近い位置にありながら海皇が直接手を下さなかった以上、西海はそう時を置かず説明を求めて来るじゃろう。これを盾にされる訳にはいかん」
「――」
静寂が室内に落ちる。既に月末に迫った西海との条約再締結――、それが期日前に揺らぐのか、と。
「知らねぇ振りをしとけ」
軽やかと言っていい程に、メネゼスはそう言い放った。何の話になったのだろうと、レオアリスは思わずあっけに取られてメネゼスを見返したほどだ。メネゼスは室内に跳ねた驚きを気にした様子も無く、ファルシオンと向かい合った。
「王太子殿下、何を悩まれる。貴方は確証のないままに我々との会談に臨まれた、その当初の意志をお忘れになったのではありますまい」
「意志――」
「その通り。それを貫く事をお勧めする」

メネゼスは口元を歪め、にやりと嘯(うそぶ)くように笑った。
「我々マリ王国は西海だのヴァイパルだのは全く与り知らん。ゼ・アマーリアと軍船を沈めたのはレガージュだと、示された状況からそう考えてレガージュの港に船を寄せた。多少かち合いはしたが――、結果、誤解は解けた」
ファルシオンは黄金の瞳を丸くして、メネゼスを見つめている。メネゼスの背後に立つ副官は、この中で唯一、動揺した様子も無い。上官の思考を良く理解し、揺るぎない信頼を置いているからだ。
「あの男が持ってきたローデン国王の書状が俺の手元にある。それをローデンに照会すれば、『セルメット』が身分を偽った事もはっきりするだろう。セルメットは海賊共の一員で、ゼ・アマーリアを沈めたのはレガージュを装った南海の海賊だった。そう本国には報告をする」
「貴国が求めておられた、今回の補償はどうされる」
「レガージュの仕業で無い以上、補償の必要も無い。取り敢えず船の修復と物資の補給はさせてもらいたいが」
「それは充分に、我々レガージュが提供致します。何なりとお申し付けください」
カリカオテは心得た面持ちで頷くと、メネゼスは口の端を苦笑の形に歪めた。
「対価は払う。幸い港に害を及ぼさなかったとは言え、こちらが火球砲を撃ち込んだのも事実だ」
レオアリスは半分面くらい、そして半ば関心すら覚えメネゼスやスランザールを眺めた。
それも外交というものの中での戦術の一つだと判る。
あくまで表向きに過ぎず、根本的な問題が変わる訳ではないが――、マリ王国とアレウス王国の二国が公式見解として出せば、それで対外的な説明になる。
ある意味では二国間の協定とも言え、メネゼスはそれを提案して見せている。自身が言ったとおり、火球砲での砲撃の不問ついても、その協定の中に含まれると言う事だ。
「それがこの件の決着だ」
「――殿下。それがよろしいかと」
スランザールはファルシオンの決定を待つように、深く頭を下げた。
ファルシオンはじっとメネゼスを見つめ、それから、背筋を伸ばして頷いた。
「提督のおっしゃるとおり――、我々の問題は、ぜんぶとけたと思います。そうあれとねがったように」
室内の空気がほぐれ、カリカオテやファルカンは、ようやく肩の荷を全て下ろしたかのように、そっと息を吐いた。これまで不安を募らせていたレガージュの街はおそらく今日の夜からでも、まるで祭りが始まったかのような賑わいを見せるだろう。
レオアリスは眼を閉じ、そのほんの数瞬の内にここで起きた事を思い返した。
「ファルシオン殿下。貴国の安寧をお祈りする」
表に定めた部分には出る事のない、だが確実に今後直面しなければならないものに対してそう言うと、メネゼスはファルシオンとの会談の席を立った。

三

西の水平線に太陽が落ち、最後に放つ朱色の輝きと濃灰の雲の影、既に世界の大半を覆いつくしている藍色とが、海と空とに入り交じる。

夕闇が濃くなるにつれ、フィオリ・アル・レガージュの街は賑やかさを増していた。

ファルシオンとマリ王国提督メネゼスとの会談の結果が街に流れると、それまで不安を残していた住民達の間に今度こそ心からの喜びが広がった。報せはたちまち街中を駆け抜け、住民達は店だけではなく路上に机や椅子を持ち出すとあちこちで祝杯を上げた。盃（さかずき）が掲げられる度、ファルシオンの名やザインの名を讃える声が交わされる。

レオアリスは港を見渡す位置に建つ、レガージュ交易組合会館の三階の窓から街を眺めていた。

その光景はつい先日過ぎたばかりの、ファルシオンの祝祭日の賑やかさにも似ていた。たった十日ほど、正確には八日しか経っていないのに、あれはまるで何年も前の、ずっと過去の事のように感じられる。

そしてまた、今喜びに沸いている街の人々が、ザインが剣を失った事を知ったらどう感じるのか――、そんな事を思いながら、レオアリスは長い間賑やかな街の灯りにじっと瞳を向けていた。

路地に点る街灯や窓の灯りが視界の奥で瞬く。

時間を巻き戻す。

あの海――右腕の剣を失い、血を流して倒れているザインと、父親に縋りつくユージュ。ユージュの燃えるような憎しみと怒りを宿した瞳。

その先にあるヴェパールの姿。

そして、笑い声。

彼女の姿は、一切見えなかった。

たが、あの時あの場の全てを操っていたのは、紛れもなくあの存在だ。

事態を振り返った今、それは改めて良く見える。

（――）

扉が叩かれ、かちりと金具の回転する音を立てて開く。

「失礼します――」

ロットバルトはまだ街へ視線を落としているレオアリスの近くまで来ると、その傍らの寝台に眼を向けた。

「殿下は良くお休みですね」

寝台にはファルシオンがぐっすりと眠っている。一日の疲れが出たのだろう、会談が終わってこの部屋に入るくらいにはもう眠そうで、うとうととしていた。レオアリスもファルシオンの姿を見て笑い、それから寝台の傍を離れた。

「ああ。お疲れなんだろう。こうして眠っておいでだとやっぱり歳相応だな。さっきまでマリ海軍の提督と向かい合ってたなんて思えない」

窓側に置かれていた椅子を引いて腰かける。ロットバルトはその場に立ったまま向きを変え、レオアリスと向かい合った。

「海上でも、だいぶ力をお使いになったようだし」

その時ですら、レオアリスはファルシオンの傍にいなかった。

苦々しい想いを抑えるように卓に肘をついて、額に手をあてる。湧き上がった感情を飲み込み、視線をロットバルトの上に置いた。

「――どんな感じだ」

「街はここから眺める以上に賑やかです。何人かにざっと歩かせて声を拾った中では、今回の結末に安堵している声が強いと思われます。とは言えそもそもの原因や、マリ海軍が寄せた段階で充分な説明が無かった事など、途中の混乱に不満や不安を抱く者も当然ながらいるようですが」

「そうか――ならここを発つ際に、殿下にお言葉をかけて頂くか」

「そうして頂くのが良いかと。後は交易組合の仕事でしょう。まあそれほど心配は無いと思います」

レオアリスは頷き、それからロットバルトが表情を改めたのに気付き、椅子の上で身体を起した。

「取り敢えず、今の段階で一番話題に上っているのはザインについてです。……剣を失った事は、やはり」
その言葉につられるように、レオアリスは視線を窓の外に投げた。座った姿勢だと陽が落ちて濃い藍に変わった空しか見えないが、街の賑わいは硝子を通して聞こえてくる。
藍色の空はずっと奥まで澄んでいるように思えた。
「――もう知ってるのか……」
ザインが、剣を失った事を、この賑やかな街は。
「港に降りた時、既にかなりの人数が集まっていましたからね。どうしても目に付きますし、隠しようが無い。まあ隠してもいい事はありません。彼が自分で説明する機会は別に設けるでしょうが」
ロットバルトも窓の外へ瞳を向ける。時折聞こえる騒めきの中の、ザインを讃える声。
「知ってるのか――彼等は」
レオアリスはもう一度、驚いた声で呟いた。
自分達の守護者が剣を失った事を知りながら、ああして彼の名を讃えている。
ゆっくり、指先から温かさが昇って来るように思えた。
安心、したからだろう。
ザインが生きてこの街に戻ってくれて、本当に良かったと思った。
その想いを読んだように、ちょうどロットバルトが言った。
「彼等にとっては守護者がどうという問題よりは、ザインが生きて戻った事の方が重要な事のようですね」
「守護者か――、偶像みたいに崇められてるのかと思ったけど、家族みたいな感じなのかもな」
「家族ですか」ロットバルトは問いかけるようにそう言って、賑やかな街を眺めた。
「それと、ユージュが剣士として覚醒しその上成長したと聞いて、それはかなり衝撃的だったようです。会館の前は二人の話が聞きたくて人だかりですよ」
「あれは俺も驚いた。覚醒もそうだけど目の前で成長したからな――大体判ってたか、ユージュが女の子だって」
「どちらか気にして眺めはしませんでしたが、女の子だと言われて驚くほどでも無いのでは？」
ロットバルトが同じように驚かなかった事に、レオアリスは物足りなさを覚えた。
「それはお前が現場を見てないからだろ。普通驚くぜ」
だいぶ真剣な口調でそう言って、話が逸れかけていると気が付き、改めるように足を組んだ。
「まあいいや。――領事は」
「今はこの建物の一室に入れています」
「どうするか、扱いが難しいな」
ロットバルトも頷いた。
「本来ならホースエント子爵は王都へ連行し、共謀の供述を取ったと処分を決定すべきですが、そうなると西海の関わりを公的に認める事になる。スランザール公のご判断がどうか」
「難しい事ばかりか」
どことなく、弱音のように響いたかもしれない。ロットバルトの瞳が伺うようにレオアリスに向けられる。
最大の問題がどこにあるか、それは先ほどのファルシオンとメネゼスとの会談で、もはや判っている。
後は口に出すか出さないか――、公的に認めるか、認めないか。
それだけだ。そしてそれが一番難しい。
「――」
ファルシオンは眠っている。その横顔は安らかだ。
ファルシオンは彼女と、普段どれほど親しくしているだろう。レオアリスはそこについては良く知らない。

ただ、親しくしていたら、ファルシオンは傷付くに違いない。
（親しいというなら、アスタロトの方か）
アスタロトは彼女を姉のように慕っていたはずだ。それを考えると更に気が重い。
（俺は直接姿を見た訳じゃない。何の証拠もなければ証明しようがない。気のせいだと言われればそれまでだ）
それで、仕方ないのではないか――。
一瞬逃げかけた思考を、ザインの声が留めた。
『俺は会って、直接話もした』
ザインが見ている。明白な証拠だ。
『放っておけば、必ず身の内から肉を食い荒らす』
胃に石を詰め込んだように、ずっしりと重く感じられる。
（放っておけば――？　今回何らかの目的があって関わって、この先何かをしようと思ってるって？）
何の目的で。
（国を――、王を支える四大公爵家の一人だ。そんなはずは）
そう思う傍から疑問が次々湧いてくる。
ディノ・メネゼスを助けたのは彼女だと、ロットバルトはそう推測した。
彼を助けたのは何の為か。結果、彼の存在がメネゼスの疑惑を解いたのは事実だ。
ヴェパールの策略を暴き、マリの疑惑を解く為に？
では、ザインを助け、そうしていながらヴェパールに助力する真似をしたのは何の為か――。レオアリスの動きを封じ、ユージュを捉え、ザインを助けるふりをして途中で手のひらを返した。
ヴェパールを手にかけたのは。
ヴェパールは彼女を知っていた。それどころか裏切ったと、そう言った。
（じゃあ、西海の目論見を知って、それを崩そうとしたのか――？）
けれどヴェパールの策略を暴きマリの誤解を解くのなら、会見の場で話せばそれが一番真っ当な方法だ。何故それをしなかったのか。
（――）
天秤はどちらに傾いているのだろう。
付きまとうのは常に奇妙な座りの悪い違和感だ。どこに目的があるのか判らない。判らないから判断が難しく、動きが取りにくい。
（でも、どこかで判断をする必要があるんだ）
ずぶずぶと知らぬ間に、底なしの沼にはまって身動きが取れなくなる前に。
曇天に澄んだ鈴の音が響くように、ふと、一つの声が脳裏に甦った。
『王の剣士――』
ファルシオンの祝賀の夜に、エアリディアルが告げた言葉だ。あの時、妙に、心に引っ掛かった。王女が近衛師団へ掛ける儀礼上の言葉でありながら、どこか別の、何かの意志が感じられた。
『その剣を以って、王の御身を、お護りくださいますよう』
鼓動が鳴る。剣が鳴ったのだ。
レオアリスは剣に意識を向けた。
（考え過ぎだ――）
そう思うのと裏腹に、剣が鳴る。
『わたくしはほんの少しだけ、相手が何を考えていらっしゃるか、想像するのが上手いのです』
（――）
エアリディアルの意図は。
何を考えている、とは――、特定の誰かの事を差していたのか。
『王の御身を』
王――。
レオアリスは双眸に光を宿し、それを上げた。

確証は無い。ルシファーに何らかの害意があるとも、エアリディアルの言葉に意図があるとも。
そして、王やその周辺に、問題を引き起こさないという確証もまた、無い。
ただ一つ判っている事が確実にある。
自分がここにいるのは何の為か。
近衛師団の担う役割は。
（それにこんな仮定の話、多分今のこの状況でしかできない）
王都へ帰ったら、今度は思考すら避けてしまう気がする。それが一番、陥ってはいけないものだと思った。
「上将？」
長い事黙っていたレオアリスが何かを決意したように瞳を上げたのを見て、ロットバルトは眉を寄せた。レオアリスは立ち上がり、一度ファルシオンの眠っている姿を確認した。
ファルシオンに届かないほどの抑えた声で、だが素早く口にする。
「西方公に踏み込む」
「――それは」
ロットバルトは常に冷静な瞳の上に、初めて見せるほどの懸念の色を浮かべた。束の間レオアリスの瞳の奥を覗き込むように見つめた後、ゆっくりとした口調で返した。
「早計です。お考えはあるのでしょうが、簡単に踏み込める相手ではありません」
「判ってる――」
反対するのが当然だ。
だがロットバルトは早計と言い、簡単には踏み込めないと、そう言った。否定ではないのは、ロットバルト自身、疑念があるからだろう。
「海中でヴェパールと対峙した時、もう一人あの場に関わった存在があった。さっきの会談で話が出たな」
ロットバルトは黙って聞いている。
「あの時も言った通り、俺は姿を見た訳じゃない。ただ、幾つか思い当たる事がある」
あの口調、身を包んでいた空気の膜。
『もう、判っているんじゃないの？』
笑みを含んだ問い。
ロットバルトが示したルシファーの関わり。
「踏み込むと言ったって、いきなり尋問するつもりはない。公爵相手に出来る訳も無いしな。ただ、可能な範囲で意図を探っておきたい」
まだ黙っているロットバルトの瞳を見返す。
「疑問がある以上、それがどんな些細なものでも無視はできない。そうだろう」
ロットバルトはゆっくり息を吐いた。
「お考えそのものには賛成です。しかし可能な範囲で意図を探るという、その範囲が無いに等しいのが現実でしょう。それはどうお考えですか」
「一度お会いして、話したい。話す中で掴めるかもしれないだろう」
「無茶を言わないでください」
隠すつもりの一切無い呆れた声が返る。
「尋ね方がどうという問題ではありません。お解りになるはずだ」
ロットバルトは息を吐いて続けた。
「貴方の推測が当たっているなら尚更、面会を申し入れるだけで警戒されるでしょう。西方公はこれまでの相手とは全く違います。一言知らないと言えばそれが通る。揉み消すのも簡単な話だ。それが例え――、近衛師団大将であり王の剣士と呼ばれる、貴方であってもです」
「それは隠すつもりがあればってのが前提だろう。俺にはその意図は見えなかった。ザインさんに姿を見せている時点で、バレたってどうでもいいんだ。その方が問題じゃないか」
「――」
「何を考えての行動か判らないが、会って話をすれば牽制になる。肝心

なのはこれ以上問題を広げない事だ」
ふいに扉を叩く音が割って入り、レオアリスもロットバルトも口をつぐんだ。
「上将」
グランスレイが扉を開けるとスランザールを先に通し、自分も室内に入る。最後にフレイザーが入って扉を閉ざした。
レオアリスはおそらく今、この問題の一番の判断権を持っている老賢者の顔をみつめた。
スランザールがレオアリスの表情へと、じっと皺の奥の小さな眼を向けてくる。レオアリスの考えを見抜いているように思えたが、レオアリスはスランザールの視線を避け、まずは老賢者の隣を抜けて歩み寄るグランスレイを見た。
「法術院へは伝令使を送りました。すぐ返信があるでしょう」
「今晩中に発てそうか？」
尋ねたレオアリスの上からは、たった今までの剣呑な空気はひとまず拭い去られている。
「今のところはっきりとは申し上げられませんが、要望はしております」
「アルジマール院長がこっちにいる訳じゃないからな。王都から法陣を操るとなると、時間はかかっても仕方ない」
そう言いながらも軽く息を吐く。一刻も早く王都へ戻りたいのが本音だ。
「取り敢えず待つしかないな……。その間に一度、ザインさんとユージュの様子を見て来るか。確かめたい事もある」
「レオアリス」
スランザールは低い声でレオアリスを呼んだ。そこには普段とは違う、刃を含んだ鋭さがあった。
「先ほどの会談の折り、ザインが言いかけた事があったはず。それについて話がある」
しまったと思ったのは、昼にロットバルトがルシファーの関わりを指摘した時のスランザールの判断が曖昧だったからだ。スランザールと話す前にもう少し方針を固めたかったが、それを諦めてレオアリスはスランザールの前に立った。
「関わっていた人物――そなたにはその目星がついているのじゃろう」
口調はどことなく詰問に近く、スランザールがどういう意図で尋ねているかが見えずに、束の間迷ってロットバルトと視線を交わした。ロットバルトもまだレオアリスの考えに賛成した訳ではなく、瞳には懸念の色がある。
ただレオアリスはすぐにスランザールを見つめ、頷き返した。
「ついています」
「誰と思う」
「西方公です」
「上将――滅多な事を」
思わずグランスレイが咎めるように口にした。フレイザーは頬を強張らせ、じっとレオアリスを見ている。
「俺のは推測の域を出ませんが、ザインさんは直接会っています」
「上将、お待ちください」
「俺は事実を確かめる必要があると考えています。危険か、危険ではないのか、それを見極めるべきだと。我々は今回の件を解決する為にこのレガージュに派遣されています。そこで起こった事を見なかった事にはできません。王にご報告申し上げる責務があります」
グランスレイはレオアリスの表情を見て、まだ強い懸念を残しながらも一歩後ろへ下がった。
皺の刻まれた額を更に険しい皺で埋め、それを憂うようにスランザールは息を吐いた。
「そなたが言及すれば、必ずそなたに問題が降り掛かろう」
その言い方に、ロットバルトは眉を顰めてスランザールを見た。レオアリスの疑念を肯定しているのような言い方だ。
（いや……もともと老公は何かを知っていた。知っていたのか、想定し

ていたのか……）
　レオアリスは真っ直ぐスランザールの瞳と向かい合っている。
「それは――覚悟の上です。無傷で踏み込める相手じゃない」
「そなたの地位も無事ではすまんぞ」
　レオアリスは一度ファルシオンを見て、更に声を落とした。
「――元から今回の一件で、処分を受けるつもりです。謹慎か、――降格か」
「上将」
　フレイザーが狼狽えた声を零す。レオアリスは微かな自嘲を浮かべた。
「当然あると思ってる。殿下の傍に立たず、ヴェパールの死も見過ごしたからな」
「それは状況がそうなったというだけで、副将やロットバルトも殿下のお傍にはおりました。我々も殿下をお護りするという任務は変わりません。今回もその役目を果たしていると思っています。それに三の戟については、上将が手を下した訳じゃあないんですから、そんな」
　フレイザーは矢継ぎ早にそう言ったが、王都に戻って報告を上げた時、西海の件は抜きにしても反発や批判が出るのは想像が付いた。
「――」
　スランザールは白く長い髯を撫で、じろりとレオアリスを見た。
「まあ喰らっても謹慎ぐらいじゃわい。だが西方公に嫌疑をかければ、降格でも済むまい」
「それでも、確認する必要はあると思っています。当然何もない可能性も充分ありえますし、何もないと判ればそれが一番です」
「――」
　街の喧騒が硝子窓を通して聞こえてくる。今はそれに楽曲の調べも加わったようだ。
　硝子一枚を隔てただけの温度差に、フレイザーは張り詰めた頬のままレオアリスとスランザールを見比べた。
「スランザール」レオアリスは黙っている老賢者へ、訴えるように続けた。
「預けよと仰るならそれに従います。ですが、無かった事にはしないと、約束してください」
　それでもスランザールはじっと黙っていたが、やがてゆっくりと、肺の中の空気を全て吐き出すように長い溜息をついた。
「――約束はしよう。だがわしが指示をするまでそなたは迂闊に動くでない。いいな」
　レオアリスはスランザールの瞳をじっと見つめて、頷いた。

四

訪問を告げようとして右手を持ち上げた時、室内から賑やかな声が上がった。先客がいるようで、ザインは起きているのだとそれで判る。改めて軽く叩いて扉を開くと中から声が飛んだ。

「大将殿！」

大きな声で呼んだのは、レオアリスに法術士の紹介を依頼したブレンダンだ。そのブレンダンとファルカン、そして部屋の左側に置かれた寝台の傍に、ザインが肩から上着を羽織った状態で高い背凭れの付いた椅子に座っていた。

寝ていなくていいのかとも思ったが、もう一台の寝台は使った形跡も無い。

「どうですか？」

部屋に入ってザインと、彼の傍らの寝台へ視線を向ける。レオアリスの後から部屋に入ったロットバルトが壁際に立ち、ザインは視線を上げてそれを見て取ると、先ほどのメネゼスとの会談の席で大っぴらには口にできなかった事を、改めてどう言うべきかと一瞬思案する顔をした。

「良く寝ている」

レオアリスの問いかけに返し、ザインは椅子から立ち上がってレオアリスが近くに来るのを待ち、改めてレオアリスの面を見つめると深々と頭を下げた。

「お前がユージュの覚醒を助けてくれたんだろう。有難う。心から礼を言う」

「いえ――覚醒の補助が何かも判らない状態で、今考えれば無茶をしたと思います」

レオアリスにしてみれば、無謀だったと改めて思う。何とか事なきを得たのはこれまでの自分自身の経験と、周りの補助と、それから剣士としての本能というものも、役に立ったのかもしれない。ザインはそういうものを理解しているのか、気にしたふうもない。

「だが剣は落ち着いているし、ユージュも無事だ。本当に何度礼を言っても足りない。親でありながら俺は何もしてやれなかったからな」

レオアリスは首を振った。

「そんな事はない、貴方は――ユージュを助ける為に、命も投げ出したじゃないか」

「――」

ザインは無言で笑ったが、思うところは当然あるのだろう。

ただ言葉や表情には自らへの不甲斐なさが滲んでいるものの、そこにはユージュが無事だった事への心からの安堵もまた垣間見れて、レオアリスは改めて、ザインが生きてここにいる事に安堵を覚えた。まだ眠っているユージュの上に視線を落とす。

ユージュはいつでも、安心して目を覚ましていいのだ。

「色々話があるだろう、俺達は外すよ」

ファルカンがそう言ってザインの椅子の背を叩き、窓の外を示した。

「ザイン、後で少しでいいから通りに顔を見せてやってくれ。そうしないといつまでも終わらん」

「ああ」

ブレンダンも同じように椅子の背を叩き、挨拶代わりと言うように、つるりとした頭に乗せていた小さな帽子の位置を整えた。

「ザインが顔を見せたらもっと盛り上がって朝まで終わらないだろう。しかしこうなると判ってたらなぁ。王都でせっかくいい酒を仕入れたのに、まだ持ってきてない。今日一日で樽全部飲み尽くしただろうに、惜しい事をした」

ひとしきり嘆いてからレオアリスと向かい合い、ブレンダンは丁寧にお辞儀をした。

「大将殿、私からも改めてお礼を申し上げます。口を聞いてくださったのにこんな事になって、大将殿にご迷惑がかからなかったですかね」

「大丈夫です」

「我々は本当に、ファルシオン殿下とあなた方近衛師団に感謝していますよ」
ブレンダンは両手でレオアリスの手を取って軽く振り、にこにこと相好を崩した。ファルカンもレオアリスへ一礼する。
「できればお礼の場を一席設けたいところです」
「お気持ちは有難いんですが、まだ報告も残っているので、帰都の用意が出来次第戻るつもりでいます」
「いつ発たれるご予定ですか」
「今夜か、遅くとも明日の早朝には」
アルジマールの法術の準備が整えば、もう発てる。戻ってからやるべき事は山積していた。戻れば間を置かず、王への謁見があるだろう。今の内に改めて整理して、謁見後に提出する報告書類の叩き台を作っておく必要があるな、とそう思った。
「そうですか――いや、仕方ありません、それならぜひ、またいらして頂いて、その時にお礼をさせて頂きたい」
「ぜひ」
「ただ今晩の晩餐はもう用意させています。それにはどうぞお付き合いください。隊士の皆さんも空腹でしょう」
「有難うございます、お言葉に甘えさせていただきます」
レオアリスは素直に頷いた。ファルシオンは昼に少しつまんだだけでお腹を空かせているだろうし、レオアリス自身や隊士達もすっかり空腹だった。さすがに酒は飲ませてやれないが、レガージュの食事は隊士達にいい労いになる。
ブレンダンは嬉しそうに手を打った。
「有難い。先日殿下の祝賀にお届けしたよりも、ずっと新鮮な果物やら魚やら、殿下にお召し上がりいただけます。レガージュの品はどれも美味いですがやはり仕入れたては違いますからな。きっとお喜びいただけますよ」
レガージュが扱う交易品への自負が籠もった商人らしい言葉で、晩餐一つも単なる感謝の場ではなく、ファルシオンへレガージュの品の良さを知ってもらう絶好の機会だと捉えているところが、このレガージュという街の性質を端的に現わしていた。おそらく今回の混乱も、交易を続ける上でそれほどの障害と感じていないだろう。
ファルカンは扉の横にいるロットバルトと目礼を交わし、先に廊下に出た。ブレンダンも後に続きかけたがまた足を止め、ザインを振り返った。レオアリスを手で示す。
「そういやザイン、土産の絵姿、やっぱり似てただろう」
「ああ。有難う」
「絵姿？」
レオアリスが首を傾げる。ブレンダンはまた得意そうな笑みを満面に広げた。
「さっそく仕入れるつもりだ。殿下のと大将殿のと――かなり売れる」
そう言ってレオアリスと、それからロットバルトを見た。
「そうそう、あんたのはどこも売り切れで無かったんだ。仕入れるそばから売り切れるって言って何だよと思ったが、本物見ると納得するなぁ。こりゃレガージュの娘っこだけじゃなく、マリやローデンでも喜ばれそうだ。版型買ってうちで刷るかな」
「ブレンダン」今にも懐から算盤を出してきて弾き出しそうな勢いで、ザインが苦笑しながら嗜める。
「いや、こいつは失礼――ついつい商売根性で」
「レガージュの商人にそう言われるのは相当な誉め言葉ですね。ぜひ収益に繋げて頂きたい。レガージュが潤えば国も潤います」
ロットバルトが笑ってそう返すと、ブレンダンは「王都もしっかりしてるな」と言い、「任せてください」と笑った。
ファルカンとブレンダンが部屋を出ると、室内は少しの間静かになっ

た。ユージュの微かな、規則正しい寝息が聞こえる。
　レオアリスはザインと寝台の傍に立った。見下ろしたユージュの寝顔が穏やかで、ほっとする。
「――ユージュは貴方に似た剣士になるかな。あの豪剣。防御くらいはしないと駄目だと思うけど、まあ俺は貴方の普段の剣を知らないからそれだけじゃ言えないか」
　ちくりと刺した言葉にザインが苦笑する。
「普段は俺も防御するさ。――しかし情けないところを見せた。不快な思いもさせただろう」
　レオアリスは首を振り、それからふと、窓の外の藍色を映したような複雑な色を瞳に浮かべ、呟いた。
「堕ちる事も選べるんだな、俺達は――。自分の意思で」
「レオアリス」
　諌める響きが含まれたのに気付いて、レオアリスは笑った。
「そうしたい訳じゃない。どっちかと言えば――そうだな、教訓になったって事です。今回意識がすっ飛んだ分、かなり眼が覚めました」
　ザインの眼から懸念が消える前に、レオアリスは意識してかどうか、冗談混じりにそう言った。
「貴方が俺を止めてくれたお陰で助かりました。あのまま意識が飛んでたらと思うとぞっとする」
　ザインはレオアリスの向こうにいる彼の部下に眼を向けた。剣の制御を失った事を聞かせてもいいのか、気になったからだ。レオアリスの――剣士の剣については王都では、複雑な状況や感情があるだろう。
　ロットバルトは変わらず扉の脇に立ちレオアリスへ瞳を向けていたが、ザインの視線に気付くと束の間それを合わせた。
　そこには確かに懸念があるものの、ザインが心配したものとは違うようだった。懸念を持っているにしろ、少なくとも直属の部下である彼等の中では心配は無用だと、そう思える。だからこそレオアリスが今、近衛師団の大将という位置にいるのだろう。
「――俺もお前に止められた。まあお互い様だな」
　あのままだったらどうなっていたかと、その思いはザインも全く変わらない。むしろより現実的な危機感があった。手を伸ばしてユージュの頭を撫ぜ、存在を確かめる。
「お前の言葉は効いたよ」
　ザインの中に響いたのはそれがレオアリスの心の、ずっと深い所から出た本音だからだろうと思ったが、ザインはそれを胸の内だけに留めた。
「結局俺は、自分の事しか考えていなかったという事だ。あのままならユージュにも――フィオリにも顔向けができなくなるところだった」
「――でもそうはしなかった。それが全てだと思います」
　レオアリスはそう言ったが、恐らく――、ザインの中にあった主を失った事に対する怒りと悔恨が、それで消える訳ではないだろう。
　これからもずっと抱え続けて行くのだと、レオアリスは漠然と思った。
　ゆっくりと長い間、身の裡（うち）に熱を孕み続け燻る熾火（おきび）のように。
　簡単に納得できるものではない。剣士という種の、存在の根幹にあるものだ。
「――」
　ザインは膝の上に左腕を置いて上半身を預けたまま、暫く暗い窓の外に視線を置いていたが、やがて上体を起こし改めて身体をレオアリスへと向けた。
「さて、少し寄り道をしたが――、あの件を確認しに来たんだろう」
　レオアリスは一度、間を置いた。
「……そうです」
「俺は幾らでも証言に立つ」
「貴方が言う人物は」
　半歩先を行くザインを引き止めたがっているようなレオアリスの問いに対し、ザインはあっさりと答えを返した。
「西方公だ。ホースエントがそう呼んだ。名乗りはしなかったが――問

題は無いだろう。顔を見れば判る」
「――」
ザインはレオアリスとロットバルトを見た。驚きに息を飲む事もなく――沈黙自体、彼等自身が既にそう確信していたのだと告げている。
雄弁な沈黙だ。
「四大公爵の一人だろう。近衛師団は動けるのか？」
答えの分かり切った問いだったが、それが今後一番の焦点になってくる。それに対しては代わってロットバルトが口を開いた。
「非常に厳しいでしょう。単独で、確証もなく手が出せる存在ではありません」
「だろうな。だが敢えて言わせてもらおう」
ザインはゆっくりと、区切るように告げた。
「放っておけば、必ず何らかの障害を生む」
ザインが言葉を交わした、あの感覚。
「何を考えているのかは見えなかったが、決して国に利する事じゃない――それが俺の直感だ」
ロットバルトとレオアリス、それぞれを見据える。
「もし俺が近衛師団の立場なら、すぐにでも拘束し、話を聞くところだ。それが難しいのだろうがな」
「――話は、聞くつもりです。恐らく西方公自身、それを予期している」
レオアリスはそう息を吐き出した。
「俺が王都に同行してもいい」
ザインの言葉は行動を急かすようだ。時間を置くべきではないと、そう言っているのだろう。
それだけザインの確信は強いという事になる。
ザインが証言すれば、王や内政官房は軽重こそあれ、真偽を見定めようとするはずだ。
そうなった場合、ルシファーはどう対応するのだろう。
そこまで考えてレオアリスは、重要な事を忘れていた事に気が付いた。
「――あなた方を、保護する必要があるな」
ザインはルシファーにとって不利な証言ができる。
通常ならともかく、剣を失い体力すら充分に戻っていないザインを、何の警護も付けずに放っておいていいとは思えなかった。
「必要無いさ」
レオアリスのそれは状況から当然の懸念だったが、ザインは一切気にしていない口調でそう断じた。「彼女に、隠す気は無かったからな」
「しかし」
「殺すつもりならヴェパールと一緒に俺も殺せた――。まあ、それが完全な保障にはならないし、後から考え直すかも知れないが」
「そうです。もし状況が西方公に不利な方へ向かえば――」言ってからレオアリスは口調を改めた。ルシファーに対して、まだそこまで強い疑念を持つ事が躊躇われたからだ。
「とにかく、万が一という事があります。体制を整えておくのに越した事はありません」
「――気を付けるよ。ユージュも覚醒したばっかりだ。俺が守ってやれる範囲も限られてるしな」
ザインは失った右腕に視線を落とした。複雑な感情がそこにはある。
「だが、まあ護衛はいらない。俺も曲がりなりにも剣士だ」
レオアリスはザインをじっと見てまだ言葉を捜していたが、仕方なく頷いた。
「――判りました、無理には言いません。ただ、しばらくの間は西方軍に警戒を強めてもらうよう要請します。部隊を増やす事はしませんが、必要であればウィンスター大将に伝えます」
「有難う。それはカリカオテ達と充分相談しよう」
ザインは頷くと、ユージュの顔を眺めてから、一旦話を区切るように席を立った。
「少しユージュを見ててくれ。水を持ってくる」

五

ずっと自分を包み込んでくれていた温かい気配が、離れていく。
それが誰かはっきりと判らないまま、遠ざかる気配をユージュは懸命に追った。

（どこへ行くの……）

どうして、行ってしまうのだろう。
（行かないで）
心に突き刺すような恐怖を感じた。
ユージュを、置いて行く。
行ってしまう。
（いやだ、いかないで！）

霞のかかった意識の中に面影が浮かぶ。
（――父さん！）
それはすぐにはっきりとした輪郭を纏った。

白い泡が次々と、止まる事を知らないように、身体の周りを上がっていた。
その向こうに、父の姿が揺れる。
（父さん！）
ユージュは身を包む泡の膜を必死で叩いた。
（止めて――嫌だよ、止めてよ）
どれほど叫んでも、まるで何も聞こえていないかのようだ。
戟が容赦なく父の身を傷付ける。
血が流れる。

（ボクの事なんていいから――）
鋭い牙が並んだ顎が父の腕に喰らいつき、腕を――剣を、食い千切る。
耳がわんと鳴った。耐え難い騒音が周囲に満ちていて、意識が霞みそうだった。
騒音が自分の悲鳴だと気付く。
泡の檻に反響し、幾重にも重なって取り巻いた。
（父さん――！）
ユージュのせいで、傷を負って。

剣を失って。

血が流れ、次第に冷たくなっていく父の身体が、縋り付いた手のひらや腕に感じられた。
恐怖が湧き上がる。

行ってしまう――。
いつもそう望んでいたように――。ユージュを置いて。

いつもいつも、ユージュではない別の所を見ていた。

遠ざかる。
手を伸ばそうとしても、掴めなかった。

（父さん――！　置いて行かないで――）

「父さん――！」

懸命に伸ばした手が何も掴まず、心臓がたちまち凍り付いた。
（いなくなっちゃった――ああ）
恐怖が全身を覆いかけた時、傍らから伸びた手が、空だった手をしっかりと掴んだ。
「ユージュ」
父の声ではなく、ただ、ユージュはその声を良く知っていた。
恐怖がゆっくりと引いていく。
何故だろうと思う前に、もう一度声がかかった。
「目が覚めたな、良かった。すぐザインさんも戻るから」
ユージュはとたんに飛び起きた。
「父さん？！」
この場がどこだか意識する暇もなく首を巡らせ、そうしながら転がるように寝台から降りた。足がもつれて木の床に膝を打ち、誰かの腕に引き起こされたが、寝台を降りた事も自分では判っていなかった。意識を占めているのはたった一つだ。
「ユージュ、まだ動くのは」
彷徨わせた視界に父の姿が無い。
（父さん――）
いない。
いない――どこにも。
行ってしまった。
「――っ」
絶望が膨れ上がった時、かちりと音を立て扉が開いた。同時にふわりと温かな気配が身体を包む。
それまで凍り付いていた血が、全身を巡るような気がした。
「ユージュ？」
父の声だ。
ザインは扉の前に立ち、驚いた顔でユージュを見つめ――その面に深い喜びを広げた。
「気が付いたのか」
「――父さん！」
ユージュは父が傍に寄るのももどかしく駆け寄って飛び付き、背中にぎゅっと腕を回した。腕にちゃんと感触がある。夢でも幻でもない。
「……良かった――、生きてるよね、生きてるでしょ？」
「ああ、生きてるよ。――ここにいる」ザインはユージュの身体を包み込むように抱き締めた。その温もりがゆっくりと伝わる。
現実だ、とユージュは噛み締めるように呟いた。
「心配をかけて、悪かった」
その一言で、安堵が心いっぱいに広がっていく。怖い思いをさせて、悪かったな、ともう一度ザインはそう言ってユージュの頭を撫でた。
「父さん――」
父を呼び、肺に溜まっていた息を全部、吐き出した。
「良かった……死んじゃったかと、思――」
そう口にした途端、それまで隠れていた恐怖や不安も全部どっと湧き上がってきて、次の瞬間には堰を切ったように嗚咽が溢れた。
嗚咽は押さえようとしても全く言う事を聞かず、どんどんと溢れてユージュは泣きじゃくった。子供みたいで恥ずかしいのに、どうしても止まらない。
ユージュが泣いている間ザインはずっと、ユージュの背中をあやすように叩いていた。
左手だけで――。
それに気付いて、ユージュは息を止めた。
どうして失われたか、ユージュは全部覚えている。
左手だけで慈しむように背に触れる、その事が悲しい。
（父さん――）
ユージュは父の右腕にそっと触れた。背中をあやす手は止まったが、その分抱き締める力が強くなる。大した問題ではないのだと、そう言うようだ。

再び嗚咽が込み上げる。
「ユージュ」
再び、ザインはユージュの背を叩いた。
問題がない訳が無い。
剣士にとって、剣は存在そのものだ。それを失って――
「ユージュ。お前が無事で良かった。生きていてくれて」
それだけでいいと、そう言う。
（ボクは）
強い思いが、ぽつりと心の中に浮かんだ。今のユージュにとってそれは、何より強い意志だった。
（ボクが――、ボクが父さんの腕になるんだ）
母の分も傍にいて、もう眠ったりしない。
しばらくは誰も何も言わず、ユージュの泣きじゃくる声だけが部屋の中に聞こえていたが、やがてそれも小さくなり、最後はそっと零した溜息の中に紛れた。
手の甲で濡れた目元を拭い、泣いた事への気恥ずかしさに少し顔を反らせ、唇を尖らせる。
「――ホントに、心配したよ。子供に心配かけないでって、いっつも言ってるじゃないか。いつもすぐ忘れちゃうんだから」
そう言いながらユージュは父の顔を見上げた。何だろう。ちょっと違和感があった。いつもより何だか少し、父との距離が近い。
「悪かった」
ただザインからは本当に反省している様子が伝わって、ユージュはそれで満足そうに頷いた。
「――いいよ、許してあげる。大体ボクの方が父さんより大人だからね」
澄ました口調でそう言って、ユージュはザインから離れた。その拍子に長い黒髪が腕に落ちかかる。くすぐったい。
「？」
見慣れない腕だと思い、何故見慣れないのかとしばらくあちこち眺めていて、思い当たった。少し、長いんじゃないか。手のひらも。
（えっと、これって、大きい――？）
顔を巡らせるとまた髪の毛が揺れる。そう言えば何だか、頭が重い。
「ヘンだなぁ、何だろ」
手を上げて髪に触れ、ユージュは首を傾げた。
「父さん、ボク髪の毛長かったっけ。眠ってる間に伸びたのかしら」
「――」戸惑いに満ちた沈黙の後、ザインは曖昧な事を言った。
「いや、長くなったかもしれないが――まあそれほど変わらないと」
「ザインさん……」
ちゃんと言わないと駄目ですよ、と呆れた声がかかる。ユージュは振り返り、そう言ったレオアリスを見た。
「あなたは――」
そういえばさっき、声を掛けてくれた。
レオアリスの姿を目にしたら、何故か、やはり何も判らない内に、すごく安心した。
それから、どこかで鼓動が鳴る。
温かくて、少し呼吸が苦しいような。
思わず視線を反らせるとその先の右側の壁に鏡が掛かっていて、そこに映った人の姿に眼を瞠り、ユージュは部屋を見回した。十六、七くらいの娘がいる。
黒い波打つ髪が腰の辺りまでかかり、手足はほっそりして長い。
けれど振り返るとどこにもいない。
いないのにまだ鏡に映っている。ユージュが見つめると相手も見つめてくる。
何となく、見た事があるような気もする。
「ユージュ？」ザインが何故か少し困った口調でユージュを呼ぶ。ユージュは鏡を指差した。
「あの人誰？」
「いや――ええと」

ザインの視線がレオアリスの上に彷徨う。
「俺に振られても困るよ」
レオアリスが苦笑しつつ手を振ると援助を求めるザインの視線はロットバルトにまで向いたが、さすがに意を決したのか、再びユージュと向き合った。
「それは、」
父はどうして困っているのだろうと、ユージュは不思議に思いながら鏡に近寄った。鏡の向こうで少女も、不思議そうな顔をして近寄ってくる。
「――これ」
ユージュが鏡に手を伸ばすと鏡の少女も手を伸ばし、冷たい硝子の表面で指先がぴたりと合った。
何で合うんだろう、と先ず思った。
束の間の沈黙の後、ユージュの瞳と口がみるみる丸く開いた。ザインが息を詰める。
「……わ……、わー！　わー！　わぁああ！！　だ、だ、誰っ、だ、誰これ！！　誰？！」
両手で頭や顔や身体をぱちぱちと叩きながら、ぐるりと振り返った。
「と、父さん――！」
「ユージュ」
「どうしよう、父さん、ボクがいない？！」
ザインがユージュの肩に手を置く。
「ユージュ、落ち着いて――。お前は成長したんだ」
「成長？　せ――」
繰り返して、それからユージュはぺたりと床に座り込んだ。
「成長……」
「そうだ。――お前の剣が覚醒して、そのせいで成長したんだ。俺にも正確な事は言ってやれないが、おそらく剣の負荷が少ない年齢まで、取り敢えず身体を合わせたんだろう」
剣の発現を抑える為に、幼い姿を保ち続けていたように。
その全てが自分に原因があるのだと、ザインは厳しい面持ちで左の拳を握り締めた。
身体の半分に流れる剣士の血――そんなものがユージュの人生に、一体どれほどの影響をもたらしたのだろう。
この先も剣に縛られる。
それは剣士としての喜びなどではなく単にユージュを苦しめるだけではないのかと、苦い後悔が浮かぶ。
「剣――」
ユージュが茫然と呟き、ザインが視線を床に落として俯いた時、レオアリスがユージュの傍らに膝をついた。
「ここに、剣がある」ユージュの右腕に、レオアリスは手を置いた。つられるようにユージュの視線も自分の右腕に落ちる。
「ユージュの父さんと、同じ剣だ」
「――父さん、と」
置かれた手の温もりがユージュの中に広がる。それに覚えがあった。
頭の奥に、朧気な記憶が甦る。
痛くて、苦しくて、怖い。色々なものが一緒くたになって身体の中と外を渦巻いている感じだった。
あれが覚醒だろうか。
自分の剣なのに、ユージュの腕を引き千切って、相手を切り裂こうとしていた。その怒りと、上手く言えないけれど、引き千切られても全然構わないという思いがユージュ自身にあった。
でも、誰かが語りかける声が聞こえた。
冷えた刃に温もりが伝わる。ユージュの剣が傷つけて血を流していたのに、その温もりが、腕が壊れそうなほどの痛みと、胸の奥で暴れて苦しくて堪らなかった塊を、解(ほど)いていった。
ユージュは右腕に置かれた手に視線を落とした。

（そうなんだ――）
だから、ユージュは覚醒できたのだ。
「――ありがとう」
小さな呟きだったが、手は一度ぽんと腕を叩いて離れた。
視線を上げ、レオアリスの顔を見つめる。何だか胸の奥が暖かくなった。
「ボクの剣、父さんに似てる？」
「似てると思うぜ」
ユージュはぱっと頬を明るく輝かせた。その輝きを父へ向ける。
「父さん――似てる？」
ザインは思いがけない表情に驚きと戸惑いを覚えながら、じっとユージュを見つめた後、頷いた。
「当然だ。親子だからな」
そう言うと、ユージュはますます嬉しそうな顔をした。
レオアリスが立ち上がり、ザインと視線を合わせる。驚いているザインを見て、何を驚く必要があるのかと笑った。
「俺も、父さんと似てると言われると嬉しいですよ」
「――そうだ。お前は、ジンに本当に良く似てるよ」
レオアリスは言葉どおり、瞳に喜びと誇りを浮かべた。ユージュの面に浮かぶ色と同じものだ。
ユージュも同じように誇りに思ってくれるのかと、ザインはまだどこか不思議な心地で二人を見比べた。
「父さんに剣を教えてもらいたかった。貴方はユージュに教えてあげられる」
「――そうだな」
ユージュは驚きを消し切れないながらも好奇心が湧き上がったのか、ひっくり返したりしながらしげしげと自分の手足を眺めていたが、ひょいと首を傾げた。
「ねぇ、成長したんなら、ボクは今幾つになったの？」
そうだな、と言ってレオアリスがユージュと鏡の中の自分を見比べる。
「うーん……まあ俺と年齢は変わらないかもな」
「――ボク、あなたと同じ……？」
「ああ。十七か、十六ぐらいに見える」
「同じ――」
ユージュの頬がさっと映える。
「そうなんだ」
「どうかしたか？」
「あっ、う、ううん。いきなり三百歳のおばあちゃんにならなくて、良かったなって」
「そりゃ悲惨だな……。まあ基本的にそれは無いだろう。それじゃ剣が使えない。剣に身体を合わせるって言うからな」
「そっかー。ヘンだね、剣士って」
「俺もそう思う」
レオアリスが笑うとユージュは立ち上がり、鏡の傍に寄ってじっと覗き込んだ。
しばらくためつすがめつ鏡の少女と睨めっこをした後、ユージュはザインを振り返った。
「ボク、母さんに似てる？」
期待と、憧れに満ちた問いだ。
ザインは自分にまっすぐ向かい合ったユージュを見つめた。
黒髪と、意志の強さを感じさせる瞳。
街から幾筋も棚引く戦火の煙の向うに、青い空を見ていた。
フィオリと良く似た瞳。
おそらくこれから先、同じようにレガージュの空と海と、その先にあるものを見つめていくのだろう。
「――ああ、似てるよ。フィオリに……お前の母さんにそっくりだ」
俺に似なくて良かったな、とザインが笑うと、ユージュは得意そうな、輝くような喜びを浮かべた。

六

しんと静まり返った王城の大階段を上がる。床や壁に使われた大理石が固い靴音を響かせながらまだ朝も早い城内の空気を冷やし、つい半刻前までいたレガージュの街の、あの肌に感じる熱を孕んだ空気との違いを鮮明に浮き立たせていた。

張り詰めた感覚は王都に帰ってきたのだ、と改めて思わせられる。

ファルシオンもそう感じているのだろう、レオアリスの前を歩いていたファルシオンは大階段の踊り場を曲がって一旦立ち止まり、初めて見る場所のように広い階段や天井を見回した。

王城の四階から続く大階段を上った正面、左右に広がる長い廊下の中央に、謁見の間の扉がある。謁見の間では既に、ファルシオンから王へ、今回の顛末を報告する為の場が整っているはずだ。

昨夜の内に王へは、スランザールから全ての経緯と事実を伝えている。西海の関わりも含めて、全てだ。その上で王はスランザールの採った結論を良とした。

謁見という場でこれから報告するのは、レガージュでマリ王国海軍提督メネゼスとの会談において定めた、マリ王国とアレウス王国二国間の正式な、いわゆる政治的判断に立った結論だった。

あくまで表向きの結論だが、その事がやはり西海に関する国と国、そして歴史的な関係の難しさを物語っているのだと、改めて認識させられる。当然その判断の大前提にあるのは、当日までもうひと月を切った西海との条約再締結の儀式だ。

それらを踏まえながらこの諸侯がそろう公式な場で報告を行うのは、ファルシオンにとってマリとの会談に劣らない、王位継承者としての資質が試される国務でもあった。

高い扉の左右で、近衛師団第二大隊の隊士が敬礼を向け、ファルシオンを迎える。ファルシオンは大階段を上がり切って一度スランザールを見上げ、スランザールが頷いたのを確認すると身体全体で息を吐いた。

今度はレオアリスの顔を見て、それから、広く高い扉の前に立つ。

レオアリスが近衛師団隊士に目線を送ると、二人の隊士は左右から、重く高い両開きの扉をゆっくりと開いた。

「王太子ファルシオン殿下、ご帰還――！」

謁見の間に隊士の朗々とした声が響く。

広間にはファルシオン帰還の報を受けていた軍部と各院の正副長官達が揃い、扉から玉座へと一直線に敷かれた深緑の絨毯の左右に並んでいた。彼等の後ろには高い天井を支える数十本もの重厚な円柱がずらりと並び、その向こうを別の空間のように霞ませている。

声と共に諸侯は一斉に膝をつき、王太子が通るべき玉座への道の前に深々と頭を下げた。衣擦れの音が潮騒のように流れる。

ファルシオンは静まり返った謁見の間を、彼等の間を歩いて玉座へと向かった。十日ほど前、自らの祝賀式典の為にこの絨毯を歩き、今日でまだ二度目の事だ。早朝の帰途の疲れもその緊張に紛れ、一歩一歩踏み締めるようにゆっくり進んで行く。

レオアリスは謁見の間の扉を潜った瞬間、皮膚に痺れが走るように、覚えのある感覚を捉えた。

どくりと鼓動が鳴る。

ファルシオンの後方に付き従って歩きながら、その感覚をもたらした原因へと、自然と視線が引き寄せられる。前方の一角に止まりかけた視線を、レオアリスは意識して外した。

（西方公――）

玉座への階段の左右、常に四大公が控えるそこに、西方公ルシファーがいた。諸侯と同様に膝をつき頭を垂れている。

王への謁見の場だ、当然だと思う反面、意外な思い――はっきり言ってしまえば驚きがあった。王都に戻っていないのではないかと、明確にではないにしろ、どこかでそう考えていたからだ。

（――）

近衛師団の控える方を確かめれば、一足先に入っていたグランスレイ

やロットバルトの表情にも同じ驚きが読み取れる。ロットバルトと視線が合い、そこにある問いかけに、レオアリスは今感じているこの感覚を改めて確認した。
肌に触れる感覚は、確かにあの異界で感じたものだ。
隠しもしない事に不審すら覚える。
（どういうつもりなんだ……。俺があの時気付いたとは考えていないのか）
いや――あの海でレオアリスの問いかけに対し、もう判っているのではないかと笑った。核心から視線を逸らしたがったレオアリスの躊躇いを見抜くように。
レオアリスは前を行くスランザールを見たがスランザールの視線は返らず、ルシファーへ向けられてもいない。その事がスランザールの意志を伝えてくるようだ。
スランザールはこの件にはかなり慎重な姿勢を示している。
スランザールは昨夜の内に王へ報告を上げている。その時にルシファーの事に言及しただろうか。
王は、何を言っただろう。
ほんの僅か迷い、レオアリスは敢えて、視線をルシファーへ向けた。
ルシファーは膝をついた体勢でやや足元をるように顔を伏せていて、まだ距離もあるせいか、レオアリスの視線に気付いて返す気配は無かった。
「――」
心の中で息を吐く。
ルシファーの瞳と合わず――、そこに答えを見つけずに済んだ事に、レオアリスは確かに安堵を覚えていた。自分でも矛盾した感覚だ。
思考を変えるように視線を外しかけ、それはすぐにもう一度、元の位置に戻った。
（え？）
もう玉座へと延びる長い深緑の絨毯を半ば辺りまで歩いて来て、玉座の階（きざはし）の下は全て見て取れる。通常、階の左右には四人の公爵が立った。
そこに、ルシファーの横に立つはずのアスタロトの姿が無い。
（遅れてるのか……？）
けれど絨毯を挟んだ対面には既に他の二公も揃っている上、そもそもファルシオンが入場する段になってもの不在というのは、基本的に有り得なかった。正規軍を見れば、副将軍タウゼンも参謀総長ハイマンスと共に立っている。
日頃は適当に見えてもアスタロトは実際には責任感が強く、今までこうした場に遅れたり欠席したのをレオアリスは見た事が無い。
だから何か、この場に出れない理由があるのだろうと、そうは思う。
（一昨日の軍議には居た。あの時は体調が悪いとか、そんな感じは――ああ、いや、違う）
何か鬱（ふさ）いでいるようだった。一昨日だけの話ではなく、最近ずっと。
（あれが何か関係あるのか？）
ファルシオンの、王への報告の席を欠席するほどに？
胸の奥に漠然とした、収まりの悪い感覚が生まれる。
（何だ――）
ふと、ルシファーの口元に微かな笑みが浮かんだが、その笑みはレオアリスの視界には入らなかった。
ファルシオンが玉座への階段の前で一度足を止め、階上を見上げる。
スランザールが深緑の絨毯の上から一歩退き階（きざはし）の横に立ち、レオアリスは幾つもの疑問を一先ず横に置いて、スランザールのやや後ろ、階段側に寄って立った。王からファルシオンの警護の任務を解かれるまでその位置で控えるが、もう後はファルシオンの奏上を見届けるだけだ。
ファルシオンは彼にとってはまだ段そのものが高い階を一つずつ上がって、玉座から三段目の位置で両膝をついた。場が整った事を知らせ

る鐘が一つ鳴り、短い余韻が静まり返った広間に溶ける。
レオアリスは改めて謁見の間を見渡した。
一昨日の軍議と同じ顔触れだ。内政官房、財務院、地政院、正規軍各方面の王都守護隊である第一大隊、そして近衛師団各大隊の正副の長と補佐官達、およそ四十名が出席している。一人、アスタロトを覗いて。
正規軍副将軍タウゼンは、壮年の面に普段見ないほど厳しい色を浮かべて膝をついていた。その理由はほぼ間違い無くアスタロトの不在にあるのだろう。
レガージュへ赴いているたった一日の内に、何があったのか。
（何だ）
もう一度、レオアリスはそう呟いた。アスタロトの周囲に何かがあって、それをまるで知らないという事にレオアリスは自責に近いものを覚えていた。
アスタロトは大切な友人だ。その友人に何か問題があった時に何も知らないで、そう言えるのか。自然と拳を握り込む。
問題がどこまで大きいのか――他の参列者達がこの不在をどう思っているのか、しかしそれを読み取ろうとする前に、王の出座を知らせる鐘の音が響いた。参列者達が再び面を伏せる。レオアリスもその場で面を伏せた。
玉座の奥の幕がするすると左右に巻き上がる。そこから近衛師団総将アヴァロンを伴って王が現れ、玉座へ着座した。アヴァロンが玉座の左後ろに立つ。王の纏う威厳が謁見の間を満たし、静まり返った空気を揺らす。
再び鐘が二つ鳴らされ、静寂がその余韻を飲み込んだ。
ファルシオンが面を伏せ再び上げる間もずっと、王の瞳はファルシオンの上に注がれていた。
「ただいま、帰還いたしました。この度の、フィオリ・アル・レガージュで行った、マリ王国との会談について、アレウス国王陛下に、ご奏上いたします」
ファルシオンが報告するのは整えられた結論だ。当然、その目的にルシファーも気付くだろう。レオアリスは少なからず緊張したが、ルシファーの並びにいるスランザールは特に隣を確認する事無く、泰然とファルシオンの報告に耳を傾けている。
ファルシオンはまだ少したどたどしいながらも、一つ一つ思い起こすようにして丁寧に言葉を繋ぎ、王へ報告を終えた。
王は幼い王子が真剣に報告する姿を黙ったまま見つめていたが、ファルシオンが口を閉ざすと、思いがけず温かな笑みを浮かべた。こうした場では非常に珍しく、列席していた諸侯が驚きを覚えて顔を見合わせたほどだ。
「ファルシオン」
「――はい」父王から向けられた笑みに頬をほころばせていたファルシオンは慌てて顔を伏せた。
「国使として初の任務には厳しい案件だったと思うが、良く求めに応えた。レガージュに損害を与えず、尚かつマリ王国との友好関係と交易を保った事は、私の想定以上の成果だ」
ファルシオンは頬を紅潮させ、父王へきらきらした瞳を向けた。
レオアリスはそっと息を吐いた。ファルシオンが担った初めての国務は、これで終了する。
昨日の昼の段階では解決策を見い出す事すら困難だったものが、今やこうして国王へ報告を上げられるまでになったのも、不利でしかない状況の中でファルシオンが決して諦めず、懸命にマリ海軍と対話をしたからだ。
ファルシオンの姿が昨日の軍議の席よりも成長したと見えるのは、レオアリスだけではなく他の諸侯も同じだろう。
この場の誰もが、今回の一件にファルシオンを関わらせた王の意図を見ていた。
まだずっと先の話ではあるものの、いずれ――、ファルシオンがこの国を継いでいく。

その流れに向けて、確かに王位継承者たる能力を有している事を、ファルシオンは父王に示し、諸侯へもはっきりと示したと言える。
おそらくこうした機会が次第に増え、いずれファルシオンが国政の場にいるのが当たり前になって行くのだ。
やがては中心に立つ。
「これを以って今回の任を解く。以降はレガージュで得た事を忘れず、そなたの経験として活かしていくと良い」
ファルシオンは改めて頭を伏せ、深々と一礼した。
謁見の終了を告げようと、内政官房長官ベールが一呼吸入れて面を上げた時、落ち着きかけた場を揺するように声が割って入った。
「発言をお許しいただけますか、陛下」
レオアリスは僅かに眉を潜め、声の主――、西方公ルシファーの横顔を見つめた。
(何を言うつもりだ)
ベールが王の意思を伺うように視線を上げる。一瞬その瞳を、他人には気付かれない程の微かな光が過った。
王は金色の双眸をルシファーへと向けたが、間を置くほども無く頷いた。
「構わん」
何事かと訝る視線が集まる中、ルシファーは深く面を伏せ、一旦王へ一礼した。その瞳の奥に何の理由か、苛立ちに近い色が瞳に湧き上がり、ただスランザールへ向けた時には消えていた。
「――スランザール。貴方に少しお聞きしたいのだけど」
スランザールの皺を刻んだ面がルシファーと向かい合い、促すように白い豊かな眉が上がる。
「今殿下の仰った事は、果たしてこの問題の全てを示しておいでなのかしら。貴方は何か、隠している事があるのではない？」
ざわりと広間の空気が揺れた。西方公が何を言おうとしているのかと、それぞれに顔を見合わせる。ファルシオンは思いがけない問いに何が始まったのかと戸惑い、階（きざはし）の途中に膝を着いたまま階下のルシファーとスランザールを見つめ、そして不安そうな瞳をレオアリスへ向けた。
レオアリスもまた内心には緊張を抱えていたが、それを抑えて穏やかな視線をファルシオンへ返した。ファルシオンの戸惑いは当然のもので、斜め向こうに立つグランスレイやロットバルトの上にも、同様の疑問があるのが判る。
それらを余所に、スランザールは普段と変わらない飄々とした様子を崩していない。
「隠していると、そう考える根拠は何じゃ」
まるで他愛のない会話を受けるようにそう言った。ルシファーの口元に笑みが広がる。深い明け方の色を讃えた瞳に、掴み所の無い光が渦を巻いた。
「マリ王国との和解が不自然に思えるのよ。レガージュには罪はなく、マリの船を沈めたのが南海の海賊による偽装行為だった。それが和解の理由と言ったけれど」
「それが判ったからこそ、事態が平穏に収まったのだから理に適っておろうが、何が不自然と思うのか」
「平穏に？　残念な言葉だわ、スランザール」
挑むようなルシファーの口調が、いやが上にも室内の緊張を浮き立たせる。ルシファーが長官を努める財務院の官吏達は、彼女がどんな立場で物を言おうとしているのかが判らず気もそぞろに青い顔をしている。
そもそも誰一人、スランザールが付き従った上でファルシオンが収めた案件に、異議を唱える者がいるとは思っていなかったのだ。スランザールが既に王とこの件について話をしている事を、彼らも前提にした上での報告の場だった。
それは一般的に取られる手順でもあり、つまりもう王も承諾している内容に対して、ルシファーは異議を唱えていると捉えられた。室内の騒めきが収まらない。

自分に対する疑念の騒めきをルシファーは面白そうに聞き、唇の端を上げた。「――ご存知の通り、私は西方の所領を任される身として、レガージュでの情報もそれなりに耳に入ってくるわ」
レオアリスにはそこに含みがあるように感じられたが、ルシファーの口調は話し出した時から変わっていない。
「先ほど殿下はマリ王国海軍が火球砲を発射したと仰ったけれど、回数までは仰らなかった。でもそこはこの件を収める上でとても大きな要素になる。確か」
一呼吸置くと、騒めきは鳴りを潜め、謁見の間は静まり返った。その場の全ての者がルシファーの言葉に注目しているのが良く判る。
「私の得た情報では、マリ海軍は火球砲を四度、撃ち込んでいる。四度。決して少なくはない数よ」
四度――、という呟きがあちこちで漏れた。
その回数は諸侯に驚きを与えるのに充分だったようだ。特に正規軍や近衛師団でも将校達は、火球砲が一度ならず撃ち込まれた事が何を意味するか直に理解して、眉をひそめる者もいる。
「弱気な外交ね」
「そうかの」
「ええ。国益を損ねていると、そう思うわ」
王の相談役に対する遠慮の無い言葉に、周囲の方がひやりと首を竦める。スランザールは黙ってルシファーの次の言葉を待っている。
「レガージュに非は無く、マリ王国側の誤認だと判って収まったのは幸いだけど、何故それだけで納得して帰ってきたの。策略に誘導されたとは言え、火球砲を撃ち込んだ事はマリ側の失策として、最終的にレガージュは優位な立場に立っていたはず。本来なら同等の決着になどなり得ないわ」
ファルシオンは何かを言うべきかと助言を求めて父王の顔を見たが、王は黄金の瞳をルシファーへ落としているものの、特に場を止める気配もない。ファルシオンには王の瞳の中にあるものは、読み取る事ができなかった。
「ふむ」
渦中のスランザールは枯れ木のような手を上げ、白い豊かな髭を撫でた。
「マリ王国との戦乱を避けられ、今後の交易に於いても問題は生じなかった。それが今回の交渉の第一の目的で、それだけでも充分国益を保持していよう。マリ側もまた二隻の船を沈められ甚大な被害を被っている。火球砲によるレガージュへの直接の被害は無かったのじゃ、それ以上を求める必要はないじゃろう」
「確かに、もっともな説明だと思うわ。ただ私が言いたいのはそれそのものの是非ではない。つまり、貴方がそれをしなかったのは何らかの――非公式な取り決めをマリとの間にしたからではないかと言う事よ。言わば交換条件として――」
レオアリスは鼓動を押さえ込む為に、ぐっと拳を握った。
（一体何を言おうとしているんだ――まさか）
頭を過った考えに、警戒と、もう一つ、不可解さを覚える。
ルシファーが開いて見せようとしているものがレオアリスの予想通りなら、そこには彼女自身が関わっている。自ら立場を危うくする事を言うだろうかと、そうした不可解な思いだ。
それではまるで自分がこの件に関わっていたと、自ら告げる行為のように思える。
「私がこんな事を言っている理由は、あなた方には判っているはずよ」
レオアリスの考えが聞こえているかのようにそう言い、ルシファーは彼女がこれから放つ言葉の効果を測るようにゆっくり謁見の間を見渡すと、淀みなく告げた。
「今回の件には西海が絡んでいた」
広間に瞬間的な静寂と、次に雄弁な沈黙が満ちた。
「西海――」
「まさか」

ロットバルトは視線を巡らせた。内政官房や地政院の事務官達だけではなく、正規軍の将校、そして近衛師団のトゥレスやセルファンの上にも驚きと――、困惑がある。
ルシファーの言葉が彼等の意識に浸透するにつれ、それは不審に変わって行くだろう。
（伏せていた分、この開示のされ方では不審を招くのも当然だ――だが、もともと公（おおやけ）にするつもりは無かったとは言え、時期を見てある程度の開示はスランザールも考えていたはずだ）
回復はできる。それがルシファーに判らないとも思えなかった。
（西方公の目的は何だ。自らの関与に対する告発を封じ込める為に、先手を打ったのか？）
その推測はどうしても腑に落ちない。ロットバルトもレオアリスと同様に、ルシファーの意図が読めずにいた。
不利なのだ。自らが。
西海を持ち出したところで、スランザールがルシファーの関わりを告発した時点で全て引っ繰り返る。
目的は自己の保身ではなく、もっと深い所にあるように思えた。
何が――。
ふとロットバルトは、昨夜のザインの言葉を思い出した。
レオアリスが、ルシファーの関与の証人でもあるザインの身の安全を懸念して身辺に軍を配備しようと言った時、ザインはあっさりと断った。剣を失ったとは言え、剣士としての矜持もあるだろう。
ただ断った理由を、ルシファーには隠すつもりがなかったからだと、そう言った。
（隠すつもりがない……）
ザインはルシファーと直接会話したからこそ、それを確信してそう言ったのだろう。
何故か――、その言葉は、見えない部分で欠けて事態を不安定にしていたものを、するりと補った気がした。
隠すつもりがない。正体の見えない言動の中でそこだけが唯一、一貫して見える。
（そう断じるのは危険だ。憶測に過ぎる）
拙速になる思考を戒めながらも、それは道に刻まれた轍にはまった車輪のように進む。
隠すつもりがないのが前提だとしたら、この状況で何を狙うだろう。
まるで、ルシファーが西海に関わっていた事を、逆に指摘させたいような。
ロットバルトはその思考を脳裏で繰り返し、視線を上げた。
（――何を言わせたい）
まさか、と思う。
この状況で、ルシファーの言葉を回避する為に、スランザールや、もしレオアリスが、口にするとしたら。
（まさか）
そこまでは、穿ち過ぎだ。そう思う。
そう思いながら警鐘が消えず、ロットバルトはレオアリスを見た。レオアリスの視線はルシファーに向けられていて、ロットバルトの視線に気付く様子はない。
（スランザールは――）
スランザールはちらりと、正面に立つベールと視線を交わしたように見えた。
ルシファーが自分の言葉が発した効果を手繰るように続ける。
「私が聞く限りでは――、マリの船を沈め、レガージュの仕業のように見せかけた者がいた。それが西海の三の鉾の一人、ヴェパール」
謁見の間が揺れる。
（どこまで――）
レオアリスが息を抑え、思わず口を開きかけた時、制止するようにス

ランザールの右手が触れた。
辛うじて聞き取れる声で、スランザールがぼそりと告げる。
（え――）
「この件はヴェパールの手によるものだと判ったからこそマリ海軍は矛先を変え、そして西海との間に起こった問題を塗り消すために貴方はマリと交換条件とも言うべき協定を結んだ」
レオアリスは先ほどのスランザールの言葉を、困惑と共に反芻した。
『乗るでない』
（どういう意味だ――）
乗るな、とは、何に。
（スランザール？）
「近衛師団第一大隊大将」
はっとしてルシファーへ顔を向ける。高い天窓から差し込む光が一筋、ルシファーとの間に落ちている。その白い光に紛れ、ルシファーの表情は読み取りにくかった。
「あなたは、ヴェパールの死をその眼で見届けたはず。いえ――ヴェパールを殺したのが誰かも、あなたは良く知っているのではない？」
「――」
どうしてそこまで詳しく知っているのだと、簡単に問い返せる。
どうして。
「ヴェパールの死は二国間の関係に大きく関わる。ヴェパールがどう死んだのか、重要な要素よ。誰が殺したの」
鼓動が大きく打ち鳴らされている。
誰が？
その問いへ答えろと言うのか。
「さても、困った事じゃな」
泰然とした声が、レオアリスの中にあった当惑を打ち消した。
スランザールは長衣の前を払い、改めてゆったりとルシファーに向き直った。
「西方公という立場にある者が、徒（いたずら）に混乱を招く事を言うとは思わなんだ。今は国使として王太子殿下から国主へ報告をお上げになる場じゃ。殿下がご報告になる事は即ち国の公式見解でもある。もしそなたの言うとおり、今回の一件に西海が絡んでいたとしても、今の時期を考えればそれを公にする事には意見があろう。それはこの場にいる誰もが理解できるはずじゃ」
「そうかしら。うやむやにする事にこそ意見があると思うわ。この件に関わっていたのが」
「西方公」
ルシファーが言い募ろうとした時別の低い声が割って入った。声の主は筆頭公爵家でもあるベールだった。
「私にはスランザール公の説明がもっともだと思える。特にこの場では」
押さえ込む響きの声に、ルシファーの面に軽い苛立ちが昇る。
「議論は無し？　明らかな疑問があるのに。内政官房の長である貴方までそんな事を言うとはね」
「立場を考えるのなら尚更そこまでにした方がいい。それは別の場の審議になるだろう」
（――）
ロットバルトは、その時に見て取ったものを、じっくりと反芻した。
ベールが口を開いた事により、幾つかの反応があった。四大公の残りの一人、東方公はまるでどうでもいい事だと言うように口元を歪めたが、アヴァロンと内政官房副長官のヴェルナー侯爵は、面に昇らせないものの微かな安堵を纏った。
その誰もがこの国の中枢にある存在だ。
ルシファーは嘲笑の色を浮かべ、ベールを睨み付けた。
「今この場でも、大して顔振れは変わらないでしょう。私にはまだ」
「ルシファー」

掛けられた冷厳な響きの声に、ルシファーは口をつぐんで壇上の玉座を見上げた。
王の黄金の瞳がルシファーの上に落ちている。
「全てを聞いている。ここで今、その議論をする必要は無い」
張り詰めていた空気が解け息を吐いたのは、レオアリス達よりも居並ぶ諸侯の方だった。
王がルシファーの言葉を間接的に肯定した事で、ルシファーが投げかけた先の見えない不安感が薄れた。
ルシファーは広間の安堵を背に、ぎらぎらと、彼女に相応しくない光をその暁の瞳に湛えた。
「陛下――貴方はいつも」
そう呟き、ただその先は発されず口の中に消えた。緩やかに一礼を向ける。
「場をお騒がせ致しました――お許しください」
ほんの束の間、ルシファーは王に瞳を据えていたが、すぐにそれを伏せた。

七

ざわざわと揺れる場を見回し、ベールが散会を告げる。
王が玉座を立ちファルシオンを伴って謁見の間を去った後も、参列者達はまだざわめきながらその場に留まっていた。集中する視線の渦のただ中にルシファーが立っている。
（――とにかく、終わりだ。考えなきゃいけない事が多いな……）
レオアリスは息を吐き、グランスレイ達のいる方へ歩いてルシファーの斜め前を横切ろうとした。
視線はやはりルシファーに向く。
ルシファーは半ば瞳を閉じていたが、レオアリスが通り過ぎる直前に、それを上げた。
「――」
思わず足が止まる。
深い、暁の色がレオアリスの瞳の奥に広がった。
ルシファーの唇が柔らかく動き、笑ったのだと気付いた。
「何故、ザインに私を告発させなかったの？」
「っ」
ルシファーはレオアリスが息を飲み瞳を見開くのを見つめ、風が草花を揺らすようにその笑みが空気を震わせた。
「選ぶべき時に選ばなきゃ、いつだって簡単に無くなるのに。後悔しても遅いのよ」
「――」
「あなたも、同じ。後悔する前に選ぶべきよ」
苛立ちや憤りなどとは無縁の、ただ吹き過ぎる風と同じ音。
貴方は、何を望む――、と。喉の奥にその問いが込み上げる。
あの青い海の中で、笑っていた。
『永遠など無いのに』
何故か、哀惜の響きがあった。

失った者が密やかな悔恨と共に振り返るような。
（何を――）
望んで。
「私は――」
微かに風が囁く。
もう一度選ぶ。
「上将？」
ぐっと肩を引かれ、レオアリスは瞳を瞬かせた。目の前にいるのはロットバルトだ。
いつの間にかルシファーは謁見の間を後にするところで、見ている間にほっそりとした背中は扉の向こうに消えた。
「――」
扉が閉まりルシファーの姿が見えなくなると、最後まで参列者達を縛っていた緊張が緩んだ。安堵が広間をゆっくり浸して行く。足元に口を広げていた深く冥い穴を覗き込み、身を引いてから初めて、頭から落ち込みそうになっていた事に気付いたような、そんな安堵に近かった。
「――」
レオアリスはしばらく扉を見据えていたが、スランザールもまた謁見の間の扉を出ていこうとしているのに気付いて後を追った。
「上将」
「スランザールと話したい」
疑問だらけだ。何もかも。
『乗るでない』
スランザールは確実に、核心に近い部分で、何かを知っている。今回のルシファーの意図すら知っているのではないか。
スランザールは何を避けようとしていたのか。
（避ける――そうだ）
引っかかっているのはそれだ。
『もう一度、選ぶ』
レオアリスは廊下へ出て左右を見回し、既に廊下の右奥の階段を昇ろうとしていたスランザールを追いかけた。
「スランザール！　待ってください」
階段を二、三段上がったところで追い付き、スランザールが振り返る前に老公の正面に回った。壁や天井に施された装飾の重厚さに加え、廊下の窓を差す陽光がここまで届かないせいで、薄暗くスランザールの表情も読み取り難い。
「スランザール」
「何じゃ、騒々しい」
スランザールが煙に巻く前にレオアリスはその眼をしっかり捉えた。グランスレイとロットバルトがレオアリスを追って来て、階段の下に立ち止まる。
「先ほどの言葉は、どういう意味ですか」
「――何の話かの」
「さっき、乗るなと俺に言ったでしょう」
「上将？」
レオアリスは一度グランスレイとロットバルトを見たが、また視線をスランザールに戻した。
「貴方は何を知ってるんです」
「知っている事を全て教えるのが正しい行為とは言えん」
「スランザール」
「わしはわしで、状況を見て必要と考える判断をしておる」
やんわりと、だが取り付く島のない口調でスランザールはレオアリスの追求を退けた。レオアリスは意識してゆっくり息を吐き出した。
「――いつかも、貴方はそう言ったな……。それで、俺が自分で調べるって言ったら、また止めるんですか」

「止める。かつてお前が知った真実には、伏せるだけの理由があったじゃろう」
「――」
「それと根はそう変わらん」
レオアリスはしばらく言葉を探してスランザールをじっと見つめていたが、瞳を足元に落とした。スランザールは眉の奥からその姿を眺め、階段を一つ上った。
「老公」
階下のロットバルトがスランザールを呼び止める。
「私も貴方から以前、伏せた事実に関する貴方の見解をお聞きした事がありました。確かに深い理由があり――しかしいずれにしても結局は、何らかの対処を要するものだったはずです。表に現れた以上、それは既に伏せたままにできなくなったものなのではありませんか。だからこそ噴き出したとも言える」
「――考えがまだ若いの」
「スランザール。私には先ほどの西方公の言動は、何かを導こうとしていたように思えました。そして貴方は、それを良しとしなかった。大公やアヴァロン閣下もです」
レオアリスはロットバルトを見た。ロットバルトが抱いているのも、レオアリスが感じた疑問とさほど変わらない。
(閣下も――。いや、閣下は確かにご存知かもしれない)
アヴァロンは王に近い。
レオアリスは瞳を窓の外へ向けた。
(――陛下は、もう既に何かお考えなのか)
南側の壁にある窓からは眩しい白い光が差し込み、廊下が少し暗いせいか空の色は見えない。
スランザールはロットバルトとレオアリスを見渡し、口調を改めた。
「良いか。この件に関しては決して、わしの許可無く動くでない」
「――」
二人が返答を躊躇ったのを見て、スランザールは呆れた様子を隠さない。
「何とも強情な事じゃ」眉をしかめ、グランスレイを見た。
「グランスレイ、そなたなら近衛師団の役割というものを理解していたな。ルシファーに関し、王の下命はあったか」
「――」グランスレイの緑の眼が慎重にレオアリスを捉え、一呼吸置いて首を振った。
「ございません」
「その通り、それが全てじゃ」
スランザールがどうだと言わんばかりにレオアリスを見下ろす。王の意思を問われては、レオアリスにそれ以上追及のしようもない。
ただ、もう一つだけ、スランザールに投げかけたかった。
「もう選ぶと」
「？　何じゃ」
「西方公は、もう一度選ぶと、俺に言いました。先ほど」
スランザールの表情に、確かな変化があった。
「――選ぶ」
そう言ったのか、と。一言呟き、じっとレオアリスを見つめた後、無言で踵(きびす)を返した。
「――」
レオアリスはスランザールの背を見つめたまま、足音が遠ざかるのを意識の端で聞いた。
「上将」
グランスレイの呼びかけに、レオアリスは瞳を上げた。
「判ってる。陛下のご下命がない限り、俺達が勝手に動く訳には行かない。けど俺は、この件に関しては放っておくべきじゃないと、やっぱりそう思ってる」

「――」
「スランザールは乗るなと言った。西方公の言葉に、という意味だ。ロットバルトがさっき言ったのもそうだ。『何かを導こうとしていた』。それが正解なのかもしれない。じゃあ何だ、それは」
グランスレイを説得しようというよりは、自分自身の考えを纏めるようにレオアリスは一つ一つ言葉を紡いでいる。
「スランザールはきっと、どこまでも伏せる。だが伏せればいい話なのか？　西方公の考えに、スランザールは気付いている。それを見ているだけでいいのか」
『もう一度選ぶ』
何をか――、その意図は判らないながら、ルシファーはもう動こうとしている。
「私も、同じ疑問があります」
そう言ったのはロットバルトではなくグランスレイだ。こうした状況では珍しく踏み込んだ発言に、レオアリスは驚きを覚えてグランスレイを見た。
「放っておいても良いものか――どうしても疑念があります。疑念がある以上、それを解決する為に動くべきです。ただし我々が勝手に動くのではなく、上将から一度、直接王へお尋ねいただくのが良いかと思います」
普段とは異なるグランスレイの言葉は、この件がただ言われたとおり看過するには問題を孕みすぎている事を端的に示しているとも言える。
王がその問いに対して答えを示すのかどうかは判らない。ただレオアリスは頷くと、もう一度、スランザールが立ち去った階段の上を見上げてから踵を返した。
謁見の間の前の長い廊下を戻りながらふと前方を見ると、謁見の間の扉から出てきた東方公がレオアリス達とは反対側へ歩み去るところだ。東方公の姿でアスタロトの事を思い出し、レオアリスは少し足を速めて扉に近付くと、広間を見渡した。既にタウゼン達の姿はない。
「上将？」
グランスレイが傍に寄り、眉根を寄せたレオアリスの顔を見つめる。
「グランスレイ。殿下がお入りになる前、アスタロトの不在について何か説明はあったか？」
グランスレイも表情を引き締めた。
「いえ――。この場を欠席されるとだけ、大公からお聞きしました。どのようなご事情かは」
「そうか――」
後で確かめないと、と思い、この後いつ時間が取れるかと考えながら、最近アスタロトがいつも、元気が無かった事を改めて思い出した。レオアリスに話したい事が何かあったようにも見えた。
いつも目にする度、後で話をしようと思っていた。
『後で』――その機会がなかなか無いまま日だけが過ぎている。
ふ、と視線が過ぎたものを追うように流れた。
（俺は最近、何度も同じ事をやってないか――？）
漠然としていながら、後悔に近い感情が過る。アスタロトとはいつでも会う機会があると思って、甘く考えていたのかもしれない。今までがそうだったからだ。
アスタロトがいつもふらっと顔を出して、他愛ない話をする。それが当たり前になっていて、今回もその延長のように思っていた。
けれど改めて考えれば、アスタロトには正規軍将軍としての責務や公爵家の立場がある。そうそう自由にできないのが本来で、今までが少し特殊だったのかもしれない。
「後で――」
そう言いかけて口を噤む。後で、では駄目だ。「いや、昼にでも館を訪ねてみるか。アーシアがいれば詳しい話を聞けるだろう」

ハヤテの銀鱗の翼が空を切る。
王城の厩舎を出たハヤテは、解き放たれた喜びを現わすように翼を震わせた。
ハヤテの手綱を取りながら、レガージュの空をもっと駆けたかったのかもしれないな、とレオアリスは笑った。
街の時計塔を見下ろすと、朝の九刻を回った頃だった。もう既に街には活気が溢れている。大通りには露店が左右に並び、道を行き交う人々も途切れる事が無い。レガージュの街とはまた違う、だが引けを取らない賑やかさだ。
途切れない活気に耳を傾け、遠い西の果てのレガージュを思い起こすように真っ直ぐ西を見つめていたレオアリスの周囲が、さっと陰った。
「上将」
振り仰いだ視界に、上空の太陽を遮るように飛ぶ青い飛竜が映る。
「アーシア？」
アーシアだ。碧玉を連ねた鱗の飛竜は王都にアーシアしかいない。
（アスタロト――？）
謁見を欠席したアスタロトが何故ここにいるのかと、驚いてハヤテの速度を緩めた。アーシアが翼を撓ませ、急降下してハヤテに近付く。
隣に並んだその背に目を向け、レオアリスはもう一度驚いた。
アーシアの背は空だ。
どうしたのかと問う前に、ハヤテに並んだアーシアの青い瞳がレオアリスを捉えた。並行して飛びながら、何かを訴えるように瞳が瞬く。
「……何かあったのか？」
人の姿を取っている時のように会話はできず、アーシアは訴えかける色を瞳に宿したままハヤテの前へと出た。
ロットバルトはグランスレイと視線を交わし、グランスレイの上にも強い懸念が浮かんでいるのを認めた。
通常飛竜を駆る時、下位の者が上位の相手に対し、上空から寄せる事はない。アスタロトを乗せている時とは違い、アーシアの性格でアスタロトが乗っていない時にそうした行動を取るとは思えなかった。
ずっと上空でレオアリスを待っていて、その姿を見つけて懸命に近寄ってきたように見える。何か、アーシアがそうした事すら意識できないほどの何かがあるのか――謁見を欠席した事に関係があるのかと、レオアリスも、ロットバルトやグランスレイもやはりそう思った。
近衛師団の士官棟に戻る道行きだがアーシアはレオアリス達を導くように飛び、第一大隊の士官棟が見えてくると先に速度を上げた。
地面に追突しそうなほどの勢いで士官棟の前庭に降りる。飛竜の姿が揺らいで消え、緑の芝の上に立った少年がレオアリスを見上げる。
「――」
レオアリスも厩舎ではなく士官棟の前庭の芝にハヤテを降ろした。ハヤテの背から降りるのも待ちきれないように、アーシアの声が飛んだ。
「レオアリスさん！」
予想していたよりもずっと、切羽詰まった響きだった。レオアリスへ駆け寄ろうとして、どうしてか、数歩前へ出てたたらを踏んだ。心の内に葛藤があり、それが外に現れたようだった。
「――」
訝しみながらレオアリスが近寄る間、アーシアは士官棟を背にして立ち、身体の脇で両手を固く握り締めてレオアリスへ視線を向けていた。その様子がレオアリスの心に強い不安を差し込む。
「どうしたんだ」
傍に来ると、アーシアの顔は青ざめ、焦燥が浮かんでいるのが判った。いつも穏やかな彼がそんな状態になる、たった一つの理由をレオアリスは知っていた。
アスタロトが関わる時だ。
やはり、と思うと同時に、鼓動が音を立てるのを感じた。
目の前に来たレオアリスへと、アーシアは不安と焦燥に満ちた瞳を向け、頭を下げた。
「すみません、本当に、失礼な事をして――」

「どうしたんだ。何かあったのか」
もう一度問うと、持ち上げたアーシアの面にようやく、そして強い安堵が宿った。
「アスタロト様が――」
勢い込んでそう口にする。
「アスタロトが、どうしたんだ」
唐突に、アーシアは瞳を瞬かせ、ぐっと息を詰めた。
今気付いたと言うように、うろたえた目でレオアリスと、後ろに立つグランスレイとロットバルトを見回す。二人もレオアリスと同様に、アーシアへ問いかけるような瞳を向けている。
「アーシア？」
「――」
強い後悔がアーシアの中に生まれていた。アスタロト公爵家長老会の筆頭である長老会のソーントン侯爵はアーシアの言葉に聞く耳をもたず、発言そのものを不届きなものと断じた。
ソーントンがそう言う理由はアーシアにも判っている。
この国を支える四大公爵家の一人を疑うなど――。ましてやルシファーはアスタロトが姉とも慕う相手だ。
けれどアスタロトはまだ眠ったままだ。もう丸一日になろうとしているのに、目を覚ます気配は依然として無かった。
不安で、レオアリスが帰還したと聞いて矢も盾もたまらず飛び出して来てしまったが、アーシアでさえ確信が持てないものをレオアリスに言うべきなのか――、何を言うべきなのかと、そうした思いが急速にアーシアの中に膨れ上がっていた。
レオアリスなら信じてくれる。少なくとも頭から否定したりしない。
でもじゃあ、信じてくれたレオアリスに、自分は何をしてくれと言うつもりだっのだろうと、アーシアは今更ながらに逡巡した。
公爵であり、財務院の長であるこの国の実力者に対して――？
駄目だ、とアーシアは呟いた。胃の奥が冷えるような恐ろしさを感じた。
レオアリスに迷惑が掛かる。
そんな事をできる訳が無い、と
「アーシア」
レオアリスははっきりと彼の名を呼び、引き寄せられるようにアーシアはレオアリスを見た。レオアリスはアーシアを真っ直ぐ見据えている。
「何かあったんだろう。それで俺を頼ってくれたんじゃないのか」
「――」
まだ迷うアーシアを見て、レオアリスは笑った。いつか、二人で暗く深い洞窟を降りて行った時のように。
「お前も知ってんだろ、今更――」
立っている場所は変わっても、あの時にあったものは変わらない。そしてこの四年間でそれ以上に培ってきた。
「俺がアスタロトやお前の為に、何もしない訳が無い」
「――ア、」
レオアリスが見つめる前で、アーシアの瞳に涙が湧き上がり、頬を零れた。それまで一人不安に耐えていたものが、一気に堰を切って流れたようだった。
アーシアは自分が涙を零している事も気付いていない様子で、懸命に声を振り絞った。
「アスタロト様を、助けてください――！」

八

ルシファーは屋根の先端に立ち、自身の館から辺りを見渡した。王都の八方に広がるなだらかな斜形は、彼女の屋敷が建つ位置から、王都西側の全景を眺める事を可能にしてくれている。

家々の屋根が緩やかな坂を下って街の裾まで犇(ひし)めいている。建物を縫うように入り組み見え隠れする、通りの縦糸と横糸。どこまでも広がっていきそうな建物を堰止める街壁の向こうには、緑豊かな牧草地と畑が連なり、ちょうど大河シメノスが西に向けて流れるその水面(みなも)の光が見えた。

この眺めこそ、大戦が終結してから三百年、如何にこの国が順調に発展してきたかを物語っていた。

辺境部には未だ厳しい暮らしがあるが、辺境部が整えばこの国は益々豊かになる。

「――やっぱり失うとなると惜しくなるものね」

広がる屋根を見ながらそう呟いた。王都の庭園や公園もこのゆるやかな斜形を生かして造られ、それが遠目には緑の絨毯が敷かれているように見せ、美しい。

暁の光を湛えた瞳が、空の深さと同様に、遠くまで澄んで街を見渡す。

まるでこの光景を、瞳の奥に焼き付けておこうと言うような視線だった。

微かな笑みが唇をほころばせる。

「でも、この都が燃えたら、遠くからでも松明のように見えるでしょう――」

これから訪れる、暗い世界に燃え盛る松明。

その時には決して希望ではなく、始まりの狼煙だが。

ふわりと足が屋根から離れる。

宙に浮いたまま一度振り返り、そこに聳える王城をじっと見つめ、消えた。

「公はまだお目覚めになられんのか」

アスタロト公爵家長老会の筆頭ソーントン侯爵は、外套も脱がないまま白く薄い眉を潜めて階上を見上げた。白鳥宮と呼ばれるアスタロト公爵家の本邸三階に、主であるアスタロトの居室がある。

ソーントンは昨日の夕刻と夜の二回公爵家を訪ねて来て、アスタロトの様子を伺いに三階の居室まで上がっていたが、今は急ぎの用件があり一階の居間で執事のシュセールから話を聞くに止(とど)めた。

「左様でございます」とシュセールが面を伏せる。彼女の冷静な瞳にも、気掛かりな色が隠せず浮かんでいる。

法術士や医師の見解も昨日から変わりは無く、ただ原因が判らないとそう言うだけだった。

ソーントンはこの後タウゼンに会い、つい先ほどまで行われていた謁見の結果の報告を受け、その足で法術院院長のアルジマールを訪ねるつもりでいた。事をおおっぴらにするのは避けたいが、アルジマールならばこの状態を解決できるはずだと、そう思えば気持ちも落ち着く。

浅く腰かけていた絹張りの椅子から立ち上がり、ソーントンはもう一度天井を見上げた。

「――アーシアはどうしている」

シュセールが瞳を伏せる。

「侯爵のご命令はしっかりと……お傍へは近付いておりませんが、昨日よりずっとアスタロト様の部屋の前に離れずおります」

シュセールの口調に少し責める響きを聞き取り、ソーントンは眉をしかめたが、何も言わなかった。

ルシファーの関わりを口にしたアーシアをソーントンが激しく叱責

し、アスタロトの傍に近付く事を禁じたのは昨日の事だ。
アーシアの忠誠は判っているが、さすがにそれはソーントンに飲み込める言葉ではなかった。
「――公が目覚めたら即刻知らせを寄越せ」
「かしこまりました」
シュセールはソーントンを見送る為、白鳥宮の正面玄関に寄せた馬車へとソーントンを案内すると、馬車寄せの階段下に立ち深く頭を下げた。
今、ソーントンがアスタロトの部屋の窓を見上げれば或いは、広い露台に降り立つ白い布の閃きを目にしたかもしれない。
だがソーントンは見上げる事無く、馬車は動き出した。轍（わだち）の音が遠ざかり、シュセールや女官達が伏せていた面を上げる。
シュセールは顎を持ち上げアスタロトの部屋の露台を見つめた。
彼女の目に映ったのは既に、何の変哲もない大理石の手摺りだけだった。

ルシファーはふわりと爪先を床に降ろし、硝子戸を後ろ手に閉ざした。ゆるくたわめられて流れる日除け布が微かに揺れた。
室内を見渡す。
右の壁際には白い光沢のある優美な化粧台や低い棚が置かれている。その前にやはり白い籐製の長椅子が、気持ちの良い庭園を望む硝子戸に向けて二台、直角に組んで置いてあり、窓からは今、正門へとゆるい弧を描きながら長く延びる道を進んでいくソーントンの馬車が見えた。
長椅子の前には低い硝子の卓も用意されていた。とはいえ完全に私室であるこの寝室に来客が通る訳ではないだろう。
ただルシファーだけは何度もここに来て、その都度色々な話をしていた。アスタロトと――、その母である前公爵とも。
右の壁にある両開きの扉は前室へ続いている。その向こうに人の気配は無かった。
左側の壁の中央に優雅な天蓋の寝台が置かれ、今は薄く透ける布の覆いが降ろされていた。
その奥に、眠っているアスタロトの姿が見える。
ルシファーは瞳を細め、寝台を眺めた。
アーシアの姿は見当たらない。
アーシアはルシファーの行為を誰かに告げただろうか。
きっとそうだろう。だから今、ここにいない。
「あの子を遠ざけるなんて愚かなこと」
何よりアスタロトに忠実で、命に代えても彼女を守ろうとし、そして彼女を諌めようとする存在をだ。
ただアーシアは館の中にもいないようだった。
くすりと笑い、ルシファーは右手を差し伸べるように胸の前に上げると、身体を巡らせながら宙に指先で緩やかに円を描いた。
室内に風の流れが生まれ、露台への硝子戸や窓、前室への二枚の扉がかたんと微かな音を立てる。
「しばらく邪魔はされたくないものね」
アスタロトには、選んでもらわなくてはいけない。その為に来たのだ。
ルシファーは薄い布を手でからげ、弾力のある寝台に腰を降ろした。
それだけで、アスタロトはあれほど周囲を困惑させた眠りから覚め、閉ざしていた瞳を上げた。
まだ半分眠りの中にあるのか、霞む深紅の瞳がルシファーを認めて幾度か瞬いた。
「――ファー？　どうしたの？」
ルシファーは微笑みを浮かべた。

「遠くに行くから、それを言いに来たのよ。王都を離れるの。もう帰らないわ」
アスタロトは瞳を大きく見開き、跳ね起きた。
「どこに――、どうして？！　帰らないって」
寝台に置かれたルシファーの手を両手でぎゅっと握る。
「嫌だ。嘘でしょ？」
目覚めたばかりの少女の言葉は、その分偽りのない真っ直ぐな気持ちを伝えてくる。ルシファーは微笑んだ。
向けられる柔らかい微笑みを見つめ、アスタロトにもそれが冗談ではないのだと悟り、首を振った。
「駄目――ダメだよ、だってファーは西方公じゃない。帰らないなんて。財務院だってあるし、そんなの」
「構いやしないわ。代わりはいるもの」
「代われるわけない、絶対」
「代われるわ」
それは何かを断ち切ろうとするきっぱりとした響きで、アスタロトは思わず口を閉ざした。
ルシファーはふっと笑うと、たった今の口調は嘘だったかのように、囁きを柔らかく空気に溶かした。
「変わらないものなんてない――絶対なんてないのよ。想いでさえ簡単に流れていくのだもの」
唇に笑みを宿したまま、唄うように綴る。「だから行く事にしたの。全て変わる前に」
「――」
ルシファーの言葉の意味が判らない。
ただ、まだ眠りの続きにあるように、周囲はふわふわと覚束なかった。
「どうして、行っちゃうの」
行かないで欲しい。
今のアスタロトの立場を一番理解してくれるのはルシファーだ。この女性（ひと）がいなくなったら、アスタロトは何を支えにすればいいのか、判らない。
ルシファーはそんなアスタロトに瞳を落とした。
「あなたはどうする？」
どうする、の意味が分からずアスタロトはきょとんとしてルシファーを見つめた。
「私と来る――？」
「え……？」
思いがけない問いに、アスタロトはその言葉を繰り返した。
ルシファーと……。
どこへ？
「失いたくないでしょう」
「何のこと……」
けれどドクリと鼓動が鳴った。
失う。
何でこんなに鼓動が早いのだろう。
何でその言葉がこんなに怖いのか。
「言ったでしょう。王はあなたの想いを認めない。国にとって、あなたの想いは厄介なものでしかないから」
そこには嘲笑の響きと、一瞬の、迸（ほとばし）るような憎しみがあった。
アスタロトはゆるゆると顔を上げてルシファーを見つめた。もう何がそれを感じさせたのか、一切の影はない。
彼女の言葉を聞いてはいけないと、心のどこかがごく、微かに、叫んだ。
それはゆるく柔らかな風に包まれる。

「どうせあなたの想いは引き裂かれる。遠くない日に。だったら、今、私と来た方がいいわ」
「――」
アスタロトはルシファーへ向けていた瞳を、自分の手元に落とした。
「叶わ、ないんだ……」
呟いただけなのに、まるで大声で宣言されたように頭の中に響いた。
判っている。初めから、判っていた。
王は認めない。
王は。
心の奥底に、微かな陰が蠢く。
ルシファーは柔らかく、ただ一切の可能性など無いというように笑みながら、アスタロトをそっと抱き締めた。
「可哀想にね――でも今のままじゃあどうにもならないわ。想いも、立場も。王がいる限りは。だったらここにいても、ただ辛いだけよ」
耳の傍で囁く声に眩暈を覚え、アスタロトは瞼をぎゅっと閉じた。
風がふわりと寝台の薄布を揺らす。
「ここにいても、王がいる限り、あなたはただ失っていくのを眺めて、傍に居るだけしかできない」
「傍、に」
「でもきっとあなたは、どんなに苦しくても、そこに有り続けようとする。そうでしょう？」
「――」
――そうだ。
居たい。
ずっと、同じ場所にいられると思っていた。
そう思っていたのに――それを壊したのは自分だ。
変わらずにいられたら良かったのに。こうなると判っていたから、変わりたくなかったのに。
想うだけでこんなにも苦しいのに――
こんな想いを抱かなければ、ずっといられたのだと、そう思う。
違う、と誰かが呟いた。
が、いなければ
「あなたの憂いを取り除いてあげると、私は言ったわ」
憂い、を
「一つは、忘れること。私にはそれができる」
風が囁く。アスタロトはびくりと肩を震わせた。
忘れる――？
「あなたが望むのなら、そうしてあげる。消してあげられるわ、あなたが抱える感情を全て」
全て。
アスタロトは無意識のまま首を振った。
（……そんなのイヤだ――）
どんなに苦しくても、この気持ちを忘れるかと自分に問えば、それはできなかった。
もし時が戻せたとして、何度あの初めて出会った森から始めて繰り返しても、きっと今ここにいる。
この想いの中に。
苦しくて苦しくて――、息が詰まるほど苦しくてもどれほど胸が痛くても、手放すなんてできる訳がない。
アスタロトの瞳に雄弁に現れた想いを読み取り、ルシファーは笑みを深めた。
「もう一つは」

実際は、選べるのはただ一つ。差し出す手は。
既に風は炎を揺らしている。
その結末も、導くものは一つだ。
この言葉も。
「私と共に行くこと――」
ルシファーは瞳を窓の外に投げ、ちらりと笑った。空の向こうを近付いてくる気配。飛竜の。アーシアだ。
アーシアと。
唇を細め、ふっと息を吹き付ける。
瞬間、窓は鏡のように変わり、外の風景を断った。
「ファー？」
妖しく、見る者を惑わせるような笑みが揺れる。
「さあ――、選びなさい、あなたの欲しい未来を――あなたの望みを」
窓へ向かいかけたアスタロトの瞳を、囁きが引き戻す。
アスタロトの手を取り、ルシファーは寝台の上に浮かんだ。
「それは叶うわ――」

九

レオアリスは自分の前を飛ぶアーシアの青い翼を見つめ、つい先ほど彼が告げた言葉を思い起こしていた。
『アスタロト様を、助けてください』
助ける、という言葉に驚いて顔を見合わせたレオアリス達に、アーシアは時折つっかえながらも早口で、まるでそうしなければ口に出す事すらできなくなるというように懸命に言葉を継いだ。
ルシファーが。
その名が出された事に、腹の底が冷たくなる。
昨日ルシファーが訪れてから、アスタロトはずっと眠ったままなのだとアーシアは言った。
昨日。状況を考えればおそらく、ルシファーがフィオリ・アル・レガージュのあの海に現れる前に、アスタロトの下（もと）を訪れたのだろう。
何故――、何の為に。
ルシファーは何をしたいのか。
『もう一度来ると、そう仰ったんです。今は行くところがあるからと』
『どうして――、ルシファー様は』
どうして、とレオアリスも思う。
どう・・・して、アーシアに姿を見せたのか。
アーシア自身がそう話したように、ルシファーが関わっているなどという話をアスタロト公爵家の長老会が認めるはずもなく、最終的にアーシアが頼るのはレオアリスしかいない。
ルシファーはそれを判っているはずだ。
レガージュの事件の直後、アーシアからそれを聞けば、レオアリスが疑いを抱くだろうと言う事も。
（判っていて――）

レオアリスは呟き、口元を引き結んだ。
ルシファーは、敢えて何かを見せようとしている。この件で一貫して、それだけは明確だ。
これも、スランザールが乗るなと言った事の延長線上にあるのではないかと、そう思った。
（――）
瞳を上げれば、アーシアの翼の向こうに、もうアスタロト公爵家の敷地と館が見える。緑なす庭に建つ白亜の館。その左右に広がる両翼棟が優雅な白い羽根を広げて憩う白鳥のように見える事から、白鳥宮と名付けられた。
公爵邸の正門から出てきただろう馬車が、大通りへ続く道に止まっている。御者台の御者が自分達を見上げていた。
馬車は中の人物の身分の高さが窺える四頭立ての立派な仕立てで、車体の屋根には上空からでも見えるように紋章が描かれていた。
ソーントン侯爵家の馬車だ。
（ソーントン侯爵――さっきアーシアが言ってた長老会の筆頭か）
馬車の小窓から白髪の男が顔を覗かせ、すぐに引っ込める。ソーントン侯爵だろう。
アスタロトの様子を見てきたのだろうか。
まずはソーントンの話を聞くべきかもしれない。
「――アーシア」
レオアリスの呼び止める声は翼が切り唸る風に遮られ、アーシアには届かなかった。アーシアは馬車を振り返る事も無く、ただ真っ直ぐに、白鳥宮の前庭に降りた。
アスタロト公爵家の私道を、王城へ向かう大通りへと馬車を進めていたソーントンの御者が、ふと空に眼を向けた後、驚いた声で主を呼んだ。
「侯爵――、あの飛竜はアーシアではありませんか」
「何だと――？　止めろ」
馬車の轍が石畳を噛んで止まる。ソーントンは馬車の小窓を開けてそれを認め、険しい表情になって空を睨んだ。
彼等の前方から、アーシアの青い飛竜姿と、もう一つ、銀翼の飛竜が上空を駆けてくる。今ソーントンが出て来たばかりのアスタロト公爵家へと向っていた。
「何を馬鹿な――」
銀翼の飛竜――それが近衛師団第一大隊大将騎だろうとソーントンにも判る。
二騎の飛竜はソーントンの馬車を通り過ぎ、長い並木道の先にある広い門の向こう、アスタロト公爵家主邸である白鳥宮の前に降りた。
「一体何のつもりだ、あの馬鹿者め。余計な事をするなとあれほど言ったと言うのに」
けしからん、と吐き出し、強い憤りを示すように窓をぴしゃりと閉めた。アーシアを捕まえて懲らしめなくてはならない。
「引き返せ、館に戻るんだ」
御者へと鋭く指示し、ソーントンを乗せた馬車は先ほどよりも速度を上げ、通りを引き返し始めた。
アーシアは緑の芝の上に降りた瞬間、雷に打たれたように身体を震わせ、長い首を館に向けた。ほんの束の間アーシアは館を凝視し、青い飛竜の姿を少年の姿に変え、そのままレオアリスを待たずに館へ掛けていく。
「アーシア」
レオアリスは驚いてまだ降下中のハヤテの背から飛び降り、追いかけてアーシアの腕を掴んだ。
「アーシア、少し待て」

アーシアが振り返る。立ち止まる時間も惜しいと、その面に書いてある。
「急がないと――何か、変なんです」
「変？」
館を見れば玄関から執事のシュセールが出てきて、馬車寄せからの階段の手前に立っている。玄関の広い庇（ひさし）が作る日陰に表情を覆われながらも、アーシアとレオアリスを見て驚いている様が見て取れたが、邸内に何か問題がある様子ではなかった。
シュセールは先代アスタロト公爵の頃からこの館を取り仕切っている。状況を詳しく尋ねるにはちょうどいい。
「アーシア、もう少し状況を知りたい。先にシュセールに話を」
いくら何でもずかずかと踏み込む訳には、と思ったからでもあるが、弾くような声が返った。
「そんな場合じゃありません！」アーシアは自分の声の鋭さに驚いて、一瞬彼らしい羞恥を浮かべた。だがすぐに首を振る。
「――レオアリスさん、お願いですから。本当に何かおかしいんです」
「――」
アーシアはレオアリスの返答を待たずに逆にレオアリスの腕を取り、半ば引っ張りながら、何かに追い立てられるように玄関への階段を上がっていく。
先ほどよりもアーシアの焦りが強くなっている事に、レオアリスは不安を覚えた。
まさかアスタロトに、何か――アーシアだからこそ感じるものがあるのか。
レオアリスはもう一度館を見上げたが、陽光の中で白い壁が輝き陰影を帯びて穏やかに佇んでいるだけだ。
そう見える。
ぐい、とアーシアの手がレオアリスの腕を引いた。
「……アーシア、とにかく落ち着けよ、どうしたんだ」
シュセールが静かに、ただ厳しい表情で玄関扉とアーシアの間に立ちはだかる。
「アーシア、お前は何をしているのです」
「シュセールさん、通してください」
馬車の車輪が石畳を噛む音が聞こえる。先ほど通り越したソーントン侯爵の馬車だろう。シュセールもちらりと門に続く道を見た。
「大将殿までお連れして、それがどういう行為かお前に判らないはずがないでしょう。ソーントン様のご命令はお前にとって厳しいものとは思いましたが、それがこの行為に繋がるのは別の話です」
「――どいてください」
アーシアの厳しく断固とした声が、決然と立ちはだかっていたシュセールの足を一歩引かせた。アーシアは彼女の横を擦り抜け、玄関扉を開けた。
「アーシア……」
たった今まではアーシアを落ち着かせようと思っていたレオアリスは、開いた玄関から流れ出た気配を感じた瞬間に、その考えを掻き消した。
空気が違う。
立ち入った瞬間にそれと判るほどに――判るように施されているとしか思えないほどに、それは違っていた。
身の裡（うち）の剣が騒めく。
鼓動が緊張を表わして、僅かに早くなった。
レオアリスは玄関を潜った所で立ち止まり、アーシアを追いかけようと横を通り過ぎかけたシュセールに聞いた。
「いつから、こんな状態だったんです」
「え？」

レオアリスの声が普段とは違う鋭さを帯びている事に、シュセールもアーシアさえも訝しそうに問い返した。
「今、何と……」
「館の中に――結界が組まれてる」
法術の気配はない。屋敷を護るための防御陣とは違うものだ。
アスタロトが張ったものでもない。
だが、覚えがある。レオアリスはその気配に、この二日の内に何度も触れていた。
あの海と、つい半刻ほど前までいた謁見の間。
（アスタロト――）
レオアリスの瞳が、這い上がる感覚を抑えて細められる。
「結界……レオアリスさん、それは」
「お前の言うとおりだ。急ごう」
アーシアは身を翻し、階段へ向かった。
馬車の音が近付き、館の車寄せに走り込む。ソーントンだろうと思ったが、レオアリスは待たずにアーシアを追って階段を上がった。
広い玄関広間の吹き抜けに、空中へ張り出すように架かる階段を三階まで上がる。一段上がるごとに、身を包む気配はどんどんと濃く強くなった。
「ここです」
アーシアが示した部屋は、玄関広間を内に抱(いだ)いて作られた回廊の南側にあった。ちょうど正面玄関の真上だ。
アーシアが二枚の扉を押し開けると、白い壁と床の、窓際に花が生けられた大きな花瓶が二つ置かれているだけの前室がある。左右にまた両開きの扉があり、左側が居間になり、右側に寝室になっていた。
「アスタロト様」
アーシアが右の扉を叩く。何度か呼びかけたが返事は無い。
「――アスタロト」
扉の前に立った瞬間、レオアリスは足元から全身を、一つの感覚が這い上がるのを感じた。
強烈な、圧迫すら覚える存在感。
扉の向こうに、それが居た。
（――まさか）
アーシアが把手に手を掛ける。
その手を止め、何で、と呟き、今度は把手に両手を掛けた。
レオアリスが視線を落とした先のアーシアの面から血の気が引いていく。
「アーシア？」
「開かないんです――把手が動かない……いつも鍵は掛けてないのに」
レオアリスは扉の把手を掴んで、手を止めた。ひやりと指先が冷える。
「――」
力を込めても把手は単なる飾り物のように、ぴくりとも動こうとしない。
「こんなの、絶対におかしい――アスタロト様！　アスタロト様？！」
アーシアの手が激しく扉を叩く、その音さえまるで柔らかい綿に吸い込まれたようだ。
「アスタロト様！」
レオアリスは一度瞳を伏せて剣の騒めきを聞き、静かに息を吐くと瞳を開けた。
「――アーシア、退ってろ。扉――、結果を斬る」
「――」
驚いた顔をしたものの、アーシアは何も言わず、廊下の扉の方へと数歩退った。その表に浮かんだ表情は、そこにあるものはレオアリスの剣でなければ断ち切れないと、そう理解していた。

レオアリスが右手を鳩尾に当てる。青白い光が零れ、室内に落ちる陽光と混ざった。
「何をしている！」
ふいに廊下から年配の男の怒りに満ちた声が飛び、アーシアははっとして後ろを振り返った。駆け付けたソーントンが開いたままの戸口に立ち止まり、眦を震わせてすぐそこにいたアーシアを睨み付けた。
「アーシア、貴様という奴は、公の覚えをいい事に、恥知らずな……っ」
打ち据えようと振り下ろされたソーントンの腕を、アーシアの前に割り込んだレオアリスが捉えた。怒りに満ちた眼を正面から見据える。
「ソーントン侯爵。失礼ながら、今はそんな状況ではありません」
「近衛師団大将――、自分が何をしているのか判っているのか？！　幾らアスタロト公のご友人と言えど、無礼が過ぎる」
「ソーントン様、違うんです、これは僕がお願いして」
「貴様は黙っていろ！　そもそも貴様にそんな権利は無い！」
レオアリスはソーントンの腕をぐっと握り、ソーントンの眼が自分に向くのを見てから手を離した。
「ソーントン侯爵。今は状況が違うと申し上げております」
レオアリスの纏う空気に触れ、ソーントンは一度息を飲み込んだ。レオアリスと正面から向かい合い睨んだが、返す言葉からは先ほどの勢いは失せていた。
「何を戯言を」
「冗談を言ってる暇は全くありません。その扉が開かない」
「――扉？　馬鹿を言うな、この」
この通り、と把手に手を掛け、ソーントンは狼狽えた。何度か持ち上げようと繰り返し、唖然として口を開ける。
「そんなはずは」
「アスタロト――公爵については、アーシアにしか判らない感覚があります。アーシアが不安を感じているのであれば、何かしら問題があると考えるべきです。今はこの扉を開けた方がいい。絶対に」
レオアリスが扉へ――扉の向こうへ向けている瞳が刃のような鋭い光を帯びているのに気付き、ソーントンは思わず肩を震わせた。
剣士としての感覚で、その向こうに何を感じ取っているのか。
「処分については無事を確認した後で、総将アヴァロンへお申し出いただくと――、それでこの場を呑んでいただけませんか」
「――」
ソーントンの眼がレオアリスと扉の把手を行き来し、やがて重い荷を下ろした時のように息を吐き、頷いた。
「いいだろう――。もしこの向こうに何の問題も無ければ、貴侯には相応の責任を取ってもらう」
レオアリスは一瞬だけ口元に安堵の色を掠め、扉に向き直った。
右手が鳩尾に沈み、零れ落ちる青白い光と共に、剣を抜き出す。
「二人は廊下に」
ソーントンとアーシアは、声に押されたのか剣の纏う空気に押されたのかどちらともつかず、ただ外には出ずに廊下の扉まで後ずさった。
レオアリスの剣が一閃し、何もない宙を薙ぐ。
扉を被う何かが断ち切られたのが、ソーントンとアーシアにもはっきりと判った。
ふいに扉は内側から激しく開き、突風が叩き付けた。
風はレオアリスの前で、右手に提げた剣に触れて割れるように流れた。
手前にいたソーントンの身体が突風に押されアーシアにぶつかる。それでも風の勢いを抑えられず、二人の足が床を離れ、それぞれ前室の壁に叩き付けられる。
アーシアへ手を伸ばしかけて風に押されそうになった足を踏み留め、レオアリスは剣の柄を握り締めたまま、扉の向こうを睨んだ。

部屋の中央にある寝台の、天蓋から流れる布が音を立ててはためいている。
寝台の上に、ルシファーの姿があった。
風が叩き付ける戸口に立つレオアリスを振り返り、ルシファーは唇に柔らかな笑みを浮かべた。
その右手が、寝台の上に身を起していたアスタロトの手を掴んでいる。
アスタロトが振り向き、驚きに見開かれた深紅の瞳と視線が合う。
「――レオアリス」
強い安堵を感じると同時に、憤りが生まれた。
あの海――、泡の壁を叩きながら父の名を呼ぶユージュの姿と、剣を失ったザイン。
落ち着け、と自分に言い聞かせ、跳ね上がろうとする剣を抑える。
「西方公――ルシファー」
低く押し出された声に、ルシファーの笑みが深まった。
風が渦を巻く。
「アスタロトから手を放せ」

十

レオアリスの身体を青白い陽炎が取り巻き、叩き付ける風と互いを削り合い、鬩ぐ。
触れれば肌を切り裂きそうな、冷えたその感情がアスタロトにも届いた。
「――レオアリス……」
熱を帯びた塊が喉を塞ぎ、アスタロトは息を詰めたままレオアリスを見つめた。
「何で」風さえも拾わないほどの微かな声で呟く。
何故彼がここにいるのだろう。
自分は、何を選ぼうとしていたのだろう――
腕を掴んでいたルシファーの手が解け、アスタロトはつられるようにルシファーを見上げた。アスタロトには読み取れなかったが、その時ルシファーの面を彩った笑みは、彼女の手を離した事を惜しいと思うものとは違った。
「残念ね――あなたも連れて行きたかったけど。残るよりもずっと楽なのに」
「ファー」
「西方公――離れろと、そう言っている」
聞いた事のないほどの冷えた響きに、アスタロトは再びレオアリスを見つめた。全身を包む青白い陽炎が揺らめく。
アスタロトの好きな、月の光に浸したような研ぎ澄まされた剣がその手にあり、レオアリスは真っ直ぐルシファーへ視線を据えていた。
（剣――、何で――）
まるで彼女を斬ろうというようだ。
「レオ」
「珍しい、怒るのね」

ルシファーは鈴を鳴らすような笑みを含み、ふわりと浮くとアスタロトから離れた。
「何も判っていないのに。成すべき事も――、この子の事も」
「！」
風がうねり、音を立てる。
床に倒れていたソーントンは叩き付ける風に恐怖を覚え、起こしかけた身体を再び縮めた。その瞳がわなわなと震え、寝室の戸口に立つレオアリスを見る。レオアリスのすぐ前を。
アーシアが立ち上がろうとして風に身体を押されながら叫んだ。
「レオアリスさん……！」
ルシファーがいつの間にか、レオアリスの真ん前に浮かんでいた。
暁の瞳を見開くようにしてレオアリスの顔を覗き込む。口元だけが笑みを広げる。
「もう遅い。さっき私を斬っておけば良かったのに、のんびりしているからよ。それとも、怖かった――？」
「――ッ」
奥歯をぎり、と噛み締め、レオアリスはルシファーを睨んだ。
底知れない夜明け前の闇が、意識を無理矢理引き擦り込もうとするようだ。
ルシファーが瞳を外す。レオアリスの全身にのしかかっていた圧迫感が軽くなった。
ルシファーはその瞳を、恐怖と驚愕の表情のソーントンへ向け、笑った。
「私はこの国を去る」
「ファー！」
それまで茫然と成り行きを見つめていたアスタロトが、咎める声を上げる。ソーントンはルシファーを凝視しながら、唇を震わせてようやく声を押し出した。
「――何を……」
問わずにはいられない。ルシファーはソーントンに顔を向けていた。語りかけているのは何故かアスタロトでもレオアリスでもなく、ソーントンにだった。
「何を、仰っているのか――」
「去れば私はこの国の滅びを望むだろう」
「滅び――」
繰り返し、ソーントンの面が更に蒼白になる。
「そんな、まさか」
スランザールの言葉が脳裏に蘇り、レオアリスはルシファーを見た。
乗るな、と
「貴方が、国を、この国をう……裏切るなどと」
ルシファーの笑みが深まる。
「止めたければ方法は一つ。今ならばとても簡単な話だ」
ルシファーはレオアリスに視線を移し、誘うように告げた。
「私を斬りなさい、これが最後の機会よ」
アスタロトが息を呑むのが聞こえる。
レオアリスは走りたがる剣を抑えながら、慎重にルシファーを見つめた。
斬れと言うその言葉が本心なのか――、ルシファーが何を仕掛けているのか、それを見極めようとしていた。
ただ、どんな疑念や迷いをも単純に貫く、直感がある。
斬るべきだ。
今
ここで
「――貴方は何故、何の為に、こんな事をするんだ」

問いかけはレオアリス自身にすら、虚しく感じられた。それを証明するようにルシファーが微笑む。
「理由はあるわ。でもそれはもう、長い時の間に、私を止めるだけの力を持たなくなった」
「――」
「あなたが斬ってでも今止めない限り、私はこの国に仇をなす」
右手に握る剣が、微かに光を増す。
「ダメ――！」
レオアリスが踏み出そうとした瞬間、アスタロトは駆け寄り、レオアリスの腕にしがみついた。剣を持った腕だ。
「バ……カカッ、危ねぇっ！」
レオアリスは慌てて剣を引いた。「何考えてんだ、怪我するだろう！」
「斬らないで――ファーなんだ」
「――」
向けられた深紅の瞳には、切実な願いが浮かんでいる。
アスタロトにとってルシファーは大切な友人で、それ以上に、姉のようにも慕っている相手だ。
「私が、話をするから」
「無理よ」
あっさりと無慈悲に断ち切る。
「ファー」アスタロトが縋るように首を振る。
ルシファーはしばらくじっとレオアリスと彼の上にある葛藤を見つめていたが、やがて息を吐いた。
「――謁見の間と今と、二度の機会があったのに」
「――」
淡々と――感情の籠もらない声だった。
「おかげで私も心を決めたわ。――今度会う時はあなたの――、王の敵よ」
アスタロトはレオアリスの顔を見つめ、微かに唇を震わせた。王の名が、それまで彼の中で揺れていた天秤を一方に傾けたのが判る。
「私は滅ぼすわ。この街も、国も、王にまつわるものは全て――。王も――、あの王子も」
レオアリスが一歩踏み出す。
「レ……」
止めようとしてアスタロトは咄嗟に手を伸ばした。
右腕の軍服に確かに掛かった指先が、振り切られて空を掴む。
「――」
アスタロトはただ瞳を見開き、自分の手を見つめ、ぺたんとその場に座り込んだ。
踏み込みざま剣を走らせようとして――、剣を下げ、レオアリスは深い息を吐いた。
たった今そこにあったルシファーの姿は、宙に溶けるように消えていた。
室内を流れる風が、アスタロトの傍らでルシファーの声を散らす。
「アスタロト――考えが変わったらいつでも呼んで。どんな時でも」
床を蹴るようにしてレオアリスは硝子戸に歩み寄り、扉を開けて露台に出ると素早く周囲を見回した。
館、庭園、空――
意識を研ぎ澄ましても、ルシファーの気配は掴めない。
「――」
風はしばらくの間小さな渦のまま残っていたが、それもやがて消えた。
張り詰めた沈黙を一番最初に破ったのはアーシアだった。
「アスタロト様、お怪我は」
アーシアは駆け寄って手を取り、アスタロトを覗き込んだ。アーシアの瞳に心配の色を見つけ、アスタロトが慌てて首を振る。
「平気……怪我とか、何も、ないから」
「本当に大丈夫なのか？」
掛けられた声に振り返ると、部屋に戻ったレオアリスが閉ざした硝子

戸の前に立ち、床に座ったままのアスタロトへ視線を向けている。
「レオアリス――」
久しぶりに近くにいる。向かい合って。
こんな状況なのに、鼓動が高く鳴り、熱が胸の奥から喉を掴むように思えた。
「……大丈夫だよ」
レオアリスは暫くアスタロトを見つめ、息を吐いた。
「ならいい。報告の謁見にいなくて、しかも戻る途中でアーシアが来たからな。何があったのかと思ったぜ」
安心するほど軽い話でもないが、と呟き、レオアリスは手にしていた剣を消した。アスタロトはレオアリスを見上げ、その瞳がゆるゆると見開かれた。
「謁見――私、出なかったの？」
懸命に記憶を辿る。ファルシオンやレオアリスがレガージュへ発つ、その朝の事はは覚えている。確かにレガージュへ行ったはずで――、だから今レオアリスがここにいるなら、謁見というのはレガージュの報告の場の事だ。
そうだ。今レオアリスがそう言った。
レガージュはどんなふうに決着したのか、そもそも自分が今どんな状況にあるのか、アスタロトは全く判らない事に気が付いた。
ルシファーが来て、それで。
それで――。
「私」
「アスタロト様は眠っていらしたんです」
「眠って……？」
「昨日……ルシファー様がいらしてから、ずっと」
「ずっと？　嘘……え、」
「眠ってたのには西方公が関係してるんだろう。何をしたのか判らないけどな」
レオアリスの口調がいつもより少しきつく感じられて、アスタロトはレオアリスを見上げた。
「西方公と、何を話したんだ？　何かお前に言ったのか」
「ファー、は」
アスタロトは唇を閉ざした。
言える訳がない。
ルシファーが何故自分の所に来たのか――
言ったら、レオアリスはきっと呆れる。
きっと――、きっと絶対に軽蔑されて、嫌われる。
「何、も」
「――」
レオアリスの瞳にあるのは懸念の色だ。決して責められている訳ではなく、普段と変わらないはずなのに、向けられる視線に絶え切れずアスタロトは俯いた。
「何も言ってない――良く、覚えてないんだ」
「アスタロト様」
真っ青なアスタロトを見つめ、アーシアが眉を寄せる。
「お身体の具合が、良くないんじゃ」
「平気」
「公」
ふいに掛けられた厳しい声に振り返り、アスタロトはようやくソーントンがそこにいた事に気が付いた。痩せた面は蒼白で、普段見る以上の厳しく張り詰めた色がある。
「西方公が、この国を裏切ったと、これはそういう事ですな」
「――ち」
違う、と言おうとして、言葉にはならなかった。
ルシファーは。
『私はこの国を滅ぼす』
ソーントンはアスタロトとレオアリスの顔を見比べ、立ち上がると服

を払い居住まいを正した。
「早急に、陛下にこの事を申し上げねばならないと思っております。由々しき事態だ――非常に」
アスタロトは茫然としたままソーントンの言葉を聞いていた。
ソーントンの言うとおり、国政を支えるべき四大公爵家の一人が、国を裏切るなどと、あってはならない事態だ。
ただ、実際には、それが起こった。
アスタロトもレオアリスもアーシアも、ソーントンも、一部始終を見て、聞いている。
王へ。
報告して、そうしたら――、王は確実に、捕縛の為に兵を出すだろう。万が一には――
討伐の兵を。
それを兵へ命じるのは、他ならぬアスタロト自身だ。
「――」
床についた手が震えているのが判る。
ソーントンもまだ半信半疑といった様子で、しきりに腕を組んだり解いたりを繰り返している。
「大将――貴侯はどうするつもりだ」
「……まずはアヴァロン閣下へ報告します。おそらく、西方公の行方を捜索し」レオアリスは一旦口を閉ざした。捕らえる、という言葉を口に出す事を躊躇ったのだと、アスタロトにも判る。「もう一度西方公に真意を尋ねる事になるでしょう」
ただ、レオアリスはこの中で誰よりも、落ち着いているように見えた。
「――」
レオアリスはルシファーを斬ろうとした。
あの時の、二人のやり取り――、レオアリスはアスタロトの知らない事を、他の何かを知っているのだと、そう思った。
「――ファーを……、斬るの？」
ぽつりと投げられた問いに、レオアリスはどこか、自分でも思いがけない事を聞いたというようにアスタロトを見つめ――、それを逸らした。
「……状況による」一度口を閉ざし、息を吐いて、続けた。「まだお前がそこまで考えなくたっていい」
「――私、は、アスタロトだよ――」
レオアリスはアスタロトから顔を逸らしたまま、くしゃりと短い髪を混ぜた。
「――そうか……そうだったな」
束の間の沈黙の後、レオアリスは扉へ向かうと、廊下へと出た。
「一度師団に戻って、それから王城へ上がる。アヴァロン閣下に報告して――、ただ、その足ですぐ陛下へ上げる事になるだろうな」
振り返り、アスタロトを見る。「半刻後に」
王城で、と言って踵を返した。
「――」
半刻後と言ったのは、アスタロトに落ち着く時間をくれたからだろう。
多分その間にレオアリスはアヴァロンへの報告を済ませて――、そうしたらもう、王へ上げる番だ。
王、に。
王はレオアリスに、ルシファーを斬れと、命じるだろうか。
アスタロトは自分の中で幾つもの色彩が渦巻いているように感じながら、しばらくの間立つ事もせずに、レオアリスの去った後の廊下を見つめていた。

十一

十刻頃から陽射しが翳り始め、王城の南面に位置する王の執務室も、王の背に連なる広い窓から差し込む光は淡く翳ったものになっていた。

どことなく磨り硝子のようなそれが、張り詰めた室内の空気をより硬質なものにしているように思える。王やスランザールの姿は窓を背に薄く影を帯び、表情は読み取り難かった。

レオアリスは王の執務室の絨毯に跪き、報告を始めた時からずっと喉元まで上がっている言葉を抑え、執務机の奥の王とその傍らに立つスランザールが発言するのを待っていた。執務机の左右にはアヴァロンと、重要案件時には必ず同席する内政官房長官のベールが立っている。

レオアリスの隣にはアスタロトとソーントンが同じように膝をつき、三人の後ろにはグランスレイと正規軍のタウゼンが控えていた。

この国の中枢を支える四大侯爵家の一角、西方公の離反――。それだけを聞いたとしても、事態の大きさが判るだろう。そして今後広がるだろう波紋の大きさも。

アスタロトの館での件を報告を上げ、レガージュでの件も改めてレオアリスの口から報告した。アスタロトからも報告し、最後にソーントンが事の経緯を告げた時は、三人の中で一番険しい口調になった。

それでいて――、アヴァロンへ報告を上げた時もそうだったが、ルシファーの離反を聞いても王やスランザールが混乱する様子は全く見られなかった。青ざめ落ち着かない様子なのは報告を上げている側だけだ。

スランザールが『乗るな』と言った時点で既に、これは彼等にとって予期されてた事態だったのかもしれないと、そんな考えすら浮かぶ。

（まさか、いくら何でも）

突飛すぎる考えに、レオアリスはぐっと奥歯を噛み締めた。

けれど先ほどから押さえつけている言葉が、喉のすぐそこでじりじりと焦げるようだ。

そうだとしたら。

（……どこまでが、予期の範囲だったんだ――）

スランザールの面は深刻な事態に眉を潜められていても、それ以上読み取れるものはない。

ただ、よしんばそうだったとしても、あの謁見の後すぐに、こうして事態が動くとまでは思っていなかっただろう。

ルシファーの挑発に対し、レオアリスに『乗るな』と言ったように、スランザールはそれを抑えるつもりでいたはずだ。

（挑発……、そうだ、西方公はずっと何かを引き出そうとしていた）

それが何か、スランザールには判っていたのではないか。

ふ、と王の傍らに立つスランザールの呟きが耳を掠めた。

結局、こうなったか、と――、溜息のような呟きだった。

抑えていた言葉が滑り出た。

「何故、何も仰らなかったんですか」

判っていたのなら。

スランザールが白い眉の下から小さな眼をレオアリスへ向ける。傍らでアスタロトが沈んだ顔を上げ、瞳を瞬かせた。

「もし」

あの時、スランザールが予期しているものの正体を聞いていれば――

その焦燥に似た考えに被さるように、違う、とも思った。

どんな状況であれ、自分は事態に対処する必要があったのだ。聞いていなかったから、などと、近衛師団大将という立場にありながら言うべき言葉ではない。

それでも何か答えが返るのではないかという僅かな期待はあったが、スランザールは何も言わなかった。

アヴァロンが厳しい眼を落とす。

「お前がすべき事はお前自身判っていたはず」
「――」　レオアリスはぐっと口を引き結んだ。アヴァロンの指摘は正しい。
「今は王のご判断の場だ、控えよ」
「申し訳、ありません」
　左隣でアスタロトが落ち着かなく身動ぎ、レオアリスは傍らに視線を向けた。アスタロトは何かを堪えるように俯き、膝をついている床を見つめている。王城に入ってからずっと、青ざめて辛そうだった。
　本当はあのまま館で休んでいるのが一番だったのだろうが、立場上それができる訳も無い。自分が負えるものなら負うつもりでいるが、今回はそれでは済まないものだ。その事にもまた悔しさを覚えた。
（せめてもう少し、何か言っておけば良かったか）
　あの時、何か、安心させるような事を。
　王は二人を眺め、口を開いた。室内を覆っている重い空気が揺れる。
「西方公の離反は由々しき事態だが、詳らかに問うのは今ではない。まずは早急に、厳正に対処しなければならん」
　その場の全員の意識が王に集中する。
「アスタロト。ルシファーの捜索についてはそなたに一任する」
　アスタロトが微かに肩を跳ねさせる。
「全方面の部隊を当て、早急に捕らえよ。ただし兵の損害は一分でも多過ぎよう」
「――承知、しました。必ず……」
　答える声が震えている。王は最終的には、アスタロトが自身で対処するようにと言っているのだ。アスタロトが出なければ、ルシファー相手に兵の損害を一分以下に抑えるなどできる話ではない。
　酷な命令だと、レオアリスも思った。
（俺が）
　顔を上げかけたが、斜め後ろに控えていた副将軍タウゼンが先に口を開いた。タウゼンの声も普段とは違い、硬く張り詰めている。
「捕らえた後の措置は、いかが致しましょう」
「まずは話を聞く必要があろう。捕らえ次第我が前に引き立てよ」
　アスタロトが明らかにほっとして肩を落としたのが、真横にいたレオアリスにも判る。さすがにレオアリスにも、率直過ぎるその反応は危うく思えた。
　アスタロトの心情は理解されるとは思う。
　ただ、捜索に当たる中で、それが邪魔になると捉えられかねない。
　第一、いざルシファーと対峙した時の障害にもなる可能性がある。
　その時に傷付くのはアスタロト自身だ。
　レオアリスは発言しようと姿勢を正しかけた。正規軍と近衛師団という管轄を超えたとしても、今回ばかりはアスタロトより自分の方がこの任務に適していると、そう思う。
「陛下」
「レオアリス」
　王がレオアリスへ黄金の瞳を転じる。
「そなたには七日間の謹慎を申し渡す」
「――っ」
　レオアリスは思わず膝を浮かせそうになり、辛うじて抑えた。
　手足の先がすうっと冷たくなる。
（七日――）
　長い。この後すぐにでも、アスタロトは正規軍を動かすだろう。七日の間にルシファーを見つけたとして、待つ余裕など無い。
「その場にいながら捕らえる事も斬る事も無く見過ごしたのは、そなたの落ち度だ」
　床についていた左手を握り込む。告げられた言葉に反論があるはずもない。
　王の口調は淡々として、告げる内容ほどには感情は感じられなかった。
「謹慎の間は近衛師団の指揮権は一時返上となる。登城も一切罷りならん。官舎に蟄居せよ。詳しい処遇についてはアヴァロンから話があろう」

跳ねる鼓動を極力宥めて息を詰め、口元を引き結ぶと、レオアリスは跪いたまま深く頭を下げた。
「謹んで……、ご下命に服します」
「待ってください！」
アスタロトが顔を上げ、膝を乗り出すようにして食い下がった。
「それではあんまりです！　あれは、私が止めたから――大体、元々は私が――私に原因があるのに、」
「――」
「それなのに、どうして処罰を受けるのがレオアリスで私じゃないんですか！」
「アスタロト、弁えよ」
静かに、ただ容赦なく諌めたのはベールだった。
「でも！」
「アスタロト」
レオアリスが素早く呼び掛けるとアスタロトはレオアリスを見た。首を振ると、アスタロトは込み上げていた言葉を飲み込み、ぎゅっと唇を噛み締めた。
深紅の瞳が潤むように揺れているのが判る。
ずき、と胸の奥が痛んだ。
「アスタロト、そなたは第一に、ルシファー捜索の責を果たせ」

執務室を出た後も俯いたままのアスタロトを見て、レオアリスは息を吐いた。
「アスタロト」
声を掛けるとやはり沈んだ瞳が返る。最近はこんな顔しか見れていない。
「悪かった、結局お前だけに負わせる事になって」
「そんなんじゃない！」
アスタロトは長い髪が跳ねるほど首を振り、レオアリスは少し驚いて彼女を見つめた。
「そうじゃなくて――」
もどかしく睨むように深紅の瞳を上げる。複雑な、それまで見た事のない光がその中に揺れているように見えた。いつも瞳に現れる激しく奔放な炎とは違う。
ゆらゆらと、不安定な。
「……レ、レオアリスは、いいの？　王の命令なら、それで」
「それは――、仕方ない。俺自身が招いた事だ」
アスタロトが俯き、ぐっと唇を引く。
「レガージュでの事を考えても、過ぎるほどのご配慮を頂いてる。下手したら降格でもおかしくない」
「――そうだけどっ。……でも、やっぱり、違うよ、こんなの。レオアリス一人が悪いわけじゃないじゃんか」
「そう言ったって」
レオアリスは後ろにいたグランスレイと顔を見合わせた。グランスレイが口を開く。
「公、私も、今回の陛下のご措置は仕方のない事と思います。どこかで規律を示す必要があるのです。公ご自身、お辛い事とは思いますが、今回の事は早急な対応が必要な事と同時に、厳然とした規律を確保しなければなりません。曖昧に済ませるなどという事があってはなりません」
「――」
「七日なんて結構すぐだろ。きちんと命に服して、そうしたら西方公の捜索も何かしら手を貸せるようになる。だから」
「――レオアリスは、王が選べって言ったら選ぶの？」
それは微かな呟きに近く、聞き取りにくかった。
「何だ？」
「――」
「公。そろそろ」

タウゼンがどことなく硬く尖った声でアスタロトを促す。アスタロトはタウゼンを見て再び頬を強ばらせた。
タウゼンが咎めるような視線を自分にも向けたのに気付き、時間を取り過ぎたかとレオアリスは片足を引いた。
「引き止めて悪かった」
「全然、そんなの」
「まあ、本当にお前が気にする必要はないんだ。七日で済んで有難いくらいだからな。月末の条約再締結で動けないのはキツいから、正直良かったと思ってる」
「条約再締結――」
その言葉を繰り返しながら、アスタロトは顔を曇らせた。
「レオアリスが、行かなきゃいけないの……？」
「そりゃ、まだ決まった訳じゃないけどな――。でも同行は無理でも動ける状態でいたい」
「公」
鋭い声が再び掛けられ、レオアリスもさすがに気まずさを覚えた。普段よりタウゼンが神経を尖らせているのが判る。
「――何かあったら言ってくれ。出来る限りの事はする」
それからもう一つ、付け加えた。
「あんまり無理すんなよ。悩んでる事とか、あるんなら聞くから」
「――平気」アスタロトはぱっと笑って首を振った。「大体無理なんて、この私がする訳ないし」
久々に見る、今までどおりの明るい様子ではある。
「――」
「レオアリスこそ、いろんなことが立て続けで疲れてるんだから、人のこと言ってる場合じゃないでしょ」
「俺は――」
「またね、時々連絡入れるよ。たぶん七日の内にすっかり収まってると思うけど」
まあ安心してよ、と言うと、アスタロトはタウゼンを促して歩き出した。
「――」
「上将、我々も」
「――ああ」
レオアリスは頷き、重い息を吐いた。
第一大隊に戻って、幾つか書類などを整理しておく必要がある。隊士達への説明も必要だ。
アスタロトにああ言いはしたが、七日間という一時的な事とはいえ、指揮権を完全に剥奪されるのが軍の立場にあって不名誉な事には変わりはない。レオアリスの立場だけではなく、第一大隊の立場にも関わってくる。隊の士気も落ちるだろう。
レオアリスはグランスレイに向き直り、頭を下げた。
「済まない――いつも、迷惑ばかり掛ける」
「上将――」
グランスレイは首を振り、膝をついて上官より頭を低くした。
「必要な形式であり、果たすべき義務の一環というだけです。しかし本当にすべき行動は、謹慎後にこそあります」
「――判った」
レオアリスは面を上げて一度天井を見上げ、施されている精緻な彫刻を眺めながら深呼吸するように息を吐いた。

終幕

マリ海軍の船団が青い海原を沖合いへと進んでいく。たった四日前の戦闘の傷痕は修復を施されてほとんど見当たらず、白い帆を張った姿が遠目にも、その体内に収めた力を伝えてくる。

ザインはそれを、レガージュの街を見下ろす崖の上からずっと見送っていた。

輝く青い海原と抜けるような青い空、それらが溶け合う狭間を行く船。ちょうどマリ海軍の船団と行き違うように、今日入港を予定していた東国トゥーランの船が向かい風の中を櫓を降ろし、辛抱強くゆっくりと漕ぎ進んでくる。

つい十日ほど前までのレガージュの姿と、その風景は何一つ変わらないように思える。崖下から吹き上げる海風も、今日はどことなく緩やかだ。

ただそれは、あくまでも表向きの姿だと判っていた。

マリ海軍提督メネゼスは、司令船に乗り込む最後にザインやファルカンを振り返り、歴戦を潜り抜けてきたその隻眼に鋭く刺す光を浮かべた。

『レガージュはこの先、これまでどおりとは行かないだろう。それも王都へ戻ったあの殿下と剣士次第なのかもしれないが――、西の海がこれで大人しく凪ぐかどうか、俺には疑わしい』

メネゼスはザインの右腕に視線を落とし、それから街の斜面に連なる白い壁の家々と、それらの間に見え隠れする急な路地を見渡した。

メネゼスが何を思い浮かべたのか、ザインにも想像できた。

攻めるに難い地形――三百年前はこの地形が西海の侵攻を食い止め、だがそれ故に戦火は街に留まり続けた。いわば身食いの地形でもある。

『剣が早く戻るといいな』

付け加えるようにそう言ったメネゼスの意図は、単純な慰めや期待ではなかっただろう。

失った剣がこの先どう影響するか、ザインもそれを考えていた。

メネゼスの懸念が懸念で終わらない可能性は、実はザインは既に強く感じていた。

正規軍のレガージュ駐屯部隊隊長からザインに対してのみ、今の正規軍の動きが伝えられたのは昨日の事だ。

それを聞いてもザインには驚きは無く、やはりとしか思わなかった。

ただ西方公が王都から消えて三日、まだ西方公の動きも、正規軍の動きも、大きく動いたものは無い。

いずれ国全体に伝われば幾つか騒ぎになる事も考えられるが、今はレガージュの街も平穏そのもの、逆に以前より活気が増して見える。

ザインは左から吹く風に導かれるように、右手に広がる海へ顔を向けた。マリ海軍が進んでいく南海の海と変わらず、美しく輝く海面と、空。見ているだけなら西の海も南の海も、何も違いはない。

だが目には見えない境界一つ、それで世界が変わる。

左手で、右腕の肘を包み込む。そこにはもう痛みは無かった。

ただ、戻るものなら早く戻って欲しいと、心底思う。

街の右手に常に変わる事無く広がり続ける西海。

ザインに手を差し出した時の、ルシファーの笑み。

レオアリスは今、謹慎の身だと聞いた。

「――」

背後でばたんと扉が閉じる音がする。ザインが振り返る前に明るい声が彼を呼んだ。

「父さん、お昼だよ！」

短い下草を蹴る軽い足音とともにユージュが駆け寄る。振り返ってユージュの姿を視界に納め、やはりザインは一瞬だが驚きと戸惑いを感じた。この五日間、急に成長した娘の姿になかなか慣れない。

ユージュは父の近くによると、その瞳を覗き込んだ。

「まだ驚いてるの？　ボクもう鏡を見ても平気になったけど。髪を切ったら前とそんなに変わらない感じ」

前と同じ長さまでばっさりと切った髪の先をつまみ、満足げに笑う。

ずいぶん順応性が高いと、ザインも呆れ混じりに笑った。ユージュは前よりも近い位置にある父の手を握った。
「安心して。父さんに剣が戻るまで、ボクが街と父さんを護るよ。父さんみたいに強くなるから」
「そうだな」
「信じてないでしょ、ホントだよ」
「信じてるさ」
「ホントにホント。でも一番は、早く父さんの剣が戻るといいな」
「すぐに戻る――きっとな」
護るものがある。
ユージュを護る。
フィオリの残した街を護る――
剣はおそらく、すぐに戻るだろう。その予感がザインにはあった。
ただ。
間に合うかどうか、問題はそこだ。
左手を引かれ、ユージュに視線を落とす。
ユージュは父の顔を見上げ、その瞳の中にある姿を認め、嬉しそうに笑った。
そこには自分と、街の姿が映っている。
「ほら、早く。僕もうお腹がペコペコだよ。早く行こ」
「――ああ」
ザインの手を引きながら、ユージュはもう一度父の瞳の中の自分の姿を見つめた。
「お昼を食べたら、剣を教えてね」

『序　章』

「アレウス国王陛下におかれては、先の条約再締結の折と変わらぬご健勝のお姿を拝謁し、幸甚に存じます」
四月は祝花の月と言われるほど大気が柔らかく温もりを帯び、様々な花が競うように咲き綻び始める。その暖かい四月の陽気が嘘のように冷え込んだ謁見の間に膝をつき、西海の使者はぬらりとした面に笑みを刻み込んで伏せた。
居並ぶ諸侯は息を潜め、審判を下すようにじっと使者に視線を注いでいる。
その中に西方公ルシファーの姿が無いのを見て取り、使者は伏せた口元で笑った。
ルシファーが去ってから四日、その事は正規軍の動きと共に、既に王都中に知れ渡っていた。
正規軍は王都のみならず、捜索三日目にはその範囲を国内全土に広げたが、ルシファーの行方は杳として掴めていないままだ。
使者はそれを良く知っていた。
「この周期――、今年は我らが海皇のおわす皇都イスが、アレウス国の沿岸に最も近付く年でございます」
ざわり、と初めて謁見の間が揺れる。アヴァロンやタウゼンの面にすら、緊張が走った。
条約再締結の舞台は、古の海バルバドスの皇都、イスだと、使者はそう示した。
ベールが使者に身体を向ける。
「失礼ながら、それは少し互いの条件に偏りが生じないか。貴国の皇都で、とは、今貴侯がおられるこの王都で行う事とさして意味は変わらない」
使者は大仰に身を伏せた。
「とんでもございません――、当然、条約再締結の儀に関わる条件はこれまでどおり」
「例えそれが皇都であっても、と申されるか」
「然様(さよう)でございます。条約の再締結の場へは、双方五十名の兵のみに限り、儀式の前後半日は、皇都から全ての兵を一里外に退かせます。ただし、僭越ながら今回は条件を一つ加えさせていただかなければなりません。これは我が皇の意と思し召しお聞きください」
もったいぶった言い方に何事かと諸侯達が顔を見合わせる中、使者はぬるりとした面を上げ、微かな笑みを浮かべながら告げた。
「アレウス国王陛下、賢明なる陛下には容易くご理解いただけましょうが、今、貴方様のお手元にある剣は、著しく拮抗を崩すものとお考え頂きたい」
「――私の剣を、と？」
王はその金色の瞳に、可笑しそうな光を浮かべた。
初め諸侯は使者が何を言っているのか判らなかったが、状況が飲み込めるにつれ、ざわめきは静かに広間を満たした。
王の剣――
剣士の、レオアリスの帯同を認めない、と、使者はそう宣告しているのだ。
代理でこの場に出ていたグランスレイは、予想だにしていなかった要求に思わず息を飲み込んだ。
「その通りでございます。百の兵を抑えるとまで言われる剣士の存在が、条約再締結の条件でもある帯同衛士五十名という範疇を超えるのは、申し上げずともお判り頂けるはず」
「何という――」
勝手な物言いよ、と正規軍南方将軍ケストナーが呟き、似たような呟きがあちこちで漏れた。この場では一切、おくびにも出さないと諒解しているものの、先日のレガージュでの一件を西海が仕掛けた事は誰もが意識し、素知らぬ顔をしている西海に対し強い不満を抱いてもいた。

アヴァロンが王へと視線を向ける。スランザールもまた、抑えた表情の中に懸念を浮かべ、王を見た。
ここに立つ諸侯の大半が、レオアリスが今回王の護衛に付く事をほぼ当然と考えていた。今レオアリスが謹慎に服している身だとしてもだ。議論はするが、結果そうなるだろうと。レオアリスへ批判的な態度を示していた第三大隊のセルファンですら、驚きと強い不審を浮かべている。
ただ諸侯が戸惑い顔を見合わせる中、アスタロトは自分でも気付かないまま、安堵の息を零した。微かに落とされた吐息に気付いたのは、すぐ傍らにいたタウゼンだけだ。タウゼンはじっと、注意深い瞳でアスタロトの横顔を見つめた。
王は広間の混乱など気にしたふうも無く、肘置きについた腕に頭を軽く預けたまま、微かに笑った。
「弱気な事だな。海皇らしからぬ」
使者は耳元まである口を深く吊り上げた。
「それだけ、条約の再締結に対しては、我が国も真摯に向き合う所存にございます。何卒ご斟酌いただけますよう」
刺すような視線が使者に集中していたが、使者はそれすら楽しんでいるかのように泰然としてそう言い、そのままゆっくりと床に近い位置まで頭を下げると、恭しく告げた。
「この尽日――、バルバドスの皇都、イスで海皇がお待ち申し上げる。陛下を皇都へお迎えできる事を、私共はこの上ない喜びと感じております。再び皇都において、ご尊顔を拝し奉らん事を」

落ち着かない。
レオアリスは別に眠る訳でもなく、ただ横になっていた寝台の上で身体を起こした。
寝台から片足だけ落とし、広い硝子戸の向こうを眺める。
今日で謹慎も三日目になる。
今日、西海の使者が条約再締結の儀について海皇の意を受けて訪れると聞いたのは、謹慎に入った当日の事だ。今頃ちょうど、西海の使者が王城で王に謁見しているところか――。再締結の儀に関する詳細が、西海から伝えられているはずだ。
（――）
焦燥が胸の内にあるのがはっきりと感じられる。
西向きに建てられているこの館の窓からは、王城は背後の東に位置していて見る事はできなかった。
気付くと溜息を落としている。
謹慎中なのだから仕方がないが、全くできる事がないというのがこれほど苦痛だとは思わなかった。夕方になればグランスレイやロットバルトが一日の報告に来てくれるものの、それ以外は書物を読もうとしても意識は外に向いて落ち着かず、かといって家の中では他にする事が無い。
正規軍によるルシファーの捜索は連日進められている。だがレオアリスが無為に過ごした日そのものに、全く手掛かりが見つかっていなかった。
アスタロトがどうしているのかが気になる。
王城の謁見の間で、今、どんな会話が交わされているのか。
ルシファーがどう動くつもりなのか。
掴みどころの無い焦りがじりじりと意識を焦がす。
何よりも、自分が今一番在りたい場所に立つ事ができないのが辛かった。
「――問題ない。あと四日で謹慎も解けるんだ」
自分に言い聞かせるようにそう口に出し、レオアリスは薄く幾筋も白い雲を棚引かせる空を見つめた。